渋松対談

赤盤

渋谷陽一＋松村雄策

rockin'on

CamScannerでスキャン

もくじ

まえがき……6
知性といいかげんさ、これが僕らとストーンズの長寿の秘訣です！……10
対談界の讃岐うどん、それが渋松対談です！……16
こんばんは、プロデューサーの渋谷陽一です……23
五十代って死ぬのか？……29
アトム科学の子、僕らロックの子……34
ミック・ジャガー観てグングン痩せる？……39
俺は遅咲きトレンド・セッター……46
僕ら絶滅寸前の「音楽評論家」――でも天国への階段は昇りません！……51

CamScannerでスキャン

答えろジミー・ペイジ、寝るなアル・クーパー！ 57
『ゲット・バック』をゲットしたい 62
フジ・ロック！ ロック・イン・ジャパン！ そして結局ツェッペリン!!! 66
七〇年代のことなら、いつでも、どこでも、何度でも 72
新単行本『ビートルズは眠らない』遂に敢行。信じてくれ、買ってくれ、読んでくれ！ 78
昔のヒーローが、浄水器を売りに来たら、君達はどうする？ 84
テレビの大晦日、フェスの大晦日 90
五十過ぎてからのタトゥー、二〇〇三年過ぎてからのタトゥー 95
ロックは生き急ぐんだから、生きてるうちに誉めてやれ！ 101
出版禁止こそ禁止だ！ 106
トム・ヨークはん、まいど！ うちら三十年これやってまっせ 113
どうだい、俺と還暦ロックを踊ろうぜ 118
電話が恐くて「在宅ロック」が務まるか!! 124
僕ら五十代、今日もロックでイカしてます 129
やっぱり夏は浴衣よりミニスカだろ？ 134

CamScannerでスキャン

僕ら陽気な五十代、趣味はプロ野球と反体制です 140
何で世間はツェッペリンも俺達も認めないんだよ!? 145
どいつもこいつも七〇年代に固執しやがって! 152
ロックに魂を売った僕ら、今日もロック魂いっぱい売ってます 158
クイーンはロックのチャンピオン? こちとらロック界の裸の王様だ!! 163
二〇〇五年大予想:今年こそはツェッペリンの年だ!! 169
会社は買えても、ロックは金で買えねえぞ! 175
ロックひとすじ三十年。誰か俺たちの名前も継いでくれよ!! 180
僕ら闘う五十代、まだまだロックを娯楽にできません 185
解散・脱退・再結成こそロックの華だろ? 191
もうろくジジイ? うるせぇ俺たちゃ猛ROCKジジイだ! 197
僕ら渋松五十四歳、ロック・フェス八十八か所参拝で天国行きを目指します 204
ボクラ・シブマツ五十四歳、来日公演ヤッテ・ブレイク・シマース! 210
五十四歳松村、ネットDJやります! 215
クイーン列島蹂躙! 見ろ、やっぱり俺たちは正しかったじゃないか! 220

CamScannerでスキャン

渋谷陽一五十四歳、ピーター・バラカンと新コンビ結成しました！ 226
開け、世のIT長者ども！ お前らにロックはあるのかい？ 232
渋谷陽一五十四歳、今日も元気にリニューアル王やってます 238
さよなら大類。そして今までありがとう！ 244
ミック・ジャガー六十二歳、僕ら渋松五十四歳、天国に近いのはどっち？ 260
ヒルズに負けるな。インフォスタワーにもマスコミが押し掛けてきたぞ 266
僕ら渋松五十五歳、まだまだ反権力の季節は終わりません 272
俺たちのビートルズはまだまだ終わらねえんだよ 277
若者の諸君、夏フェス最強のサヴァイヴァル術教えます 282
俺はトイレを新品に変えさせるマドンナが好きだ！ 288
渋谷陽一、ヘビメタ転向宣言!? 今月のライヴ七番勝負 294
あとがき

まえがき

三十五年前、この連載が始まった時、これほど長く続くとは、地球上の誰も想像しなかったはずだ。それがここまで続いたのは、ひとえに読者の皆さんの支持のたまものだと、感謝しています。
少し興醒めな事を書けば、対談当事者には続けていこうという内在的な動機はほとんどない企画である。読者の方に支持されなければ、何十年も前に終っていただろう。面白いという声に励まされ、踊らされここまで続いてしまった。
正直に書けば、何度か終ってもいいと思った事がある。もっと正直に言えば、もう終りたいなと思った事がある。そして六十歳になった時、もう終わろうと思った。というか続けられないなと思った。
この単行本を作り、最終回に書こうと思っていた事を書き、それで渋松の幕を降ろそうと思ったのだ。

結論から言うと、続ける事にした。ただ最終回に書こうと思った事を書いた上で続けようと決めた。それを書いてからなら続けられる気がしたのだ。

この対談は、実は対談ではなく、僕や松村が一人で書いていた創作対談なのだ。

ロッキング・オンに入社した社員が、例外なく入社後に一番驚くのがこの事実を知った時だ。たいてい目が点のようになる。

いつからこうなったか正確には思い出せないが、この単行本上下巻に収められているものは全て一人で書いた架空対談である。僕が書いたと分るのは七十三本だ。最近は架空である事を楽しんでいた。それを読んだ方が信じて面白がってもらえると、とても嬉しかった。余りいい表現ではないけれど、腕のいい詐欺師になった気分を楽しむ事ができた。

僕は、自分や松村だけでなく社員も登場させた。勿論、それも架空のキャラとしてだ。言うまでもないがウチの社員はそんなに面白くない。リアリティーを感じてもらえるように実名にしたが、設定したキャラは本人とは似ても似つかないものだ。

CamScannerでスキャン

何んでそんな事をしたのか。細かい理由はいろいろある。スケジュールの調整、テーマの設定、そんな事が難しくなって来たからだ。しかし大きな理由は、対談を面白くするにはそうする方がいいと考えたからだ。過去のものを読み返してもらうと分るが、渋松対談は今のものが一番面白いという自信がある。

こうした長寿連載の場合、たいてい昔の方が面白かったという意見が出る。しかし、この渋松に関してはほとんどない。ひょっとすると僕の耳に届いてないだけかも知れないがそうではないという自信がある。長年、こういう仕事をやっていると、その辺のチェックはできるようになっていく。間違っていないと思う。そして、だからこそこのスタイルを変える事ができなくなってしまった。

ただそうした倒錯した喜びもこう続けていると何んだか息苦しくなって来てしまった。自分の詐欺行為に疲れてしまったのだ。自白したくなって来てしまったのだ。自白してしまっては詐欺でなくなってしまう。どう考えてもネタバレは最終回だ。しかし終る決断もなかなかできない。それで結局、こういう形になった。

CamScannerでスキャン

前に書いたように、新入社員はこの渋松が架空対談である事を入社後に知ると、例外なくとても驚く。ただ、だからと言ってこの渋松が面白くなくなるかと言えば、そうでないようだ。むしろ、より倒錯した面白さを感じて読んでいるようだ。

そんな様子を見ていて、これはもっと高度な詐欺行為へとレベルアップできると思ったのである。つまり、騙されている側が、それを分って騙される事を楽しむ、一種のプレイのようなものになるのではと考えたのである。果して、そんな見事にうまく行くかどうかは分らないが、やってみる事にした。それがこの単行本である。

僕の書いた渋松対談にはSを付け、松村が書いたものにはMを付けた。この事によって二回楽しんでもらえるのではないか。まずは普通に読んで、次はそれを一人で書いている事の馬鹿らしさを想像して、二回笑えるのではないか。

これからロッキング・オン本誌での渋松対談もそうしていくつもりだ。もう、そんな事なら止めろという声が大きくなったら、すぐに終了したいと思います(笑)。

渋谷陽一

CamScannerでスキャン

知性といいかげんさ、これが僕らとストーンズの長寿の秘密です！

柳（前号の山本さんが描いた自分のイラストを見て、いかに自分が不機嫌なオーラを周りにまき散らしているかに初めて気付いたアホな渋松の担当編集者）——どうも柳です。

松村——何だお前、いきなり前触れもなく出てくんなよ。

柳——ウッス、ありがとうございます。おかげ様で渋松の単行本、順調に進んでます。

松村——順調だか何だか知らないけど、全然打ち合わせがないじゃないかよ。

柳——ウッス、前号の渋松を読んで反省しまして、これからは打ち合わせをバリバリさせていただきます。

松村——渋松読んで反省するなよ。印刷された自分

CamScannerでスキャン

の雑誌の活字で筆者の意思に気付いてどうすんだ。だいたい打ち合わせバリバリするとか言っても、もう本でちゃうんじゃないかよ。

柳――ウッス、順調に進んでます。

松村――だから順調じゃないんだよ。

柳――ウッス、反省して順調にバリバリで打ち合わせです。それじゃ失礼します。ウッス。

松村――何だあいつ。

渋谷――おう、悪い悪い会議が延びちゃって遅くなっちゃったんだ。

松村――それはいいけど、柳って大丈夫か？

渋谷――どうしてだ？ 何かあったのか。

松村――今、意味不明な事言ってどっか行っちゃったぞ。

渋谷――大丈夫じゃないか。元気そうに今日も昼メシ食ってたぞ。

松村――飼ってる犬じゃないんだからメシを元気に食っててもしょうがないだろう。俺は別にあいつの健康や食欲を心配してるわけじゃないんだよ。

渋谷――でも、あいつに食欲がなくなったら相当ヤバイぞ。特徴と言えば食欲と不機嫌ぐらいな奴だからな。

松村――そんな奴、社員にするな。俺が言いたいのはそういう事じゃなくて、ちゃんと仕事をしてるのかって事だよ。

渋谷――どうなんだろう。やってるんじゃないのか。こうやって『ロッキング・オン』もちゃんと出てるんだから。

松村――いいかげんな会社管理してるな。あれから単行本の打ち合わせとかあったか？

渋谷――一回だけな。

松村――俺も一回だけ電話もらっただけなんだけど。大丈夫かな。

渋谷――次の『SIGHT』でストーンズの特集をやろうと思ってたんだ。

松村――何だよ、いきなり。

CamScannerでスキャン

渋谷――この号の『ロッキング・オン』もストーンズの特集だけど、やっぱりこのバンドがこんなに長く続いたのは、知性といいかげんさだと思うんだよ。

松村――凄い結論だな。

渋谷――ストーンズと比較するのも何だけど、『ロッキング・オン』がこれだけ三十年も続いたのも、やっぱり知性といいかげんさだと思わないか？

松村――よく分かんないけど、社長のお前がそう思うんなら、そうなのかもな。

渋谷――お前、どうでもいいと思ってるだろう。

松村――思ってるよ、だいたい柳の話はどうなったんだよ。

渋谷――まあ焦るなよ。長い物語なんだな、これが。

松村――俺、時間ないから帰るわ。

渋谷――待てよ、聞けよ。話したいんだから。最近、俺の話に付き合ってくれるのはお前ぐらいなんだよ。

松村――別に俺はお前の話に付き合ってるんじゃなくて、仕事だと思って話してるんだけど。仕事じゃないんなら帰るぞ。

渋谷――仕事だよ。仕事。原稿料払うから聞いてくれよ。

松村――あっそう、それならいいけど。

渋谷――……。

松村――どうした？ 話せよ、聞くから。

渋谷――俺はお前の事、友達だと思ってたんだけどな。やっぱり経営者ってのは孤独なのかな。いつから俺の人生はこんな事になっちまったんだろう。

松村――グチなら帰るぞ。

渋谷――分かったよ、分かったから、聞けよ。

松村――ストーンズがどうした、とか言ってたよな。

渋谷――そうそう、『SIGHT』のストーンズ特集号の準備や、この『ロッキング・オン』の特集なんかでストーンズのインタヴューを読んで思ったんだよ、やっぱり知性といいかげんさ、なんだよ。

松村――ストーンズっていいかげんか？

渋谷――というか、凄くバランスがいいよな。それ

は知性から来てるんだと思うんだけど、柔軟なんだよ発想が。意固地なようで全然意固地じゃないんだよ。例えばテレビに出ないってルールを自分達で作ると、たいていのアーティストの場合、それが何の為のルールだったか忘れて、出ないってルールだけが一人歩きしちゃうんだよ。それで、出るべき時に出なくて、出ても意味のない落ち目になってから出ちゃうわけ。そんなところが全然ないよなストーンズは。

松村――ストーンズってテレビに出なかったっけ？

渋谷――例えばの話だよ。ミックとキースの確執だってそうだよ。普通なら中心メンバーの不仲ってのはタブーじゃない。だけどミックもキースもインタヴューでガンガン相手の悪口言って、仲が悪い事を隠さないじゃないか。

松村――まあな。

渋谷――それは自信があるからなんだよ。

松村――でも、他のメンバーは一番険悪だった時期は、本当にヤバかった、って言ってたぜ。

渋谷――きっとそうなんだろうけど、だからこそガス抜きが必要なんだよ。だいたい本当にヤバイ時期が人間関係的にあった、なんて事を現在進行形のバンドがペラペラ喋る事からしてユニークだぜ。

松村――そうだよな、ミックもキースもまだバンドにいるんだからな。それに死んじゃったブライアン・ジョーンズに対しても結構言ってるよな。

渋谷――そうそう、あんな嫌いな奴はいなかった、とか死んじゃったんだから、そこまで言わなくても、と普通思うぜ。

松村――でも嫌な感じしないじゃないか。ちゃんとストーンズに貢献した部分はしっかりフォローするし、健全なんだよ。

渋谷――それそれ健全、俺が言いたかったのはそれだよ。

松村――いいかげんと健全じゃ、全く逆じゃないか。

渋谷――だから、『ロッキング・オン』も健全だから、

CamScannerでスキャン

柳のアホもあえて隠したりしないわけよ。

松村——言ってる意味が理解できないいんだけど。

渋谷——俺も言ってて分かんなくなってきた。

松村——だったら言うんじゃないよ。

渋谷——でもさ、ストーンズって本人達はこうやってクレバーで健全なんだけど、ファンは様子のおかしい奴が多いよな。

松村——昔ほどじゃなくなってきてるけどな。

渋谷——ロックに理屈はいらねえ、とかいきがってるストーンズ・ファンっているけど、ミック・ジャガーほど理屈っぽくて、よく喋るミュージシャンはいないぜ。

松村——まあな、キースも結構喋るよな。

渋谷——キースも凄くクレバーだよ。人生はメチャクチャだけど。

松村——生きてるのが不思議だよな。

渋谷——ストーンズが偉大なのは、その辺のバランスだと思う。まじにこれだけバンドをサヴァイヴァルさせたのは、そのバランス感覚を生んだ知性だと思うぜ。それを誤解して、ドラッグやって酒飲んでるのがロックだと思ってるアホがいるから困るよな。ロックってのは知性なんだよ。

柳——ウッス、渋松御苦労様です。今月も面白いんで、これぐらいでいいです。

渋谷——何だ、お前。

柳——ウッス、ところで最後にお二人に質問なんですけど。

松村——何だよ。

柳——社長も松村さんもビートルズ派ですよね。昔はビートルズ派とストーンズ派に分かれていて、どっちかに所属してると相手をほめてはいけない掟があった、ってものの本で読んだんですけど。その辺はもうバックレていくって事でいいんでしょうか。

渋谷——山崎[注5]、こいつ地下の粗大ゴミのところに持ってけ。**S**

注1：当時の渋松対談担当。
注2：シリーズ四作目『渋松対談Z』のこと。本書とあわせてぜひお読みください。年月を経てなお勢いを増す、『渋松対談』の謎の進化にふれられるはずである。
注3：『渋松対談Z』単行本化に伴う打ち合わせの相談がないと叱る渋谷に、「忙しい」と答える柳——という展開だった。詳しくはぜひ『渋松対談Z』を本書とあわせてお読み下さい。
注4：二〇〇〇年に渋谷が創刊した弊社刊行の総合誌。ロックから政治・経済までを扱う幅広い総合誌としてスタートし、二〇〇六年にリニューアル。高卒の渋谷が日本の知の最高峰の方々にお話をうかがうという畏れ多いスタイルをとっているが、登場して下さる方の御協力があって、毎号大反響を呼んでいる。
注5：山崎洋一郎。現『ロッキング・オン』、『ロッキング・オン・ジャパン』編集長、株式会社ロッキング・オン取締役、音楽局局長。

対談界の讃岐うどん、それが渋松対談です！

渋谷――ついに出たな。『渋松対談Z』。

松村――出てないじゃないか、まだ。

渋谷――何回言っても、分かんない奴だな。十一月十八日発売だから、この『ロッキング・オン』一月号が発売される十二月一日にはもう出てるの。

松村――本当に、十一月十八日に出るんだろうな。最初は九月に出すって言ってたじゃないか。

渋谷――そういう、人を不安にするようなこと、

CamScannerでスキャン

ワンイメージだけど、校正したよな。

松村――まあ、校正もしたし、少し昔の絵も描いた
あんな専用の対談もしてくれたじゃないか。

渋谷――じゃあ、聞こう。

松村――何を？

渋谷――11月18日に出ることを。

松村――ひとりで出てるよ、そんなもん。

渋谷――だけど[illegible]が神よ。ゲーメン、ソーメン、冷やソーメン。

松村――そういう、昭和の年代のギャグ、やるなよ。

渋谷――とにかく、面白いよな、これ。

松村――まあ、それはたしかだな。校正してても、つい読んじゃったもんな。だけど、俺が一番嬉しかったのは、カヴァーだったな。山本直樹さんが描いてくれた、イラストだな。

渋谷――なんだよ、タキシードなんか着たことがないから、イラストで着せてもらって、喜んでるのかよ。

松村――そうじゃないよ。『40過ぎてからのロック』のいがらしさんのイラストも良かったけど、微妙な位置だったから、お前が表紙で俺は裏表紙だっただろ。なおかつ、帯があると俺の顔は隠れちゃうんだよ。俺とお前のふたりの本だなんて言っておきながら、俺の立場が……。

渋谷――泣くな、そんなことで。単なるデザイン上の問題じゃないか。

松村――だけど、お前は前向いて笑っているのに、俺は上向いて泣きそうになっていて、これじゃあ俺の立場が……。

渋谷――だから、やめろって言ってんだろ、もう。せっかくいがらしさんが描いてくれて、それももう何年も前のことなんだから。

松村――だけど、今回は泣きそうでもないし、縦

CamScannerでスキャン

位置だから帯にも隠れないし、ちゃんと表紙なわけだ。だから、嬉しいんだよ。

渋谷——分かんない奴だな。俺的には前回の清志郎[注2]に続いて、同世代のチャボ、仲井戸麗市にスイセン文を書いてもらったのが嬉しいな。本当に読んで面白いと思ってくれたらしくて、営業じゃなくて書いてくれたらしいぜ。

松村——なんだよ、営業って。

渋谷——本当はたいして面白いと思ってなくても人間関係的に同情して書いてくれることだよ。

松村——普通、営業ってギャラの為にしかたなくって意味じゃないのか。

渋谷——いや、ギャラはほとんど払ってないらしいんで、それは間違いなくそうじゃないな。

松村——そんなことに自信持ってどうするんだよ。

渋谷——そういえば、あの『定本渋松対談』[注3]も、同時に復刻されたんだぞ。

松村——しかし、この新しくつけられたカヴァーは、実に大類[注4]らしいよな。このタイトなパンツのオネエちゃんの下半身って、大類の当時の『ロッキング・オン』のスタイルだもんな。

渋谷——知ってる人が見れば、一目で大類がデザインした『ロッキング・オン』の本だって分かるな、たしかに。

松村——だけど、このクモの巣がはってるのは、なんなんだろうな。

渋谷——うん、それは俺もちょっと気になってたんだよ。

松村——まあ、折り返しだから、いいんだけどさ。それと、この背表紙のところにぶら下がってる動物はなんなんだろうな。

渋谷——なんなんだろうな、これは。オーストラリアの奥地にいる珍獣かな。

柳——やめてくださいよ、二人とも。大類さんが、

CamScannerでスキャン

気を悪くするじゃないですか。

松村――そういえば、俺テレビで見たことがあったな。

渋谷――そうだ、『地球！ふしぎ大自然』でやってたな。

柳――やめてくださいったら、いい歳をして。本当に大人げないんだから。

松村――まあ、大類も今や高名なデザイナーなんだけど、俺達の本っていうとこうなるっていうのが、面白いよな。

渋谷――見事に、七〇年代の『ロッキング・オン』なわけだ。

松村――ところで、ついに来たな、讃岐うどん。

渋谷――突然、何を言い出すんだよ。

松村――ずっと続くぞ、このブーム。

渋谷――なんで、お前が讃岐うどんのブームを喜んでるんだよ。

松村――っていうか、いつまで経っても何もしない蕎麦に対する怒りなのだよ。

渋谷――分からない奴だな。

松村――いや、俺もお前も東京だから、なんてったって蕎麦で、うどんなんかどうでもよかっただろ。

渋谷――まあな、東京のうどんはフニャフニャだからな。

松村――東京でうどんを食べるのなんて、風邪をひいたときぐらいだったろ。消化にいいから、なんて言って。

渋谷――そういえば、昔、蕎麦屋で風邪薬を売ってたよな。なんだったんだろうな、あれは。

松村――だから、そういう昭和三〇年代の話題はやめろって。俺とお前しか、分かんないだろ。

渋谷――大類も分かるよ。

松村――うるさいよ。ところが、数年前に讃岐う

CamScannerでスキャン

どんを食って、びっくりしたんだよ。これがうどんだったら、今まで食ってたうどんはなんだったんだろうって。まるで、違う食い物だぜ。

渋谷——たしかに、イタリア料理屋のスパゲッティと喫茶店のケチャップのナポリタンぐらいの差はあるな。

松村——そうしたら、それがブームになってきてさ、こないだ渋谷にオープンした店なんて、一杯百円だってさ。

渋谷——どっちかというと、お前はその百円に気がいってるんじゃないのか。

松村——もちろんそれは小さいやつで、普通のにして具を入れたら三百円とか四百円とかになるそうなんだけど、それでもあのうどんなら安いもんじゃないか。立ち食いうどんより安くなるんじゃないか。

渋谷——そういうふうに、安い安いを連発するなって。それしか、考えてないみたいじゃないか。

松村——そうじゃないんだよ、ラーメンのブームって、結局みんなが工夫したからじゃないか。スープや麺や具を、各々の店が独自のものを作ったからじゃないか。

渋谷——おう、それは凄いらしいな。

松村——それでいて、一杯五百五十円とか六百円とかで、高くても七百円八百円なわけだ。なおかつ、一杯食べれば、それでちゃんと昼メシになるわけだ。

渋谷——そりゃあそうだけど、それがどうしたんだよ。

松村——ところが、蕎麦も何度もブームになりそうになって、いつも最終的には通の食べ物だっていうことになって、落ち着いちゃうんだよ。俺は、あれが気に入らないんだ。

渋谷——俺に言うなよ、そんなこと。

CamScannerでスキャン

松村――新しいことなんて何もしなくてさ、なおかつ、さっと作って、一口か二口で食い終わっちゃうものを、千円も取るんだぜ。ちゃんと昼メシ、自分も食おうと思ったら、四枚も五枚も食べなきゃなんないじゃないか。昼メシに、千円もかけられるかよ、ザケンナ！

渋谷――だけど、昔から蕎麦は食事じゃなくて、ちょっと小腹が空いたときに食べるオヤツみたいなものだったっていうじゃないか。

松村――じゃあ、オヤツに千円もとるのかよ。小学校の遠足に持っていくオヤツだって、三百円までだったじゃないか。

渋谷――知らないよ、そんなこと。たしか昔は蕎麦も天ぷらも屋台でちょっとつまむものだったらしいけどな。

松村――そうだろ。だけど、お前、今、昼メシで食おうと思えば、ランチの蕎麦も天ぷら蕎麦も千円ぐらいで、腹一杯になるぞ。

渋谷――どうでもいいけど、どうしてお前はそんなに昼メシにこだわってるんだよ。

松村――一口、二口で食い終わるもんに千円もとりやがって。俺は高級ワンコ蕎麦を食おうってんじゃねえんだ。

渋谷――なんか分かんないけど、それで讃岐うどんがいいって言いたいのか。

松村――まあ、そういうことだな。

渋谷――それと『渋松対談Z』と、どういう関係があるんだよ。

松村――……。

渋谷――一九九六年から二〇〇二年まで俺達が[illegible]重ねた対談が一冊で読める。しかも千二百円という安さで。これを買わないわけにはいかない。対談本の讃岐うどん！ こういうふうに言うんだよ。

CamScannerでスキャン

[illegible]

ヤバン編集部である山崎洋一郎の、入社して初めての仕事が
ふ本の装丁だった。
[illegible]年入社、創刊当時からアート・ディレクションを担当
[illegible]年にパリへ移住。ロッキング・オンのデザイナーは
[illegible]年目にして初めて替わり、当時ロッキング・オンのハ
ウスデザイナーだった[illegible]が現在までアート・ディレク
ションを手がけている。

こんばんは、プロデューサーの渋谷陽一です

渋谷——ＣＤ出すぞ。
松村——何だそれ。
渋谷——ＣＤだよ。ＣＤ。キャッシュ・ディスペンサーじゃねえぞ。ＣＤから金を引き出すと思ったたろう？
松村——思わねえよ。
渋谷——サーティフィケイト・オブ・デポジットでもないぞ。
松村——何だそれ。
渋谷——譲渡制預金の事だよ。まあ定期預金の一種だよな。
松村——意味がわかんないんだけど。
渋谷——日経とか読むと、やたらＣＤって出て来るんで、財務省が金に困って小泉純一郎のＣＤでも出すのかと思ったら、Certificate of Depositの略で譲渡制預金の事なんだって。最近憶えたんだ、偉いだろう。
松村——そんな事憶えてると何かいい事あるのかよ。クイズ番組にでも出るのか。
渋谷——『ＳＩＧＨＴ』みたいな雑誌やってると、そういう事も知らないと大恥かくんだよ。だから必死で憶えたんだけど、もう五十一だから憶えられないし、すぐに忘れるんだよ。
松村——だったら無理しなきゃいいじゃないか。
渋谷——そうなんだけど、ロックを扱ってる雑誌の編集長がレッチリって何です？とか言ってられないだろう。
松村——それって『ＳＩＧＨＴ』の編集長はお前に

はできないって事じゃないか。

渋谷――……。ウルサイ、今回はそういう事じゃなくて、俺の出したCDの話をするんだよ。

松村――ウルサイって、勝手にお前が現金支払機がどうとかって話し出したんじゃないか。

渋谷――まあそうなんだけど、やっぱ高卒には総合誌の編集長は無理なのかな?

松村――知らねえよ、それよりお前のCDがどうしたって?

渋谷――そうそう、CD出したんだよ。CD。買え。

松村――買えって言われても、売ってんのかよ、お前のCD。

渋谷――売ってるに決まってんじゃないか。インディーズだけど大きなCD屋ならどこでも買えるぞ。

松村――どんなCDなんだ、高卒の中小企業の経営者のグチでもCDにしたのか。

渋谷――そんなもんCDにしても誰も買わないよ。

松村――じゃあ何をCDにしたんだよ。

渋谷――音楽に決まっているだろう。

松村――お前、音痴だし楽器も弾けねえじゃないか。どう音楽作ったんだよ。

渋谷――プロデュースだよ、プロデュース。松村雄策をプロデュースした輝かしい業績があるからな、俺には。

松村――……。

渋谷――何で、黙るんだよ。

松村――CDって聞いた時、きっとそこへ話が行くんじゃないかな、って嫌な予感がしたんだ。

渋谷――何で嫌な予感なんだよ。栄光のキャリアじゃないか。

松村――俺の話はどうでもいいから。そのお前の現金自動支払機の話をしろよ。

CamScannerでスキャン

渋谷——そういう言い方をするか、お前は。まあいいけどさ、とにかく出したんだよCDを。
松村——だからわかったたって、ひとつも話が前に進まないじゃないか。どういうCDなんだよ。
渋谷——女の子三人組のユニットでカヴァーをやってんだよ。かなりいいぞ。
松村——何か怪しいな。そのうち、そこの一人と五億円かけて結婚したりするんじゃないか。
渋谷——俺は小室かよ。
松村——三回はできるぞ、自分のプロデュースした女と結婚。お前は一回してるから残りあと二回だな。
渋谷——何の残りなんだよ。
松村——だから二回しか残ってないから慎重に選べよ。あと、弟には気をつけろ。手がつけられないヤンキーだとユニットが壊れるからな。
渋谷——それってゴマキの弟の事か。
松村——ソニンは涙を誘うよな。山崎も好きらしいぞ。
渋谷——だから俺は小室でもつんく♂でもないんだよ。
松村——じゃあ何だよ。
渋谷——俺は俺だよ。特にこのプロデュースは評論家渋谷陽一の仕事の延長線って感じだな。
松村——自分で自分のCDの評論するんだ。星五つ、大傑作とか書いたりするんだ。アホだなお前。
渋谷——アホはお前だよ。そんな事したら評論家としても終わっちまうだろう。そういう意味じゃなくて、ある意味、カヴァー曲の選曲とかアレンジの方向性を決めるとか、凄く評論家的な視点でプロデュースしたんだよ。
松村——ふーん、どういう曲を選んだんだよ。
渋谷——何といっても〝私たちの望むものは〟だろう。アルバム・タイトルにもさせてもらったんだ。

CamScannerでスキャン

岡林さんに頼んで。
松村――凄い曲を選んだな。
渋谷――日本のポップ史に残る傑作だろう。
松村――そうだけど、ヘヴィーな曲だよな。
渋谷――でも凄くエモーショナルでポップなメロディを持った曲でもあるわけで、この曲のカヴァーをやりたいから作ったって言ってもいいくらいのCDなんだ。
松村――確かに今の若い奴は知らないだろうな。
渋谷――そうなんだよ。でも自分の番組でかけたら反響がやたらあって、それこそエミネムの新譜をかけた時よりハガキが来て、びっくりしたよ。
松村――洋楽ファンに受けたんだ。
渋谷――むしろ洋楽ファンだろう。三十二年前の曲なのに歌詞なんかムチャクチャ現代的だし洋楽的だよ。
松村――私たちの～～♪望むものは～～♪
渋谷――歌わなくていいから。
松村――あっ、そう。
渋谷――〝私たちの望むものは　与えられたことではなく　私たちの望むものは　奪いとることなのだ〟だよ。
松村――〝私たちの望むものは　決して私たちではなく　私たちの望むものは　私でありつづけることなのだ〟っても凄いよな。
渋谷――それで最後は〝私たちの望むものは　あなたと生きることではなく　私たちの望むものは　あなたを殺すことなのだ〟だからな。
松村――確かに今だインパクトのある歌詞だよな。
渋谷――というか今だからこそだろう。
松村――他にはどんな曲やったんだ。〝朝まで待てない〟ってモップスのか。
渋谷――当然だろう。
松村――はっぴいえんどの〝はいからはくち〟もや

CamScannerでスキャン

ってんだ。
渋谷——完璧な選曲だな。
松村——というか、お前が好きな古い曲並べただけじゃねえか。
渋谷——違うよ。それなら他にもRCとか早川さんとか、いろいろあったけど、やっぱりこのアレンジの方向で生きる曲に絞ったんでこうなったんだ。
松村——ジャケットも凄いな。JR新宿駅を全共闘が占拠した時の写真だろう。
渋谷——この時代の気分を象徴してるんじゃないかと思ってさ。
松村——今の若い奴に通じんのかね。
渋谷——よくわかんないけど、いいんじゃないか。ちょっと聴いてみるか？
松村——いや、いいよ忙しいから。
渋谷——何が忙しいんだよ、渋松やってるだけじゃないか。
松村——何か急に帰りたくなった。
渋谷——聴きたくないのかよ、ワクワクするだろう？
松村——いいけどさ。聴いたら何か言わなくちゃ駄目じゃないか。
渋谷——当然だろう。
松村——ちょっと、この場所、俺の立場で悪口は言いにくいんだよ。
渋谷——どうして悪口だと決めてんだよ。
松村——決めてるわけじゃないけど、あっ、何か腹が痛くなってきた、帰らなくちゃ。
渋谷——ガタガタ言わずに聴け。
——CDをかける。
松村——……。
渋谷——凄いだろう？
松村——思ってたものより全然いいけど、これで

お前は何をやってるわけ。
渋谷――プロデュースだよ。
松村――だって、これアレンジャーのCDじゃないか。このかっこいい音は百%アレンジャーのもので、お前は何なの？
渋谷――そのアレンジャーを選んだ人だよ。
松村――何か音楽的なディレクションとかしたのかよ。

渋谷――かっこいいの作ってくれって言ったよ。
松村――そんな事はサルでもできんだよ。
渋谷――しょうがねえだろう、俺は音を作る知識はないんだから、できたもんが良ければそれでいいんだよ。
松村――俺もお前のプロデュースじゃなければ売れたかもな。
渋谷――……。 **S**

五十代って死ぬのか？

松村——なんか、この年末年始って、あんまり年末年始っぽくなかったな。

渋谷——どういうことだよ？

松村——年末っていっても、そんなにせわしくもなかったし、年始っていっても、それほどのんびりした気分じゃなかったじゃないか。

渋谷——そんなことないよ、勝手に決めるなよ。俺はメッタラヤタラと忙しかったし、だから正月気分もあったぞ。

松村——そうなのか。年末っていったら、俺は二日かけて大掃除をしたことだけだな。年始っていったら、初詣でに行ったことだけだな。あとは、ゴールデン・ウィークなんかと同じような感じだったな。

渋谷——たしかに、特別な感じはなくなってきているかも知れないな。人間、五十歳を越えると、まあしょうがないけどな。

松村——そういえば、やたらと人が死んだような気もするな。

渋谷——そう、ジョー・ストラマーが十二月二十二日だったな。五十歳だったんだってな、俺達より若

CamScannerでスキャン

かったんだ。

松村――クラッシュのレコード・デビューが一九七七年っていうことは、俺より一年早いだけだったんだ。完全に、俺達と同世代だったんだ。

渋谷――デビューは一年しか違わなくても、レコードの内容は全然違うんだから、それ以上何か言わないほうがいいぞ。

松村――うるさいよ。で、年が明けて、モーリス・ギブが五十三歳、ミッキー・フィンが五十五歳。

渋谷――死んでるな、五〇代。

松村――……。

渋谷――……。

松村――やめようか、この話題。

渋谷――まあ、いいよ。だけど、ビー・ジーズやティラノザウルス・レックスは、六〇年代からやってきてるわけだ。そうすると、ここまでよく生き残ってきたとも言えるな。もっと早く死んじゃった人がいっぱいいるわけだからさ。

松村――だけど、ポール・マッカートニーは六十歳でツアーをやってるんだな。

渋谷――ストーンズもディランもその世代で、がんがんツアーをやってる。

松村――つまり、六〇代は元気で、五〇代は死んでるっていうことか。

渋谷――……。

松村――……。

渋谷――やめるか、この話題。

松村――だけど、ジョー・ストラマーは後続のバンドやファンの尊敬を集めていたし、ビー・ジーズもビッグ・ヒットをたくさん出していて、こう言っちゃあナンだけど、それなりに納得はできる。ミッキー・フィンだけが、ちょっと辛いな。

渋谷――何、してたんだろうな。

松村――十年ぐらい前にリヴァプールに行ったとき、小さなライヴの前に来週、ミッキー・フィンが出演するっていうポスターが貼ってあるのを見たこ

とがあったぞ。

渋谷――じゃあ、音楽活動は続いていたわけだ。

松村――こういうふうに、死亡記事が出るだけでもいいのかも知れないぞ。ニュースにもならずに死んでいるミュージシアン、たくさんいるのかも知れないぞ。

渋谷――……。

松村――……。

渋谷――なんか、もっと楽しいことはなかったのかよ、お前の正月は。

松村――おう、正月映画を観に行ったぞ。これは最近毎年行ってるぞ、『ゴジラ×メカゴジラ』。

渋谷――『ゴジラ×メカゴジラ』……。

松村――その日、夕方から人と会う約束があったから、午前中の十一時あたりの回に行ったんだよ。そうしたら、上映二十分前ぐらいなのに、もう満員で立ち見しかないっていうんだよ。

渋谷――で、五十歳を過ぎた人間に立ち見とは何ごとだ！　俺はギックリ腰だ！って怒ったわけか。

松村――怒るか、そんなもの。そうじゃなくて、小学生の子供を連れて行ってるから、立ち見は無理なんだよ。しょうがないから、次の回のチケットを買って、近くの公園へ行って時間をツブしたんだ。で、その次の回は無事に座れたんだけど、客席はほとんどが幼稚園児なんだよ。

渋谷――ゴジラが子供っていうのは分かるけど、幼稚園児が来るのか。

松村――いや、そうじゃなくて。『とっとこハム太郎』と二本立てで、腹が立つのはだな、『ハム太郎』が終わったら、半分ぐらいの客が帰っちゃったことなんだ。

渋谷――で、ゴジラを見ろ！　ゴジラを見ない子供は正しい日本の子供じゃない！って怒鳴って、幼稚園児を泣かせたわけか。

松村――だから、泣かせないって言ってんだろ。っていうことはだな、うちの子は『ハム太郎』は卒業し

てるから、前の回に立ち見でもいいって言って入って、ロビーで待ってれば『ゴジラ×メカゴジラ』はちゃんと座って見られたんだ。二時間も、公園でウロウロすることはなかったんだ。

渋谷――なんか分かんないけど、早い話がお前の計算違いっていうだけのことのような気もするな。で、ゴジラはどうだったんだよ、ゴジラは。

松村――それがな……。

渋谷――もっと楽しく過ごそうぜ、正月なんだから。

松村――つまり、あんまりゴジラが出てこないんだよ、メカゴジラ中心でさ。ゴジラは四年前の『ゴジラ2000』から新しいシリーズになっているんだけど、四本の中で一番ゴジラが出てこないんじゃないかな。

渋谷――それにだな、最近のゴジラはやたらとストーリーを作り上げていて、逆に無理な感じがするんだよ。二年前の『ゴジラ×メガギラス』なんて、最初にゴジラが日本に来たときに東京を破壊しちゃったから、首都は大阪になったなんていうんだよ。そうなれば、当然、大阪に意味があると思って見ていたら、別に何もないんだよ。あれは、いまだに分かんない。

渋谷――ゴジラは二十六作目だっけ？　それだけ作ってくれば、いろいろ手を加えなきゃなんないんだよ。

松村――それと、妙に人間ドラマをからませようとするんだよな。

渋谷――そりゃあ、そうだろう。

松村――そうじゃないよ。ゴジラ映画には、複雑なストーリーも人間ドラマもいらないんだよ。ゴジラが派手に暴れれば、それでいいんだよ。だから、ゴジラと闘う敵だけ、ビシッとやってくれればいいんだよ。

渋谷――お前みたいな単純な奴だけじゃないんだよ、映画の観客は。

松村――だってさ、今回のヒロインは釈由美子なん

だけどさ、「ゴジラのために犠牲になった人のことを思うと……」かなんか言って、悩んでるんだぜ。それを言っちゃあ、おしまいだろ。

渋谷――まあ、あれだけ暴れてんだから、何百人何千人犠牲になってるんだろうけど、たしかにそれを考え始めたら、ゴジラじゃあなくなっちゃうな。

松村――だから、どうもひとつ楽しめなかったな。

渋谷――ところで、映画が遅くなって、夕方会う人は大丈夫だったのかよ。

松村――ああ、時間を遅らせてもらって、大丈夫だったよ。これがミュージシャンなんだけど、バンド・メンバーが病気になってこれからの活動を見直さなくちゃっていう話でさ……。

渋谷――もっと楽しく過ごそうぜ、正月だから！ M

CamScannerでスキャン

アトムの科学の子、僕らロックの子

渋谷——コンニチハ、お茶の水博士です。

松村——いきなりだな。何でお茶の水博士なんだよ。

渋谷——今年の四月七日が鉄腕アトムの誕生日なの知ってたか？

松村——知らないよ。ロボットなのに誕生日があるのかよ。

渋谷——生産記念日でも、完成記念日でもいいけど、それじゃ盛り上がらないから誕生日って事になってるんだろうけど、とにかくそうなんだよ。

松村——アトムも手塚治虫も死んじゃったけど。

渋谷——まあそうだけど、それでも四月からアニメが始まったり、ハリウッドで超大作が作られたり、いろいろ盛り上がるんだよ。

松村——今でもアトムって人気あんのか？

渋谷——あるらしいぞ。それで『SIGHT』も三月十九日売りで手塚治虫の特集やるんだよ。

松村——便乗商法だな。

渋谷——時代のトピックに対応しているって言ってくれ。

松村——何でもいいけど、今更手塚治虫をどうやるんだよ。

渋谷——“何故、手塚治虫はアトムが嫌いだったのか”って特集なんだ。

松村——手塚治虫ってアトム嫌いだったのか？　そんなテーマで売れるのかよ。

渋谷——よく分かんないけど、それぐらいやった方がいいと思ったんだよ。絶対、アトムは希望の使者だったとか、手塚ヒューマニズムを二十一世紀に、とか、ろくでもない事をいろんな奴やメディアが言い出すに決まってるんだから。結局、手塚さんが死んだ時と同じ事になると思うんだ。ここで俺が真の手塚メッセージを伝えなくちゃ、いったい誰がやる

んだ。

松村——でも、便乗商法なんだろう。

渋谷——だから違うって言ってるだろう。

松村——何で手塚治虫はアトムが嫌いなんだ？

渋谷——本人が、「アトムは、さみしくて悲劇的なマンガなのに、そのテーマをちっとも汲んでもらえず、アトムは正義の味方だと誤解して宣伝されてしまった。よい子のためのマンガに鞍替えされてしまった」って言ってるんだよ。

松村——そうなんだ。

渋谷——手塚治虫って人は巨大な矛盾の塊みたいな人で、それを象徴する発言のひとつだよ。だからアトム・イコール・手塚って公式で手塚治虫を語ってしまうと本来の手塚治虫と逆の手塚像ができちゃうわけよ。だけど世間の手塚観って、その逆の方になってるよな。

松村——愛と平和のジョン・レノンみたいなもんだよな。

渋谷——そうそう、確かにジョン・レノンは愛と平和でもあるけど、同時に反抗と闘いのジョンでもあるわけじゃないか。そこを抜きにロックンローラー、ジョン・レノンを語ってもしょうがないわけよ。

松村——つまり、反抗と闘いの手塚治虫をやろうってわけだ。

渋谷——まあ、手塚治虫の場合は、絶望と闇って感じだけどな。

松村——確かに手塚治虫のマンガって暗いよな。

渋谷——そうなんだよ、作品を読めば誰だって暗いって思うはずなんだけど、そこが語られないって怖いよな。ところでストーンズって二万二千円なの知ってたか。

松村——何だよ、どうして急にストーンズになるんだよ。

渋谷——いや、この渋松ってロック以外の話題だと受けないんだよ。

松村——でも、ストーンズ、やったばっかじゃないか。

CamScannerでスキャン

渋谷――だから、最近観たコンサートの話題にしようかと思ったんだけど、お前が知ってるバンドがなかったんで、とりあえずストーンズの名前を出してみたんだけど。

松村――なめんじゃないよ、言ってみろよ。

渋谷――ダットサンズ、ジュラシック5、スウェード、オーディオスレイヴ、ズワン、フー・ファイターズ、デス・イン・ヴェガスとか、あっ、お前も知ってるのだとシカゴだ。

松村――全部知ってるよ。スウェードも知ってるぞ、フー・ファイターズだって知ってるっていうの。でも前も言ったけど、そうやって若いフリをして無理矢理、好きでもないバンド観てると体壊すぞ。

渋谷――だから無理矢理じゃないんだよ。だけど年末、十二月三十日に横浜の小汚いクラブで夜中にやったルーツを観に行った時は、関係者なんか誰もいなくて、さすがに俺は偉いか馬鹿か、どっちかだな、と思ったね。

松村――馬鹿に決まってるだろう。

渋谷――でも、そういう時のライヴが良かったりすると、凄く嬉しいんだよ。ルーツも最高だったぜ。会場の入り口に一緒に出たK-CI&JOJOのバンドが都合で来れないんでカラオケになりますって書いてあった時は、帰ろうかと思ったけどな。

松村――ルーツはカラオケじゃなかったのか？

渋谷――バンドだからカラオケじゃ演れないんだよ。でもシカゴみたいに泣きたくなるパターンもあるけどな。

松村――嬉しくて泣いたのか？

渋谷――悲しくて泣いたんだよ。

松村――まだ、やってたんだシカゴって。

渋谷――当然、懐メロ状態だろうとは思ってたんだけど、かなり悲しかったな。三十年振りに出た高校の同窓会で、昔好きだった女の子がブスのババアになってたって感じに近かったな。

松村――そこまで言うか。

CamScannerでスキャン

渋谷――だって世間でシカゴっていえばAORバンドのイメージかもしれないけど、俺達世代にとっては政治的なメッセージも持ったシリアスなバンドだったじゃないか。

松村――まあな。でも誰も知らないぜ。

渋谷――シカゴってグループ名は、一九六八年民主党大会でベトナム反戦を叫んで戦った七人、それをシカゴ・セブンっていうんだけど、そこから付けたんだぞ。

松村――ウルトラマン・セブンみたいだな。

渋谷――言うんじゃないかと思ったけど、とにかくそういうリベラルな思想のバンドだったんだよ。それが何だかキャバレー・バンドみたいになってて悲しかったよ。だからリベラリズムって信用できねえんだよな。それにヒット曲が多いからコンサートが長いんだよ。

松村――そんなに長いんなら途中で帰ってくりゃいいだろう、演奏もつまんないいんだし。

渋谷――でもアンコールで〝長い夜〟演るっていうから、それを待ってたんだ……。

松村――お前も単なる懐メロ・ファンじゃないかよ。

渋谷――まあな。長いといえばオールナイト・ロック・フェス、マジック・ロック・アウトも行ったぞ。

松村――何だ、それ。

渋谷――スマッシュが冬のフジ・ロックって事でやったイヴェントだよ。

松村――オールナイトでやるんだ。

渋谷――ロック・アウトっていうのは、ROCK OUTとLOCK OUTのダブル・ミーニングで、朝まで出られない事なんだ、って日高が嬉しそうに言ってたよ。

松村――朝まで居たんだ？

渋谷――四時ぐらいまでな。

松村――お前、年寄りなんだから死ぬぞ。

渋谷――とにかく眠くてさ。最近はボケてきたせいか昼でも眠いのに、夜中はキツかったな。意識失って

床で寝てたら、暗いんで客に踏まれて、散々だったな。
松村——お前みたいなオッサンが床に寝てると完全にホームレスだな。
渋谷——そうそう。
松村——そうそう、じゃないだろう。行くなよそんなとこ。
渋谷——フー・ファイターズとデス・イン・ヴェガスを観たかったんだよ。レディオイは時間が早くて観れなくて残念だったな。
松村——本当に偉いんだか馬鹿なのか、お前の場合、よく分かんないな。
渋谷——そうだ、最近歳取って朝早く目が覚めるから、日高に言って早朝フェスっていうのをやらそう。早起きフェス、何か体に良さそうでいいな。タイトルはモーニング・セットだ。松村、お前も来い。
松村——シカゴでも呼んで一人でやってろよ。**S**

CamScannerでスキャン

ミック・ジャガー観てグングン痩せる？

渋谷——コンニチハ、鳥井賀句です。

松村——誰も知らないだろう、今の若い読者は。

渋谷——そうかな？ ストーンズといえば鳥井だろう。

松村——お前だけだよ、そういう連想するのは。

渋谷——それは鳥井に失礼だろう。

松村——そういう問題じゃなくて、鳥井も迷惑だろう。

渋谷——だって、ビル・ワイマンがソロで来日会見した時、鳥井が、「ストーンズは何故これだけ長く解散せずに続けられたのでしょう」って質問したんだよ。そうしたら、ビル・ワイマンが「俺たちの中には、君のようにサングラスをした奴が居なかったせいじゃないか」って答えたんだよ。キャラ立ってるよな鳥井って。

松村——……、お前さあ、そうやって敵ばっか業界に作ってどうすんだよ。ただでさえ嫌われてるのに。

渋谷——そんな事ないだろう、いいエピソードじゃないか。

松村——まあ、いいや、鳥井には俺から謝っておくよ。

渋谷——どうして謝るんだよ、余計な事するんじゃないよ。

松村——分かった、分かった。それでストーンズの話をしたいわけだ。

渋谷——凄かったよな、大阪まで追っかけて観ちゃったよ。

CamScannerでスキャン

松村――確かに凄かったよな。

渋谷――あれ以来、ジムに行く回数を増やして、夜十時以降、食事をとらないようにしてるんだ。

松村――何でストーンズを観るとジムに行くんだよ。

渋谷――だってほとんど六十なんだぜ、ミックもキースも。

松村――チャーリーは六十一歳だよ。

渋谷――そうそう、それであの体と動きは立派を超えて驚異だよ。人間太ったら終わりだよ。お前もどうにかしろ。

松村――どうせ一週間も続かないぞ。

渋谷――だから、こうやって活字化して退路を断とうと思ったんだよ。

松村――でも客の年齢も高かったな。

渋谷――特に初日の武道館は年齢も高いし関係者とか有名人も多かったよな。

松村――関係者入口も何か大袈裟で、テレビ・カメラも並んでたしな。

渋谷――それなんだけど、俺は今回全部チケット買ってたんで、関係者入口から入る必要はなかったんだ。でも一般入口の列がやたら長くて、関係者入口がやけに空いてたんだよ。コメントとかとられるの面倒だな、と思ったけど関係者入口から入ったんだよ。

松村――テレビに映ったのか。

渋谷――そうしたら予想通り若い奴が俺の方に走って来てさ。いきなり「一般の方はこちらから入れません」とか言って、人の前に立ちふさがるんだ。

松村――カメラマンじゃなくてガードマンじゃねえか。

渋谷――失礼だよな、ストーンズといえば鳥井賀句の次に俺だろう。

松村――お前もいろんな所で恥かいてるな。

渋谷——汚い服着てたのが良くなかったんだろうな。

松村——そういう問題じゃないだろう。結局入れなかったんだ?

渋谷——ウドーの人が飛んで来て「この人はいいんだよ」って入れてくれた。

松村——何か、お前って業界の中で迷惑な人になってない?

渋谷——どうしてだよ。

松村——「この人はいいんだ」って言い方がビミョーだな、と思ってさ。

渋谷——でも、武道館のストーンズって何かライヴ・ハウスで観てるみたいだったな。しばらく現実の出来事とは思えず、何かボーっとしてた。ミック、異様に気合入ってて歌間違えてたな。

松村——緊張してたよな。アメリカでは本当にライヴ・ハウスで演ったりしてんだろう。

渋谷——チケット二十二万らしいけどな。

松村——ストーンズって最初に来たの一九九〇年だっけ。

渋谷——スティール・ホイールズ・ツアーの時な。正直、あの時は少し期待が裏切られた感じがあったな。バックにキーボードが何台もあって、バンドのグルーヴというより、その音の壁に武装されて演奏しているみたいで、ストーンズの凄さが出てなかったよ。

松村——でも初来日が大騒ぎになって、もの凄い客が来たけど、あいつらはどこへ行ったんだよ。

渋谷——全くだよ。前回のブリッジズ・トゥ・バビロン・ツアーの時なんか、ドームの二階に人なんか居なかったぞ。俺なんか、キースが怒って帰っちまうんじゃないかと心配で東京公演全部行ったぞ。

松村——お前が行ってもしょうがないだろ。

CamScannerでスキャン

渋谷――いや、鳥井賀句の次のストーンズＶＩＰだから、キースも喜ぶかなと思ってさ。

松村――でも演奏は良かったな。

渋谷――良かった。本当の事を言えば、初日観て、やたらいい演奏だったんで、連日行く事にしたんだよ。幸か不幸かチケットはいくらでも買えたから。それで今回は、前回があれだけ良かったんだから、もっといいだろうと予想して全公演分のを買ったわけよ。

松村――でもガードマンに止められて入れてもらえなかったんだろう。

渋谷――入ったんだよ。うるせえな。それにしても初来日から十三年。その間に四回来日していて、回を重ねる度に良くなってくる五〇代のバンドって、ほとんどＳＦだよな。

松村――だから、お前も変な妄想でストーンズを真似しようとか思わない方がいいぞ。

渋谷――俺は思ったね、これはＣＤが売れないから、こんなライヴがいいんだ、って。

松村――どういう事だよ。

渋谷――だって、ＣＤが売れないと、コンサートで金を儲けないと生きていけないわけだよ。あの緊張感は生活がかかったライヴだから生まれるんだな。

松村――金なんか、いくらでもあるだろう。

渋谷――そりゃ、俺たちよりはたくさんあるんだろうけど、使う金額も半端じゃないはずじゃん。一生何もせずに、今の生活をキープする程はないと思うな。だとするなら何年かに一度ワールド・ツアーをする事で稼ぐしかないだろう。それに売れる売れない以前に、曲ができないと思うな。〝ドント・ストップ〟なんて、別にどうでもいい曲じゃん。

松村――お前、ストーンズ・ファンに殴られるぞ。

渋谷――大丈夫、みんな思ってて、ただ口に出さないだけだから。お前もそう思うだろう？

松村――振るんじゃないよ。

渋谷――だって本人たちも分かってるから、武道館の時、演奏しなかったじゃないか。たった四曲しかない新曲なんだぜ、普通演るだろう。

松村――まあな。

渋谷――もともと新しいアルバムを出してもその時のツアーで数曲しか演らないバンドだったけど、新作がないから選曲がタイトになって、もの凄くコンサートの流れがスムーズだったじゃないか。

松村――確かに聴きたい曲をしっかり演って、しかもベスト・ヒットじゃない渋い曲も演る完璧なセット・リストだったな。

渋谷――俺はね、五万人が入ったドームの何の仕掛けもないセカンド・ステージで〝リトル・レッド・ルースター〟と〝ミッドナイト・ランブラー〟を続けて演って、あれだけ盛り上げた時、この四人はロックの神だと思ったね。演出も、バック・メンバーも何にもなし、あるのはバンドのグルーヴだけって裸の状態だったからな。

松村――そういえばキース裸になってたな。

渋谷――やっぱ裸だろう、俺たちも裸で対談しよう。

松村――言ってる事がよく分かんねえぞ。でもキースが二曲ヴォーカルをとるじゃないか。〝スリッピング・アウェイ〟歌う時、ギターを肩からはずすのが変にかっこいいよな。

渋谷――そうそう、ああいうのって一種の様式美で、メンバー紹介の時、チャーリーが拍手に照れるポーズも、毎回お約束になってるよな。古典芸能に近い感じだよ。本当に日本のストーンズ教の頭の悪いバンドに学習してもらいたいんだけど、ストーンズほど正しく愛想のいいバンドはいない

んだよ。ステージを観れば一目瞭然なんだけど、客へのサービスが徹底してるわけじゃないか。つっぱってポーズをとったり、無愛想なMCしたり、日本のアホなバンドがストーンズっぽいと思ってる事は全く逆なんだよ。

松村――でもミックの日本語はどうなんだ？

渋谷――それは言える。ミックに「イケ面」とか言って欲しくなかったな。ビジョンに女の子が大映しになった時「カワイイね、後でどうよ」ってそれこそどうよ。

松村――メンバー紹介の時、拍手が長いと「しつこいよ」とか言ってたな。

渋谷――あれ毎回言ってるぞ。大阪では「まいど」って言ってたし。

柳――まいど。

渋谷――何だよ。盛り上がってる時にうるせえんだよ。

柳――いやいや、今回もビートルズ派のお二人に熱くストーンズを語っていただいて、ありがとうございました。それでは、お二人も、ミック、キースを目指し、そのお腹を絞っていただくとして、今回も枚数が尽きましたので、この辺でという事で。

松村――こいつ何で四月に異動させなかったんだよ。

渋谷――どのセクションも欲しがんなかったんだよ。**S**

編集部注：老人ボケが進行する渋谷の記憶が不安な我々は事実確認のため島井先生に連絡したところ、次のようなコメントをいただきました。ただ、渋松のノリに合わせていただき感謝します。ただ、記者会見のやりとりはやはり事実のようで……。

「ROなんてずっと読んでないけど、相変わらず

CamScannerでスキャン

アホな漫才やってるな。ビル・ワイマンはサングラスかけなかったからやめたんだよ。ブライアンやキースはいつもかけてたぞ。VIPっていえば俺ホントにストーンズのVIPパス十枚位持ってるぞ。何せオークラの寿司屋でストーンズ全員に寿司をごちそうになって、キースと部屋でギター・セッションしたのは俺位しかいないだろう。まあミーハーと言われりゃそうなんですが。俺も今回のストーンズは前回よりもずっと良かったと思う。キースなんて歌舞伎役者の域に達してたよ。でもストーンズにパワーもらって一番喜んでるのは、俺たちみたいなジジイ・ロック人種なのかも知れねえな。PS.俺はストーンズだけじゃなく、ドアーズやジャックスも好きなんだよ。その辺だけは松村と趣味が合うんだがねえ。

鳥井賀句」

CamScannerでスキャン

俺は遅咲きトレンド・セッター

松村――山口瞳の『礼儀作法入門』や『男性自身』が、売られてるんだよ。

渋谷――そうだってな。文庫本のベスト・セラーの第一位第二位になったりしてるんだよな。

松村――やっぱりエラいよな、俺って。

渋谷――山口瞳が売れると、どうしてお前がエラくなるんだよ。

松村――俺がずっと昔から山口瞳のファンだったぐらいのことは、お前も知ってるだろ。サイン本だって、持ってるぞ。

渋谷――それは知ってるけど、なんの関係があるんだよ。亡くなった作家がまた注目されてるからって、その愛読者がエラいことにはならないじゃないか。

松村――何を言ってるんだよ。俺は『礼儀作法入門』の原本の初版を持ってるんだぞ。

渋谷――当時から愛読者だったことは分かるけど、それがどうしたんだよ。

松村――祥伝社のノン・ブックっていう新書で、一九七五年十一月の発売で六〇〇円だったんだぞ。

渋谷――だから、それは分かったって。

松村――俺はあの当時山口瞳がどうして新書なんかで本を出すんだろうって思ったんだけど、今の新書ブームを見るとやっぱりあの人もエラかったんだよな。カヴァーのスイセン文は、伊丹十三だぞ。

渋谷――頼むから、俺に分かるように話をしてくれないか。

松村――つまり、俺が好きな作家は、亡くなっても必ず再評価されるっていうことだよ。内田百閒だって、そうだっただろ。

渋谷――まあな、再評価されるまでは、たしかに百閒も日本文学全集では〝昭和のその他の作家〟みたいなところに入れられちゃう存在だったけどな。

松村――それまでにも全集は出てたんだけど、あのブームのおかげで文庫本で読めるようになったもんな。

渋谷――あれは、鈴木清順の映画がきっかけだったんだっけ。

松村――言っとくけど、俺が初めて内田百閒を読んだのは一九六四年で中学一年のときだぞ。ビートルズを聴くのと内田百閒を読むのと、いっしょだったんだぞ。

渋谷――ビートルズを聴いて内田百閒を読むというのは、変わった中学一年生だよな。

松村――そんなに誉めるなよ、照れるから。

渋谷――誉めちゃいねえよ。

松村――ともかく、俺が評価した作家は、亡くなっても再評価されるんだよ。どうだ、エラいだろ、俺って。

渋谷――お前、佐藤泰志[注]も好きだったよな。彼の再評価は、始まってるのか。

松村――佐藤泰志は……まだかな。

渋谷――なんで、声が小さくなるんだよ。

松村――佐藤泰志の場合は、内田百閒や山口瞳よりもずっと若かったから、まあ俺達世代だったたから、もう少し時間がかかるかも知れないな。

渋谷――好きだった作家が再評価されて浮かれてる

のは分かるけど、別にお前に先見の明があったわけじゃないんだからさ。

松村――だって、ロックだって、そうだったじゃないか。『ロッキング・オン』創刊の頃、ビートルズやドアーズなんか、みんなめちゃくちゃに言ってたじゃないか。俺だけじゃないか。

渋谷――また、それかよ、ホント、お前って、根に持つ性格だよな。

松村――ところがビートルズは今や当り前だし、ドアーズだってオリヴァー・ストーンの映画あたりから再評価が定着したじゃないか。

渋谷――そういえば、ドアーズって来日するな。

松村――……。

渋谷――なんで、黙っちゃうんだよ。

松村――せっかく久しぶりに俺が盛り上がってるのに、どうしてそういうふうに頭から水をかけるようなことを言うのかな。

渋谷――ドアーズの来日は、お前にとっては頭から水をかけられることなのか。

松村――……。

渋谷――対談なんだから、黙るんじゃないって。

松村――いや、あの再評価から、ドアーズって、やたらとコンピレーションやライヴがリリースされてるんだよ。

渋谷――なんか、毎年出てるような感じだよな。

松村――で、同じようにドアーズが好きな友達に、「今頃、こんなに出されたって、困るよな」って言われたんだよ。だから、「こういうもの出して、売れてるから俺達も安心していられるんだよ。もし売れてなかったら、他の歌手を入れて再結成してるだろ。そんなもん、見たくないだろ」って言ったんだよ。

渋谷――ドアーズの三人って、金に困ってるのか。

松村――いや、CD売れてるから、そんなことはないと思うよ。

渋谷――じゃあ、なんで再結成するんだよ。

松村――やる気になっちゃったんだろうな。

CamScannerでスキャン

渋谷——なんだよ、それ。
松村——いや、最近の演奏のヴィデオ見たら、やたらとうまいんだよ。あの当時よりも、ずっといいぐらいなんだよ。
渋谷——そりゃあ、同じ曲を三〇年もやってればうまくなるだろ。
松村——そういうナツメロふうじゃなくて、ホントにいいんだよ。まるで新曲をやってるみたいに、力強いんだよ。
渋谷——じゃあ、いいじゃないか。
松村——だけど、お前、シンガーがジム・モリソンじゃないドアーズって、ドアーズか。
渋谷——まあな。
松村——ヴォーカルがミック・ジャガーじゃないストーンズって、ストーンズじゃないだろ。
渋谷——たしかに、あの時代のスティーヴィー・ウインウッドだとかポール・ロジャースだとかのとんでもなくうまい歌手が入っても、ストーンズじゃないな。じゃあ、観に行かないのか、ドアーズ。
松村——う〜ん……。
渋谷——だから、喋れっていうの。
松村——迷ってるんだよ。
渋谷——迷ってちゃ、エラくなれないぞ。
松村——だけど、今の格闘技ブームだって、そうじゃないか。『ロッキング・オン』創刊の頃から、俺は"猪木、猪木"って書いてたんだぞ。
渋谷——そりゃあ、『ミュージック・ライフ』や『ニューミュージック・マガジン』は、"猪木、猪木"って書かないだろ。それに、猪木とボブ・サップは全然違うじゃないか。
松村——どうして、お前には俺のエラさが分からないのかな。
渋谷——お前が、エラくないからだよ。
松村——よし、じゃあ俺に先見の明があって、エラいっていうことを証明してやるよ。実は、今、CDを作ろうと思ってるんだ。

CamScannerでスキャン

渋谷――やめろ、それだけは。エラくてもいいことにしてやるから、もうお前は歌うんじゃない。

松村――俺のじゃないよ。俺の大好きな日本のある歌手の、トリビュート・アルバムを作ろうと思ってるんだよ。

渋谷――お前の大好きな日本の歌手で、トリビュート・アルバムを作れる人っていったらもう名前を言っちゃったようなものじゃないか。

松村――いや、まだ言ってない。いちおう、年内発表を目標にしているんだ。

渋谷――お前で、ホントに大丈夫なのかよ。

松村――大丈夫だよ。これは女の子三人組じゃないから。

渋谷――……。**M**

注：佐藤泰志は二〇〇二年に再評価された。（文責・松村）

僕ら絶滅寸前の「音楽評論家」——でも天国への階段は昇りません！

渋谷——コンニチハ森脇[注1]美貴夫です。

松村——懐かしい名前だな。

渋谷——電話したら、松村は元気かよ、って言ってたぞ。

松村——電話なんかしたんだ。

渋谷——いや、前に鳥井賀句をとりあげたら受けたじゃないか。

松村——あれ、受けたのか。

渋谷——受けたらしいぞ読者に。鳥井も喜んでたし。

松村——喜んでたのか、怒って反論書いて来たじゃないか。

渋谷——あれは、あいつなりの感謝の気持ちなんだよ。

松村——そうかな、俺はただ文句言って来たように思えたけど。

渋谷——まあともかく、鳥井に続いては森脇かな、と思ってさ。

松村——昔の評論家仲間をいじってみたいんだ。だって、もう何年も会ってないだろう。

渋谷——十年以上会ってないし、電話も五年ぐらいしてなかったな。でも、中学や高校の同級生みたいで、すぐに二十代の感覚に戻るんだ。何でだろう。

松村——俺はお前ほど評論家やってなかったし、あいつらとも親しくなかったから分かんないけど、青春なんだな。でも、何で大貫[注2]や伊藤[注3]じゃなくて森脇なんだよ。

渋谷——あいつ『DOLL』で日記を連載してるんだ。それを読んでると、今にも死にそうな感じなんで、

CamScannerでスキャン

生きているうちにいじっておこうと思ってさ。

松村――病気なのか。

渋谷――みたいだな。

松村――バカ、シャレになってないだろう。

渋谷――いいんだよ、もう俺たちみたいに五十を越えたら病気のひとつやふたつ、お前だって、デブとハゲじゃないか。

松村――デブとハゲは病気じゃねえよ、お前だってデブじゃねえか。

渋谷――俺なんか四十代に二回も全身麻酔の手術してるから、そんなもんだろうって開き直りがあるけどな。

松村――お前の事はどうでもいいんだよ。

渋谷――だって森脇の日記読んでると、本当にたそがれてて、ほとんど家に居て、たまに外出すると古本屋と中古レコード屋ばっかなんだよ。

松村――いいじゃないか。

渋谷――そういえば、お前に近いかも知れない。それで、古本屋で花輪和一のマンガ買って、中古レコード屋でスターリン買って、それを喫茶店で読んで一日が終わるんだよ。

松村――普通だろう。

渋谷――普通じゃねえよ。

松村――森脇は正しい。俺は一票入れるね。

渋谷――何の一票だよ。

松村――正しい人生の一票。

渋谷――訳の分かんない事言ってんじゃないよ。

松村――でも『DOLL』ってまだ出てるんだ?

渋谷――パンクが盛りあがってるから、結構調子いいみたいだぜ。

松村――じゃあ、鳥井の時はストーンズだったんで、今回はパンクなんだ。

渋谷――いや、ツェッペリンだよ。

松村――森脇と関係ないだろう。

渋谷――いいじゃないか、『DOLL』であいつの連載が一番楽しみで、いつか渋松のネタにしようと思

ってたんだよ。今度、みんなで集まって評論家の同窓会でもやるか。
松村――嫌だよ。お前らだけで勝手にやれよ。それで、何でツェッペリンなんだ。
渋谷――DVDとライヴ・アルバムが出るんだよ。これが凄い。DVDなんか五時間二十分だぞ。それを記念して、この号もツェッペリンが表紙なんだよ。
松村――えっ、柳がレディオヘッドだって言ってたぞ。
渋谷――嘘だろう、こら柳!
柳――ハイ、ケイオー出身なのに、何故か高卒の者二人の対談を担当している、副編集長の柳です。
渋谷――ツェッペリンだって言ってたじゃねえか。
柳――ハイ、ケイオー出身なのにジョーチ出身の編集長の下で副編をやっている柳です。でも副編仲間の粉川もケイオーです。
渋谷――そんな事訊いてねえよ、ツェッペリンはどうなってんだよ。
柳――コンテンポラリーなロック・マガジンであるロッキング・オンとしては、今や原形を留めぬまでに顔の液状化が進んでいるロバート・プラントより、たとえ二ヶ月連続になろうともレディオヘッドが表紙にふさわしいと判断しました。ケイオー大学そばのラーメン「二郎」はウマイ。
渋谷――向こう行け!
柳――ハイ、ケイオー出身の副編の柳です。「二郎」のトンコツ・スープは濃いぞ。それでは、何かありましたら、そのベルを押して下さい。緊急時には、となりの桜丘クリニックに連絡して対処できるようになってます。
渋谷――うるせえ、あっち行け。
柳――それでは、お大事に。
松村――いいのかよ、あれで。
渋谷――いい訳ねえだろう。こうなったらこの渋松で盛りあげよう。
松村――いいけど、何で今更そんなDVDとライヴ

が出るんだ。

渋谷――金がなくなったんじゃないのか。

松村――いきなり盛りあがんないな。

渋谷――そうとしか思えないよな。この時期にリリースされる必然性がないもん。

松村――ないもん、って、それじゃ盛りあがんないだろう。

渋谷――いや、動機はともかくとして、内容は凄いんだよ。森内なんか『マトリックス リローテッド』より凄かった、って興奮していたぞ。

松村――よく分かんない比較だな。

渋谷――いや、音も凄いけど映像的にも思いっきりカタルシスがあるんだよ。

松村――だって三十年前の映像だろう。

渋谷――そうそう、特に初期のなんか、まだロックの中にヴィジュアル的な方法論が確立されてない時期だから、フィルムのカメラが一台くらいしか回ってないんだよ。だから演奏の途中で絵がなくなって静止画になるんだぜ。昔のエロ・ヴィデオみたいで興奮するだろう。

松村――昔のエロ・ヴィデオって静止画になるんだ？

渋谷――いや知らない。俺、そういうの観ないから分かんないけど、とりあえず感じだよ、感じ。

松村――お前の話聞いてると、金がないとか、昔のエロ・ヴィデオとか、およそ盛りあがる感じがないんだけど。

渋谷――何言ってんだ「ロック・ゴッズ、ブルース・ヒーローズ、ラップ・スターズ」だぞ。

松村――何だそれ。

渋谷――イギリスの『MOJO』がツェッペリンを表紙にしていて、その特集のタイトルだよ。『MOJO』は心あるロック・マガジンだと、俺は昔から思ってたんだよ。

松村――それって、昔のバンドばっかりとりあげてる雑誌だろう？

CamScannerでスキャン

渋谷――……。何でそんな事知ってんだよ。見てみろ、この表紙。

松村――凄いな、本当にロバート・プラントって顔が液状化してるんだ。柳はうまい事言うな。

渋谷――つまんねえ事で感心してないで、ほらロック・ゴッズって書いてあるだろう。

松村――本当だ。でも最後にクエスチョン・マークが付いてるけど。

渋谷――……。

松村――何か『ロッキング・オン』で冷たくされたんで、サイトで特集するんだって？

渋谷――第一特集が国際政治で「戦争に勝って、全てに負けたアメリカ」っていうタイトルで、第二特集が「かっこいいぞツェッペリン！」なんだ。

松村――ムチャクチャな雑誌だな。

渋谷――ツェッペリンのタイトルは嘘だけど第二特集にするのは本当だぞ。昔やった俺のジミー・ペイジ・インタヴューも載せるぞ。

松村――例の、貴方のお母さんは日本人ですか、って訊いたら帰っちゃったやつだろう。

渋谷――帰んねえよ。やたら盛りあがって、最後に二人でガッツ・ポーズして記念写真を撮ったんだから。でも読み直してみたら、あの時点で既にジミー・ペイジって昔の記憶がはっきりしてないんだよ。

松村――駄目じゃん。

渋谷――そうなんだよ、年はとりたくないよな。

柳――お疲れさまです。ケイオー出身の副編の柳です。桜丘クリニックの医者がもう帰るらしいので、そろそろ渋松も終わりにしたいと思います。

渋谷――何で医者が帰ると渋松も終わるんだよ。

柳――それではお二人ともお大事に。

渋谷――何か森脇は正しい人生を生きているような気がして来た。

松村――そうだろう、そうだろう。**S**

注1：渋谷、松村と同世代の音楽評論家。主にパンク関係の

バンドについての評論活動を行っている。惜しまれながら先だって休刊した『DOLL』の編集長を務めた。何故か渋谷は個人的に友達だと思い込んでいて、意味もなく電話をするらしい。ちなみに、森脇さんから電話が渋谷にかかってきたことはない。

注2：御存知、音楽評論家の大貫憲章氏。伊藤政則氏と一緒に渋谷のラジオ番組『ワールド・ロック・ナウ』で年末に鼎談をやるのは毎年恒例。年甲斐もなく、若者のフリをしようとする渋谷に呆れながら、大貫さんと伊藤さんは付き合ってくれている。

注3：御存知、音楽評論家の伊藤政則氏。レッド・ツェッペリン再結成ライヴを一緒に観に行った時の模様は『青盤』P80参照。

注4：粉川しの。『ロッキング・オン』編集長を経て現在はフリー。

注5：森内淳。元スワン・ソング。現在はフリー。

答えろジミー・ペイジ、寝るなアル・クーパー！

渋谷――コンニチハ、デヴィッド・クレイトン＝トーマスです。

松村――分かんないよ？　みんな。

渋谷――BS&Tの二代目ヴォーカリストだよ。♪ホワット・ゴーズ・アップ・マスト・カム・ダウン～♪

松村――歌うなよ。下手なんだから。それにBS&Tとか言っても誰も知らないだろう。

渋谷――一九七〇年代のブラス・ロック・ブームをシカゴと共に支えた人気グループで代表的なヒット曲は〝スピニング・ホイール〟。♪レット・ザ・スピニング・ホイール・スピン～♪

CamScannerでスキャン

松村——だから歌うなって、言ってるだろう。それに何でBS&Tなんだよ。

渋谷——BS&Tの初代ヴォーカリストでもあり、キーボードの奏者としてはボブ・ディランの〝ライク・ア・ローリング・ストーン〟での名演でも知られ、そして何より偉大なソロ・アルバムの数々を世に残したアル・クーパーが来日したんだよ。

松村——知ってるよ。

渋谷——じゃあ、知ってるか。日本でアル・クーパーをインターネットで検索すると、渋谷陽一が好きなアーティストって出て来るんだぞ。

松村——アル・クーパーもかわいそうにな。

渋谷——そんな事ないだろう。俺は死ぬまで観れないと思ってたんで、ムチャクチャ幸せだったな。先月はアル・クーパー、ジミー・ペイジと、俺の死ぬほど好きなアーティストが来日して、インタヴューできて最高だったぜ。盛りあがったぞ。

松村——そうか？ 今月号に載ってるジミー・ペイジ・インタヴュー読んだけど、ジミー・ペイジ怒ってるじゃないか。

渋谷——怒ってねえよ。俺に会えて喜んでいたぜ。

山崎（突然登場）——いいえ、怒ってました。

渋谷——何だよ急に。

山崎——やばかったじゃないですか。ジミー・ペイジ、社長の質問聞いたとたん機嫌が悪くなって、通訳の丸山さんも動揺して質問間違えたりして、絶対そんな事ない人なのに。

渋谷——俺は動揺しなかったぞ。

山崎——それは社長が全然英語が分からないから、何が起きているか把握できてないんですよ。

渋谷——何だよ、人を知恵足らずみたいに。

山崎——松村さん聞いて下さいよ。ジミー・ペイジが、そういう質問には答えないって言ってるのに、俺は訊きたいんだから答えろとか言うんですよ。

松村——止めろよ、お前も、横に居るんだから。

山崎——だって、社長、ジミー・ペイジを前にして

CamScannerでスキャン

眼がすわってて怖いんだもん。

松村——だもん、じゃないだろう。

渋谷——別にいいじゃないか、隠し子について話せ、と言ってるわけじゃないんだから。ロバート・プラントのヴォーカル・メロがどの段階でできているのか、どうしても知りたかったんだよ。

松村——マニアックな興味だな。

山崎——社長以外、そんな事に興味がある人間居ないですよ。

渋谷——そんな事ないって、それがツェッペリンを理解する上で一番重要なポイントなんだよ。

松村——本当かよ。

渋谷——俺としては、何でロバート・プラントがツェッペリンを嫌っているかを証明したかったわけよ。

山崎——だから、そういう決めつけがジミー・ペイジは嫌だったんですよ。

渋谷——だって、あいつのせいでツェッペリンの再結成ができないんじゃないか。売れないソロなんか早く止めてツェッペリンやれ！

松村——確かに、こういう奴がインタヴュアーだと最悪だよな。

山崎——でしょう。隣に居た僕の立場も考えて下さいよ。"アキレス最後の戦い"のリフはいつできたんだ、とか。ロバート・プラントのヴォーカルを入れたのは、ギター・ダビングの前だったのか、後だったのか、とか、そんな事ばっか訊くから、ジミー・ペイジが怒り出したんですよ。

渋谷——重要な事だろう。スタジオでヘッド・アレンジしている時、歌詞はどの程度までできているのか、というのも訊いたぞ。

松村——ほとんどストーカーじゃねえか。

渋谷——盛りあがったぞ。

松村——だから、盛りあがってないって、山崎も言ってるじゃないか。

渋谷——山崎には俺とジミーの友情が見えていないんだよ。もう十年以上会ってないのに俺の顔憶えて

CamScannerでスキャン

たし。

山崎――社長が無理矢理、前にインタヴューした事があるんだけど俺の事を憶えているかって、眼を血ばしらせて迫ったから、顔をひきつらせて、何となく憶えてるって言っただけじゃないですか。

渋谷――ジミーもシャイだから。

山崎――松村さん、どうにか言ってやって下さいよ。

松村――やだよ。

渋谷――終わった後、何でジミー・ペイジは立ったまま窓をボーッと見てたんだろう、インタヴューに感動したのかな。

山崎――虚脱してたんですよ、本当に疲れたみたいだったたし。

渋谷――次が楽しみだな。

山崎――もうないと思いますよ。

渋谷――俺のメール・アドレスがＪＩＭＭＹだって言った方がよかったかな。

松村――もういいからアル・クーパーの方はどうだったんだよ。

渋谷――すっごく盛りあがったんだけど途中で寝ちゃうんだよ。

松村――……。

山崎――いや、アル・クーパーも心配なんで僕ついていったんですよ。

松村――それで。

山崎――何か体調が悪くて頭が痛かったらしいんですよ。それで頭痛薬を飲んだら、丁度社長のインタヴューの時に効いてきちゃって眠くなっちゃったんですよ。

渋谷――いいタイミングだったわけよ、リラックスして。

松村――うるさい、お前は黙ってろ。

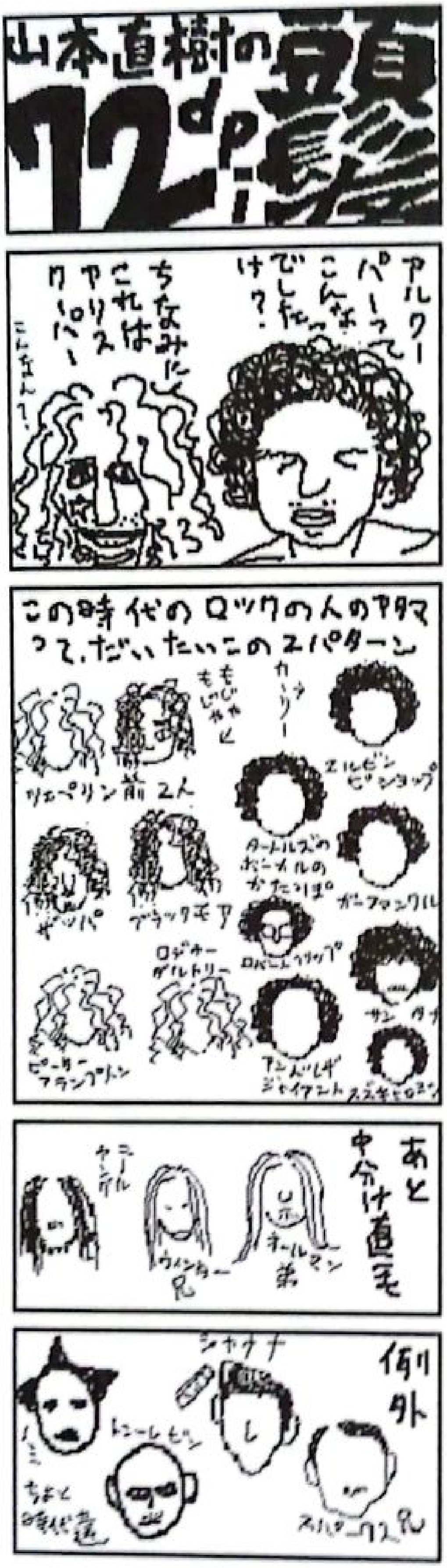
渋谷――……。

山崎――それでインタヴュー中、社長が必死に質問してる間にウトウトして寝ちゃうんすよ。何か、盛りあがってる社長がフビンで……。

CamScannerでスキャン

松村——泣くな、アホらしい。そんなインタヴュー聞いた事ないわ。
山崎——だから通訳が大変で、十五分に一回くらい「ウェイク・アップ・アル！」とか叫ぶんですよ。
松村——モンティ・パイソンじゃないんだからさ。
山崎——社長がフビンで……。
松村——だから、泣くんじゃないよ、話がバカバカし過ぎるだろう。

山崎——でも本当の話だっていうのが凄いですよね。
松村——……。
渋谷——だけどインタヴューの後、アル・クーパーは握手してくれて「今度は寝ないから」って言ってくれたんだぜ。
山崎——社長がフビンで……。
松村——ウルサイ！ **S**



CamScannerでスキャン

『ゲット・バック』をゲットしたい

松村――おい、ついに出るぞ、『ゲット・バック』が！

渋谷――なんだよ、『ゲット・バック』って？

松村――お前、『ゲット・バック』も忘れちゃったのかよ。俺と同い歳なのに、もうボケてきちゃったのかな。

渋谷――うるさいよ。お前の言ってることが分かんないんだよ。『ゲット・バック』って、あのビートルズのアルバムのことを言ってるのかよ。

松村――そのとおり。ビートルズが『ホワイト・アルバム』の次に作ろうとしたアルバムで、だけど当時はメンバー同士のコミュニケーションもとれていなくて途中で嫌になっちゃって、曲順も決めてミックスまで出来ていたのに、結局ボツにしちゃった作品なんだよ。

渋谷――知ってるよ。そんなこと。だけど、『アビイ・ロード』の後に、フィル・スペクターがプロデュースし直して、『レット・イット・ビー』というタイトルで出したじゃないか。

松村――おお、ようやく記憶がもどってきたか。昔から、忘れっぽいからな。

渋谷――だから、そういうことじゃないって言ってんだろ。

松村――そのオリジナルの『ゲット・バック』がなんと三十四年ぶりにリリースされるんだよ。ほら一月にオランダでテープが見つかっただろ。

渋谷――本当かよ。

松村――どうやら、ジョンの誕生日の十月九日発売らしいぞ。

CamScannerでスキャン

渋谷——十月っていったら、もう一か月しかないじゃないか。そんな話、俺は全然聞いてないぞ。

松村——じゃあ、命日の十二月八日かな。

渋谷——なんだよ、それ。

松村——間をとって、ジョージの命日の十一月二十九日っていう手もあるな。

渋谷——だから、なんなんだよ、それは。いったい、どこから聞いた話なんだよ。

松村——うん、友達。

渋谷——……。

松村——ビートルズが好きな仲間のひとり。

渋谷——十月出来るのかよ、そんなもの。

松村——だけど、おかしくないだろ。テープが見つかったのが一月だから、リミックスして十月発売出来るじゃないか。

渋谷——あのテープは劣化していて、すぐには手のつけようもないって話だったじゃないか。

松村——だけど、〝フリー・アズ・ア・バード〟だとか〝リアル・ラヴ〟だって、完成させたんだぞ。『アンソロジー』の中には、もっとひどい音のものもあったんじゃないのかな。

渋谷——『レット・イット・ビー』の映画がDVDになるっていう噂は聞いたことがあるから、それとごっちゃになってるんじゃないのか。

松村——CDとDVDといっしょに発売っていうのは、余計に考えられるんじゃないか。あの『イエロー・サブマリン』のときだって、そうだったからな。

渋谷——ともかく、お前は『ゲット・バック』を出させたいわけね。じゃあ、あの〝ラスト・ダンスは私に〟なんかが入っているやつが、そのまま出るのか。

松村——いや、それはどうかな。あのとき見つかったテープは五百巻って言ってたから、もう一度チェックして編集し直すかも知れないな。

渋谷——だけど、お前、そんなに聴きたいか、あれ。映画の『レット・イット・ビー』だってダラダラダラダラやってて、なんだこりゃって思ったぞ。

CamScannerでスキャン

松村——あれは、リハーサルじゃないか。終わりのアップルの屋上のライヴなんか、良かったじゃないか。〝トゥ・オブ・アス〟や〝レット・イット・ビー〟や〝ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード〟も、完成形のシーンは良かったじゃないか。本番は、いいんだよ。

渋谷——俺は、今さらっていう感じがするけどな。だいたい、ブートレッグで聴いたことがあるだろ。

松村——それは、あるよ。だけど、これが完成形っていうオフィシャルなものを聴きたいじゃないか。

渋谷——ビーチ・ボーイズの『スマイル』もそうだけど、たしかにあの時代には完成していたら大傑作と言われているレコードがたくさんあって、だけど完成しなかったわけで、それはもうしょうがないんじゃないのか。

松村——ビーチ・ボーイズだけじゃないぞ。ドアーズの〝セレブレーション・オブ・ザ・リザード〟、フーの〝ライフハウス〟、ジミヘンの〝ファースト・レイズ・オブ・ザ・ニュー・ライジング・サン』……。

渋谷——もう、分かった。だけど、完成出来なかったものは、完成出来なかったんだよ。だから、それはボツにして、その先に行ったんだから、それでいいんだよ。そんなことにこだわっていたら、しょうがないんだよ。

松村——だけど、フーは『ライフハウス』を完成出来なくて、そこまでのもので『フーズ・ネクスト』として発売したわけだろ。『フーズ・ネクスト』でもあれだけ凄いんだから、本来の『ライフハウス』だったらどれだけ凄いか分からないぜ。

渋谷——たしかにそれは言えるけど、そのときボツにした曲を後のアルバムに入れたりしてるじゃないか。ドアーズなんか、ライヴ・アルバムでやったじゃないか。最近はボックス・セットに、ほとんどデモ状態のものも入れてるし。それで、いいんじゃないのかな。

松村——ビートルズやドアーズの場合、曲目を調べ

て、オフィシャルなレコードとブートレックを組み合わせて、自分でテープを作ったりもしたんだ。だけど、やっぱり公式のものが聴きたいんだよ。
渋谷――しつこい奴だな、昔からそうだけど。
松村――あの当時はレコーディング機材も今とは比べものにならなくて、八チャンネルとかでやってただろ。だからこそ、とんでもないことをいろいろとやっていたわけだ。そこが、面白いんだよ。そうだろ。
渋谷――それはそうだけど、今は二〇〇〇年代だからな。そんなに、お前みたいに六〇年代七〇年代で喜んじゃいられないんだよ。
松村――あっ、そういうこと言うかな。ツェッペリンのライヴCDで狂喜してたの、誰だよ。
渋谷――……。M

フジ・ロック! ロック・イン・ジャパン!! そして結局ツェッペリン!!!

渋谷——コンニチハ、エルニーニョ渋谷です。今年の偏西風はきついぞ!

松村——……。

渋谷——黙るなよ。突っ込めよ、仕事だろう。

松村——突っ込みようがねえだろう、そんな意味不明のボケ。

渋谷——なんだよ、知らないのか。今年の夏、やたら涼しかったのはエルニーニョ現象のせいなんだぞ。

松村——知ってるよ、そんなこと。だからなんだよ。

渋谷——いや、梅雨明けも遅くてフジ・ロックは雨ばっかで寒かったな、と思ってさ。

松村——……。

渋谷——うちのフェスも、ぎりぎり梅雨明けで、結構ヒヤヒヤしたし、大変だったな、ってな話題で盛り上げようと思って、ナイスなつかみをかましたわけさ。

松村——そういえばロック・イン・ジャパン・フェスって毎日ツェッペリンをオープニングで流して、それに乗ってお前が登場したんだって。

渋谷——オウ、バカ受けだったぞ。

松村——客は怒ってたらしいじゃないか。

渋谷——どうしてだよ、すごい歓声だったぞ。

松村——それは最初のバンドの演奏が始まると思って歓声をあげたんで、別にお前に歓声をあげたわけじゃないだろう。

渋谷――確かに言われてみれば、そうかもしれないな。

松村――そうかもな、じゃないだろう。よく四万人を相手にそんなことするな。客は急に変なオヤジが出て来たんで、フェスが中止になるのかと思ったらしいぞ。

渋谷――ツェッペリンに乗って中止のあいさつする奴なんかいるか。

松村――だから客はわけが分かんなかったらしいぞ。

渋谷――誰がそんなこと言ってんだよ。お前ひたちなか来てねえから分かんないだろ。

松村――いいじゃないか。民の声だよ。

渋谷――柳のバカだな。そういうつまんねえこと言うのは。

松村――誰でもいいだろう。しかも出て来て説教するんだって、お前は。

渋谷――まあな、心配じゃないか、いろいろと。四万人を前に説教はなかなかできないぞ。

松村――そうかもしれないけど、説教するのになんでツェッペリンを流さなくちゃならないんだよ。

渋谷――なんにしろ勢いは必要だろう。

松村――止める奴はいないのかよ。

渋谷――舞台監督が言いにくそうに「明日もやるんですか、ツェッペリン？」って訊きに来てたな。

松村――お前、なんて言ったんだよ。

渋谷――力強く[注1]「もちろんやります」って答えたよ。

松村――邦楽のフェスなのに、なんでツェッペリンなんだよ。

渋谷――俺の場合、なんでもツェッペリンなんだよ。分かりやすくていいだろう。

松村――ジミー・ペイジもえらいもんにとりつかれたよな。

渋谷――来年の曲は何にしようかな。

CamScannerでスキャン

松村——止めたほうがいいと思うぜ。そういえばフジでは一回しか会わなかったな。

渋谷——お前、ジョン・メイオールを観たって言ってたな。

松村——良かったぞ。なんでお前は観ないんだよ。俺たちが観ないと誰も観ないぞ、ジョン・メイオールなんか。

渋谷——それって、ほめてんのか？　他に何を観たんだよ？

松村——スティーヴ・ウィンウッドとか、ニック・ロウとか、いろいろ観たぞ。

渋谷——年寄りばっかじゃねえか。

松村——お前もニック・ロウのときにいたらしいじゃないか。〝クルーエル・トゥ・ビー・カインド〟のとき、一緒に歌ってたんの目撃されてるぞ。

渋谷——なんで俺の行動がいちいちお前に報告されてるんだよ。

松村——お前も社長だと思って安心してちゃやばいぞ。俺も、お前には言えないけど、社員からいろいろ相談されることだってあるんだよ。

渋谷——嘘つけ。お前に相談したってしょうがないことぐらい、うちの社員は分かってるよ。

松村——お前の知らないところでは俺は人望があるんだよ。

渋谷——お前が先月、会社でウロウロしてるの見て、新入社員が「ビルの管理会社の人ですか」って言ってたらしいぞ。

松村——今度、そいつの名前と住所教えろ。いやがらせの手紙を書いてやる。

渋谷——展開が暗いな。面と向かって怒ればいいじゃないか。まあ、そんなことはどうでもいいけど、フジは三日間いたんだ？

松村——雨で寒かったな。

渋谷——日程の問題かと思ったけど、結局八月も

寒かったから、今年は異常気象だったよ。

松村――でも、ロック・イン・ジャパンはフェス日和だったな。

渋谷――俺にはフェッペリンがついてるからな。

松村――よく分かんないけど、フジじゃお前も濡れて寒がってたらしいじゃないか。

渋谷――結局、お前は何を観たんだよ。

松村――だから、ジョン・メイオール、ニック・ロウ、スティーヴ・ウィンウッド、コステロ、外道、電撃ネットワーク、それから――。

渋谷――年寄りばかりじゃないか。

松村――何言ってんだ、ビールアウトも観たぞ。お前だって外道のとき、外道ダンスしたって聞いたぞ。

渋谷――どうして、そういうレポートが届くんだよ。

松村――してなかったのか？

渋谷――してたよ、うるせえな。終わって加納秀人とバック・ステージで握手したよ。やっぱ俺たち世代にとっては伝説だからな。

松村――同じじゃないか。スティーヴ・ウィンウッドとコステロのときは、グラスの斜面に場所取りして、椅子まで用意して盛り上がってたらしいじゃないか。

渋谷――お前、スパイでも雇ってんじゃないのか。でもフジの客はなんで"ギミー・サム・ラヴィン"でもっと盛り上がんないんだよ。俺なんか一緒に歌ったぞ。

松村――お前、オヤジのロックで踊ったり歌ったりしてるくせして、俺のことなんか言えないだろう。

渋谷――でも、お前はメインのグリーン・ステージにあんまりいなかったんだ。

松村――観たぞ、グリーン・ステージでビートルズのコピー・バンド。かなり分かんないもんだっ

CamScannerでスキャン

たけどな。
渋谷——……。三日間いて、グリーンのヘッドライナーを三つとも観てない奴とか珍しいぞ。ビョークもマッシヴもアンダーワールドも観てないいんだろう？
松村——その代わり右にエンケン、左に三上寛という貴重な体験もしてるぞ。
渋谷——なんだよそれは。
松村——いやオレンジ・コートで三上寛が「ウオーッ」とか叫ぶのを聴いてたら、隣のフィールド・オブ・ヘブンからも「ウオーッ」とか叫び声が聞こえてきて、エンケンが始まったんだよ。そっちもチェックしようと思って移動してったら中間地点で丁度、右からエンケンの叫び声、左から三上寛の叫び声という実に感慨深いシチュエーションになったわけよ。あれは日本のポップ史がある意味凝縮された貴重な瞬間だったな。体験できなくて悔しいだろう。
渋谷——別にエンケンと三上寛の叫び声を同時に聴きたいとは思わないけど、考えてみるとフジ・ロックへ行った、という体験にはいろんな物語があるんだな。
松村——お前はどうだったんだよ。
渋谷——俺は一日中動き回ってたから、ものすごい数のアーティストを観たけど、一番メジャーなものならビョーク、マイナーなものならキネシスが面白かったな。でも、一番知り合いに会ったのはニック・ロウのときだったな。そういえば大久保[注2]のあいさつ見たか？
松村——なんだそれ。
渋谷——大久保がNGOについてグリーン・ステージでスピーチしたんだよ。今年の俺のワースト・アクトはあれだな。あいつは喋れないのに、どうして出て来るかな。今度、日高に言っておこうぜ。

松村――お前だって、客から見たら同じようなもんだぜ。

渋谷――そうかもしれないな。そういえば思い出した、オイッ、柳ちょっと来い。

柳――ヘイ！

松村――俺はそろそろ帰ろう。それじゃな。**SM**

注1：現在も、フェスで渋谷が朝礼を行う際、毎日流れている。フェスに参加している社員は皆、あのイントロが流れると何かに憑かれたように現場へ駆けつけているとかいないとか。

注2：ロッキング・オン創刊当時のメンバー。松村の同級生。松村は同じ学内闘争をやって自分だけが退学になって、大久保氏は逃げたと恨みに思っている。渋谷はロッキング・オンが一番苦しいときに逃げたと思って恨みに思っている。ただ我々から見ると、三人の中で一番性格がいいのは大久保氏である。（当時の柳による記述）

七〇年代のことなら、いつでも、どこでも、何度でも

渋谷――コンニチハ！　チョークです。

松村――誰だよ、それ。

渋谷――忘れたのかよ、サブマリンのチョークだよ。

松村――忘れてないよ。そうじゃなくて、そんな名前、読者は誰も知らないだろう。

渋谷――いや、今回七〇年代特集号らしいから、ちょっと七〇年代っぽい名前で始めてみようかなと思ってさ。コンニチワ！　パンサーです。

松村――だから、誰なんだって。

渋谷――忘れたのかよ。今村じゃないか。元々お前の友達じゃなかったっけ？

松村――そうだけど、そんな昔の『ロッキング・オン』周辺の奴のニックネーム言ったってしょうがないだろう。

渋谷――コンニチハ！　マッキー[注1]です。

松村――……。

渋谷――なんだよ、お前の源氏名じゃないかよ。

松村――なんで源氏名なんだよ。俺はホステスじゃねえよ。

渋谷――しかし、昔はなんであんな不気味なニックネームで呼び合ってたんだろうな。

松村――そういえば、お前にはなかったな。

渋谷――フーテンには〝DJのお兄さん〟と呼ばれてたぞ。

CamScannerでスキャン

松村――それは〝八百屋のオジサン〟とか〝バイク便のお兄さん〟とおんなじで、別にニックネームじゃないだろう。

渋谷――でも、今は社員に〝社長〟って呼ばれてるぞ。フェスでも照明さんとか、舞台監督に〝社長〟って言われてたぞ。

松村――だからなんだんだよ。

渋谷――俺もようやく五〇代になってニックネームができたな、と思ってさ。

松村――だから、それって飲み屋でホステスに〝社長〟って呼ばれてるのと大差ないだろう。

渋谷――そうかな。

松村――どうでもいいけど、こんな話題でいいのかよ。大体なんで今さら七〇年代の特集なんだ。

渋谷――知らねえよ。山崎に訊いてくれよ。大体七〇年代って言ったって、いろいろあるんだから、一括りにしようとしても難しいよな。

松村――特に、俺たちみたいに実際に体験してると、逆に七〇年代って言われると捉えどころのない気分になるな。でもブームなんだろう。

渋谷――というか、いわゆるガレージ系のバンドが明らかに七〇年代ロックのスタイルをベースにしていて、好きなバンド、尊敬するバンドとして七〇年代のバンドの名前をあげたりするんで、ちょっと再評価の動きがあるんだよ。

松村――結構そのまんま七〇年代みたいなバンドもいるよね。

渋谷――そうそう。でもホワイト・ストライプスみたいに、そうではあるけれど、明らかに二十一世紀型のオリジナルになっているものもあるけどな。ただ七〇年代をちゃんと聴いとかないと、そのへんの判断が難しいところもあるな。ときどき若い奴がとんでもないこと言ってたりするからさ。やっぱ俺たちみたいに古いものも知りつつ新しい動きに対応している人間がより必要とされる時代になったということだよな。

CamScannerでスキャン

松村——お前のくだらない自慢はどうでもいいから、今回はどういう話にするんだよ。七〇年代の話をすればいいのか。

渋谷——そうそう。それでニックネームじゃないけど、七〇年代にはあったのに、二十一世紀になったらなくなったものというのをやろうと思うんだよ。

松村——ロック喫茶。

渋谷——そうそう。

松村——FM雑誌。

渋谷——そうそう。

松村——エアチェック、後楽園球場、日劇。

渋谷——出るな。

松村——『ミュージック・ライフ』、『音楽専科』、『新譜ジャーナル』。

渋谷——『ミュージック・マガジン』。

松村——わざと間違えるなよ。

渋谷——でも、どのネタも長くなりそうだよな。これを特集にすればいいのに。日劇のジョン・メイオールと後楽園のグランド・ファンクだけで一時間喋れるぞ。

松村——それ、もう何回もやったじゃないか。

渋谷——そうだっけ？　俺は初めての気持ちで喋れるぞ。

松村——そりゃあ、喋れるだろうよ。俺だって、武道館のビートルズとか日劇のリトル・ペギー・マーチとか、いくらでも喋れるぞ。

渋谷——ちょっと待てよ。ビートルズの武道館は分かるけどそれって六〇年代だし、リトル・ペギー・マーチってなんだよ。

松村——知らないのかよ、六〇年代のアメリカン・ポップスの女性歌手じゃないか。〝アイ・ウィル・フォロー・ヒム〟とか、〝さよなら初恋〟とか、ヒットしたじゃないか。

渋谷——単なる、アイドル歌手じゃないかよ。

松村——可愛いかったぞ。とても同じ人間とは思えなかったな。やっぱり俺は東洋の日本人だなって感

じたよ。これじゃあ、アメリカに負けるわけだって思ったよ。

渋谷――ウソつけ。ビートルズっていえば、前にお前が言ってた『ゲット・バック』、どうやら本当に出るみたいだな。

松村――そうなんだよ。やっぱり、俺は間違っちゃいないんだよ。

渋谷――お前が友達から聞いた噂話だなんて言うから、俺はガセネタだって思ってたんだけどさ。

松村――とりあえず、俺のビートルズ仲間は凄いぞ。リヴァプールへ行った時も、ジョンが結婚して初めて住んだ家を見に行ったんだけど、そこにいた地元の兄ちゃんが「ここじゃないよ。もう一本向こうの道だよ」って言うのに対して「こういう人たちは何も知らないんだよね」って自信たっぷりだったぞ。

渋谷――何が言いたいんだか、よく分かんないんだけど。

松村――ジョンとポールが初めて会ったセント・ピーターズ・チャーチに墓地があって、そこにエリナー・リグビーの墓があるのも見つけたぞ。

渋谷――お前と俺とでは、凄いっていう概念が恐ろしくかけ離れてるような気がするな。

松村――で、『ゲット・バック』発売記念で、ついに俺の本『ビートルズは眠らない』も発売することにしたぞ。

渋谷――その話、もう何年も前から聞いてたような気がするけどな。

松村――そんなことないだろ、気のせいだよ。とりあえず、一九九一年から今日までに俺が書いたビートルズ関係の原稿の中から厳選したものだから、凄いぞ。

渋谷――お前と俺とでは、凄いの意味が違うからな。

松村――まあ期待してくれよ。

渋谷――なんだよ、久しぶりに『ロッキング・オン』から本出すのに、それだけかよ。

松村――いや、あとは来月の渋松対談全部使って、

ピシッと決めるからよ。

渋谷——……。なんか、話題がお前のせいで思いきり六〇年代になってるじゃないか。

松村——お前の七〇年代バナシは読者も飽きてるんだよ。

渋谷——大丈夫だよ。読者も新陳代謝してるし、十年以上読んでる読者は俺たちと一緒に歳とってボケてるから忘れてるって。

松村——ムチャクチャなこと言ってるな。まあいいや。そういえば、外盤屋ってのもなくなったんじゃないか？

渋谷——いや、残ってるし、ヒップホップとかテクノとかアナログが重要になってくるジャンルだと健在なんだけど、昔とはやっぱりちょっと違うよな。昔って輸入盤でしか手に入らないものが今よりずっと沢山あったんだ。だから輸入盤屋で高い金を払って日本未発売のものとか買ったんだよな。足元見た高い値段つけたりしてたぜ。

松村——そうだな。なんか、外盤のほうが偉いってイメージなかったか。

渋谷——あった、あった。音楽評論家とか一種のオタクじゃないか。どれだけ外盤を持ってるか、日本未発売のものを持ってるか、そんなことばっか自慢してんだよ。俺は日本で一番外盤を買わない音楽評論家だったな。

松村——ただケチなだけだろう。

渋谷——まあ、そうなんだけど、いわゆるコレクター的なもの、マニアックなものを馬鹿にしてたな。だから、知識に頼らない評論家として同業者から一目置かれてたぜ。

松村——馬鹿にされてたんだよ。

渋谷——でもオタク系の評論してた奴はみんな消えたぜ。

松村——というより音楽評論家も二十一世紀になってなくなったものの一つだよな。

渋谷——そのうち俺とか大貫とか伊藤は貴重な存在

として人間国宝とかなったりするかな。
松村——変わった生き物として保護されるかもな。オリとか入れられて。
渋谷——なんでオリに入れられるんだよ。でもこうやって消えたものを並べていくと、結局、消えるべくして消えていった感じがするな、『ミュージック・マガジン』とか。
松村——だからなくなってないって言ってるだろう。
渋谷——知ってるよ。
松村——……。 SM

注1：松村がコロムビアより歌手デビューした際、当時のニックネームから渋谷は「マッキー・ショック」というコピーをつけた。もちろん現在、ロッキング・オンの社員たちは誰もそんなふうには呼んでいない。
注2：二年後にも同じことを言っている。詳しくはP208。

新単行本『ビートルズは眠らない』遂に刊行。信じてくれ、買ってくれ、読んでくれ！

松村――お前『モスラ』の原作者って、誰だか知ってるか？
渋谷――なんだよ、いきなり。円谷英二かな。
松村――ブー！
渋谷――あっ、それ知ってる。高木。
松村――名前、訊いてるんじゃないよ。ハズレって、言ってるんだよ。
渋谷――分かってるよ、そんなこと。お前に合わせて、ボケただけじゃないか。
松村――……これがな、なんと中村真一郎、福永武彦、堀田善衛の三人なんだよ。
渋谷――本当かよ、大作家三人じゃないか。
松村――まあ、ストーリーを全部作ったわけじゃあないんだろうけどな。『ゴジラ』が大ヒットした

CamScannerでスキャン

から、なんかそういうものを考えてくれって言われて、アイデアを出しただけだろうな。

渋谷——それにしても、凄いじゃないか。いつなんだよ、『モスラ』の公開って？

松村——一九六一年。

渋谷——じゃあ、まだ三人とも大御所っていうわけじゃあなかったんだな。それで、なんかアイデアを出してくれって言われて、〝でっかい蛾〟を考えたんだな。

松村——なんだよ、〝でっかい蛾〟って。ミもフタもないなあ。だけど、びっくりしただろ。

渋谷——まあな。

松村——じゃあ、なんでへえーって言わないんだよ。

渋谷——『トリビアの泉』をやろうっていうのか、お前は。

松村——『男はつらいよ』のオイチャンとオバチャンの店は、初めは〝くるま屋〟だったんだけど、しばらく経ったら〝とら屋〟になったんだぞ。

渋谷——へえー。

松村——そこで、机たたくんだよ。

渋谷——うるさいよ。

松村——これはな、映画が大ヒットしたら、あそこの参道のある店が、勝手に〝くるま屋〟っていう名前にしちゃったんだよ。松竹がやめてくれって言ってもやめないから、しょうがなくて映画のほうを変えたんだよ。

渋谷——へえー。へえー。へえー。

松村——おっ。調子が出てきたじゃないか。

渋谷——今日は、お前に合わせないと、話が進みそうにないから、やってるんだよ。

松村——エリック・クラプトンの大好物は……。

渋谷——なんで、途中でやめちゃうんだよ。

松村——バカだな。ここで、数秒間時間を空ける

CamScannerでスキャン

んだよ。

渋谷——いいから、早くやれよー。

松村——トンカツである。

渋谷——へえー、へえー、へえー、へえー、へえー。

松村——おっ、五へえーか。やったな。

渋谷——だけど、本当かよ、それ。

松村——ああ、青山のトンカツ屋でクラプトンが嬉しそうにトンカツを食べてるのを、何人にも目撃されてるぞ。

渋谷——まあ、もう来日回数も多くなってるからな。

松村——渋谷のそば屋でカツドン食ってたっていう噂も、あるぞ。

渋谷——クラプトンとトンカツはいいけどさ、これっていつまでやるんだよ。

松村——いや、今月は俺の本をテーマにしようって思ってるからさ。いきなり本題に入るのはちょっと照れくさくてさ。

渋谷——照れるガラか、お前が。早くやろうぜ、もうずいぶん時間が経ってるぞ。

松村——ニック・ロウのマネージャーの大好物は……。

渋谷——だから、早くやろうって言ってるだろ！

松村——そういうわけで、ついに俺の本『ビートルズは眠らない』が発売されることになったんだ。

渋谷——へえー、へえー、へえー。

松村——なんで、こんなところで、へえーなんだよ。

渋谷——だって、お前、出す出すって言って、なかなか出さないいじゃないか。

松村——いや、今度はもう大丈夫だよ。

渋谷——お前、ロッキング・オンでは、〝単行本のオオカミ少年〟って言われてるんだぞ。だいたい、

この前に本出したのって、いつなんだよ。

松村――『それがどうした風が吹く』は、二〇〇〇年十一月。

渋谷――三年も経ってるじゃないか。

松村――二〇〇二年十一月には『渋松対談X』も出てるぞ。

渋谷――あれは、俺との対談本じゃないか。それにしても、お前って十一月が多いな。

松村――そうだな。どうしてかな。

渋谷――分かり切ったことだろ。基本的に取次が休みになるから、十二月っていうのはあんまり単行本を出さないんだよ。だから、遅れると十一月になるんだよ。出版社の社長だぞ、俺は。

松村――ヨッ、社長！　いい子、いますよ。

渋谷――ポン引きか、お前は。

松村――だけど、今回は違うんだよ。『レット・イット・ビー…ネイキッド』の発売日に、合わせたんだよ。

渋谷――ウソつけ。発売日が十一月十七日って分かったのは、ついこの前じゃないか。作り出したときには、分かるわけないじゃないか。出版社の社長だぞ、俺は。

松村――ヨッ、社長！　いいシャブ、ありますよ。

渋谷――うるさいって、言ってんだろ。

松村――この本の広告にはたぶん十一月後半発売って書いてあると思うんだけど、十一月十七日には書店に並んでると思うぞ。

渋谷――へえー、へえー、へえー。

松村――うるさいよ。だから、CDショップで『レット・イット・ビー…ネイキッド』を買った人は、書店で『ビートルズは眠らない』を買うわけだ。

渋谷――勝手に都合よく決めるなよな。

松村――この本は、俺が一九九一年から二〇〇三年までの十三年間に書いたビートルズに関する原

稿の中から厳選したものなんだ。
渋谷――源泉は一割。
松村――うるさいよ。人がマジメに喋り始めたらくだらないこと言うなよ。お前は社長だろ！
渋谷――そうか、『ロッキング・オン』から出すんだったな。だけど、十三年分っていうのは、中途半端だな。
松村――始めたときは十年分だったんだけど、どんどん時間が経っちゃってな。
渋谷――三年かかってんのか、お前は。
松村――まあ、これが俺の初めてのビートルズ本だからさ。
渋谷――そういえば、ビートルズしか能がないお前が、今迄ビートルズ本は出していなかったんだ。一九九一年から二〇〇三年までっていうと、どんなことがあったんだっけ。
松村――九〇年代前半は、ポール、ジョージ、リンゴがツアーをやって、まあ一種のカムバックだな。後半は『アンソロジー』で、これは六〇年代の総決算かな。で二〇〇〇年代になると、『イエロー・サブマリン～ソングトラック～』や『ビートルズ1』で、二十一世紀のビートルズの始まりだな、『レット・イット・ビー…ネイキッド』も、そうだな。そしてジョージも亡くなった。
渋谷――もう、ポールとリンゴだけなんだよな。だけど、ひょっとしたら、ビートルズが一番聴かれてるのは、今かも知れないな。
松村――そうなんだよ。なおかつ、解散から三十年経って、ようやく冷静にビートルズを語れるようになったんだよ。だから、この本でも、後半は十五枚とか二十枚とかいう原稿が多いんだ。そういう原稿が、求められてたんだな。
渋谷――もはや、俺達はビートルズから離れられないわけで、それに、二十一世紀の若いファンが

たくさん増えているわけだ。まあ、世界遺産だよな。
松村——これだけ社会に影響を与えたバンドは他にはいないわけで、自分で原稿をまとめているときにもそう思ったよ。
渋谷——まあ、俺は社長でもあるし、ガンガン売れることを望むよ。
松村——なんとなく、俺が死んだ後、代表作は『ビートルズは眠らない』って言われそうな気もするんだ。
渋谷——エンギでもないこと、考えるな。
松村——ところで、本の帯のコピーなんだけど、「年季の入ったビートルズ・ウォッチャーの見た十三年間のビートルズ」ってしたらダメだって言われたんだけど。
渋谷——当り前だろ。M

昔のヒーローが、浄水器を売りに来たら、君達はどうする？

澁谷――コンバンハ、グレッグ・レイクです。

粕村――……。

澁谷――コンフュージョ〜〜ン、ウィル・ビー・マイ・エピタ〜〜フ！

粕村――何ぶれなの！　いきなり。

澁谷――ふざけてんじゃないよ。歌ってんだよ。知らないのかよキング・クリムゾンのロック史に残る名作エピタフを。

粕村――知ってるよ。[illegible]

年代に聴いたね。だからなんでグレッグ・レイクなんだよ。

澁谷――この曲を歌ってたのはグレッグ・レイクじゃないか。クリムゾンの初代ヴォーカリスト。クリムゾン脱退後、エマーソン・レイク・アンド・パーマーを結成して、[illegible]

[illegible]

体になって空に飛んでいったんだよ。

松村——くだらねえ事言ってると、全部嘘だと思われるぞ読者に。

渋谷——空に飛んでいったのだけ嘘。でも球体にはなってたな。

松村——……。

渋谷——まるかったじゃないか、顔も体も。

松村——……。

渋谷——後楽園球場と甲子園球場でELPがやったなんて、今の若い奴は信じられないだろうな。

松村——昔の方がロックの人気があったって事だよな。今、レディオヘッドやU2が来ても、甲子園球場じゃできないもんな。でも、なんでグレッグ・レイクなんだよ。

渋谷——21st・センチュリー・スキッツォイド・バンド(以下スキゾバンド)を観てきたんだよ。

松村——なんだそれ。

渋谷——元キング・クリムゾンのメンバーで、今仕事のない人達が集まってクリムゾン・ナンバーを演奏するってバンドだよ。

松村——なんか説明を聞いてるだけで悲しくなるようなバンドだな。

渋谷——演奏聴くともっと悲しくなるぞ。

松村——だったら行くなよ。

渋谷——きっと悲しいだろうな、と思いながら行っちゃったんだよ。何十年か振りで高校時代の女の子から電話がかかってきて、いちおうクラスの人気者の女の子だったから嬉しいわけよ。で、相談があるんで会ってくれとか言われて、きっとろくでもない事になるだろうな、と思いながら行っちゃうのと同じ感覚だな。

松村——良く分かんない説明だな。俺なら行かないけどな。

渋谷——で、行ってみたら、予想どおり老けこんでいて、確かにあの子には違いないんだけど、かなり悲しい状態なわけ。それで、少し昔話なんかするん

だけど、いきなり「渋谷くん会社やってるんだって、私浄水器のセールスしてるんだけど、一台買ってくれないかな」とか言われちゃうわけよ。

松村——長い喩え話だな。

渋谷——だって、コンサート、新曲とか演ったりするんだぜ。

松村——そりゃ演るだろうバンドなんだから。つまりお前の場合は新曲が浄水器なわけね。

渋谷——そうそう、新曲なんて聴きに行ってるわけじゃなくて昔の曲を全員聴きたいわけなんだから。

松村——中には新曲聴きたい奴も居るかもよ。

渋谷——絶対居ないね。だったらスキゾバンドなんて物欲しげなグループ名なんか付けるなよ。

松村——物欲しげなのはお前だろう。

渋谷——確かに。でもクリムゾンの代表曲をグループ名にしといて新曲はないだろう。だって、ドアーズの元メンバーが集まって"ジ・エンド"ってバンド組んで、それ観に行って新曲やられたら怒るだろう。

松村——まあな。

渋谷——ジョン・ライドン抜きのピストルズのメンバーが"ノー・フューチャー"ってバンド組んで新曲やるか。

松村——いいバンド名だな。

渋谷——そういう問題じゃなくてさ。

松村——分かってるよ、興奮するなよ。それでクリムゾン・ナンバーは演んないのかよ。

渋谷——そりゃ演るよ。"エピタフ"も"スターレス"も"二十一世紀〜"も"キャット・フード"まで演ったよ。

松村——だったらいいじゃないか。グレッグ・レイクは居るのか?

渋谷——居ないよ。一人だけ元クリムゾンのメンバーじゃない奴が居て、そいつがヴォーカルとギターなんだ。

松村——どんな奴なんだ。

渋谷——元レベル42ってフュージョンぽいバンドの

メンバーで、なんかやたら器用な奴なんだよ。確かに指は動くし、歌も歌えるんだけど何か違うわけ。ロバート・フリップの代わりにリー・リトナーが〝スキッツォイド・マン〟を弾いてる感じがしちゃうんだよ。極端な言い方をするとカリフォルニアの空の下のスキッツォイド・マンって感じなわけ。

松村――ある意味、シュールで恐いな。

渋谷――でも、そこまでいってていないから、ただヌルイだけなんだよ。

松村――でも、元プログレの連中って日本で稼いでないか？

渋谷――ジョン・ウェットン・バンドとか来てたな。クリムゾン系は強いよな、日本で。

松村――要するに、お前みたいなカモがたくさん居るということだろう。

渋谷――……。でも、客が入ってなくて、さすがにみんな分かってたんだな、と思ったよ。

松村――お前が駄目なんじゃん。浄水器買わされちゃうパターンだな。

渋谷――そうかもな。

松村――そんな評論家としての恥をここでさらしてもいいのかよ。

渋谷――いや、コンサート観てて、ここに居る自分を正当化できなくなって、これは渋松のネタにするために居るんだ、ってことにしたんだよ。

松村――すごい自己合理化だな。

渋谷――だから、もういいんだ……。

松村――悲しい目をするんじゃない。

渋谷――でも、次の日のニール・ヤングは良かったな。

松村――ああ、あれは良かった。観る前は、ちょっと心配してたんだけどさ。さすが、ニール・ヤングだった。もう、原稿書いちゃったよ。

渋谷――最新作の『グリーンデイル』が架空の街を舞台にした物語仕立てのアルバムだったんで、その物語を芝居で再現してみせたんだよな。

CamScannerでスキャン

松村――俺、最後の曲で踊ってる登場人物を数えたら、五十人以上はいたな。

渋谷――登場人物も多いし、映像を使った演出も凝っていて、金と手間のかかったステージだったな。

松村――で、お前は『グリーンデイル』自体は、どうだったんだ?

渋谷――英語分かんないし、話も複雑だからよく分かんないよな。

松村――なんだ、それ。

渋谷――いやCDで訳も読んだし、DVDで弾き語りの映像も観てるし、自分の番組でストーリーの解説までしてるから、それなりに分かってるんだけど、別に芝居観たいわけじゃないからな。

松村――じゃあ、なにが良かったんだよ。

渋谷――ニール・ヤングが五十八にもなって、こういう変なことにエネルギーをつぎこんでいるところが良かったたな。ストーリーは文学的で分かりにくいんだけど、基本となるのは時代に対する危機感で、それに向き合うのはストレートな反権力意識なんだ。その六〇年代から変わらないロックな世界観がいいよ。とても共感できるな。

松村――そういやニール・ヤングって昔もそんな事やってなかったか?

渋谷――ラスト・ネバー・スリープ・ツアーだよな。インタヴューで、あのときは誰も理解しなかったけど、後から良かったたって言われたって言ってたよ。今回もあのときの映像を流してたから、結構あのときと似た気分なんだろうな。

松村――でもすごいエネルギーだったよな。

渋谷――普通にコンサートやって十二分に盛り上がる、あの年代のアーティストとしてはかなり幸福なポジションにいる人なんだけど、そこに甘んじないところが偉大だよ。第二部はバンドだけで演奏するんだけど、一曲目の〝ヘイ・ヘイ、マイ・マイ〟が始まったときは、あまりの轟音とすさまじいグルーヴで、なにが起きたのか分かんないくらいすごかった

CamScannerでスキャン

よ、あのテンションがキープできてるのは『グリーンデイル』みたいなことをやってるからなんだよ。

松村――そうかもな、次になにをやるのか、いまだにニール・ヤングって分かんないもんな。

渋谷――相変わらず面白いなと思ったのはエンディングが長いんだよ。曲が終わんないの。あれは過剰なエネルギーで曲が閉じられないんだよ。客のために盛り上げるというより、自分で曲を終わらすためにやってるんだな。かなり笑えるぞ。やっぱりロックはあれじゃなくちゃ。

松村――お前としては、ようやく浄水器ショックから立ち直ったわけだ。

渋谷――そうそう。ところでさ、知り合いから買った浄水器が一台余ってんだけど、お前いらない？

松村――……。 S

テレビの大晦日、フェスの大晦日

松村――コンニチハ、曙太郎です。
渋谷――なんじゃ、そりゃ。
松村――知らないのか。お前。曙といえばハワイはオアフ島の出身で、十八歳のときに相撲取りになって、平成五年には第六十四代横綱になって、貴乃花のライバルとして、優勝を十一回もして、平成十三年初場所後に引退した力士じゃないか。
渋谷――そういうことを言ってるんじゃないんだよ、俺は。この〝コンニチハ・シリーズ〟を始めたのはたしかに俺だけど、いちおうみんなミュージシャンじゃないか。グレッグ・レイクとかデヴィッド・クレイトン＝トーマスとか。誰が、元相撲取りの名前を出せって言ったんだよ。
松村――誰も言ってないよ。ただ俺が出したかっただけだよ。早く出せって言ってた本だってもう出したんだから、文句なんか言うなよ。
渋谷――ちっとも、早くなかったじゃないか。
松村――もう出たんだから、いいじゃないか。そういうふうにしつこいと、社員に嫌われるぞ。
渋谷――うるさいよ。なんで、曙なんだよ。
松村――よく訊いてくれた、それなんだよ。
渋谷――だから、なんなんだよ。
松村――だから、それなんだよ。
渋谷――わけ、分かんないな。
松村――あのなあ、今のお前とのやりとりで、昔[注]のバンドがやったギャグを思い出したんだけど、やってもいいだろ。
渋谷――なんでも、勝手にやれよ。
松村――ひとりのミュージシャンが、もうひとりのミュージシャンを「こいつは絶対音感があって、一音聴いただけでなんの音か分かるんです」って紹介するんだよ。で、ドを弾いて「どの音」って訊くと、

相手は「ドの音」って答えるんだ。「だから、どの音？」「だから、ドの音」って。面白いだろ。

渋谷——ひとりで、笑ってろよ。

松村——で、次にソを弾いて……。

渋谷——もういいって、言ってんだろ！　だから、なんで曙なんだよ。

松村——大晦日に、K－1で曙がボブ・サップと試合するんだよ。これが楽しみでな。

渋谷——他に楽しみがないのか、お前は。だけど、曙はヒザを悪くして引退したんだろ。ボブ・サップと試合なんか出来るのか。

松村——さすがに元空手経験者だな、相撲をなめてるな。

渋谷——そういう意味じゃないよ。

松村——そういえば、お前、カール・パーマーに挑戦されたことがあったけど、あれからどうなった？

渋谷——古い話、持ち出すんじゃないよ！（注：昔、渋谷が空手をやっていたとき、空手の雑誌に〝カール・パーマーも空手をやっているが、弱いらしい〟と書いたのを当人が知って、今度日本へ行くとき俺と闘えと言ってきたことがあった）

松村——あのときは、ELPとツェッペリンとどっちが強いかって話題になったよな。

渋谷——なってねえよ！　だから、曙はどうなんだよ！

松村——まあ、あれから三年近く経ってるし、引退したのもケガが原因じゃなかったって噂もあるし、相撲最強説もあるから、けっこう面白い試合になるんじゃないかな。

渋谷——そういえば、曙には八百長の噂もあったじゃないか。

松村——あったな。だけど、あれは横綱になって体力が落ちてきてからで、それまではガチンコだったらしいぞ。だいたい、八百長っていうのは、受けてくれる相手がいなきゃ、成立しないわけじゃないか。ガチンコの貴乃花とは二十三勝二十四敗でほぼ互角

CamScannerでスキャン

だったんだから、やっぱり強かったんだよ。

渋谷——じゃあ、なんで八百長なんかやってたんだよ。

松村——『週刊ポスト』とか読むと、ともかくラクしようと思ってたらしいな。

渋谷——ラクしようと思って、一番に何十万も払っていたのか。

松村——そうみたいだな。

渋谷——それで金を遣っちゃって、年寄株が買えなくなっちゃったんだ。

松村——いいなあ。無頼派だなあ。

渋谷——お前、意味を間違えてないか。

松村——それはともかくとして、引退してしばらくたったら、相撲ファンの間で、曙再評価があったんだよ。つまり貴乃花は完全なベビーフェイスで、曙は完全なヒールで、対立構造がはっきりしていて、だから面白かったんだって。

渋谷——曙のあとっていうと、武蔵丸か、まあ武蔵丸にはヒールは合わないな。

松村——そうだろ。武蔵丸って、優しそうな顔してるもんな。あの貴乃花の最後の優勝だって、足にケガしてるのは分かってるんだから、そこを攻めればいいのに、迷ってるうちに投げられちゃったんだから。人がいいんだろうな。

渋谷——下手に投げて貴乃花が再起不能になっちゃったらどうしようとか、考えたんだろうな。

松村——そういうわけだから、曙はヒールに徹してベビーフェイスのボブ・サップと闘ってもらいたいんだよ。ケガしてる眼に指を突っ込むとか、バケツで頭を殴るとか。

渋谷——K-1で、そんなことが出来るかよ。

松村——今、相撲の人気が落ちてるのも、そういう形がまったくなくて、一番強いのが明らかにヒールだろ。

渋谷——朝青龍か。横綱なのに反則負けになったり、風呂場でつかみ合いになったり、帰りに相手の車を

勝ったり、たしかにヒールだな。

松村――タイガー・ジェット・シンだぜ、まるで。

渋谷――大人気の高見盛あたりが強くならないと、まだ相撲人気は戻らないっていうことか。

松村――まあ、先場所栃東が優勝したから、初場所も優勝して横綱になったら、少しは盛り上がるだろうな。

渋谷――そういえば、K‐1だけじゃなくて、大晦日のテレビは、三局も格闘技をやるっていうじゃないか。

松村――そう。日本テレビ系が〝イノキボンバイエ馬鹿になれ　夢をもて〟TBS系が〝K‐1プレミアム〟、フジテレビ系が〝プライド男祭り〟。とんでもないことになっちゃった。困っちゃうよ。

渋谷――〝馬鹿になれ〟とか〝男祭り〟とか。わけ分かんないな。外国人が見たら、いったいどう思うんだろうな。だいたい猪木なんか元プロレスラーだろ。どうして格闘技の主催者になっちゃうんだよ。

松村――そこが、猪木の面白いところじゃないか。猪木に〝馬鹿になれ〟って言われたら、素直に納得出来るじゃないか。

渋谷――どういう意味だよ。とんでもないことになっちゃったっていうのは分かるけど、お前が困っちゃうっていうのはどういうことなんだよ。

松村――ともかく、当然三局とも時間が重なってるんだよ。それも、やたらと長いんだ。K‐1が九時から十一時半までの二時間半。イノキボンバイエは八時から十一時十五分までの、三時間十五分。プライドにいたっては六時半から十一時四十分までの、五時間十分だぞ。どうしろっていうんだよ。大晦日に。

渋谷――困るな、そんなことで。

松村――ともかく、夕方までに大掃除を終わらせて風呂にも入っておかなきゃ。年越しそばも食べて、初詣もしとかなきゃいけないんじゃないか。

渋谷――しないでいいに、決まってんだろ。

CamScannerでスキャン

松村――とりあえず、一局はオン・タイムで見て、もう一局もヴィデオで録っても、もう一局残っちゃうんだよ。だから、今、仲間の間で、どれをヴィデオに録るか、決めてるんだよ。

渋谷――勝手に決めてろよ。しかし、テレビ五十年とかデジタル・テレビとかいっても、結局大晦日に殴り合いなのかよ。

松村――今月号は年内の発売だから、今これ読んでる奴もきっと悩んでるぞ。

渋谷――一生、悩んでろ。

松村――で、お前はどれを見るんだ？

渋谷――俺は「カウントダウン・ジャパン」で、朝まで幕張メッセにいるんだよ。

松村――そうか。がんばって、働けよ。

渋谷――……なんか、やる気がなくなってきたな。**M**

注：寺内タケシとバニーズです。

五十過ぎてからのタトゥー、二〇〇三年過ぎてからのタトゥー

渋谷——コンニチハ、リェーナです。
松村——誰だよそれ？
渋谷——タトゥーの赤毛でブスの方だよ。
松村——タトゥーって、あのレズの女子高生か？
渋谷——まあな、実際、本人達はレズってわけじゃないだろうけど。
松村——懐かしいな、今は何やってんだ。
渋谷——何やってるってタトゥーやってんだろう。懐かしいって、そんなに昔の話じゃないだろう。
松村——何か、すでにあの人は今って感じしないか？
渋谷——まあな、盛りあがんのも早かったけど、人気がなくなるのも早かったからな。
松村——東京ドームはガラガラだったんだって？
渋谷——四分の一も入ってなかったな。
松村——何でいきなりタトゥーの話なんだよ。

CamScannerでスキャン

渋谷——いや、だからその東京ドームに行ったら、想像以上にいいコンサートだったんだよ。

松村——お前、ロリコンだったっけ？　若い頃は年増好きで年上ばっかりつき合ってたけど、さすがにこの歳となると年上探そうとすると老人ホームにナンパしに行かなくちゃならないんでロリコンに転向したんだ。

渋谷——するわけないだろう。

松村——俺の家の近くに老人ホームが出来たぞ。自分が入る部屋の様子見に来るか？　ババさんいっぱい居るぞ。

渋谷——だから、俺はロリコンでも、ババさん好きでもないんだよ。

松村——だってキャーって、いろんなところで書かれてたじゃないか。

渋谷——[illegible]

[illegible]延々回して最低だったし、本人達のライヴも時間を延ばす為に同じ曲を二回やったり、何だかどうしようもなかったな。

松村——ひとつも良くないじゃないか。

渋谷——それでも良かったんだよ。

松村——やっぱりロリコンに転向したんだ。

渋谷——いや、音楽としてちゃんとしてたし。ポップ・アイドルとして正しかったんだよ。

松村——同じ曲二回やってどこが正しいんだよ。

渋谷——まず歌が半端じゃなくうまかったんだよ。特に赤毛のリエーナは、かなりのもんだったな。どうせ口パクだろうと思ってたらそうじゃなく、ちゃんと歌うんだ。東京ドームはステージから花道みたいなものがフィールドの端まで作られていて、そこをウロウロしながら歌うんだけど、ピッチが全く狂わないんだ。モニターなんかなくて、[illegible]だろうけど、ドームは音が回

って、ホールの何倍も歌いにくいのに、あれは驚いたな。バンドもうまくて、ロシア人恐るべしって感じだったぜ。

松村――聖歌隊の女の子からオーディションで選んだらしいぜ。

渋谷――詳しいじゃないかよ。

松村――俺だってそれくらい知ってるよ。

渋谷――……とにかく音楽として守るべきところは守るっていうスタンスは明確にあったな。イワンのバカには。

松村――何だよ、イワンのバカって。

渋谷――マネージャー兼プロデューサー、つまりタトゥーの仕掛け人がイワンっていう奴なんだけど、業界ではいつの間にかイワンのバカってのが通称になっちゃったんだよ。特にテレビのドタキャン以降、みんなイワンのバカって言ってるぞ。

松村――でも、音はトレヴァー・ホーンが作ってんじゃないのか？

渋谷――本当に詳しいな。

松村――だからそれくらい知ってるって言ってるだろう。

渋谷――俺もそう思ってたんだけど、基本的なものはイワンが作っていて、トレヴァー・ホーンはそれをアレンジしているだけらしいんだ。フランキー・ゴーズ・トゥ・ハリウッドのインチキ臭さに似てるんで、結構トレヴァー・ホーンのアイディアが入ってると思ってたんだけど、イワンのバカは偉いみたいだな。

松村――バカじゃないんだ。

渋谷――バカかもしれないけど、正しいところは正しいんじゃないか。それに客が良かったよ。アイドルってのは、結局、時代の欲望をどう反映するかってのが勝負じゃないか。女の子が圧倒的に多かったけど、腹のすわった客だったよ。あの時

CamScannerでスキャン

点でタトゥーのファンであるってのは、かなりかっこ悪い事になってんだけど、それがどうしたって感じだったな。まあ、だからあの数になっちゃったんだろうけど。明らかにタトゥーは、若い女の子の性意識の何かの抑圧を解放したんだよ。イワンのバカはひょっとすると男の欲望にフォーカスを合わせたのかもしれないけど、反応したのは女の子だったんだな。

松村――そんなにレズが多いんだ。

渋谷――そういうわけじゃないんだろうけど性の在り方なんて何だっていいんだ、っていうメッセージにはなったんじゃないか。

松村――そんな大げさなもんか。

渋谷――俺も半信半疑だったんだけどコンサート観て、そう思ったな。それに所詮本人達は子供なんだけど、自分達の役割はそれなりに引き受けていこうという覚悟は感じられたな。その赤毛のリエーナは、なかなかのもんだったよ。あのドームの大きさは本人にパワーがないと思いっきり寒くなるんだけど、それなりにMC部分でも持ちこたえてたからな。

松村――お前、イワンのバカからカニでも食わせてもらったんじゃないか。

渋谷――そんなもん食ってないけど、誰かちゃんと言っとかないと駄目かな、と思ってさ。実は新聞にもそういう事書いたら、いろんな反応があってさ。読者からのメールとか来たんだよ。日経の記事にそんなタトゥー・ファンからのリアクションがあるなんて驚いたよ。俺の事なんか知らない読者で日経に直接来たんだよ。担当者もめったにない事だって言ってたぜ。

松村――そりゃそうだろうな。

渋谷――ポップ・ミュージックって誰でも分かるから誰でも勝手な事言うんだよ。それはいい事な

CamScannerでスキャン

んだけど、本質的な事を言うのは難しいんだな。結局、俺しか居ないから大変なんだよ、ヤー・ヤー・ヤーズからタトゥーまで面倒みてるのは。

松村――誰かにお前の面倒みさせる方が先じゃないか。

渋谷――お前に言われたくないよ。

松村――俺はいいんだよ自覚があるから。お前のその変な自信がやばいよ。

渋谷――かもな、でもいいんだよ。

松村――何がいいんだよ。

渋谷――俺から思い込み取るとエネルギーなくなるから。

松村――凄い開き直りだな。

渋谷――そういえばエミネムのコンサートについて朝日新聞でわけ分かんない事書いてた奴居たな。

松村――いちいち話題が古いな。

渋谷――今回の渋松は新春第一弾、二〇〇三年言い残した文句大特集だって言ったじゃないか。

松村――言ってねえよ、そんな事。

渋谷――そいつもポップ・ミュージックをひとつも分かってねえんだよ。エミネムのコンサートにはヒップホップを理解してないガキばっかりが集まってリアルじゃなかったみたいな事言ってて、アホかってんだよ。

松村――お前も、千葉のヤンキーがいっぱい来て、会場でカツアゲしてウザかった、って言ってなかったか。

渋谷――自分が言うのはいいけど、他人が言うと腹が立つ。

松村――ムチャクチャな奴だな。

渋谷――というか、友達との世間話レベルならいいけど、それをコンサート評にしたら駄目だろう。そこで言ってるのは、ビートルズのコンサート行ったら、キャーキャー言ってる若い女ばっかりで、

ひとつもリアルじゃなかった、っていう話と同じだよ。そんなもん当たり前で、ビートルズはミーハー・バンドだったし、エミネムも子供に人気のアイドルなんだよ。だから、あんな遊園地みたいなセット作って、誰でも面白がれるパフォーマンスしてるわけじゃないか。そんな事は当人、百も承知で、でも作品はリアルでヘヴィーなもんを作ってるんだよ。ポップ・ミュージックの構造なんて百年も前からそうなんだからアホな事言ってんじゃないよ。

松村——でも、タトゥー三月に再来日するらしいじゃないか。お前、そのときも面倒みてやれんのか。またドタキャンするかもしれないぜ。

渋谷——そうか、じゃあそんときは俺がプロデューサーをやろう。

松村——いいから老人ホーム行ってこいよ。**S**

ロックは生き急ぐんだから、生きてるうちに誉めてやれ！

松村――コンニチハ、桂文治です。

渋谷――なんだよ、落語家かよ、今月は。

松村――そう、つい先日亡くなった、元落語芸術協会会長の十代目桂文治です。

渋谷――その落語家が、どうしたんだよ。

松村――いや、今回の文治もそうだったんだけど、亡くなると、新聞が〝惜しい人を亡くした、名人だった〟とか書くじゃないか。

渋谷――それじゃ、いけないのかよ。〝死んでせいせいした、本当に下手だった〟とか書けって、言うのかよ。

松村――そうじゃないよ、死んでから持ち上げるんなら、生きてるうちに誉めろっていうんだよ。生前に文治のことを名人なんて書いた奴、ひとり

もいないはずだぜ。

渋谷——まあな。

松村——特に、今回の文治の場合、やり過ぎだぜ。絶対に、ほとんど、名人、死すだもんな。

渋谷——文治って、落語上手くなかったのか。

松村——そんなことはないよ、面白かったぜ。ただ、いわゆる名人上手だなんて思ってた人は、いなかっただろうよ。本人だって、思ってなかっただろうよ。それで、良かったんだよ。

渋谷——何が言いたいんだよ、お前は。

松村——つまり、桂文治っていうのは、落語家っていうよりも噺家って言う感じの人で、小さな寄席がよく似合って、そこで大爆笑させる人だったんだよ。柳家小さんや志ん朝みたいに、人をホールでの名人芸でじっくり聞かせるなんていうタイプじゃなかったんだよ。

渋谷——なるほど、ホールよりも、寄席が似合うっていうタイプか。

松村——そう、そう。

渋谷——東京ドームよりも、クアトロのほうが実力を発揮しやすいっていうことか。

松村——そういうこと。

渋谷——オリンピックよりも、国体のほうがいいわけだ。

松村——ちょっと、違うような気もするな。

渋谷——『ロッキング・オン』よりも『ミュージック・マガジン』っていうことじゃないよな。

松村——絶対、そういうことではない。わけ分かんなくなってきたな。つまり、これは文治を貶めてるんじゃなくて、逆に、寄席の雰囲気を漂わせてる噺家って貴重なんだよ。他にも、三笑亭夢楽とか川柳川柳なんかがいるけどさ。

渋谷——ところが、落語家が死ぬと、誰でも名人っていうのは、おかしいっていうことか。

松村――そう、そう。古今亭志ん朝や柳家小さんが亡くなったときは、それは名人でいいんだろう。だけど、桂文治の場合は、寄席で爆笑させて、落語ファンに愛されてたってことでいいんじゃないか。そのほうが、ぴったりくると思うぜ。

渋谷――まあ、だいたい、新聞って、そういうもんだけどな。

松村――毎年、思うんだけど、冬になってスキー場がオープンすると、必ず"みんな、思い思いのスロープを描いていた"って書くのな。恥ずかしくないのかな、あれ。

渋谷――だけど、"まわりの迷惑かえりみず、自分勝手に滑ってやがんの"とは、書けないしな。

松村――わけ分かんないな、お前。数年前にプロレスラーの冬木弘道が亡くなったときも、専門誌は"プロレスラーらしい、プロレスラーだった"なんて書いてたし。

渋谷――そうじゃないのか。

松村――冬木っていうのは途中からヒールになって、なおかつ客を喜ばせることを考えて、おそらく日本では初めての、明るく楽しいヒールだったんだよ。そのときには、批判されてたんだぜ。それを、死んだ途端に、手のひらを返しやがって。それなら、生きてるうちに誉めろって言うんだよ。

渋谷――たしかに、亡くなってから誉められたって、しょうがないもんな。

松村――それを逆手に取った、頭のいい人もいるんだよ、村松友視。安原顕って、決して評判のいいだけの人じゃなかったじゃないか。

渋谷――まあな、賛否両論あったな。

松村――だけど、亡くなったから、誰も悪口は言わなくなった。そこで、村松友視は『ヤスケンの海』を書いて、積極的に安原顕をいい奴だったとしたわけだ。こうなると、あと十年二十年経ったら、

CamScannerでスキャン

本当にいい人だったということになるわけだ。頭いいよな、村松友視って。

渋谷——村松友視と安原顯って、友達だからな。

松村——だから、お前が死んだら、俺が『シブヤの海』っていう本を書いて、渋谷はケチじゃなかったし性格も暗くなかったっていうことにしてやるから。

渋谷——うるさいよ。

松村——そういうことじゃなくて、評価の定まっている芸人が死ぬと、必ずその人のことを書いて本にする奴がいるけど、あれって嫌だな。

渋谷——なんか、嫌な予感がしてきたな。

松村——渥美清とか、横山やすしとか、古今亭志ん朝とかさ。

渋谷——それに該当する作家って、明らかにひとりしかいないと思うんだけど。

松村——ビートルズに詳しいようなふりをしてるから、ジョージ・ハリスンの本も出すかと思ったけど、さすがに出さなかったな。

渋谷——その話題は、ここらへんにしておこうな。

松村——さっき、柳に訊いたら、今月は亡くなったミュージシャンの特集らしいんだよ。でもって、これから十年二十年の間に、ミュージシャンはたくさん死ぬぞ。

渋谷——エンギでもないこと、言うなよ。どうしてだよ。

松村——だって、六〇年代から活動してる六十歳ぐらいのミュージシャンがたくさんいるんだぜ。ポール・マッカートニーやリンゴ・スター、ミック・ジャガーやキース・リチャーズ。

渋谷——ボブ・ディランやブライアン・ウィルソン、レイ・デイヴィスやピート・タウンゼントもそうか。

松村——ジミー・ペイジやロバート・プラントも

CamScannerでスキャン

そうだろ。

渋谷――まあな、だけど、俺達は彼等を正当に評価してきたわけだから、亡くなっても誉めちぎってもいいわけだ。

松村――そう。ポール・マッカートニーは素晴らしい作品をたくさん作ったけど、天然でときどきボケたことを言っていたとかな。

渋谷――誉めてないじゃないか。

松村――だけど、さっきのコ〇ヤ〇じゃないけど、亡くなった人の本を出すっていうのは、慎重にしないとな。『ロッキング・オン』も、カート・コバーンの本を出してるけどさ。

渋谷――うん、今度シド・ヴィシャスの本を出すんだよ。

松村――……。 M

出版禁止こそ禁止だ！

渋谷――コンニチハ、田中真紀子の長女です。

松村――来るんじゃないかと思ってたよ。

渋谷――本名書くと出版禁止になるからな。

松村――別に本名書いたから出版禁止になったわけじゃないだろう。それに結局、ほとんど書店に出回って完売したらしいぜ。

渋谷――そうか、じゃあうちも本名書いて出版禁止にしてもらおう。

松村――だから本名書いたから出版禁止になったわけじゃないって。

渋谷――でも、さっそく買って読んでみたんだけどカスみたいな記事で、損したよ。

松村――お前みたいなアホがたくさん居たから完売したんだろうな。

渋谷――出版史上、あれほどの大宣伝はないよな。新聞の一面とテレビのトップ・ニュースだからな。結局、田中真紀子サイドも、これによって長女が離婚した事を日本国中に宣伝したみたいになって、これってどうなの？

松村――どうなの、って俺に訊かれても知らないよ。

渋谷――でも、日本の出版史に残る最悪の事件だ

と思うよ。

松村——田中真紀子の長女の離婚がか？

渋谷——そんなわけねえだろう、出版禁止命令だよ。そんなもん普通の民主主義社会じゃ考えられないぜ。

松村——確かに名誉毀損とかはよく聞くけど出版禁止っていうのは余りないよな。

渋谷——そんな事は当たり前で、出版社にとって出版禁止ってのは、放送局の放送が止まる、新聞の発行が止まる、ってのと同じ事なんだから、そんな事簡単にやられてたまるかって。

松村——やけに興奮してるな。

渋谷——世間が興奮してないから、余計に腹立たしいんだよ。

松村——でも、世間は文春もしょうがねえよな、ってムードじゃないのか？

渋谷——そうなんじゃないか。それはそれで普通の市民感覚だと思うぜ。

松村——だったらいいじゃねえか。

渋谷——全然良くない、全く良くない、本当に良くない、死ぬほど良くない。

松村——分かったよ。そんなツバキ飛ばして興奮するなよ、血圧上がるぞ。

渋谷——皆分かってないけど、これはマジにやばい事なんだよ。

松村——よしよし、今日はそれを喋りたいんだな。この対談にどれだけ世論に対する影響力があるのか全く分かんないけど、とりあえず俺が話を聞いてやるよ。

渋谷——急にやる気がなくなってきたな。

松村——じゃあ落語の話でもするか？

渋谷——やっぱり文春の話にしよう。

松村——あっ、そう。

渋谷——もの凄く原則論的に言えば表現の自由の

CamScannerでスキャン

問題なんだよ。

松村――でも、そういう言い方をメディアの側が言い出すと世間は引くぜ。

渋谷――そうなんだよ。

松村――別に田中真紀子の長女が離婚した事を報道する自由なんてなくていいよ、って思うよな。

渋谷――そうそう。でも原則の話なんだよ。表現の自由ってのは、くだらない情報でも、大切な情報でも、何でも区別せず、とにかく自由に発表できる権利を保障するって事なんだよ。これは民主主義の大原則で、知るという権利が失われたら民主主義なんて機能しなくなるからな。

松村――でも個人のプライバシーとか無視した報道も多いし、最近のインターネットなんて書き放題じゃないか。だいたい、お前もいろんな所である事ある事書かれてるだろう。

渋谷――ある事ある事じゃなくて、ある事ない事だろう。

松村――いちおう人の話を聞いてるんだな。

渋谷――確かにろくでもない情報も多いし、もっと個人情報は守られるべきだよ。でも表現の自由は絶対的な権利として守らなくては駄目なんだよ。これは俺達が歴史の中から学んで来た事で、いろんな所で言ってるけど、勝手な言論でモラルが破壊されて滅びた国はないけれど、表現の自由が失われた事によって滅びた国はたくさんあるからな。というか、世界中で、今、表現の自由が保障されてる国と、保障されてない国を比較すれば、そんな事は明白だけどさ。

松村――でも、今はプライバシーか言論の自由か、みたいな論争になってるじゃないか。

渋谷――いや、今回の事で面白かったのは〝ズームイン〟の辛坊ってコメンテーターなんだよ。

松村――ああ阪神ファンのな。田中真紀子より阪

神のニュースやれとか言ったのか。

渋谷——いや、それが今回の事に関して一番まっとうなコメントだったんだ。

松村——本当かよ。

渋谷——驚いたよ。まず、問題がごっちゃに論議されている、って言うんだよ。今回の田中真紀子の長女に関する問題は、まさにプライバシー、名誉毀損の問題で、それは裁判所に訴えて決着すべきもんで、出版禁止なんかとんでもない、ってわけ。表現の自由はどんな事があっても守られるべきで、たとえ悪い言論でも保障されるべきなんだ、こんな事で出版禁止なんて文明国じゃ考えられない、とか言ってんだよ。偉いぞ辛坊、阪神優勝だ。

松村——お前、自分の都合のいいように変えてないか。

渋谷——変えてないよ。しかも、一回だけでなくて、何回もそのテーマで話をしてるんだよ。あいつは根性があるな。読売テレビで阪神応援してただけの事はあるな。

松村——よく分かんないけど、悪い言論でも保障される、って言い切るのは凄いな。

渋谷——そうそう、たいていそこでつまずいちゃうんだよ。無論、人を傷付けたり、個人情報を流したり、根拠のないゴシップを流したりしたら犯罪なんだから、罰せられるよ。そこは逆にシビアにすべきだと思うけど。

松村——名誉毀損になっても、たいした金額じゃないし、誌面のどこに掲載されてるんだか分からない謝罪広告出されてもしょうがないよな。

渋谷——そこはどんどんシビアに論議していくべきだけど、出版禁止は凄く危険。これも辛坊が言ってたけど——。

松村——お前、辛坊ばっかだな。

渋谷——〝六甲おろし〟、歌うぞ。

松村——歌えよ勝手に。

渋谷——つまり、出版禁止は検閲って事で、国民の知る権利が奪われるって事なわけじゃないか。

松村——確かに。

渋谷——悪いか、いいかって判断を国がやっては駄目で、それは国民が考える事、っていうのが民主主義の原則なわけよ。ろくでもない情報が流通する、っていうのはそのコストなんだよ。

松村——でも、その理屈を皆に納得させるのは大変だよな。

渋谷——全くそうで、だからメディアは腹をくくらなくちゃ闘えないんだよ。それなのに朝日新聞のアホは——。

松村——出た、朝日批判、いっその事読売に変えろよ。辛坊もいるぞ。

渋谷——読売は問題外、出版禁止は当然って乗りなんだから、あれはアホを超えて犯罪的。

松村——あっ、そう。それで朝日新聞はどうアホなんだ。

渋谷——あの日の論説のタイトルが「警鐘はわかるけど」ってタイトルなんだぜ。辛坊とは違うワイドショーで、何が書いてあるか分かんない、とか馬鹿にされてたけど、思いっ切り腰が引けてるよな。新聞の論説が、ワイドショーのコメンテーターが言える事も言えてない、ってのが情けないよ。

松村——タイトルは情けないけど、書いてある内容はどうなんだよ。

渋谷——俺に言わせれば何も書いてないに等しいな。表現の自由は無論大切だけど、文春も反省すべきだ、って事だよ。本当にアホとしか言いようがないよ。

松村——朝日って文春に恨みがあるからな。

渋谷——そのレベルだよな、この論説って。だか

CamScannerでスキャン

ら文春がろくでもない、田中真紀子の長女の離婚なんてどうでもいいだろう、なんて論説こそどうでもいいんだよ。ニワトリの群れに犬がやって来てニワトリを食おうとしている時、ニワトリどうしで、お前が鳴いたから犬が気付いてやって来たんだ、とか非難しあってても意味ないいんだって。やるのは、犬とどう向き合うのか、どう闘うのか、って事だろう。

松村――朝日とか文春って、ニワトリってイメージじゃないよな。

渋谷――そういう問題じゃなくてよ。

松村――分かってるよ。何かお前が変に興奮してるから、ちょっとクールダウンさせてやろうと思ってるんだけど。

渋谷――余計に興奮してくるから止めてくれ。だって、あんな事でもし出版禁止が可能になったら、世の中の週刊誌なんて全部出版禁止にできるよ。俺が山拓なら自分の記事を止めたい時、他の記事を理由にすぐに出版禁止にするぜ。あの文春だって、長嶋ネタの方がよっぽどエグかったもん。政治家の娘が公人じゃないんなら、有名スポーツ選手のカミさんなんか、絶対に公人じゃないだろう。辛坊じゃないけど、今回の出版禁止が問題ないなんて事になったら、いくらでも検閲的な事が可能になっちゃうよ。

松村――確かに。

渋谷――だから、今メディアがやらなければならないのは、とにかく報道の自由という原則を、まさに原則として強く主張する事。プライバシー云々という違う議論へとすり替えない事なんだよ。メディア自身が騒がなくちゃ誰も騒がないからね。ある意味、政治家以上にメディアなんて嫌われてるから。俺だって朝日も文春も嫌いだもん。

松村――毎日にケンカ売ってたな。

渋谷――大きなメディアなんて権力だからたいてい嫌なもんなんだよ。ウチだって、ボロイけど、業界では権力で、嫌っている人も多いんじゃないのか。

松村――自分で言うなよ。

渋谷――でも、報道の自由は、どんな事があってもメディア自身が協力して守っていかなければならないの。出版禁止もしょうがないなんて書いている読売新聞なんて、問題外だよ。テレビのコメンテーターが言える事を何で日本の新聞はどこも言えないのかね。読売も辛坊に論説委員をやらせた方がいいんじゃないか。くだらない巨人のヨイショ記事も減るかもしれないし。

松村――そうしたら読売とるか？

渋谷――絶対とらない。

松村――……。 S

トム・ヨークはん、まいど！ うちら三十年これやってまっせ

渋谷——どうぞ。

松村——なんだよ、どうぞって。

渋谷——どうぞ始めて下さいって事だよ。

松村——渋松三十年やってるけど、そんな挨拶で始めた事なんかないぞ。

渋谷——いや、トム・ヨークがメンバーにそうやって演奏スタートの指示を出してたから、ちょっとレディオヘッドな気分で始めてみようかな、って思ってさ。

松村——どこがレディオヘッドな気分なんだよ。外タレの変な日本語なんか真似すんじゃないよ。

渋谷——いや、それがさすがトム・ヨーク、喋る日本語も違うんだって。

松村——どう違うんだよ。

渋谷——これ、って言うんだよ。

松村——……。

渋谷——ステージから〝これ〟を連発して笑えたぞ。あんなに日本語の指示代名詞を連発した外タレは初めてだな。さすがトム・ヨーク。

松村——どこがさすがなんだよ。日本人がアメリカ行って、ステージでイットとかザットばっか言ってたら、ほとんど馬鹿じゃないかよ。

渋谷——それは言える。でも日本語のコレって言葉はちょっと違うじゃないか。なんか笑えるんだよ。その辺のニュアンスにきっとトム・ヨークは気付いたんだと思うな。

松村——本当かよ。

渋谷——だって他の日本語も結構喋ってたぞ。ステージのソデに何か取りに行った時に「ちょっと待ってて」とか言ってたし。

松村——トム・ヨークって、そんな奴だっけ？

渋谷——イメージと違うから面白いんだよ。やっぱり言葉の感覚が鋭いんだと思うな。いや、大阪まで

行ったかいがあったよ。

松村――渋松のネタ作りに大阪までレディオヘッドを観に行ったんだってな。

渋谷――新しい担当の高橋（注）が、東京公演の後じゃ原稿が間に合わない、って言うからさ。新担当のくせに態度がデカイんだよ。

松村――確かに背はデカイな。

渋谷――電話番号を憶えるくらいしか能がないんだよ、あいつは。

松村――お前は、前の担当の柳にも文句ばっか言ってたけど、誉めるのも管理する重要な方法だと思うけどな。

渋谷――だから背が高くて電話番号をよく憶える、って言ったじゃん。

松村――……まあいいけど、お前の会社なんだからさ。

渋谷――でも、大阪行ったかいがあったよ。いいネタとれたよ。

松村――どうぞとコレがいいネタなのかよ。

渋谷――実際のライヴに行かなくちゃ、絶対に得られない情報じゃないか。

松村――そりゃそうだけど、そんなMCネタより、ライヴはどうだったんだよ。

渋谷――まいど。

松村――……。

渋谷――ミック・ジャガーが大阪公演の時に言ったんだよ。

松村――知ってるよ、渋松でやったネタじゃないか。

渋谷――だからライヴ以上に重要なネタがあるんだよ。全世界のストーンズ・ツアーに付いて行っても、大阪以外じゃ〝まいど〟は聞けないぜ。

松村――そりゃそうだけど、ミック・ジャガーは全世界、それぞれ行った場所の言葉でそういうことを言ってるんだよ。

渋谷――確かに。

松村――確かにじゃなくて、だからライヴはどうだ

ったんだよ。

渋谷——でも、〝まいど〟と言ったミック・ジャガーと、〝これ〟って言ったトム・ヨークって、比較すると面白いと思わないか。

松村——引っ張るな、お前もそのネタで。

渋谷——だって往復の新幹線代、いくらだと思うんだよ。

松村——そういう問題かよ。

渋谷——普通の外タレだと〝コンニチハ〟とか〝アイシテマス〟とかが、せいぜいじゃないか。

松村——まあな、でも自分で言っておいてなんなんだけど、今どき外タレとか言うか？

渋谷——いいんだよ、渋松はレトロなムードが売りなんだから。むしろ俺たちが来日アーティストとか言ったりする方が不自然じゃないか。

松村——俺は言うぞ。

渋谷——俺も言うけど、渋松では外タレなんだよ。

松村——よく分かんないけど、まあいいや。

渋谷——その外タレなんだけど、やっぱりお約束じゃない日本語を喋った、という点でミック・ジャガーとトム・ヨークって鋭いと思うわけ。

松村——〝まいど〟と〝これ〟な。

渋谷——そうそう。で、そのふたつを比較すると〝まいど〟の方が営業っぽくて、ちょっとシュール度が足りないじゃん。

松村——まあな。

渋谷——でも二十年前のミック・ジャガーなら〝これ〟とか言ったと思うんだよ。

松村——本当かよ。なんの根拠でそう断言できるんだよ。

渋谷——俺のカンだな。

松村——いいかげんだな。

渋谷——で、二十年後のトム・ヨークは〝まいど〟とは言わないと思うんだよ。

松村——それは、俺も思う。

渋谷——つまり、そこにローリング・ストーンズと

レディオヘッドの本質的な差異があるわけだよ。

松村——そんな大げさなもんなのか。

渋谷——そうだよ、つまり今やレディオヘッドは人気も評価も世界のトップに位置するグループだけど、二十年後ストーンズみたいにサバイバルしてるかと言うと、"まいど"と言えない一点においてサバイバルは無理だと俺は分析するわけだよ。

松村——全く意味が分んないんだけど。

渋谷——分り易いじゃないか、大衆バンドとして、芸人的スタンスを持てるかどうかという事だよ、レディヘは間違いなく今最も重要なロック・バンドだし、俺もムチャクチャ好きだけど、やっぱりロック・ファンの為のロック・バンドなんだな。ストーンズやビートルズは、明らかにそこから踏み出しているじゃないか。ポールも"まいど"とか言えそうじゃん。

松村——確かに。でもロジャー・ダルトリーもピート・タウンゼントも"まいど"とは言わないぜ。

渋谷——……。

松村——なんで"まいど"と言わないフーはサバイバルしてんだよ。

渋谷——……。

松村——ボブ・ディランって"まいど"って言うと思うか?

渋谷——……。

松村——バリバリ現役でサバイバルしてるんだけど。

渋谷——なんかレディオヘッドもサバイバルしてそうな気がしてきたよ、松村。

松村——何が松村だよ。人の名前気安く呼ぶな。お前、いいかげん過ぎ。若い社員はダマせても、俺みたいなオヤジにストーンズ、ビートルズ・ネタでごまかそうとしても無理。

渋谷——偉い松村。やっぱり三十年も一緒に対談やってるだけの事はある。

松村——交通費のモトを取ろうと、ネタを引っ張り過ぎるから、そういういいかげんな事を言うハメになるんだよ。

CamScannerでスキャン

渋谷——最初からやり直そうか。
松村——やらないよ。読者も、お前のいいかげんさが分っていいんじゃないか。
渋谷——いい事言ってると思ったんだけどな。
松村——どこがだよ。完全に理屈が通らなくて、メチャクチャじゃないか。
渋谷——新幹線代に執着すると、ろくな事にはならないな。
松村——どうぞ。
渋谷——……。
松村——まいど、って言わないのか。
渋谷——まいど。**S**

注：高橋智樹。ロッキング・オン編集部、ロッキング・オン・ジャパン編集部を経て現在はフリー。長身でケミカル・ブラザーズのトムを彷彿とさせる（主にシルエット）。

どうだい、俺と還暦ロックを踊ろうぜ

渋谷——コンニチハ、ジョン・エントウィッスルです。

松村——そういえば、死んじゃったな。俺も今月原稿で書いたけど。

渋谷——そうなんだよ。でも○○○を×××して、しかも△△△だったから、ピート・タウンゼントは「ロックスターとしては理想の死に方だ」ってコメントしてたぜ。

松村——○○○とか△△△じゃ分かんないだろう。

渋谷——いや、良識ある青少年が読んでいる上品なロック・マガジンだから、あまり刺激的な表現は避けようかな、という配慮だよ。

松村——思ってもいない事を言うんじゃないよ。コカインをきめて、売春婦と一緒に居るところで死んだって話じゃないか。最近はこのパターンは少なくなったけど、昔はよくあったぜ。

渋谷——さすがフーだな。

松村——さすがかどうかは知らないけど、らしいと言えばらしいよな。でもジョン・エントウィッスルって言って、読者は分かるのかな。

渋谷――分かんないだろうな。だいたいフーそのものが日本ではマイナーだから、そこのベーシストって言われても皆んな「ふーん」って程度だろう。

松村――でも、あまり同情されない死に方だよな。

渋谷――向こうの新聞では、もっとリアルに○○○は△△△で、しかも×××だったって事まで書かれてたぜ。

松村――だから、その伏字を止めろよ。

渋谷――でも、喋りながら伏字になってるのが分かるって、変じゃないか。

松村――……。

渋谷――やっぱ○○○はないよな。

松村――止めないと帰るぞ。

渋谷――分かったよ、そんなに怒るなよ、大人げないな。

松村――子供はお前だろう。だから、何が書かれてたんだよ。

渋谷――いや、その売春婦に口でサービスさせているところで死んだらしいんだよ。しかも、そのオネエちゃんは五百ドルもする上玉だった、なんて事まで書かれてるんだよ。

松村――詳しいな。

渋谷――やっぱり、日本と違ってフーはアメリカやイギリスでは超大物バンドだし、ジョン・エントウィッスルも有名人だから、インターネットにいっぱい情報が載ってるんだよ。ピート・タウンゼントもコメントを出していて、最高な死に方だった、というのと、自分が死ぬ時はもっと訳が分かんない形にしたい、とか言ってたな。

松村――なんだよ、訳の分かんない死に方って。

渋谷――サッチャーの写真を横に置いて、ワセリンのビンを持って、遺書には「ベン&ジェリーはナチのブタ」って書くんだって。

松村――ベン&ジェリーって誰だよ。

CamScannerでスキャン

渋谷――アメリカの有名なアイスクリーム屋らしいぜ。
松村――本当にわけが分かんないな。
渋谷――まあ、ピート独特のユーモアなんだろうけどな。そういう謎の残る死に方がしたいみたいだぜ。
松村――ジョンの場合はあまりに謎がなさ過ぎるからな。コカインと売春婦って、いくつなんだっけ、あのオッサン。
渋谷――五十七じゃないか。地元の新聞にはこの年齢の老人に二種類の負荷は大き過ぎたのでは、とか書かれてたけどな。ちょっと情けないな。
松村――本人的には幸せだったかもしれないぞ。
渋谷――確かに。病院のベッドで管だらけになって徐々に死んで行くよりもいいかもな。というか絶対にいいよな。松村、俺達も○○○を△△△して、×××な死に方をしよう。
松村――だから止めろって言ってるだろう。それにお前は○○○な死に方も、△△△な死に方もできないよ。
渋谷――お前も伏字じゃないか。
松村――だんだん面倒になって来たんだよ。お前の場合は、周りに迷惑がられながらボケ老人のまま長生きするね。俺は早死にしそうだけど。
渋谷――でも、ミック・ジャガーって六十歳になったの知ってたか。
松村――そりゃ、ジョン・エントウィッスルが五十七なら、ミックもキースも六十で不思議はないだろう。
渋谷――だけど、あの若さは異常だぜ。次の『SIGHT』で〝還暦を迎えたストリート・ファイティング・マンたち〟って特集やるんだけど、その表紙が六十になったミックのアップなんだよ。どう見ても四十代だぜ。

松村――シワだらけだけどな。それにしても凄いタイトルの特集だな。

渋谷――ミックもキースも六十だぜ。他にピート・タウンゼント、ジェフ・ベック、ルー・リード、グレイトフル・デッドのインタヴューを載せるんだけど、みんな還暦だったり、目前だったりだからな。

松村――現役バリバリも凄いけど、還暦目前になってクスリと女で死ぬジョン・エントウィッスルも凄いよな。

渋谷――ロック・ミュージシャン以外、あまり聞かないよな、そういう死に方。しかもハリウッドだからさ。

松村――ハリウッドで死んだんだ。

渋谷――ホテルで遊んでたみたいだぜ。

松村――還暦のイメージも変わったよな。

渋谷――俺達もパーッと行こうぜ。

松村――お前の場合は還暦で過労死だな。炎天下のフェス会場で、ひからびた老人の死体が発見されるとお前なんだよ。山崎かなんかが「ロッキング・オンの社長としては理想の死に方でした」とかコメントを出したりして、誰も同情しないいってパターンだな。

渋谷――そんなもん準備するんじゃない。

松村――いい死に方じゃないか。

渋谷――よくねえよ。それに変にリアリティがあるから止めてくれ。

松村――でも、一時期に比較するとミュージシャンって死ななくなったよな。

渋谷――業界全体に生き延びさせるシステムが出来てきたんだよ。ミュージシャンが死んじゃったらビジネスとして終わりだから、周りも必死になるわけよ。まあ、ドラッグ対策が進化したのが一番なんだろうけど。でも還暦を迎えても現役バリ

CamScannerでスキャン

バリっていうミュージシャンは、やっぱりいろんな意味で若いし、エネルギーの絶対量が違うよな。

松村――ミック・ジャガー以外もそうなんだ。

渋谷――キースなんか言うまでもないし、ピート・タウンゼントは、ある意味もっと凄いぞ。

松村――どう凄いんだ。

渋谷――例の幼児ポルノ事件後、唯一その事について喋ったインタヴューなんだよ。

松村――インターネットで幼児ポルノのサイトを見て逮捕された事件な。

渋谷――そうそう。考えてみればフーって凄いバンドだな。性的にまともな奴は居ないのかよ。

松村――一番クレイジーだったキース・ムーンはとっくに死んじゃってるしな。

渋谷――それでピートは、自分は悪い事をしたけど無実だって言ってるんだよ。

松村――よく分かんない理屈だな。

渋谷――まあ理屈にもなってないんだけど、ピートの言い分としては、確かにポルノ・サイトに金を払ったけど、自分は幼児愛の変質者じゃない、だから無実だって言うわけなんだな。

松村――確かに理屈になってないな。

渋谷――犯罪は倫理の問題じゃなくて社会的なルールの問題って事を理解してないわけよ。

松村――一人殺せば犯罪だけど、戦争で一万人を殺せば英雄って話だよな。

渋谷――そうそう。松村がピート・タウンゼントより社会性があったなんて今回の対談の最大の収穫だな。

松村――くだらねえ事言ってんじゃないよ。でも、ジェフ・ベックとか何を喋ってんだ。

渋谷――インタヴュアーも質問する事がないのか、どうやったらそのシャープな体型を維持できるんですか、とか間抜けな事を訊いてんだ、ジェフ・

CamScannerでスキャン

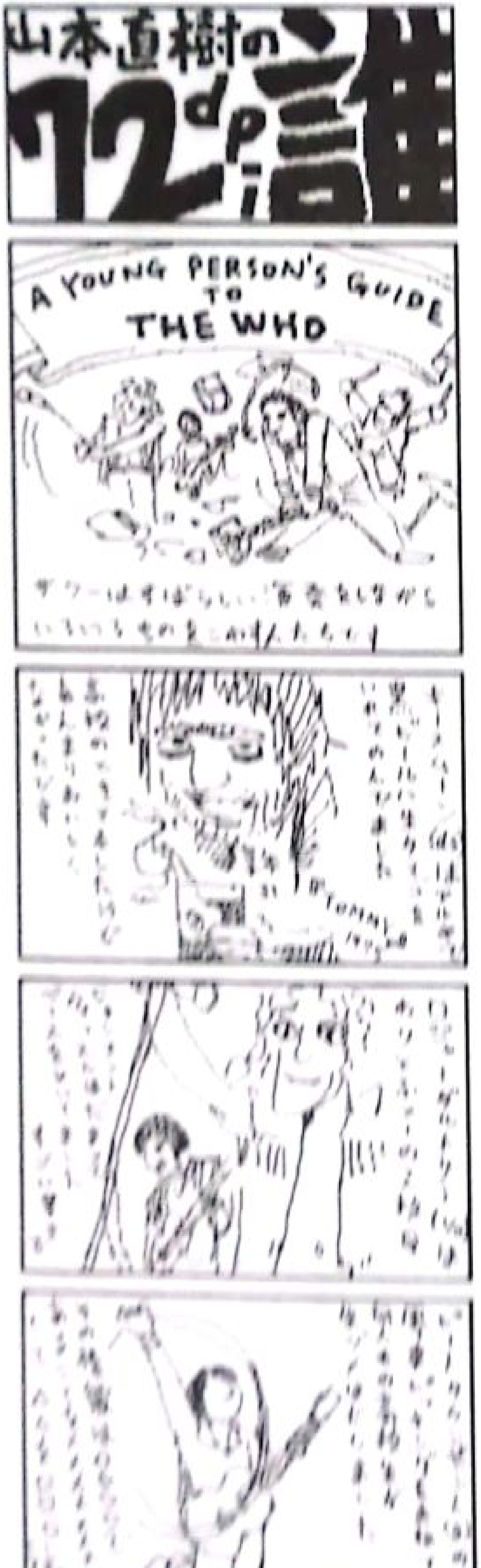
ベックも、そりゃ、食べたくないのに無理に食わない事だなとか、真面目に間抜けな事を言ってて面白いぞ。

松村――本当に面白いのかよ。

渋谷――やっぱ、それでいて八十まで現役って背景があると、そういう発言も重みがあるわけよ。キースもタイプは似てるんだけど、頭の良さとユーモアが群を抜いていて、それがジェフ・ベックとの財力の差になってるのかも。ただ共通してるのは、とにかく全員マイペースで、自分の理屈だけで生きているって事だな。それが許されるキャラを持った奴だけが勝ち残ってるわけよ。結局、抜けちゃった人がほとんどなんだから。

松村――そう考えると切ないな。

渋谷――やっぱ俺は過労死だし、上田はボケ老人だな。■



電話が恐くて「在宅ロック」が務まるか!!

松村——お母さん、いらっしゃいますか？

渋谷——なんだよ、それ。

松村——そういう電話が、やたらとかかってくるんだよ。

渋谷——どういうことなんだよ。

松村——電話に出てるのは俺で、明らかに五十歳過ぎたオヤジの声じゃないか。ということは、俺の母親のことを言っているのか。それとも、単にひとつの家庭の主婦、つまりカミさんのことを言っているのか。初めのうちは、迷ったぜ。

渋谷——まあな、子供の友達のお母さんなんかが、そう言ってかけてくることはあるもんな。

CamScannerでスキャン

松村――だから、「私の母ですか？」って訊いたんだよ。ちゃんと、ワタクシって言って、こっちはオヤジだぞって、分からせるためにさ。そうしたら、「そうです」って言うんだ。それだったら、「二年前に、亡くなりましたが」って言うしかないだろ。すると、あわてて「いや、○子ちゃんのお母さんです」って言うんだ。だから、さっき訊いたじゃないかよ。

渋谷――なんか、話がよく分かんないんだけど。

松村――つまり、塾や家庭教師の勧誘っていうか、セールスなんだよ。

渋谷――ああ、なるほどな。

松村――最近はもう分かってきたけど、あいつらおそろしく程度が低いんだよ。「どういうご用件ですか？」って訊いて、初めて名乗るんだよ。

渋谷――おそらく、そんなもんでもマニュアルがあるんだろうな。

松村――で、セールスだって分かったから、「必要ありませんから」って言って切ろうとすると、「あの、御主人ですか。実は……」って喋り始めるんだよ。カミさんはお母さんで、なんで俺は御主人なんだよ。

渋谷――意味が分かんないな、どういうことだよ。

松村――カミさんがお母さんなら、俺もお父さんにしろよ。さっきは、子供と間違えたくせによ。たしかに、死んだ母親からすれば、俺は子供だけどさ。とにかく、バカ！

渋谷――なんか、疲れてないか、お前。

松村――まあな。だけど、お前のほうが疲れてるんじゃないか。

渋谷――ロック・イン・ジャパンがもうすぐだから、大変なんだ。

松村――そうだろうな。さっきから一行分か二行分しか喋ってないもんな。

CamScannerでスキャン

渋谷——ずいぶん、変な言い方だな。で、どうするんだよ、その勧誘は。

松村——「今、仕事中で、忙しいので」って言って切ろうとすると、「どういうお仕事ですか?」とか言うんだよ。大きなお世話だ、お前は税務署か!

渋谷——今、たぶん四行分ぐらいだぞ。

松村——うるさいよ。俺は家で仕事してるから、そういう電話に出ちゃうことも多いんだよ。だけど、締切日当日であせっているときに電話がかかってくると、「もう間に合いません」とか言われるんじゃないかと思って、ドキッとするじゃないか。それで、「お母さん、いらっしゃいますか?」だと、張り倒してやろうかって思うぜ。

渋谷——そんなふうに対応しちゃうから、いけないんだよ。必要ないなら、「必要ありません」で切っちゃえばいいんだよ。

松村——だけど、あいつら、本当にバカなんだぜ。一度、「私の母のことですか?」って訊いたら、「あなたが誰だか、僕は知りませんから」って言った奴がいてさ。知らねえんなら、電話してくんな。アホ、ボケ、カス!

渋谷——からかわれてんじゃないのか、お前。

松村——そういうのが、必ず一日に一回。多いときは、三件ぐらいかかってくるんだよ。で、ヒマなときにかかってきたら、こっちから攻撃してやろうと思ってさ。考えたんだよ。

渋谷——そんなこと考えてないで、仕事をしろよ。

松村——あいつらって、必ず「私達は○○大学って思ったら、大間違いだよ。僕は高卒、それも……」って言うからさ、「大学名がブランドになるって思ったら、大間違いだよ。僕は高卒、それも夜間高校卒なんだから」って言ったら、黙っちゃいやんの。

渋谷——楽しいのか、それが。

松村——「さっきは私の母だって言ったのに、今

度は○子の母か。そんな電話のかけ方をする奴に、子供の勉強を見させるわけにはいかない」って言ったら、「アワワワワ」って言った奴もいたな。

渋谷——もっと、前向きに生きようぜ。

松村——異様にしつこい奴がいたんで、「この電話番号は、どこで知ったんですか？」って訊いたら、あわてて「いや、電話帳で順にかけてるんです」って言うんだ。「そんなわけはないでしょう。子供のいない家庭だってあるんだから」って言ったら、黙っちゃったんだ。

渋谷——そういう名簿が、出まわってるんだよ。

松村——「だいたい、ウチは電話帳に載せていないんだ。個人情報を不法に利用するのは、犯罪ですよ。そちらの電話番号を、教えてください」って言ったら、あわてて切っちゃいやんの。

渋谷——お前の人生は正しいんだか間違ってんだか、俺には分かんない。

松村——そういう名簿ってさ、まあ中学生の子供がいるぐらいはいいけどさ、大人のやつってなんか正しくないんじゃないか。

渋谷——どうして。

松村——だって、俺個人へのセールス電話って、あまりにも俺のことを知らな過ぎるぞ。「マンション、買いませんか？」とか、「小豆相場、やりませんか？」とかさ。

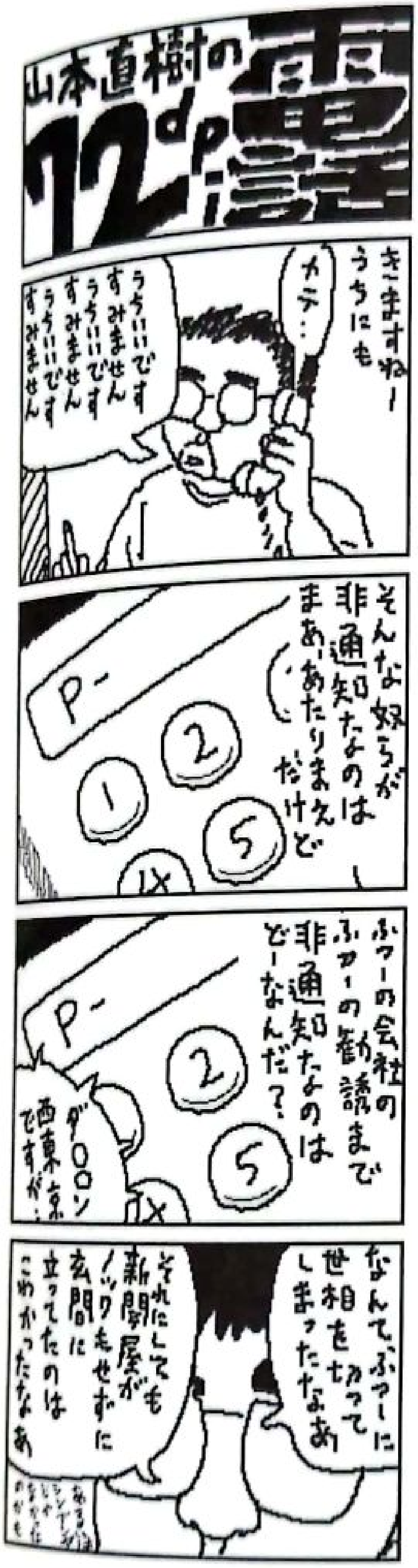
渋谷——たしかに、お前のことをまったく知らないな。

松村——そのうち、「自衛隊に入りませんか？」とか、かかってくるんじゃないか。

渋谷——くるか、そんなもの。

松村——そういえば、このまえなにかにオレオレ詐欺の電話を撃退した人の話が載ってたな。大阪の人でさ、そういう甥も孫もいない人なんだって。で、かかってきたからさ、これはオレオレ詐欺だ

って思ってさ。チャウチャウって言ったんだって。
渋谷――なんだよ、それ。
松村――ほら、違う違うっていうのを、チャウチャウって言うじゃないか。だから、相手が「オレオレ」って言ったら、「チャウチャウ」って返す。相手は一瞬引くんだけど、また「オレオレ」って言って、また「チャウチャウ」。何度か繰り返したら、切っちゃったんだってさ。
渋谷――面白いのか、それ。
松村――疲れてるな、お前。俺のところにかかってきたら、「ウィー・アー・ザ・チャンプ」って言うんだけどな。
渋谷――どういうことだよ。
松村――「オレオレ」、「ウィー・アー・ザ・チャンプ」。
渋谷――どっと、疲れてきた。 **M**



僕ら五十代、今日もロックでイカしてます

渋谷――あれっ、そうだっけ？　っていうことは、俺達は五十三歳なのか？

松村――なのかもようかもないよ。

渋谷――そうか。まあ、いいや。だから、油っこいものよりもさっぱりとしたもののほうがいいとかいうことになるわけじゃないか。困っちゃうようなことじゃないだろ。

松村――だけど、東京生まれの東京育ちの人間としつちゃってさ、ちょっと困ってるんだよ。

松村――最近、ソバよりもウドンのほうが好きにな

渋谷――俺達もう五十歳を三年も過ぎてるわけだから、食べ物の好みも変わってきてもおかしくないじゃないか。

松村――あのなあ、俺達は五十歳を三年も過ぎてるの。そんなところで、セコくひとつぐらいごまかそうとするなよな。

ては、ソバよりもウドンのほうが好きだとはちょっと言いにくいじゃないか。

渋谷——まあな、行きつけのソバ屋が近くにあるからちょっと行こうかとは言えるけど、行きつけのウドン屋があるからきつねウドン食べに行こうとは言いにくいな。

松村——俺も引っ越して来るまで知らなかったんだけど、多摩にはウドン文化があるらしいんだよ。

渋谷——ラーメン屋も多いっていうじゃないか。

松村——そう。ソバ屋もしっかりしてるし、基本的にメン類がいいんだ。特にウドンが歴史があるらしくて、ガイド・ブックなんかも出てるんだよ。これが充実してさ。

渋谷——それって、いわゆる東京のウドンとは違うのか？

松村——やっぱり、あのフニャフニャのウドンとは違うな。あれはあれで、俺は好きだけど。コシがあってしっかりしてるよ、多摩のウドンは。で、どの店行っても、必ず肉ウドンっていうのがあるんだ。

渋谷——リアルなネーミングで、妙にうまそうだな。

松村——簡単に言えば、ウドンのもりなんだけど、汁にブタ肉のこまぎれが入っていて、これがうまいんだ。肉を使ってるぐらいだから、明治以降のものなんだろうけどさ。

渋谷——いや、江戸時代の多摩なんて山の中だろうから、イノシシ使ってたかも知れないぞ。なんてったって、新選組が出て来るところだからな。

松村——お前、調布や日野で新選組の悪口言ったら、多摩川に叩き込まれるぞ。

渋谷——だから、年齢とか住む所によって、食べ物の好みも変わってくるんだよ。

松村——だけど、昔も今も俺はイカが好物だぞ。

渋谷——それはイカがなものか。

松村——くだらないこと、言うなよ。今はもうやってないけど、独身時代は一パイ買って自分でおろしてたぞ。

渋谷――へえ、お前と料理っていうのは、あんまり結びつかないけどな。

松村――ひとり暮らししたことある奴は、ひとつやふたつは料理出来るんだよ。特に気に入ってたのは、イカのワタを傷つけないように外して、タッパーにミソを入れてその中に形を整えて埋めて、冷蔵庫に二〜三日入れとくんだよ。

渋谷――うまいのか？

松村――これが酒のツマミに、最高。ついでに言うと、イカのワタじゃなくても、卵の黄味でも出来る。

渋谷――じゃあ、わざわざイカをおろすことないじゃないか。

松村――いいんだよ。とにかく、生でも焼いても煮ても炒めてもうまいから、イカはエラいんだ。

渋谷――それって、タコでも同じじゃないか。

松村――えっ？

渋谷――タコだって、生でも焼いても煮ても炒めても食えるぞ。

松村――……そういう考え方も、出来るな。

渋谷――っていうか、ほとんどの魚が出来るんじゃないのか。

松村――……だから、俺はイカが好きなんだよ。で『いかレスラー』っていう映画を観てきたんだよ。

渋谷――なんだよ、いきなり映画かよ。いかレスラーって、タイガーマスクみたいに、イカの覆面かぶって、カラマリ・マスクとかいうのか？

松村――いや、イカがプロレスラーなんだよ。

渋谷――……。

松村――チャンピオンの試合にイカが乱入してきて、勝っちゃうんだ。正体を調べると、失踪していたレスラーで、パキスタンで修業して、イカになったらしいんだ。

渋谷――どうして、パキスタンでイカになるんだよ？

松村――……さあ。

渋谷――どうやって、入国審査受けたんだよ？

松村——……パスポート持ってたんじゃないか?

渋谷——……イカのパスポートがあるのかよ?

松村——あるんじゃないか、身長二四二センチ体重一三二キロだから。

渋谷——わけ分かんないな。

松村——で、リターン・マッチが行われることになるんだけど、今度は前回負けたチャンピオンもパキスタンで修業してきて、たこレスラーになってるんだよ。

渋谷——パキスタンって、どういう国なんだよ。

松村——その後、しゃこボクサーも出てくるんだな。

渋谷——俺は刺身の盛り合わせ頼んでるんじゃないんだよ。

松村——つまり、そういう映画なんだよ。資料にも「ナンセンスを超えたシュールでヤバ過ぎのギャグ」とか「日本が世界に誇る驚異の着ぐるみSFX」とか書いてあるし、監督も「日本最狂のバカ映画」って言ってる。

渋谷——そういえば、去年『えびボクサー』っていうイギリス映画があったな。

松村——あっ、そのパクリだって、監督も書いてる。

渋谷——なるほど、確信犯なわけだ。

松村——そう、監修が実相寺昭雄で、監督も脚本もウルトラマンをやってた人達なんだな。

渋谷——なんとなく、分かったぞ。ウルトラマンって、ときどきとんでもないやつがあったからな。

松村——まあ、イカ好きプロレス好きの俺は、見逃せない映画なわけだ。で、主演のいかレスラーは着ぐるみのときは専門の人が入ってるんだけど、人間のときは西村修っていうプロレスラーがやってるんだよ。

渋谷——レスラーの名前出されても、俺は分かんないけど。

松村——西村っていうのは、今俺が一番好きなレスラーで、テクニシャンなんだけど、エンターテイナーなんだよ。

CamScannerでスキャン

渋谷——なんだよ、テクニシャンでエンターテイナーって。

松村——ルックスは真面目な好青年なんだけど、技かけられると座禅組んだり瞑想したりしちゃうんだ。

渋谷——試合中にか?

松村——そう。そうすると、技が利かなくなるんだよ。

渋谷——そのレスラーのことを映画にしたほうが、良かったんじゃないのか。

松村——八月の中旬までシネセゾン渋谷と池袋テアトルダイヤで、レイト・ショーやモーニング・ショーでやるらしいぞ。

渋谷——観に行くんなら早く行ったほうがいいな、打ち切りになる可能性があるからな。

松村——……。M

CamScannerでスキャン

やっぱり夏は浴衣よりミニスカだろ？

渋谷——いらっしゃーい！
松村——何だよいきなり。
渋谷——いや、歓迎の意志を表明してるわけよ。
松村——最近、そういう突っ込みようのない意味不明のボケが多くないか？
渋谷——ロック・オデッセイ[注1]の時、二日目のトリに現われた永ちゃんの第一声がこれだったんだよ。
松村——何か、魚屋か八百屋のオッサンみたいだな。
渋谷——俺は凄いと思ったな。だってレッチリが暴れ回って、客も盛り上がりきった後のトリだぜ。たいていの日本人アーティストならプレッシャーで平常心じゃ立てないぜ。正直、レッチリ目当ての客は帰ったりしてたんだよ。そこで全く自分のペースで永ちゃんは永ちゃん以外の何者でもなかったな。
松村——それって誉めてるのか。
渋谷——俺は昔から永ちゃんを評価してて、凄いって言い続けてんだけど、今回も凄いと思ったよ。
松村——でも、あのロック・オデッセイってブッキングに無理あり過ぎないか。ラルクに永ちゃんレッチリとレニー・クラヴィッツって、何だか分かんないじゃん。
渋谷——確かに。レッチリの時、俺の前で短パンと

CamScannerでスキャン

フンチャツの若者が着てたんだけど、ネエちゃんの時はワンピースにヒールの水っぽいネエちゃん達が踊ってて、入れ替え制かと思ったぜ。レッチリの時、そのネエちゃん達居なかったんだけど、どこからわいて来たんだろう。

松村——謎のイヴェントだったよ。

渋谷——でもフーを観たんだから、それが全てだろう。

松村——お前、泣いてたらしいな。

渋谷——フジのニール・ヤングで、〝ライク・ア・ハリケーン〟のイントロ聴いた時以来だな泣いたのは。アンコールで〝シー・ミー、フィール・ミー〟が始まった時は、本当に泣いただろう。

松村——俺は泣かなかったけど、グレッグ・レイクが居なかったな。

渋谷——そうそう、今回の不安材料だったんだけど、居なかった。最初はグレッグ・レイクもやけにやせてベースがうまくなってたな、とか思ったんだけど、謎のベースだった。

松村——何で来なかったんだろ。

渋谷——アメリカのツアーはずっとグレッグ・レイクがベース弾いていたらしいけどな。

松村——あの後、FMとかでやたらフーがかかってたよな。

渋谷——業界オヤジに与えたインパクトは大きかったな、実際凄かったし。

松村——ビート・タウンゼントは本当に自分が受けるかどうか不安だったらしいな。

渋谷——だから終った後、やたら上機嫌だったらしいぜ。来年は単独ツアーを観られるかもな。

松村——エアロもフーに気を使ってたな。

渋谷——でも、ジョー・ペリーの〝フジ・ロック……〟ってMCはどうなるのかね。

松村——とりあえず日本でやってるロック・フェスは何でもフジ・ロックなんだよ。

渋谷——そういえば、フジでお前と二人で座ってた

ら、『あつ、渋松だ』ってサイン頼まれたな。

松村――あれって、熱心な読者っていうよりも、何か珍しい昆虫を見つけたんで、とりあえず採っておこうか、って乗りだったな。

渋谷――まあ、実際そんなもんだろう俺達は。

松村――お前も「貴重だぞ、来年はどっちか死んでるからな」とか言って、相手どうリアクションしていいか困ってたじゃないか。

渋谷――笑うかと思ったけど、余りシャレにならなかったみたいだな。お前が疲れた顔してたからだよ。

松村――お前も椅子を担いでウロウロしてホームレスみたいだったじゃねえか。

渋谷――そうそう。あの折りたたみ椅子持って移動するスタイルは、俺は二回目のフジから導入してるんだよ。増えたよな今年は。最初はほとんど居なかったのに。これからあれは渋谷式と呼ぼう。登録商標にしよう。

松村――そんなもん、お前がやる前からやってる奴はたくさん居るよ。くだらねえ事を言ってないで、ちゃんとライヴは観たのかよ。

渋谷――毎年、社員にどこにでも出没する社長と恐れられているんだから。でも今年はグリーンとレッド・マーキーに居る事が多かったな。

松村――何、観たんだよ。

渋谷――まずはミニスカ三人娘だな。

松村――何だ、それ。ミニスカって二十年振りに聞いた気がするな。

渋谷――ＰＪハーヴェイ、コートニー・ラヴ、カレン・オーだよ。

松村――カレン・オーって誰だよ。

渋谷――ヤー・ヤー・ヤーズって、俺が好きなバンドがあるんだけど、そこのヴォーカルのネエちゃんだよ。彼女の場合はミニというよりほとんど水着だったけどな。まあライヴではパンツを見せるというコンセプトで一貫してるから、いいんだけど。

松村――どういうコンセプトなんだよ。それにＰＪ

CamScannerでスキャン

ハーヴェイもコートニー・ラヴも娘じゃなくて、オバサンだろう。
渋谷――確かに。特にコートニー・ラヴは思いっきりオバサン的風格があったな。
松村――ステージに出て来た時は、オーって歓声があがって盛り上がったけど、二曲ぐらい演ったら、どんどん客がグリーン・ステージから出て行っちゃったよな。
渋谷――俺の隣の客も、出て来た時は「コートニー!」とか叫んで立ち上がったのに、一曲目の途中で「メシでも食べるか」とか言って、どっかに行ってしまったからな。お前、それは早過ぎだろう、って言ってやりたかったな。二分前まで「コートニー」って叫んでたんだぜ。
松村――フェスの客ってシビアだよな。とりあえず盛り上がれるものには反応するけど、ちょっとでも面白くないと、すぐに興味を失っちゃうんだよ。
渋谷――そうそう、でもPJハーヴェイはムチャクチャ凄かったのに、グリーンは空いていたぞ。
松村――まあ地味だからな。
渋谷――ミニで頑張ってたのに。
松村――良く分んないけど、PJハーヴェイのミニって見たいか。
渋谷――三人娘の中でベスト・ワンだったな。
松村――相当変った趣味だな。だって脇毛そんない女だろう。
渋谷――つまんない事、よく憶えてるな。その芸風はデビュー当時に終ったんだよ。可愛いかったぞ。
松村――本当かよ。
渋谷――本当だって。まあ演奏が素晴しかったのが一番だけど、客が空いてるんで、ほぼステージ前まで行けたぞ、思いっきり少ない音数で、凄いグルーヴを出していて、俺としては今年のフジのベスト・アクトだったな。
松村――三人娘以外ではどうだったんだよ。
渋谷――ピクシーズ[illegible]たな。歌詞間違えてた

けど。

松村——ルースターズ良かったな。

渋谷——良かった良かった。花田が飛んだ時、思わず「花田が飛んだ」って叫んで、隣の兄チャンに変な目で見られたな。

松村——ロッキング・オンのフェスは三日間ソールド・アウトだったんだろう。

渋谷——俺の人柄のおかげだな。

松村——お前の人柄は全く関係ないし、もし関係あったらチケットは売れないな。

渋谷——何言ってんだよ。毎朝ステージで挨拶するんだけど、皆んな拍手してくれるぞ。

松村——社員が言ってたぞ、「松村さん、うちのフェスは本当に客が優しくて、社長にまで拍手してくれるんですよ、涙出ますよ」って。

渋谷——少なくとも、俺は社員よりフェスの客の方が好きだな。

松村——でも、お前も五十三歳なんだから、いつまでも先頭になってステージで挨拶なんかしてないで、兵庫でも山崎でも、部下に任せろよ。

渋谷——いや、今年は新兵器を導入したんでまだまだやれる自信が付いたな。

松村——何だよ新兵器って。

渋谷——電動自転車。

松村——……。

渋谷——うちはステージがふたつあって、それの移動が坂もあって大変なんだよ。電動アシスト自転車はいいぞ。革命だな。後、十年はやれそうだな。

松村——いいよ、やんなくて。

渋谷——電動だからエコだぞ。日高はジープで移動してるけど、俺は電動自転車だぞ。

松村——何か、かっこ悪くないか。

渋谷——失礼な。ジープより環境に優しい電動自転車。俺をエコ・プロデューサーと呼びなさい。

松村——いいけどさ、お前は会場内は電動自転車かも知れないけど、会場までは何に乗って行ってんだ

よ。

渋谷——ポルシェ。

松村——どこがエコなんだよ。だいたいエコとか大嫌いなくせに、いいかげんな事言ってんじゃないよ。

渋谷——来年は電動ポルシェだ。

松村——勝手にしろ。**S**

注1：「ロック・オデッセイ」：二〇〇四年、日産スタジアムで行なわれたロック・フェス。渋谷はいろいろ言っていますが、この時もどの社員よりも早く会場に到着し、どの社員よりも多くのライヴを観ていた。

注2：現ロッキング・オン ウェブ事業部／SIGHT編集部。当時はフェス事業部所属で、渋谷・山崎と共にロック・イン・ジャパン・フェスティヴァルの前説を担当。前説の中で何度も噛みまくることで社内では有名。

僕ら陽気な五十代、趣味はプロ野球と反体制です

渋谷——コンニチハ、エディ・ヴェダーです。

松村——オッ、今月はいきなり分かり易い展開で来たな。

渋谷——今月はロック・アゲインスト・ブッシュで行こうと思っているんで、ストレートなつかみがいいかな、と思ってさ。

松村——何だ、そのロック・アゲインスト・ブッシュって。

渋谷——アメリカの若手パンク・バンドが主体となって、アンチ・ブッシュのキャンペーンを始めたんだよ。アンチ・ブッシュをテーマにツアーをやったり、CD作ったりしてるんだよ。そのCDのタイトルが『ロック・アゲインスト・ブッシュ』って言うんだよ。

松村——スプリングスティーンもやってなかったか。

渋谷——そうそう、ヴォート・フォー・チェンジ、変革のための投票ってタイトルでツアーを始めたんだよ。これもアンチ・ブッシュがテーマなんだけど、R.E.M.、パール・ジャムも参加してるぜ。

松村——何か盛り上がってるな。

渋谷——そうだよ、それなのに何で日本はがんばれ古田で盛り上がんないんだよ。

松村——何だよ、急に。それってプロ野球の話かよ。

渋谷——オーナー会議とか、本当にクソだよな。何が「銅は金に同じと書く」だよ、いいかげんにしろ、って言いたくなるよ。

松村——それはオリンピックの代表チームが三位になった時の発言だろう。オーナー会議とは関係ないじゃないか。

渋谷——[illegible]

よ、俺としては。

松村——ロック・アゲインスト・ブッシュはいいのかよ？

渋谷——まずはプロ野球を叩こう。次がブッシュだ。

松村——何でもいいけどさ。

渋谷——古田も言ってるように、買いたいって企業があるんだから売ればいいんだよ。

松村——ライブドアだよな。

渋谷——近鉄が球団経営から手を引きたいって言うんなら、それはしょうがないけど、何で買いたい企業があるのに、いきなり五球団になって、合併されちゃうんだよ。理屈が通んないだろう。

松村——ライブドアの事、嫌いみたいだぜ、オーナー会議は。

渋谷——失礼だよな。サラリーマン経営者のクセしやがって。

松村——そういう言い方もまずいんじゃないのか。でもライブドアって何なんだ。

渋谷——俺もよく知らないんだけど、ネット関係らしいな。

松村——ネット関係って何なんだよ。

渋谷——ネット関係はネット関係だよ。そういう事を俺に訊くんじゃない。今だにパソコンの電源も入れられないんだから。

松村——嘘だろう？

渋谷——嘘だよ。でもライブドアの社長って個人資産二千億らしいぜ。

松村——本当かよ。

渋谷——らしいぜ。だから近鉄なんかいくらでも買えるんだよ。六本木ヒルズのてっぺんに住んでるらしいし。どういう感性してるんだろうな。かなり趣味悪いよな。

松村——お前はどっちなんだよ。

渋谷——いや、余り友達になれそうな気はしないけど、別にそんな事はどうでも良くて、とりあえず近鉄買って、二リーグを維持してくれるならいいよ。

CamScannerでスキャン

資本主義社会なんだからルール守って金を払えば自由なんだよ。「銅は金に同じって書く」とか間抜けな事言ってるから駄目なんだよ。

松村——よっぽど気に入らなかったみたいだな、そのセリフ。

渋谷——だって、そうだろう。どう考えても日本はオーストラリアより強いわけで、それに負けたら、責任は追及されるし、批判されるべきだよ。それがいつの間にか感動物語になって、銅は金に同じだってアホな発言がまかり通ってるのがオカシイ。オヤジの俺が言うのも何だけど、メディア周辺のオヤジ共のプロ野球と長嶋に対する理屈に合わない感情移入は、結局プロ野球を腐らせるね。もう腐ってるけど。

松村——ベンチで長嶋のユニホームにみんな礼してたな。

渋谷——おかしいと思わないのかね。死んじゃったわけでもないのに、二言目には長嶋、長嶋って。

松村——でも、ライブドアとか楽天とかの社長の記者会見と、オーナー会議の社長の記者会見を比較すると、年齢も全然離れてるし、人種も違うって感じだよな。

渋谷——あの若さがナベツネとか嫌なんだろうな。オーナー会議の連中って、何か人として駄目な感じだよ。

松村——良く知りもしないのに適当な事言っていいのかよ。

渋谷——俺はサラリーマン経営者が嫌いなの。自分がオーナー社長だから、やっぱ同じ人種の方が話が合うんだよ。とにかく何も決めないんでイライラするんだよ。

松村——オーナー経営者って、お前の場合は八百屋のオーナーに近いけどな。まあ、お前の好き嫌いはどうでもいいけど、世論は古田の側にあるよな。

渋谷——女房が俺のファンだけの事はあるな。

松村——その話本当なのかよ。

渋谷——本当だって。正しい夫婦だよな。

CamScannerでスキャン

松村——でも俺達って、典型的な長嶋世代でプロ野球世代なんだけど、お前は昔から巨人が嫌いだったよな。

渋谷——ロックな魂がそうさせたんだよ。神宮球場の外野でたき火して、警備員に追いかけ回されたくらいパンクだったんだぜ。

松村——単なるアホなヤンキーじゃないかよ。

渋谷——昔、神宮の外野は芝生だったんで、たき火くらい平気だったんだよ。客も全然居なかったし。いやロックだな。ロック・アゲインスト・ブッシュ。

松村——かなり強引な展開だけど、ようやく最初の話に戻ったたな。

渋谷——緻密な展開だな。

松村——どこがだよ。でもお前って、〝ウィ・アー・ザ・ワールド〟でもライヴ・エイドでも、ミュージシャンがそういう政治的なテーマを掲げて活動すると、すぐ批判するけど、これはいいのかよ。

渋谷——いや、ライヴ・エイドとか、〝ウィ・アー・ザ・ワールド〟は政治的テーマじゃないと思うんだよ。一種の道徳・倫理、俺から言わせればファシズムなわけ。つまり絶対的な正義があって、それに全ての人間が跪くって構造で、これはムチャクチャ危険なわけ。エコとかも一緒だけど、飢えた子供を救おう、とか地球環境を守ろう、とかそういうもっともらしい正義に対してノーというのがロックだろう。

松村——ロック・アゲインスト・ブッシュは違うんだ。

渋谷——そうそう。これは明らかに政治的メッセージで、発する事に凄くリスクがあるわけよ。実際、スプリングスティーンは今凄いバッシングにあってるわけで、これはリアルなメッセージとしてロックっぽいと思うけどね。つまり道徳とか倫理じゃ駄目なのよ。むしろそれは危険だね。やっぱ神宮の外野でたき火する位のリスクは背負わなくちゃ。

松村——いいよ、そんなもん背負わんでも。でもスプリングスティーンも、よっぽど腹をくくったんだろうな。

渋谷——新聞にステイトメントを発表したり、日頃

自分の作品のインタヴューにも応じないエディ・ヴェダーが記者会見やって質問に答えたり、かなり気合い入ってるよな。

松村――それだけ危機感があるんだろうな。

渋谷――でも、本当にライヴ・エイドとかより百倍ましだな。

松村――でも共和党って、スプリングスティーンの〝ボーン・イン・ザ・USA〟を今回の選挙のテーマ・ソングにしようとしてたんだって？

渋谷――そうそう、ブッシュって英語分かんないんじゃないか？　いかにちゃんと聴いてないかって事だよな。

松村――日本は余りそういう事はないな。

渋谷――よし、俺達もロック中年の実力を見せつけてやろうぜ。東京ドームでたき火だ。

松村――一人で捕まってくれよ。 **S**

何で世間はツェッペリンも俺たちも認めないんだよ!?

渋谷――コンニチハ堀江貴文(ライブドア社長)です。アダルト・サイトのどこが悪い!

松村――また、そのネタかよ。

渋谷――だって、何を偉そうに言ってんだ、と思わないか。昔、東映フライヤーズだってあったじゃないか。東映といえばヤクザな映画とポルノだろう。

松村――いきなり古いな。若い読者の為に解説すると、昔、東映フライヤーズというパリーグの球団があって――。

渋谷――張本、尾崎な。

松村――ウルセエな。そのオーナー企業が東映と

CamScannerでスキャン

いう映画会社だったわけ。それで、今回プロ野球のオーナー会議でライブドアにアダルト・サイトがあるという点が問題にされたけど、渋谷としては、何を今更言っているのだ、と主張しているわけだ。そういえば東京球場がフランチャイズだったんだよな。もう、そんな球場があった事さえ誰も憶えていないよな。でも東映ってヤクザ映画はやってたけど、ポルノもやってたっけ？

渋谷——いいんだよ、どうせ東京球場と一緒で誰も憶えてないんだから。

松村——ムチャクチャ言ってるな。

渋谷——だってライター屋だってオーナーだったんだぜ。

松村——あったあった、クラウンライター。

渋谷——クラウンライター・ライオンズ。ライブドアでも楽天でも、何だって立派なもんじゃないか。稼ぐが勝ちだろう。この本見ろよ。

松村——何だよこれ。『稼ぐが勝ち』って凄いタイトルだな。

渋谷——堀江が書いた本で、『SIGHT』のブック・レヴューで取り上げようと思って買って来たんだけど、アタマ痛くなって来るぞ。オビに〝この男が日本を変えはじめた〟って書いてあるけど、頼むから変えないでくれ、って言いたくなるぞ。

松村——だから、お前はどっちなんだよ。

渋谷——まあ、オーナー会議の連中よりは堀江の方がよっぽどいいよ。だいたいダイエーなんて実質倒産企業で、しかも税金使って再生しようとしているわけで、そんな企業のオーナーが、アダルト・サイトがどうのこうのと言える立場かよ。利益出して社員に給料払うというのが企業として一番重要な倫理だろう。それが出来てない奴が利益出して成長している企業に向かって、アダルト・サイト云々とか言うんじゃない。悔しければアダ

ルト・サイトをやって儲けてみろ。

松村――言ってる事がよく分かんないぞ。

渋谷――だからアダルト・サイトだって立派なビジネスなんだよ。俺は、いかにも自分は上品なビジネスやっています、みたいな口をきくサラ公が大嫌いなんだよ。例えば銀行とサラ金だと、全く身分が違うみたいなイメージがあるけど、モラルが低いのは銀行じゃねえか。サラ金の取り立てがエグイとか言うけど、銀行だって同じだよ。銀行のえげつない取り立てで首をくくった零細企業の経営者はいくらでもいるよ。にもかかわらず、今銀行は何千億円という単位で借金の棒引きを大企業相手にやってるわけじゃん。俺が取り立てにあった零細企業の経営者だったら、殺意をおぼえるね。

松村――お前、銀行嫌いだよな。

渋谷――中小企業の経営者は百パーセント、銀行は嫌いだと思うぜ。だから、会社が赤字だから駄目とか、財務内容が悪いから駄目、っていう理屈は分かるんだよ。でもアダルト・サイトやってるから駄目はないだろう。読売や中日の新聞拡販でどれだけエグイ事が行われているかなんて話は誰だって知ってるし、人のビジネスにそういうレベルで口を出せる経営者なんていないって。本当にオーナー会議ってムカつくよな、阪神系列の小売店では一切エロ本売ってないって断言できるのかよ。探すぞエロ本を。

松村――分かった分かった、どうしてこういう話だとお前は必要以上に興奮するんだろうな。

渋谷――積年の怨みが爆発するんだよ。零細な出版社でロックとか扱ってると、社会の壁の厚さに腹が立つ事が多いんだよ。そうすると堀江に感情移入しちゃうわけ。

松村――でも個人資産二百億で六本木ヒルズの最

CamScannerでスキャン

上階で"儲けるが勝ち"とか言われちゃうと、それもムカつくと。

渋谷——そうそう。

松村——要するに、お前はヒガミっぽいって事なわけだ。

渋谷——そういうまとめ方は止めろ。ロックな魂を持ち続けているとか言え。

松村——どこがロックな魂なんだよ。

渋谷——それにしてもツェッペリンのファーストが二十九位はないだろう。

松村——……。

渋谷——どうして黙るんだよ。

松村——意味が分かんないからだよ。

渋谷——十二月に出る『ＳＩＧＨＴ』がロック・ベスト・アルバム100という特集なんだ。それは『ローリング・ストーン』誌が選んだ百枚を訳して掲載するんだけど、ツェッペリンで最高位でランクされているのがファーストの二十九位なんだよ。これはないだろう。フリートウッド・マックの『噂』が二十五位なのに。

松村——どうでもいいけど、最近話の転換が強引過ぎないか。

渋谷——いや、堀江の話で興奮し過ぎて枚数がなくなって来て、ちょっと焦ったんだ。どうしてマイケル・ジャクソンの『スリラー』が二十位でツェッペリンが二十九位なんだよ。根拠を示せよ、根拠を。

松村——ウルセエな。知るかそんな事。その『ローリング・ストーン』のベスト・アルバムってどうやって選んだんだよ。

渋谷——いろいろなミュージシャンとかライターとかレコード会社のディレクターとか、そういう連中の投票によって決まったみたいだな。U2、ピンク・フロイド、ビーチ・ボーイズ、ス

リップノットまで、凄いんだよ参加ミュージシャンが。キャロル・キングからレッチリのフリーまで居るんだぜ。

松村——だったらしょうがないだろう。

渋谷——でも、何でツェッペリンが二十九位なんだよ。

松村——俺に言うな。

渋谷——俺に投票させたら一位にしたのに。

松村——そんなにツェッペリンを一位にしたいなら『ローリング・ストーン』誌のベスト・アルバムじゃなくて自分で作ったものを載せればいいじゃないか。

渋谷——さすがに一人で百枚の解説は書けないからな。

松村——百枚全部に解説が付くんだ。

渋谷——その解説に、また俺が解説を付けようかと思ってんだ。

松村——何だそれ。解説にどういう解説を付けんだよ。

渋谷——『ローリング・ストーン』はこう言っていますが、やはり私としてはツェッペリンが一位になるのが妥当ではないかと考えます、とか書くんだよ。

松村——嘘だろう。

渋谷——嘘だよ。それじゃ本当に馬鹿じゃないか。

松村——お前なら書きかねないな。

渋谷——ビーチ・ボーイズの『ペット・サウンズ』が二位になってたりしてるんで、日本の普通のロック・ファンには解説があった方がいいかな、と思って書いたんだ。人のチョイスとか解説に突っ込みを入れるのって面白いじゃないか。

松村——性格悪いな。

渋谷——評論家やってて性格いい奴なんて居ないって。

CamScannerでスキャン

松村——開き直ってどうするんだよ。

渋谷——でもトップ十のうち四枚がビートルズなんだよな。

松村——当然だろう。

渋谷——まあ俺も人生がビートルズで決まった人間なんで、当然だろう、と言いたい気もするけど、ちょっと引いて考えると、どうなんだろう。とも思うな。

松村——どうしてだよ。

渋谷——だって、三十五年前に解散しちゃったグループだぜ。結局、それからロックは前に進んでないのかよ。

松村——進んでないんだよ。だからビートルズを聴いていれば、結局はいつの時代であってもロックの本質に触れる事が出来るんだよ。

渋谷——失敗した。お前とこのテーマで話しても意味がなかったんだ。

松村——どうしてだよ。意味があるだろう。だって十年後、同じ企画が立てられても、やっぱりビートルズは同じくらいのポジションに居るぜ。それこそ二位のビーチ・ボーイズは分からないけど。

渋谷——確かに、それは言えるかも。ツェッペリンもどう評価されるか分かんないよな。

松村——つまりビートルズはそれだけ永遠のものなわけよ。

渋谷——ほとんど自分がビートルズの版権所有者みたいな言い方だな。

松村——お前だって、結局はツェッペリンよりビートルズなんだろう。

渋谷——まあ、本当の事を言えば俺の人生におけるツェッペリンのシェアが一割だとするなら、ビートルズは五割以上だよな。

松村——要するに、俺とかお前みたいな奴が約束しているから、そういう事になるんだよ。

渋谷――でも俺はフリートウッド・マックやマイケル・ジャクソンには投票しないぞ。

松村――別にそんな事はどうでもいいけどビートルズは偉大だよ。

渋谷――まあな。でもこの微妙な納得できなさは何なんだろう。あのビートルズが現役だった時代、ビートルズを認めない世間に対して怒っていた時の方が、俺としてはしっくりしていたな。

松村――要するに、お前はヒガんでないと盛り上がんない悲しい奴なんだよ。どうあがいても堀江にはなれないな。六本木ヒルズ最上階は諦めろ。

渋谷――コクドのインサイダー取引はどうなったんだよ。コラ！　堤。プリンスホテルにはアダルト・ヴィデオの有線は入ってないのかよ。

松村――入ってないんじゃないか。

渋谷――……。**S**

どいつもこいつも○○年代に固執しやがって！

清蔵——ところで、ミュージシャンのなんです。

松村——何だそれ。

清蔵——いや、今風のミュージシャンのアルバムが素晴らしいんだけど、そこでミュージシャンがよく見かけると歌っているんだ。

松村——ふーん。

清蔵——それがなかなか面白くて、良いなんだよ。だから、それはミュージシャンが父親に会いたいなぁ、俺がおじさんになってやろうかと思ってさ。

松村——ハアーッ？

清蔵——いや、だから若い頃の由だとすれば、俺がミュージシャンの父親でも、年齢的にはおかしくない話じゃないじゃん。だから、ミュージシャンに、俺がおじさんだよって言ってやろうかな、と思ってさ。

松村——拳銃で撃たれるな。

渋谷――話相手になってやってやったり、早死にしそうだから遺産をもらってやったり、いろいろしてやろうと思ってんだけど。

松村――お前、ファンに殺されるぞ。

渋谷――でも、本当に素晴らしいアルバムなんだよ。娘の事を歌った曲なんか、本当に泣けるぞ。

松村――マイケル・ジャクソンの事をおちょくったりしてるんだろう。

渋谷――〝ジャスト・ルーズ・イット〟って曲なんだけど、エミネムってそういう人を馬鹿にしたふざけた奴っていうイメージが強いよな。

松村――そうじゃないんだ。

渋谷――まあ、そういう面もあるけど、基本はシリアスなアーティストだよ。特に今回のアルバムは、強力なアンチ・ブッシュの曲も入っていて、シリアス度は高いな。半端じゃないプレッシャーの中で闘っているから、シリアスにならざるを得ないってところもあるんだろうけど。

松村――顔も変わってきたな。

渋谷――そうそう、だから今からでも遅くないんで、父親が必要かな、と思ってさ。

松村――いつまでも言ってんじゃないよ。でもシリアスな部分も評価されてるんだろう。

渋谷――アメリカではそのブッシュ批判の〝モッシュ〟というのはボブ・ディランのプロテスト・ソングを超えた、とか言われてるらしいからな。でも、日本のエミネム・コンサートの客にシリアスなムードは全くなかったな。前にも言ったけど、コンサート中にカツアゲしてるの、初めて見たからな。

松村――ヒップホップっぽいじゃん。

渋谷――違うと思うぜ。あいつら本当に聴いてんのかな。

松村――そうじゃなきゃ一万円近い金を払ってコ

CamScannerでスキャン

シリーズにはかないだろう。
渋谷——そうだよな。謎だ。でも、このアンソロジーでアルバムは、この四年を代表する一枚だし、ロック史に残るな。
松村——ジェリー・ガルシアのギタリストっぷりもオットーの時もそう言ってなかったか。
渋谷——そうそう。それがおもしろかったんだ。ジョン・ウォリッシュその四枚目のやつもよかったしな。ジョン・ザ・ルダブルジャケット、少し長いけど、アルバムが作るんだぜ。
松村——何だそれ。
渋谷——それが全部良くてさ、特に今回のはボップで良かったな。しかも、ヒットしてこの夏、十か国のチャートに出て働き回っている中で作ってるんだぜ。お前も少し考えたら？
松村——大きなお世話だよ。でも、そうやって曲[illegible]がどんどん次から次へと出てくるってすごいよ
な、お前も。
渋谷——何か基準にしてないか、その言い方。
松村——基準にはしてないけど、余りにも一緒では居ないパターンだよな。
渋谷——そうかも知れないし、例えばエマーソンの新譜を、自分が十八の時に聴いたツェッペリンと同じように興奮して聴いているか、と言われれば、それは違うよな。
松村——そりゃそうだろうけど。
渋谷——ただ、自分の青春時代に聴いたアルバムが自分のベストになるのはいいんだけど、それを絶対的な基準にして、最近のロックはつまらん、とか言うオヤジには絶対なりたくないよな。
松村——つまんないんじゃなく、それは分からないだけだろう、って事だな。
渋谷——そうそう。
松村——俺は分からないものは分からないと、すぐ

言うぞ。

渋谷――そういう事を自信を持って言われてもな。

松村――偉いだろう、お前も自分に正直になれ。正直になると楽だぞ。

渋谷――別に今でも正直で楽だからいいよ。

松村――俺の目をまっすぐ見ながら言えるのか。

渋谷――気持ちの悪い奴だな。見たくないけど、言えるよ。

松村――見たくないのは心のどこかにやましい部分があるからだ。そういえば目がにごってるぞ。

渋谷――ウルセエな。寝不足で目が充血してるんだよ。

松村――俺は良く寝たぞ。心にやましい事があるから寝られないんだ。早く楽になれ。今夜は眠りたいだろう。

渋谷――殺すぞ、ウルセエな。忙しくて寝られないんだよ。だから、先月も言ったけど、『ローリング・ストーン』誌が選んだロックのベスト・アルバムの特集をするんだけど、ベスト百のうち八割が六〇年代、七〇年代にリリースされたものなんだよ。これって変じゃないか。

松村――俺的には問題ないけど。

渋谷――どう考えても変だよ。確かに七〇年代はロックにとって豊かな時代だったけど、九〇年代だって、二十一世紀に入ってからだって優れたアルバムはたくさん発表されたんだから。現に今年だっていいアルバムたくさんあったし。

松村――選んだのが年寄りなんじゃないか？

渋谷――まあな、そうなんだけど。

松村――だいたい文句があるなら自分で選べばいいじゃないか。

渋谷――ちょっと面倒臭いじゃないか、先月も言ったけど……。それにこれも先月も言ったけど、ベスト十のうち四枚がビートルズなんだぜ。

CamScannerでスキャン

松村――俺的には問題ないけど。

渋谷――そうだろうな。でも、何だかなあって感じはするな。でも、一緒に掲載するポール・マッカートニーのインタヴューは凄いぞ。二〇〇四年で唯一といってもいいロング・インタヴューなんだけど、今読めるベストのポール・インタヴューだと思うな。

松村――何が凄いんだ。

渋谷――インタヴュアーの性格が悪い。

松村――お前が言うんなら、本当に悪いんだろうな。

渋谷――どういう意味だよ。

松村――お前より性格悪いのか?

渋谷――悪いよ。だって、貴方の作った一番くだらないアルバムは何ですか、って訊くか、あのポール・マッカートニーに。

松村――それは凄い。ポールは怒んないのかよ。

渋谷――答えが最高なんだよ。「いや答えたいけど、僕は自分の作ったものはビートルズも含めて聴かないんだ。もし一週間くれるなら全部聴き返して、どれが一番ひどいか答えてあげるんだけどな」って言うんだよ。

松村――ポールの勝ちだな。

渋谷――圧勝だろう。ただこのインタヴュアーは全てがこういう調子で「ビートルズはたいしたバンドじゃなかった、とか思いませんか」「〝イエスタデイ〟が嫌いな人も多いけど、どう思います」「ヘロインをやったことありますか」「〝マル・オブ・キンタイア〟って、かなりキビシイ曲ですよね」「あなたは一緒に働くには横暴すぎるという批判にはどう答えます」なんて事ばっかり訊くんだよ。

松村――よくポールは帰らなかったよな。

渋谷――いや、さすがだと思ったのは、どの質問に対しても正面から答えて、一切逃げないんだよ。

特に、その横暴云々という質問に関しては、そういう自分がいる事を認めつつ何故そうなるかを、しっかり話していて、かなり感動的だな。やっぱり偉大なミュージシャンは何を訊いても大丈夫なんだ。よし俺も頑張るぞ。

松村――何か、お前、間違った方向で自信付けてないか。

渋谷――俺の質問はまだ甘かった。これからはもっとガンガン行くぞ。エミネム、俺はまだ少し忙しいから、お父さんになるのは少し待っていてくれ。

松村――息子はいいから子供に早く孫でも作ってもらえよ。ロックの現役もいいけどそろそろ老後の心配でもしろよ。

渋谷――お前に言われたくないよ。 S

CamScannerでスキャン

ロックに魂を売った僕ら、今日もロック魂いっぱい売ってます

松村――コンニチハ、エリック・バードンです。

渋谷――なんだ、そりゃ。

松村――〝なんだ、そりゃ〟って、お前、エリック・バードンを忘れたのかよ、アニマルズの。ううむ、同い歳なのに、そんなに老化が進んでいるのか。

渋谷――エリック・バードンは分かってるよ。ただ、今のロック・ファンは知らないって、言ってるんだよ。

松村――知らなきゃ、それでいいのかよ。勉強しろよ、勉強を。そういえば、日本の子供の数学と理科の成績が下がってるって、新聞に書いてあったな。嘆かわしい。

渋谷――じゃあ、お前、微分積分、今でも出来るかよ。

松村――微分積分……出来るとか出来ないとかじゃなくて、あれは習ったときに意味が分からなかった。

渋谷――それで、よく子供のこと言えるな。

松村――だって、俺、子供じゃないもん。

渋谷――何、居直ってるんだよ。で、エリック・バードンがどうしたっていうんだよ。

松村――先月号の『ロッキング・オン』にだな、叙事詩(エピック)ロック百選！〟っていうのが載ってただろ。なんで、

あそこにエリック・バードンとアニマルズの″スカイ・パイロット″が入ってないんだよ。あんな名曲、ないぞ。俺は腹が立ったから、山崎にメールで「バカ」って送ってやろうかと思ったぞ。
渋谷――本当に送ったんじゃないだろうな。
松村――当たり前だろ。俺、メールの送り方なんか、知らないもん。
渋谷――そういうことは、あんまり大きな声で言わないほうがいいぞ。あの記事は編集部で作ったものじゃなくて、『ＭＯＪＯ』の翻訳記事じゃなかったかな。
松村――よし、それじゃあ、『ＭＯＪＯ』に、「スチューピッド」って送ってやろう。
渋谷――送り方も知らない奴が、エラそうに言うんじゃない。
松村――そういえば、友達がインターネットを見てたら、ＣＣＣＤを論じてるグループがいたんだって。で、その中のひとりが「松村雄策なんか、ＣＣＣＤを使ってるんだろうか」って言ったら、なんと松村雄策を名乗る人間が出て来て「俺はそんなものは使わねえよ」って言ったんだって。
渋谷――変なとこに出てくるな、お前のニセモノは。
松村――で、友達は「松村はインターネットなんか出来ないんだよ」って入れようと思うんだけどって、電話してきたんだ。
渋谷――なんか、わけが分からないな。
松村――それはともかくとして、なんで″スカイ・パイロット″が入ってないんだろう。
渋谷――さあ、そんな古いもの、『ＭＯＪＯ』も知らなかったんじゃないか。
松村――そんなわけないだろ。十九位″霧の中のジョニー″ジョン・レイトン、二十六位″パスト・プレゼント・アンド・フューチャー″シャングリラス、二十七位″太陽はもう輝かない″ウォーカー・ブラザーズだぞ。ジョン・レイトンとかシャングリラスなんか、ロックでもなんでもないじゃないか。ポップ

だろ。

渋谷――まあ、六〇年代ポップスの領域だな。

松村――ウォーカーズだって、いつのまにかスコット・ウォーカーはカリスマになっちゃってるけど、アイドル・バンドで、ライチャス・ブラザーズのエピゴーネンじゃないか。

渋谷――そういったら、ビートルズだって、デビュー当時はアイドル・バンドだったじゃないか。

松村――……まあな。

渋谷――それに、お前、六〇年代ポップスもウォーカー・ブラザーズも好きじゃないか。

松村――……まあな。

渋谷――ともかくロック五十年っていうことで、最近こういう企画が多いけど、全員納得するものなんか無理なんだよ。

松村――そういやぁ、『BUZZ』でもそういう企画があったし、『SIGHT』でも〝ロック・アルバム100枚！〟なんてのがあったな。

渋谷――『SIGHT』の〝ロック・アルバム100枚！〟は、お前も納得しただろ。

松村――まあな。一位『サージェント・ペパーズ』、三位『リボルヴァー』、五位『ラバー・ソウル』、十位『ホワイト・アルバム』だからな。『アビイ・ロード』の十四位は低過ぎると思うけど。あと『ハード・デイズ・ナイト』が入ってないのは、やっぱり当時アメリカではオリジナルが出てなかったからかな。

渋谷――ブツブツ、言ってんじゃない。

松村――何年か前、やっぱり『BUZZ』がこういう企画をやったら、一位がセックス・ピストルズだったんだよ。で、俺は腹が立ったから、メールで……。

渋谷――もういいって、言ってんだろ。

松村――だいたい、セックス・ピストルズなんて、クリス・トーマスが作り上げて、スタジオ・ミュージシャン集めてバックの音録って、ジョニー・ロットンのヴォーカル入れただけじゃないか。そんなの、モンキーズと同じじゃないか。

渋谷——お前、モンキーズ好きじゃないか。
松村——……まあな。
渋谷——ビートルズだって、〝ラヴ・ミー・ドゥ〟のドラムス、リンゴじゃないじゃないか。
松村——……まあな。
渋谷——で、何が言いたいんだよ。
松村——……いや、あのギター、クリス・スペディングだっていうから、やっぱりカッコいいなと思ってな。
渋谷——わけ分かんないな。
松村——それでだな、世の中の流れがそうなってきてるから、俺もそういう本を作ったんだよ。朝日文庫で『R&BコンプリートCDガイド』っていうの。
渋谷——お前、ついに朝日に魂を売ったのか。
松村——魂は売ってない、原稿を売ったんだ。俺の魂、買ってくれないし。
渋谷——だけど、なんでR&Bなんだよ。
松村——いや、つまり、ブルースから始まったブラック・ミュージックが、リヴァプールに行って、アメリカに帰って、ソウルやファンクになって、ヒップホップから、Jポップに至るという道を見ると、R&Bっていうのが、一番分かりやすいかなと思ってな。
渋谷——まあな、意味は分かるけどな。だけど執筆者を見ると、藤田正、中川五郎、赤岩和美は分かるけど、お前のあとに高見展[注1]、鹿野淳[注2]って入ってるのはなんだよ。
松村——だから、各々詳しい人に頼んだんだよ。誠実だろ。それに、五郎さんには何も言えないけど、高見や鹿野にはダメ出し出来るだろ。正論だろ。
渋谷——セイロン過ぎて、紅茶が飲みたくなってくるよ。
松村——うまい、座ブトン一枚！
渋谷——うまくなんかねえよ、ヤケで言ったんだよ！
松村——で、この本発ライヴを、一月二十七日に新

宿タワーレコードで、俺と鹿野と高見でやるから。
渋谷――なんだよ〝本発ライヴ〟って。
松村――いや、よくバンドがレコ発ライヴやるから、俺も本発でトーク・ライヴやろうと思ってな。
渋谷――お前や鹿野は辞めた人間だからいいけど、高見は就業時間中じゃないのか。
松村――だから、有休取れって言ってあるから。
渋谷――……。M

注1：国際部チーフ、ロッキング・オン編集部を経て現在はフリーの通訳・翻訳家。ロック、ヒップホップ何でもこいで、学生時代にハワイに移住したせいかアロハシャツやタイダイをよく着用している。酒の席ではもっぱらジャパニーズ・ダメオヤジに……。

注2：元ロッキング・オン社員。松村は「ダメ出し出来る」と息巻いているが、こうして一方的に後輩扱いすることが往々にしてある。

クイーンはロックのチャンピオン？
こちとらロック界の裸の王様だ!!

渋谷——コンニチハ、ヘルプ・シー・キャント・スイムです。ブリット・ポップとザ・ストロークスが嫌いです。

松村——何だ、それ。

渋谷——イギリスのインディーズでデビューした新人バンドでヘルプ・シー・キャント・スイムっていうグループ名なんだよ。

松村——変な名前だな。

渋谷——男四人と女一人の五人組で、いいんだよ音も歌詞も。

松村——そいつらがブリット・ポップとザ・ストロークスが嫌いなのか。

渋谷——歌詞が過激で、具体的な名前を出して批判するんだよ。“ホワット・ウッド・モリッシー・セイ？”って曲で、一九九五年に盛り上がっていたブリット・ポップと、今盛り上がってるガレージ・ロックは同じなんじゃないか、って歌ってんだよ。メンズウェアもパルプも消えちまった、ってバンド名まで歌詞

にしてるんだぜ。

松村――バンド名も変だけど曲のタイトルも変だな。それって〝モリッシーなら何て言うのだろう〟って事か。

渋谷――そうそう。

松村――あのモリッシーの事か？

渋谷――そうなんじゃないか。サ・ストロークスについて歌っている曲のタイトルは〝アー・ユー・フィーリング・ファッショナブル？〟っていうんだ。

松村――それも凄いな。タイトルだけで内容が想像できそうだな。

渋谷――想像どおりの歌詞で、これはザ・ストロークス批判というより、常にファッショナブルなものを求め続けているメディアに対しての歌なんだけどな。

松村――お前もメディアの人間なんだから喜んでいられないいじゃないか。

渋谷――まあ、そうなんだけどな。ただ、ブリット・ポップを批判して、一連のガレージ・ロックに対して「気分としてのロックンロール」と言って距離を置いて来たオジサンとしては、若いバンドで自分と同じような事を言う奴が出て来たというのは面白いよ。

松村――でも、お前パルプとか好きだっただろう？

渋谷――そうだな。いくらなんでもメンズウエアと一緒にするのは酷だと思うけど。でもブリット・ポップは本当に嫌いだったな。わざわざ批判原稿書いたくらいだから。今となってはブリット・ポップは駄目なものという評価は出来上がってしまったけど、当時は俺みたいな事言う奴は居なかったぜ。

松村――ザ・ストロークスも、別に嫌いというわけじゃないんだろう？

渋谷――まあな。このヘルプ・シー・キャント・スイムと一緒の見解だよ。ファッショナブルなものとして持ち上げられ過ぎで、そんな凄いもんじゃないよ、という感じだな。別に悪いもんじゃないけど、ザ・ストロークスにロックの未来を託しても、どうなの

かねと思うわけよ。

松村――お前としては若いバンドがそう言ってくれて嬉しいわけだ。

渋谷――まあね。でも本音を言えば、別に若い奴が言わなくても、自分の認識には自信を持ってるから、どうでもいいって言えばどうでもいいんだけどね。というか、こういう事を言う若い奴らが少な過ぎる方が問題だよな。

松村――可愛くないオヤジだな。でもオアシスとかブラーもブリット・ポップなんだろう？　それなら『ロッキング・オン』はブリット・ポップに足を向けて寝られないだろう。お前のポルシェのガソリン代もブリット・ポップがかせいでたわけじゃないか。

渋谷――まあな。下手すりゃレディヘもブリット・ポップに入れられる事もあるしな。

松村――それってどうなんだよ。

渋谷――俺のブリット・ポップ批判は、結局ロックとしてイノヴェイティヴじゃなくて、B級メロと予定調和のアレンジに陥っていたオアシス、ブラー以降の雨後のタケノコみたいに出て来たバンドに対してのものだったけどな。そりゃ、ブラーとかパルプとかいいバンドも居たよ。ただブリット・ポップが持つ構造的弱さは、どのバンドも内包していたとは思うぜ。

松村――だったら後出しジャンケンみたいに今言わずに、その時言えよ。

渋谷――言ったよ。だから原稿にも書いたんだけど、誰も一緒に盛り上がんなかったんだよ。ガレージ・ロックもそうで、ザ・ストロークスとホワイト・ストライプスは全く違うんだぞって力説しても、今ひとつ受けないんだよな。

松村――悲しい奴だな。

渋谷――コンニチハ、ロジャー・テイラーです。クイーンのメンバーで単独で表紙になっていないのはジョン・ディーコンだけです。

松村――何だよいきなり。挨拶ネタは一回にしろよ。

渋谷――二〇〇五年にクイーンが『ロッキング・オン』の表紙になるとは思わなかったよな。
松村――去年、一番売れた洋楽アーティストなんだろう?
渋谷――そうなんだよ。
松村――テレビの影響なのか?
渋谷――まあ、そうだけど、それはひとつのきっかけで、基本はクイーンそのものの再評価という事だろうな。テレビのテーマに使われた洋楽はいろいろあるけど、こんなに売れたのはクイーンだけだろう。
松村――現役時代を知ってる俺達からすると何か変な感じだよな。
渋谷――そうそう、何か知らない間にストーンズやビートルズみたいな存在になってて、そこの脈絡が見えにくいんだよ。逆に現役時代を知らない方が、この状況をすんなり受け入れ易いよな。
松村――簡単に言ってしまうと、人気はあるけどキワモノとして馬鹿にされてたよな。
渋谷――まっとうに評価する対象からはずれてたよな、特にデビュー当初は。だって、ピチピチの全身タイツの、およそ二枚目とは言いがたい男がメイクして、いきなりクイーン(オカマ)ってグループ名で出て来て、すっとんきょうなハイトーン・ヴォーカルで歌いまくったんだから、そりゃキワモノだぜ。
松村――お前の表現もどうかと思うけど、まあそんなもんだよな。日本でしか人気がなかったし。
渋谷――アメリカでは誰も知らないし、本国イギリスでもまっとうに扱われてなかったよ。
松村――でも日本での人気は凄かったな。
渋谷――凄かった。最初の来日の時はとんでもない騒ぎで、俺は死ぬかと思った。
松村――別にお前は死なないだろう。
渋谷――原稿に書いた事あるけど、ガンガン事務所に電話がかかって来るんだよ。「クイーンはどこに泊まってるんですか」とか「いつ取材するんですか」とか。俺、最近のヨン様騒ぎを見てて、クイーンの

初来日思い出したもん。

松村――オバサンが騒いでたわけじゃないけどな。

渋谷――何で渋谷さんだけメンバーに会えるんですか、って泣かれた事あるぜ。

松村――確かに異常だった。

渋谷――アイドル性のあるバンドの周辺では常にそういう現象が起きるけど、洋楽であんな事になったのは、ビートルズ、ベイ・シティ・ローラーズ、そしてクイーンだけだったな。しかもビートルズやベイ・シティは全世界的現象の中での騒ぎだったけど、クイーンは日本だけだったから、かなり変だった。それに当事者として巻き込まれたのはその時だけだったから、かなり強烈に印象に残っているな。

松村――どうしてお前が当事者なんだよ。

渋谷――だからメンバーに会った、というだけで当事者なんだよ。それに当時はロック評論家というのは独特の存在で、俺とか大貫とかはアイドルだったんだよ。

松村――そういう事を言うと、全ての話のリアリティーがなくなるから止めた方がいいと思うぜ。今じゃドラえもん・ブラザーズなんだから。

渋谷――何だよ、そのドラえもん・ブラザーズって。

松村――いや何となく、お前と大貫が並んでいる所をイメージしたら頭に浮かんだんだよドラえもんが二個。

渋谷――でも当時は洋楽アーティストのスポークスマンであり代理人だったからなロック評論家って。

松村――でも今はドラえもんだから。

渋谷――ウルセエな。

松村――大山のぶ代の後、お前がやったらドラえもん。大貫でもいいけど。

渋谷――お前に言われたくないよ。

松村――まあな。

渋谷――コンニチハ、アドロックです。バンド形式でやった〝サボタージュ〟は、アホのブッシュへのメッセージです。

松村――またかよ。

渋谷――いやピースティよかったんだよ。コンサートの前はちょっとオールド・スクール過ぎて駄目なんじゃないかと不安だったんだけど、予想以上によかったな。バンド形式でやったパートが最高だったよ。サンクスも知ってたし。

松村――何だそれ？

渋谷――チケットをどこで買ったのかステージから訊くんだよ。ローソン、ファミリーマートだけじゃなくて、サンクスで買った人とか言うんだよ。よく憶えたよな。

松村――つまんない事感心してんじゃないよ。

渋谷――藤子・F・不二雄です。私の許可なしにドラえもんの声優を変えないように。

松村――一人でいつまでもやってろよ。 **S**

二〇〇五年大予想：今年こそはツェッペリンの年だ!!

渋谷――コンニチハ、ホリエモンです。女の心は金で買ってます。

松村――また、そのネタかよ。前もやったじゃないか。

渋谷――だって面白過ぎだろう。ニッポン放送買って、フジサンケイグループ全体を支配しようとしてるんだぜ。

松村――事態は毎日変化してるから、この本が発売される時にはどうなってるか分からないけどな。ライブドアが倒産してるとか。

渋谷――まあ、それはないだろうけど、確かに毎日事態は変わっているよな。でも、とりあえず今はニッポン放送の大株主で、実質的な支配者だよな。

松村――まあな。

渋谷――ウチのフェスは夏も冬もニッポン放送が

主催だから、ホリエモン来たりするのかな。

松村――知らないよ。大株主だからって、いちいち主催コンサートに行ってたら仕事にならないだろう。

渋谷――宣伝になるからって来たりして。オープニングの挨拶させろとか言って来るかな。

松村――だから来ないよ。

渋谷――いきなりロックは金で買えますとか言ったら受けるな。

松村――受けないに決まってるだろう。

渋谷――物とか投げられたりして。

松村――お前は何を面白がっているんだよ。

渋谷――でも、凄いよな。三十二だぜ。いくら金があっても、少し前まではその歳でフジテレビを買おうなんて発想する奴は居なかっただろうし。実際ニッポン放送までは買ってしまったからな。

松村――何であんなに金があるんだ?

渋谷――まあ基本的に借金なんだろうけど。

松村――危なくないのか。

渋谷――買っているのがニッポン放送の株なんて紙クズになる危険はないよな。明らかに価値があって流動性もあるものを買ってるわけだから、まあ普通の投資行動といえるんじゃないのか。ただハイリスクではあるだろうけど。ライブドアの資産規模を考えるなら。

松村――ニッポン放送とフジテレビは焦っているだろうな。

渋谷――そこが面白いよな。楽天でもライブドアでもソフトバンクでも、IT産業の連中って若いし、既存の財界的ルールを気にしないじゃないか。プロ野球買う時もそうだったけど。

松村――確かに。

渋谷――だからニッポン放送とフジテレビが資本関係的にねじれている構造には誰もが気付いてい

CamScannerでスキャン

たわけよ。だからライブドアより資産のある大手企業が手を出せばライブドアよりスムーズにオイシイ買い物ができたんだよ。

松村——実際、村上ファンドとか手を出したよな。

渋谷——何でそんな事知ってんだよ。

松村——俺だって新聞読むんだよ。

渋谷——お前、本当に松村なのか。松村が村上ファンドなんて言葉を言うなんて日本経済の破綻も近いかも。

松村——失礼な事言うんじゃない。最近は円の先物取引までやってんだから。

渋谷——嘘だね。

松村——嘘だよ。

渋谷——……。

松村——だから、ITの連中がどうしたんだよ。

渋谷——ちょっと村上ファンドのショックから立ち直れないんだけど、まあ、いいや。つまり分かっていたけど手を出さなかったわけよ既存の企業は。そこは一種の互助会的な発想と、実際の利害関係がしがらみになっていたんだと思うわけ。でもITの連中はそんな事気にしないからガンガン行くんだな。ソフトバンクも役所とすぐケンカしちゃうし、いきなりアメリカ政府に言いつけに行ったり、やる事が破格で、上の世代の企業人とは全く違うよな。

松村——ホリエモンもやたらテレビに出て来て喋ってるし。

渋谷——そうそう。これまでの常識だと企業買収の当事者、しかも社長が出て来て、その買収の過程をペラペラ喋るなんて考えられないじゃん。例えば銀行の合併の時、凄い話題になったけど、誰も社長の顔なんか分かんないじゃない。三井や住友、三菱の社長というか、頭取の顔なんて誰も知らないし。

松村――興味もないけどな。

渋谷――確かに。でも日本の会社って大企業ほど顔がないんだよ。プロ野球買収の時だって、ホリエモンや三木谷の顔はみんな憶えたけど、一方の当事者の近鉄の球団社長の顔なんて誰も知らないぜ。

松村――だって所詮サラリーマン社長なんだから、本人の意志でどうこうできないだろう。

渋谷――そうそう、そこなんだよ。ＩＴの連中は創業者でオーナーで社長で、しかも若いから、しっかりと顔もある社長をやれるわけだよ。だから見てて面白いんだよ。

松村――でも出たがりだよな。

渋谷――まあな。ただメディアに顔を出すというのは経営者にとってリスクとストレスのある行為だから、ある意味根性あると思うぜ。

松村――結構、お前ホリエモンに同情的じゃないか、前の時と較べると。

渋谷――ちょっと面白がってるよな、俺も。よし、この号は「今年のロック・シーン大予想」だから、渋松も予想を立てよう。「今年の夏フェスにホリエモンがやって来る」。

松村――そういう、当たってもハズれても誰も興味のない、どうでもいい予想を立ててるんじゃないよ。

渋谷――そうかな、面白いじゃん。

松村――フェスに来ている客にとってはどうでもいい事だぜ。

渋谷――まあな、じゃあ別の予想を立てようぜ。よし、[注1]「レッド・ツェッペリン再結成」。どうだ派手だろう。

松村――派手かも知れないけど、何か根拠でもあるのかよ。

渋谷――ない。

CamScannerでスキャン

松村——ないじゃ予想にもならないだろう。

渋谷——根拠はジョン・ポール・ジョーンズ仕事がなくて大変そうだから。

松村——そんな事は昔からで、今年急に大変になったわけじゃないだろう。

渋谷——ジミー・ペイジも仕事なさそうだぜ。

松村——でも、前にお前が言ってたけどツェッペリンのCDは未だに全世界で毎年百万枚くらい売れてるんで、仕事しなくても金が入るんだろう。

渋谷——そうなんだよ。さすがに最近はそこまで売れてないだろうけど、ある程度の収入が保証されてるんだよな。そこがマズイ。もうツェッペリンのCDを買わなくすればいいんだ。不買運動をしよう。ツェッペリンのCDを買うのを止めてジミー・ペイジを困らせてツェッペリン再結成を実現する会を作ろう。

松村——勝手に作れよ。

渋谷——お前もビートルズのCDの不買運動してポールを困らせて、ビートルズを再結成させろよ。

松村——何やってもポールは金に困らないから意味ないよ。

渋谷——確かに。その点、ツェッペリンは希望があるな。

松村——どういう希望だよ。もう少しマシな予想はできないのかよ。

渋谷——じゃあ、「ツェッペリン人気、日本で大爆発！」。

松村——ツェッペリン以外の話題はないのかよ。だいたい何だよ日本で大爆発って。もともと人気はあるじゃないか。

渋谷——去年のクイーンみたいに、お茶の間レベルで人気が出るわけよ。ドラマのテーマになったりして。スマップがカヴァーするとか、〝アキレス・ラスト・スタンド〟を。

松村――スマップが歌えるわけないだろう、あんな曲。クイーンはメロディーが歌謡曲だったからお茶の間でもヒットしたけど、ツェッペリンなんて一番歌謡曲になりにくいじゃないか。

渋谷――お前、知らないな、"天国への階段"を。

松村――誰でも知ってるよ。でも、それ、曲だろう。だいたいCDを売れなくして再結成させるんじゃなかったのかよ。

渋谷――そうだ、そうだ。世の中、なかなか難しいな。しかたないので渋松の予想はホリエモン本に絞ろう。

松村――絞らなくていいよ。でもネット会社と放送局の合併って、AOLとタイムワーナーでも余りうまくいってないから、どうなんだろうな。

渋谷――……お前、本当に松村なの。**S**

注：二年後にまさか再結成するとは露とも思っていなかったが、渋谷の念が通じたか。

会社は買えても、ロックは金で買えねえぞ！

渋谷――コンニチハ、ロバート・プラントです。ツェッペリンが再結成しなくても、俺のソロがツェッペリンだから安心してくれ。

松村――本当かよ。

渋谷――嘘だよ。

松村――何だそれ。

渋谷――ロバート・プラントのライナーノーツを断ったら、担当のホリくん（注）が、それなら渋松を「コンニチハ、ロバート・プラントです」で始めてくれと言ったんで、ちょっとやってみたんだよ。

松村――私物化するなよ渋松を。

渋谷――私物化しか売り物はないじゃないかよ、渋松なんて。

松村――まあな。何でライナー書かないんだよ。

渋谷――〆切が日程的に無理だったんだよ。でも実は本当に今回はツェッペリンっぽい曲が多くて、何か生活感が出てるんだよな。

松村――ツェッペリンって生活感があるのかよ。

渋谷――いやツェッペリンにはないけど、ツェッペリンっぽい事をやってるロバート・プラントにはあるじゃないか。あんなにツェッペリンのイメージから逃げようとしていたのに、ついにここまでやらざるを得なくなったんだな、生活が大変なんだな、って感じだよ。

松村――別に生活に困ってツェッペリンっぽい事をやってるとは限らないじゃないか。今回バート・プラントはそういうモードなんだよ。

渋谷――お前は知らないから、そういう善意な解釈をするけど、そんなシンプルな話じゃないんだよ。悪いけど、俺はツェッペリンには詳しいから。

松村――知ってるよ、そんな事。ジミー・ペイジより詳しくて嫌がられたって話じゃないか。

渋谷——それは違うけど、とにかくロバート・プラントはツェッペリンが嫌いで、俺から見ると被害妄想に近いもんがあるね。何か自分だけバンドに参加してなかったような気分らしいんだよ。

松村——意味が分かんないんだけど。

渋谷——DVD観ると分かるけど、ライヴの時ロバート・プラントって暇そうじゃん。

松村——暇なわけないだろう、歌ってんだから。

渋谷——いや意外と歌ってない時が多いんだよ。それが嫌だったんだと思うな。

松村——物凄くシンプルで、全く説得力のない分析だな。お前、本当にツェッペリンに詳しいのかよ。

渋谷——もっともらしい言語に変換するとツェッペリンって、凄く器楽的要素の強いバンドなんで、ヴォーカリストはどうしても疎外感を持っちゃうんだよ。日本人のあるヴォーカリストと話をしていて、リスナーとしてはツェッペリン好きだけど、あのバンドのヴォーカルにはなりたくないって、言ってたよ。結局オイシイのはギタージャん、って感じだと思うぜ。

松村——にもかかわらずツェッペリンっぽい事を始めたロバート・プラントは生活が切迫しているのではないか、というのがお前の見解なわけだ。

渋谷——切迫とまでは言わないけど、後がない感じだな。

松村——それを切迫って言うんだよ。

渋谷——そうか、じゃあ切迫だ。そういえば前にジミー・ペイジにツェッペリンの再結成の話をしたら「いや、ロバートは大成功しているソロ活動が忙しいからよ」とか言ってたな。

松村——嫌味なオヤジだな。

渋谷——あの二人って、そういう距離感なんだよ。でもツェッペリン・ファンには喜んでもらえるアルバムだと思うよ。今度のロバート・プラントのソロは。

松村——何かとって付けたようなコメントだな。

渋谷——だってとって付けたんだもん。

松村——……。

渋谷——コンニチハ、ホリエモンです。ニッポン放送はお金で買えました。待ってろよロック・イン・ジャパン！

松村——またそれかよ。

渋谷——想定の範囲内です。

松村——お前、何も考えずに、ただ言いたい事を言ってるだけだろう。

渋谷——面白過ぎだろう。だってホリエモンの着信音まであるらしいぞ。

松村——何だよそれ。

渋谷——携帯の着信音でホリエモンが「我々としては、この携帯を買収する意志があります」って言うらしいんだよ。受けるらしいぜ。「女の心は金で買えます」ヴァージョンも作って欲しいよな。

松村——お前、ホリエモン好きだよな。

渋谷——面白いじゃないか、太ってるし。俺に限らずみんな好きだろう。新聞、テレビもトップ・ニュースじゃないか。

松村——まあな。あの敵役の日枝っていうフジの会長よりはキャラが立ってるよな。

渋谷——立ち過ぎだろう。ロック・イン・ジャパンもシャレじゃなくなって来たよな。

松村——お前、来るの楽しみにしてないか？

渋谷——そんな事ないって。でも、俺に限らず自分で起業した中小企業の経営者で、大企業にいじめられた奴は、みんなホリエモンを応援してると思うぜ。だからと言ってホリエモンに感情移入してるわけじゃないんだけどな。

松村——あのキャラじゃ、誰も感情移入できないよな。

渋谷——レースクイーンと女子アナ好きっていうのが、本当にオタク王道でいいよ。

松村——でもニッポン放送、本当に買われちゃったんだな。

渋谷——この対談をやってる時点ではそうだな。企業買収って日本では余りないから、ちょっとカルチャー・ショックがあるよな。

CamScannerでスキャン

松村――海外だと普通にあるけど。
渋谷――レコード会社なんかオーナーがクルクル変ったりするからな。でも株主が変っても現場は全く変らないからニッポン放送も変らないよ。社長の亀渕さん、俺好きだし。
松村――つき合い長いよな。あの人がオールナイトニッポンでツェッペリンかけてDJしてたなんて、今の若い奴は想像もできないだろうな。
渋谷――コンニチワ、ビリー・ジョーです。日本人はギターとベースは上手いけど、ドラムは下手です。
松村――何だそれ。
渋谷――今回のグリーン・デイのライヴではオペレーション・アイヴィーの〝ノレッジ〟を演る時、客をステージに上げて楽器を演奏させるんだよ。俺が観た幕張の初日は、ギターとベースは上手い奴が出て来て良かったんだけど、ドラムが下手で、業を煮やしたトレが自分で叩いちゃったんだよ。
松村――別に日本人がドラムが下手じゃなくて、たまたまそいつが下手だっただけじゃないか。
渋谷――アメリカ人は大ざっぱだからサンプル数少なくても、そう思い込むぜ。ちょっと心配だな。
松村――心配じゃねえよ。心配なのは、お前の頭だよ。
渋谷――ビリー・ジョーって、名前は似てるけどビリー・ジョエルの弟じゃないぞ。
松村――殺すぞ。
渋谷――アメリカでは『アメリカン・インディオット』を全曲演ったって話を聞いたんで期待したのに、演んなかったな。山崎に、メンバーに俺が初日に観に行くからって伝えとけって言ったのに、伝えなかったのかな。
松村――お前、ギャグになってないから、そういうアホな事言うの止めろ。若い読者には渋松でしかお前のキャラは認識されていないから、シャレでなくて、本当にボケ老人だと思われるぞ。
渋谷――まあ、本当にそんなもんなんだけどな。
松村――開き直るなよ。
渋谷――でも凄くいいライヴだったぞ、グリーン・

ティ、エミネムの時にも思ったけど、メッセージもシリアスだし、音楽的にも凄く高いものを表現してるんだけど、ショーはエンターテイメントに徹していて、思いっきり分かり易いんだよ。いきなりキッズ並みに、ステージから炎がガンガン上ったのには驚いたよ。子供達にどう届けるか、という視点が物凄く強いものとしてあるよな。聞いてるのかよロバート・プラント。

松村——ロバート・プラントも今回は分かり易くて生活感があるんだろう。

渋谷——あっそうか。聞いてるかホリエモン。

松村——枚数になったから、俺帰るから。**S**

注：ロバート・プラントの当時のソロ作『マイティ・リアレンジャー』のレコード会社担当。書籍にまでこうして名前を掲載してしまってゴメンなさい。

ロックひとすじ三十年。誰か俺達の名前も継いでくれよ!!

渋谷——コンニチハ、ホリエモンです。ライブドアはフジテレビと和解してしまいました。

松村——ハックション!

渋谷——……だけど、業務提携をしたので、まだロック・イン・ジャパンに来る可能性はあります。

松村——ズルズルズル。

渋谷——……何なんだよ、そのクシャミと鼻ミズは。

松村——花粉症なんだよ。もう一か月以上、ずっとこうなんだよ。

渋谷——花粉症なんていうナイーヴなものに、お前がなるなんて思ってもいなかったな。

松村——花粉症が話題になり始めた頃は俺は全然平気で、涙浮かべて鼻ミズたらしてる人を見ても理解出来なかったんだけど、五年ぐらい前からこうなっ

て、どうも毎年ひどくなってくるようなんだ。

渋谷——そういえば、マスクしている人の数は、毎年増えているような気がするな。

松村——だけど、おかげで、電車の中でクシャミを十連発ぐらいしても、誰も迷惑そうな顔しないもんな。可哀そうにって、同情的な目で見てくれるもんな。これが冬だったら、そうはいかないぞ。風邪をうつすんじゃねえぞって、にらまれるもんね。

渋谷——お前、無精ヒゲなんかはやして、小汚くしてるから、花粉症になるんじゃないのか。

松村——あっそれは言いがかりだ。これはな、ハナをかみ過ぎて鼻の下が荒れちゃってヒゲを剃ったりしたら血が出てきて痛くてしょうがないからなんだよ。だから、花粉症の季節が終るまでは、ヒゲが剃れないんだ。しょうがないだろ。

渋谷——じゃあ、今、無精ヒゲをはやしている人は、みんな花粉症なのかな。イチローとかヒデとか。

松村——そんなわけないだろ。だけど、今のお前の言いがかりで思い出したんだけど、昔アトピーが話題になり始めた頃は、それを否定する人はひどいことを言ってたぞ。たったの十五年前ぐらいだけど、ある大学病院へ行って、「これってアトピーっていうんじゃないでしょうか?」って訊いたら、そこの医者は「そんなものはない! そんなことを考えているから、そういうふうになるんだ!」って怒鳴りやがった。今、思い出しても、腹が立つ。

渋谷——たしかに、メチャクチャだな。

松村——旗の台の駅前にある大学病院だ。

渋谷——分かった。もう、それ以上は言うな。

松村——結局、アトピーが世間的に認められたのは、蕎麦アレルギーの子が学校の給食で蕎麦を食べて、亡くなってからなんだよ。あの駅前病院の医者、どう思ってんだろうな。

渋谷——だから、分かったって。花粉症は全国民が認めているから、いいじゃないか。

松村——まあな、国民の二割が花粉症だっていうか

ら、これで認められなかったら、どうしようもないけどな。

渋谷――そういえば、あの頃、お前がしょっちゅう赤い顔をしてるから、昼間っから酒を飲んでるんじゃねえよって思ったんだけど、アトピーだったんだな。

松村――昔からそういう奴だったんだ、お前は。人が苦しんでいるのに、この酔っ払いめって思っていたんだ。

渋谷――今月もホリエモンで行こうと思っていたのに、花粉症とかアトピーとか盛り上がんないな。

松村――俺が最近一番盛り上がったのは、こぶ平の九代目林屋正蔵襲名だ。あれは凄かったな。

渋谷――お前が落語が好きなのは知ってるけど、こぶ平でも盛り上がるのか。

松村――いや、こぶ平じゃなくて、おそらくあれを全部仕切っただろう春風亭小朝だよ。もはや日本の落語界をリードしているのは、小朝だよ。

渋谷――ちゃんと、分かるように話してくれよ。

松村――話せば長くなるけど、話は亡くなった五代目柳家小さんが襲名するところから始まるんだ。

渋谷――いったい、いつの話だよ。

松村――昭和二十五年だ。

渋谷――俺達が生まれる前じゃないか。

松村――五代目を誰にするかっていうときに、一番の候補が現実に五代目になった当時の小三治で、二番がその兄弟子の馬楽だったわけだ。で、実力者の桂文楽が小三治って決めたんだけど、兄弟子だから馬楽にもそれなりの襲名をさせなきゃなんない。そのとき、七代目の正蔵が亡くなったところで、継ぐべき人材もいなかったので、馬楽は八代目の正蔵になったわけだ。ここまで、いいか？

渋谷――落語の世界っていうのも、会社の人事みたいなことがあるわけだ。

松村――ところが、七代目の海老名家が、正蔵の名前は、一代限りで返してくれって言ったんだよ。

CamScannerでスキャン

渋谷——それって、おかしいことなのか。

松村——落語家の名前っていうのは、一回渡しちゃったらもうその人のもので、その人の弟子が継ぐものなんだよ。だから、海老名家と八代目とは、ずっと確執があったんだよ。で、七代目の息子があの林家三平で、八代目が亡くなったら継ぐのは三平だろうって言われてたんだ。だけど、三平で超人気者になったんだし、正蔵っていう感じでもないしとか言ってるうちに、三平は亡くなっちゃったんだ。

渋谷——そうだ。たしか、三平は五十四歳で亡くなったんだ。俺達と同い年じゃないか。まずい。

松村——このままじゃ面倒くさいことになると思った八代目は、そこで正蔵の名前を返して彦六になったわけだ。

渋谷——そうか。たしかに、あのおじいさん、名前変えたな。

松村——だけど、返してもらっても、こん平とかこぶ平とかしかいなかったから、正蔵も三平も継げる人間がいない。

渋谷——ぺーとかパー子もいるぞ。

松村——そのうちに彦六も亡くなり、その一番弟子の春風亭柳朝も亡くなり、その一番弟子が小朝なわけだ。人気も実力も、凄いものがある。その小朝が、何と三平の娘の泰葉と付き合い始めたんだ。落語ファンは、みんなうなったぞ。

渋谷——まるで、落語界のロミオとジュリエットだな。でも、ちゃんと結婚したんだよな。

松村——そう、何十年もの確執を、小朝はまったく平和に解決しちゃったんだよ。なおかつ、小朝なら正蔵でも三平でも彦六でも柳朝でも継げる人間じゃないか。

渋谷——ところが、小朝はこぶ平に九代目を継がせたわけか。

松村——そうなんだよ。たぶん、もう何年かしたら、いっ平に三平を継がせるんだろうな。

渋谷——じゃあ、小朝は彦六も柳朝も継がないんだ

CamScannerでスキャン

ろうな。

松村——そうだな。襲名でトラブルが起きるなんて、意味がないって思っているんだろうな。

渋谷——だけど、小朝ってまだ四〇代じゃなかったか。

松村——そうだよ。落語界も、そういうことになってきてるんだよ。

渋谷——しかし、今日はお前の落語のウンチクになっちゃったな。よし、これで終わりにしよう。

松村——ああ、これから外へ出ると、またクシャミと鼻ミズか。身体もダルくなってきたし、のども痛くなってきたし。

渋谷——それって、花粉症じゃなくて、風邪なんじゃないのか。

松村——……。 M

僕ら闘う五十代、まだまだロックを娯楽にできません

渋谷──コンニチハ、イアン・アンダーソンです。六十近いけど、まだ片足で立ってフルート吹けます。

松村──……。

渋谷──何でナイスなギャグにリアクションしないんだよ。

松村──そんなネタ振っても誰も知らないんだから、意味ないだろう。

渋谷──何言ってんだよ。渋公すぐにソールド・アウトして、追加の渋公も売り切れたんだぞ。イアン・アンダーソンがリーダーの伝説のロック・バンド、ジェスロ・タルのコンサートの事だけど。

松村──何、説明してんだよ。お前もイアン・アンダーソンって言っても分からないんじゃないか、と不安に思ったんだろう。

渋谷──いや、いいコンサートだったんで会社に帰って来て「ジェスロ・タル凄かったぞ！」と騒いでも、知らない奴が結構居たんだよな。ここはロックの出版社だろう！　どうなってんだよ。

松村──どうなってるもこうなってるも、お前の会社じゃないか。

渋谷──そうなんだよ。だから今度、渋谷陽一のロック講座を社員相手に開こうかと思ってんだけど。

松村——誰も来ないと思うな。特に宇野[注1]は来ないね。

渋谷——俺もそう思う。あいつはビートルズのメンバーが何人だったかも知らないぜ。

松村——ストーンズは完全に駄目だろうな。

渋谷——六人とか言いそうだよな。

松村——ツェッペリンは五人とか言うな。

渋谷——ドアーズは三人だな。

松村——フーは五人だな。

渋谷——ビーチ・ボーイズは十人ぐらい行くと思うな。クリームは三人とか言うぞ。

松村——クリームは三人だろう。

渋谷——あっそうか。

松村——馬鹿馬鹿しいから止めないか。やってて空しくなる。

渋谷——確かに。

松村——でもジェスロ・タルって渋公二回もやったんだ。前回来た時はオンエアじゃなかったか？

渋谷——よく憶えてるな。三十年近く前の来日ではNHKホールだったな。コンサートのラストにステージに置いてある電話が鳴って、それをイアン・アンダーソンが取って、君への電話だよ、って客に向かって言うんだよ。そのまま受話器を置いてコンサートが終わったんだよな。

松村——何で、そこまで細かい事を憶えているんだよ。

渋谷——昔の事は良く憶えているんだよ。

松村——でも渋公にジェスロ・タル観に来てる客って、どんな客だよ。

渋谷——オッサンに決まってるじゃないか。伊藤政則も来てたらしいけど、日本中の政則と渋谷陽一が集合してたんだな、渋公に。

松村——最低の空間だな。

渋谷——全員で歌ったりして熱かったぞ。

松村——若い奴は要らないのかよ。
渋谷——少しは要るけど、全面的にオヤジだよ。
でも、二十代後半のOLらしい女が一人で来たり
するんだよ。思わずインタヴューしたくなったね。
どういう人生を過ごすと、会社帰り一人で渋谷に
ジャズ・ヴォーカルを観に来る事になってしまうのか、
凄く知りたかったな。
松村——別に犯罪に手を染めてるわけじゃないん
だから、どういう人生を過ごしたって問題じゃな
いだろう。
渋谷——だって来てるライヴの出演者はジャズ・ヴォーカルじ
ゃなくて、ジャズ・ヴォーカルの一年振りの来日コ
ンサートだぜ。前評判も何もないし、同時代を体験
していない。二十代のOLが、何を動機にして一人
で渋谷まで来たのか謎だろう。
松村——別に、ジャズ・ヴォーカルが好きなんだよ。
渋谷——それが謎だろう。どうしてジャズ・ヴォーカ
ルが好きなんだよ。
松村——知らねえよ。お前、凄くジャズ・ヴォーカルにはま
ったってたじゃないか。
渋谷——ジャズ・ヴォーカル、リザ・ハイウォーターです。
ソロは駄目だったけど、やっぱりジャズ・ヴォーカ
リストは画面で、涙は涙します。
松村——……。
渋谷——何か言えよ。ジャズ・ヴォーカルはみんな知って
るぞ。
松村——いないじゃないか。
渋谷——ジャズ・ヴォーカルは武道館ワンマンやってい
た。出演者も武道館だったぞ。
松村——それもすごいけど、ひとかなだろう。
渋谷——当然、伊藤政則は来ていない。それは
小さな設備で渋谷公会堂で大集結したんだ。
松村——お前、それは嫌いだろう。ジャズじゃないか。
渋谷——嫌いだよ。でもジャズ・ヴォーカル・ジャズは嫌いです。

るメタルの原型、古典じゃないか。何か笑えそうな気がしたんだな。で、笑えた。何だかステージの上手と下手にせり上がりみたいなものがあって、そっちからロブ・ハルフォードがピョコンって現われるんだ。これが何の為の演出か謎で、ほとんど意味が分かんなかったな。

松村――オートバイで出て来るんじゃないのか?

渋谷――それはアンコール。山崎はそこだけ面白かったって言ってたな。

松村――駄目じゃないか。

渋谷――あんなもんだろう。俺は面白かったけどな。ただジェスロ・タル、ジューダスと観てると、何だか洋楽って、そのうち釣りとか盆栽とかみたいな、オヤジに特化した趣味になるんじゃないか不安になって来るな。

松村――邦楽の方が勢いあるよな。

渋谷――コンニチハ、ジャック・ホワイトです。レニー・ゼルウィガーは骨が好きだったけど、僕にはハリウッド・スターは荷が重過ぎました。

松村――何だそれ。

渋谷――ホワイト・ストライプスの新作が素晴らしいんだよ。本当はこれで本文書きたかったくらいなんだけどな。で、このアルバムのテーマがレニー・ゼルウィガーとの失恋なんだよ。

松村――つき合っていたんだ。

渋谷――『コールドマウンテン』で共演してお互い骨が趣味というのが分かってつき合うようになったらしいぜ。

松村――何だよ。骨が趣味って。

渋谷――何か好きらしいぜ。

松村――良く分かんないな。

渋谷――俺も良く分かんないよ。でもつき合ってみたら、やっぱり価値観が違って別れたらしいな。まあ、俺としてはそんな事はどうでも良くて、失

CamScannerでスキャン

恋してこんな凄いアルバムが作れるのなら、しょっちゅう失恋してもらいたいよ。

松村――そういう言い方はないだろう。もしテーマが失恋なら、それはそれで重要じゃないか。スプリングスティーンの新譜で戦争がテーマだとしたら、お前はそんな事はどうでもいいと言わないだろう。こんなアルバムが作れるなら戦争はもっと起きてもいいとは言えないだろう。

渋谷――確かに。少し問題は違う気はするけど、お前の言うとおりだ。時々、思わぬ突っ込みをするよな。

松村――『ロッキング・オン』編集部は、ツェッペリンに似てるから社長は好きなんだ、とか言ってるぞ。

渋谷――俺はパブロフの犬じゃないんだからツェッペリンに似てれば何でも好きってもんじゃないんだよ。

松村――ロバート・プラントの新譜でさえ気に入ってないもんな。

渋谷――そういう答えにくい突っ込みをするんじゃない。でも、これは歴史的な作品だと思うな。基本的にオーソドックスなブルースをベースにしたロックなんだけど、ちょっとした音色の工夫、メロディーの斬新さ、アレンジのセンス、そうしたものによって革命的なものになるっていう事が証明されてるわけよ。それはどういう事かと言えば、ロックは凄いって事なわけよ。

松村――思いっきり大ざっぱな言い方だな。

渋谷――つまり、従来型のロックのフォーマットの中でも充分に革新的な事が可能って事なわけだよ。前にも原稿に書いたけど、楽器編成とかメチャクチャだったりするわけじゃない。そうした部分では限りなくアバンギャルドだけど、基本は王道ロックなんだよ。ロックを信じてるわけ。俺な

CamScannerでスキャン

んか、ひょっとしてロックは賞味期限切れのフォーマットなのかも、とか思った事もあるけど、反省したね。だてにジャック・ホワイトは太ってないよ。偉い。とにかくかっこいいアルバムだよ。ツェッペリンに似てるし。

松村――何だよ、結局それかよ。ところでホワイト・ストライプスって姉弟だよな。

渋谷――だから、二人だよ。**S**

注1：元ロッキング・オン社員。松村は「来ない」と断言しているが、こうして一方的に社員のキャラを決め付けることが往々にしてある。

注2：二〇一一年に創業四十年を迎えるロッキング・オンだが、現社員は渋谷がこれまでファースト・ネームで人を呼ぶのを見たことがない。渋谷は勝手に伊藤政則さんを友達だと思っているようだが……。

解散・脱退・再結成こそロックの華だろ？

渋谷――俺、六本木ヒルズって嫌いなんだよ。

松村――何だよ、今更。六本木ヒルズの悪口なんか、お前が言わなくても、そこら中のメディアで書かれまくっているじゃないか。

渋谷――いや、そうなんだけど、あそこがITバブルの象徴で、ホリエモンとか三木谷とか、キャラの強いのがたくさん生息していてうさん臭い、とかいうのじゃなくて、建物として嫌いなんだよ。

松村――確かに変な形だよな、あのビル。

渋谷――そうだろう？　中に入るともっと変なんだよ。あのビルに入ってる企業に打ち合わせに行ったんだけど、居るだけで気分が悪くなってくるビルだったぜ。

松村――居るだけで何で気分が悪くなるんだよ。

渋谷――いや、廊下の幅とか照明の暗さとか、建物のハードそのものが人を不快にさせるんだよ。

松村――お前、廊下はないだろう、木造のアパートじゃないんだから。普通に通路って言おうぜ。

渋谷――でも、廊下みたいな感じなんだよ。とにかく居心地が悪いんだな。駐車場からのアクセスがややこしくて、なかなかオフィス・フロアにたどりつけないんだ。

松村——そういえば、マンションの駐車場が自走式じゃないんで不便でしょうがないって週刊誌に書いてあったな。

渋谷——そうそう、知り合いが住んでるんだけど、ちょっと近くに買い物に行こうと思っても、機械式の駐車場から車を出すのに十分くらい時間がかかるんで外に出たくなくなるって言ってたぞ。まあ、最近の高層ビル全体にそういう傾向があるけど、六本木ヒルズは特にひどいな。

松村——でもテナントで一杯なんだろう。

渋谷——賃貸料が安いんだよ。出来た当初はテナントが集まんなくて、一年間無料とかにして集めてたみたいだぜ。今は人気になったんで強気かも知れないけど。

松村——お前も、一時「移ろう」とか言ってなかったか？

渋谷——賃貸料が安そうだったからな。あそこに行ってたらホリエモンに会社を買ってもらえてたかもな。

松村——そんなに嫌いなら行かなくて良かったじゃないか。

渋谷——まあ、そうなんだけどな。全体にセキュリティーとか厳しくて、もっともらしいゲイトとか、大仰な受付とかあるんだけど、そこから入るエスカレーターがせまっくるしいとか、通路もせまいとか、セコイ訳よ。何かヴァーチャルというよりハリボテみたいなんだ。とにかく人を疎外するオーラが出てるんだよビルから。

松村——凄い言い方だな。

渋谷——お前も憶えてるだろうけど、『ロッキング・オン』の最初の事務所って、今の六本木ヒルズの隣りだったじゃないか。

松村——喫茶店と中華屋の四階な。

渋谷——あのビルの歯医者に今でも通ってんだけど、工事中やたら評判が悪かったらしいんだ、あのビル。

松村——近所の人達から？

渋谷——そうそう。解体の時、水を撒かなかったんでホコリが凄かったらしいんだ。

松村——古いビルを解体する時、ホコリが立たないように水を撒くけど、あれをやらなかったんだ。

渋谷——とにかく建築費を安くあげる為に、せこくせこく作ったんだよ。水も少なく少なく撒いたらしくて、近所の人達が抗議に行ったらしいぜ。

松村——お前も、細かい六本木ヒルズ情報を持っているな。

渋谷——そういう情報がいちいち納得できるセコイ感じがするんだよ、あのビル。

松村——それは分かったけど、これだけの分量を使って言いたいのはそれだけかよ。

渋谷——いや、言いたいのは、そういうビルに入ってる楽天もライブドアもヤフーもどうなの、って事が言いたいんだけど。

松村——俺、いつも思ってたんだけど、このビル[注1]の一階のガランとした間抜けな空間、凄くセンス悪いと思うんだけど。

渋谷——思う、思う。

松村——これだけのビルなのに周りの道は車一台くらいしか通れない幅で、とても使いにくいと思うんだけど。

渋谷——そうそう。駐車場から出る時、不便だし、危ないんだよ。

松村——そういうビルに入ってる『ロッキング・オン』って、どうなの、って言いたいんだけど。

渋谷——コンニチハ、ロジャー・ウォーターズです。やっぱりピンク・フロイドの名前はオイシイので、ライヴ・エイトで再結成する事にしました。

松村——自分に都合が悪くなったとたんに話題を変えるんじゃないよ。

渋谷——ロジャー・ウォーターズも生活が苦しいんだろうな。

松村——どうしても話題は変えたいんだな。

渋谷——ライヴ・エイトにはポール・マッカートニ

CamScannerでスキャン

ーも出るぞ。

松村——分かったよ。でも、お前、ああいうチャリティーとか嫌いじゃないか。

渋谷——話し出すと止まんないから話さないけど、死ぬほど嫌いだよ。

松村——そこに、お前が評価するロジャー・ウォーターズが、しかもピンク・フロイドのメンバーとして出るってのは、どうなの？

渋谷——情けないね。直接会って、注意してやりたいくらいだな。

松村——でも、ブルース・ディッキンソンとアイアン・メイデンも、別々にやってたけど盛りあがらないで、結局また合体したら人気が盛り返したし、そういうものなのかもな。

渋谷——一時期、再結成もの多かったよな。イーグルスでさえ再結成したからな。

松村——何かロックも一回りした感じがするよな。

渋谷——でも、ロジャー・ウォーターズは絶対にピンク・フロイドに戻らないと思ってたから、ちょっとショックだよ。だって裁判とかしてたんだぜ。

松村——生活苦しいんだよ。

渋谷——そうかも知れないな。俺が『ロッキング・オン』を追い出されたみたいなもんだぜ。曲書いて、詩を書いて、歌を歌って、コンサートのコンセプトも全部ロジャー・ウォーターズがやってたのに、人数的に一対三だからピンク・フロイドの名前は残りの三人のものって、ちょっとひどくないか。

松村——確かに。でもお前は別に曲も書いてないし歌も歌ってないからいいじゃないか。

渋谷——出版社なんだから当たり前だろう。全ての雑誌を創刊して、会社を運営して、ここまでやってきたのに追い出されたら頭に来るだろうな。

松村——そういう動きがあるのか？

渋谷——良く分んないけど、最近、山崎とジャパンの編集長の古河[注2]が話をしている所に俺が近付くと、あいつら急に話を止めるんだよ。

松村――それはヤバイぞ。すでにお前のロジャー・ウォーターズ化は進んでいるな。

渋谷――ちくしょう、〝アナザー・ブリック・イン・ザ・ウォール（パートⅡ）〟を歌うぞ。

松村――歌うな、誰も知らないよ。

渋谷――フロイドの『ザ・ウォール』に入っているヒット・シングルだよ。〝シャイン・オン・ユー、クレイジー・ダイアモンド〟も歌うぞ。

松村――だから歌うなって。それも誰も知らないよ。

渋谷――ロジャー・ウォーターズが、頭のオカシクなった元リーダーのシド・バレットについて歌った名曲だよ。

松村――そうか、よし何でも歌え。若い社員にロックの恐ろしさを教えてやれ。

渋谷――別に恐ろしい歌じゃないんだけど。

松村――ついでにツェッペリンも歌え。くるりの岸田に「一緒にステージで歌おう」って言われたんだって？

渋谷――つまんない事知ってるな。でも、本当に俺が『ロッキング・オン』を追い出されたらオリジナル・メンバーで再結成しよう。

松村――何だよそれ。

渋谷――だから、三十三年前の創刊メンバーの、俺とお前と、岩谷宏と橘川幸夫だよ。新宿のロック喫茶で手売りしようぜ。[注3]

松村――もうロック喫茶なんかないよ。だいたい、このインターネットの時代に同人誌作るなんて奴居ないよ。

渋谷――そうか、さみしいな。でもオリジナル・メンバーが揃えば盛りあがるぜ。

松村――盛りあがる訳がないだろう。だいたい四人のうちお前しか残ってないのに、何でお前が『ロッキング・オン』の名前を使ってんだよ。

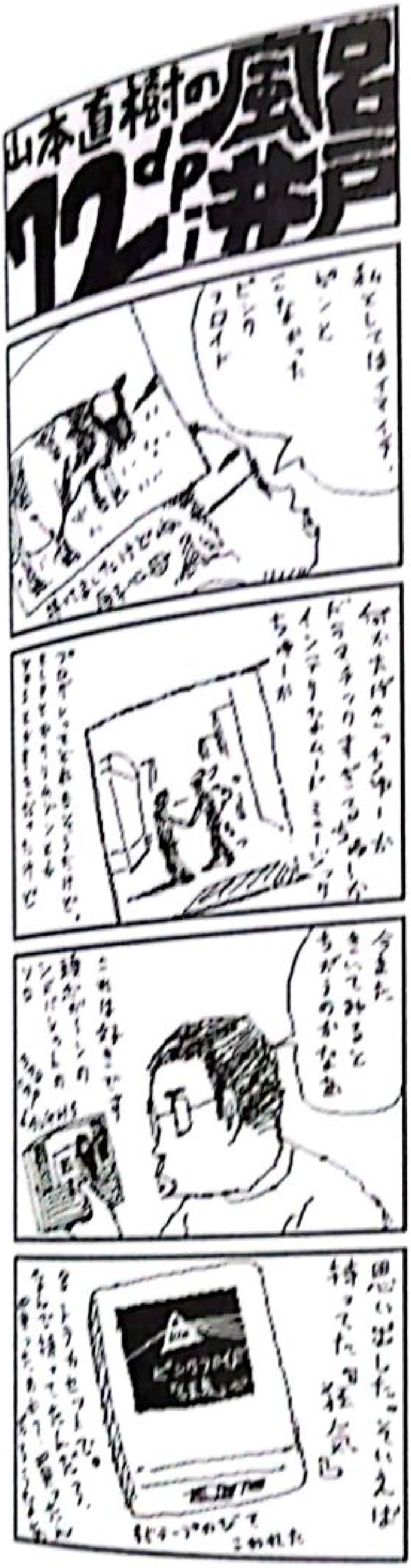
渋谷――コンニチハ、ポール・ロジャースです。クイーンの再始動に参加したけど、やっぱりフレディの世界観にはなじめません。

松村――……。

注1：現在のロッキング・オンが入居している渋谷インフォスタワーのこと。

注2：古河晋。現ロッキング・オン・ジャパン副編集長。ブルーハーツでロックに目覚めるも、社内では冷静沈着。渋谷にも冷静沈着に対応。

注3：『ソウル・イート』のこと。もう何度渋松に登場したかわからない。若かりし頃の渋谷と松村が入り浸っていた幻のロック喫茶。新宿・厚生年金会館の靖国通りを挟んだ向かいにあった。学生運動家、ミュージシャンくずれ等々多数たむろしており、明らかにイケナイ煙が立ち込める中、渋谷がDJと称してピンク・フロイド『原始心母』のA面一曲二十五分かけっぱなしにするなど好き放題やっていたのは一部で有名。ある意味ロッキング・オン発祥の地。現在は閉店。



もうろくジジイ?うるせえ俺たちゃ猛ROCKジジイだ!

渋谷――コンニチハ、ジェフ・ベックです。下手な奴ほどチューニングをやりたがります。

松村――何だそれ。

渋谷――俺が観た時、二時間のコンサートで白のストラト一台を弾きまくって、一回もチューニングしなかったんだよ。

松村――普通、ありえないな。

渋谷――二部構成で、アンコールもあったから、見えてないところで替えたとしても、最大で三台だから、それにしても凄いぜ。

松村――盛りあがったらしいな。

渋谷――東京と横浜で追加を含めると二万人以上

動員してるぞ。一人でフェスできるぞ。こんなに盛りあがってるのに何で『ロッキング・オン』は表紙にしないんだよ。

松村――普通しないだろう。

渋谷――『ギター・マガジン』は表紙だぞ。『サウンド&レコーディング・マガジン』はブライアン・イーノが表紙だぞ。

松村――それは関係ないだろう。

渋谷――ハゲた変なオッサンが表紙なんで驚いたけど、ブライアン・イーノだったぞ。

松村――イーノは昔から凄かったじゃないか。

渋谷――どうして『ロッキング・オン』は洋楽のリーディング・マガジンなのに、もっとオッサンのミュージシャンを盛りあげないんだよ。責任者を出せ。

松村――お前だろう。

渋谷――……。

松村――お前が山崎に言えばいいじゃないか。

渋谷――あいつ、言う事聞かないんだよ。最近、あいつと古河が話している所へ俺が寄っていくと、二人共黙るんだぜ。

松村――先月、その話聞いたよ。

渋谷――おかしいと思わないか。

松村――別に。社長なんてそんなもんだよ。

渋谷――でも、ジェフ・ベック若かったぞ。六十一歳には全く見えないんだよ。新聞の評にも書いたけど、三十代といっても遠目なら通用するぜ。すっかり体のデッサンが狂ってしまったジミー・ペイジとえらい違いだよ。お前も太ってんじゃないよ。

松村――お前に言われたくないね。確かに髪型もファッションも変えてないから、昔のイメージどおりなんだよな。

渋谷――そうそう、何にも変えてないというのも、

普通の六十のジイさんとしてはどうかと思うけど、それが許されるジェフ・ベックは偉大だね。

松村――昔の曲ばっか演るのか。

渋谷――実はジェフ・ベックって、二〇〇〇年以降も新作二作出したりして、現役バリバリなんだよ。

松村――そうだよな。じゃあ新曲主体なんだ。

渋谷――前回までのライヴはそういう傾向があったけど、今回は代表曲はほとんど演ったたな。

松村――ジェフ・ベック・グループとか。

渋谷――そんな有史以前の事は客もジェフ・ベックも忘れてるよ。基本的に『ブロウ・バイ・ブロウ』以降の、いわゆるインスト主体のもんだな。

松村――そういうもんなんだ。

渋谷――そうだよ。確かに来ていたお客はオヤジばかりなんだけど、それでも四十代なんだな。つまり俺たちより十歳ぐらい若いわけ。そうなるとロッド・スチュワートと一緒にやっていた頃のベックは原体験としてないんだな。実際、セールス的なジェフ・ベックのピークは『ブロウ・バイ・ブロウ』とか『ワイアード』の頃だからさ。

松村――クロスオーバーの時代じゃねえか。

渋谷――懐かしいなクロスオーバー。もう古語辞典にしか載ってない言葉だな。

松村――そうなのか？

渋谷――そうだよ。今はフュージョンと言ってるな。つまり、もう俺たちはオヤジでさえないって事だよ。

松村――じゃあ、何だよ。

渋谷――ジイだな。

松村――ジイ……。

渋谷――有史以前の歴史を古語を使いながらロックを語るんだからジイだろう。翁でもいいぞ。

松村――何か嬉しそうじゃないか。

CamScannerでスキャン

渋谷——聞き直そうかないかな。

松村——じゃあヴォーカリストは居ないのかよ。

渋谷——いや、居酒屋のオヤジが来てたぞ。

松村——何だよ、居酒屋のオヤジって。

渋谷——どう見ても、歌のうまいロック居酒屋のオヤジにしか見えないわけ。新曲には、幸福屋のオヤジって書いたけど。

松村——ライヴって本当に大丈夫だったのかよ?

渋谷——いや、良かったよ。正直言って、一万人も動員するようなもんじゃないけど、しっかりと現役だったし、バックの演奏もしっかりしてたぜ。少なくとも俺は楽しかったな。ボブ・テンチのヴォーカルで第一期ジェフ・ベック・グループの曲を聴きたかったけど。

松村——ジイだからな。

渋谷——そうそう。

松村——そうそう、って。

渋谷——コンニチハ、ネリーです。日本では義務教育で一年間、英語を勉強すると聞いていたけど、俺の歌くらい歌えるようにしておいてもらいたいです。

松村——……。

渋谷——反応しろよ。

松村——面倒なんだよ。話題が変わったわけね。

渋谷——ネリーって知ってるか?

松村——知らねえよ。

渋谷——アメリカのヒップホップのスーパースターなんだけど、武道館は結構、空席があったな。

松村——日本じゃ人気がないんだ。

渋谷——そうでもないけど、武道館二回は少し無謀だったかも。

松村——ジェフ・ベックは出来たかもな。

渋谷——確かに。何しろ、アメリカではスタジアムでも出来るくらいのミッシー・エリオットが、

会場もライヴハウスにすがらないんだから、「ロッキング・オン」も、もっとヒップホップやれ。

松村――責任者に言っておくよ。

渋谷――そうだな……。

松村――しかし、お前もジイなのに忙しいな。

渋谷――だってネリーなんてうちの会社から誰も行かないぜ。やっぱり観ておくべきだろう。

松村――そんな重要なアーティストなのか？

渋谷――そうでもないけど、無視してもいいもんじゃないよ。田舎臭くて、ベタなヒップホップだけど、俺は少なくともブリティッシュ・シー・パワーの何倍もポップ・ミュージックの現在を感じる事が出来るけどな。

松村――具体名を挙げるんじゃない。粉川に殺されるぞ。粉川いいのか？ 渋谷が勝手な事言ってるぞ。

粉川――いいんです。相手にしてませんから。

松村――あっ、そう。お前、大丈夫か、この会社でのお前の立場。

渋谷――いいんだよ、俺には松村、橋川、岩谷のオリジナル・メンバーでのロッキング・オンの再結成というカードがあるから。

松村――ない、ない。

渋谷――それで、ネリーの最大のヒットが"ジレンマ"って曲なんだよ。

松村――そうなんだ。

渋谷――当然、それがコンサートでもハイライトになるわけ。そこで客の女の子をステージにあげて歌わせるんだけど、歌えないんだよ。

松村――何だよ。

渋谷――会場は大合唱になってるのに、最前列に居る、カワイイ系の女は歌えないわけ。どうして、ああいう女が最前列に居るんだよ。

松村――関係者のオヤジがチケット取ってやった

CamScannerでスキャン

のに決まっているだろう。

渋谷――「ネリー・ラヴ」とか書いたプレート持ってるんだぜ。ネリーも歌えると思ってステージにあげるぜ、普通。歌え、バカ。

松村――お前が怒ってもしょうがないだろう。でも本当にいろいろ行ってるな、お前。古いのから新しいのまで。

渋谷――だから、時々自分の立ち位置が分んなくなって来るんだよ。

松村――立ち位置って？

渋谷――だから古いんだか新しいんだかだよ。ジェフ・ベック行くと、すっかり追憶モードのオヤジたちに、古いもんばっかり聴いてないで少しは新しいロックも聴けよ、と言ってやりたいんだけど、同時に『ワイアード』じゃなくて『ラフ・アンド・レディ』みたいな古い名作も聴け、とかも言ってやりたいわけよ。

松村――忙しいな、お前も。基本的には大きなお世話だけどな、言われる方は。

渋谷――まあ、新しいもんも古いもんも、いいものはいい、という事だな。

松村――つまんない結論だな。

渋谷――コンニチハ、グレアム・グールドマンです。エリック・スチュワートは居ないけど5ccじゃないよ。

松村――10ccも来てたんだ。

渋谷――オッ、さすがこういうバンドだとすぐに反応するな。

松村――客入ってるのか？

渋谷――横浜ブリッツで、キャパ千五百のところに二百人居なかったな。

松村――厳しいな。

渋谷――でも、いいライヴだったぜ。当たり前だけど客は温かかったし、途中で、グレアム・グー

ルドファンのセルフ・カヴァー・コーナーがあって、泣けたぞ。

松村——〝パス・ストップ〟とか演るんだ？

渋谷——そうそう、詳しいな。

松村——当たり前だろう。

渋谷——〝ノー・ミルク・トゥデイ〟も演ったぞ。

松村——ハーマンズ・ハーミッツなんて誰も知らないだろう。

渋谷——お前、知ってるじゃないか。

松村——俺は知ってても、世間は誰も知らないの。

渋谷——そのコーナーの最後が〝フォー・ユア・ラヴ〟で、俺泣きそうになっちゃった。高校時代、それカヴァーしてたんだバンドで。

松村——間違いなく、お前はジイだから、その立ち位置を間違えないように。 **S**

僕ら渋松五十四歳、ロック・フェス八十八か所参拝で天国行きを目指します

渋谷――コンニチハ、ノーマン・クックです。僕のパフォーマンスより雷の方が受けて悲しかったです。

松村――結局フジ・ロックは三日間雷雨だったな。

渋谷――特に二日目はひどかったな。ファットボーイ・スリムの時、割とパフォーマンスが地味だったんで、雷が光る時の歓声の方がでかくて、何だかかわいそうだったよ。客も怖いから「ウォーッ」って言うしかないんだろうけど。俺も怖いから「ウォーッ」って言ったし。

松村――言うなよ五十四のオッサンが。

渋谷――でも、あの日はグリーン・ステージとホワイト・ステージで観たいものが交互にあって、雨の中で移動が大変だったよ。ギャング・オブ・フォーからベック、ベックからダイナソー、ダイナソーからファットボーイ・スリム、ファットボーイからブラフマン、何だかシャトル・バスみたいに動いてたな。

松村――普通、若い奴でもあの雨の中でそんなに動いてたら死ぬぞ。だいたいブラフマンってホワイトのトリだろう。終わったら十二時ぐらいになってたんじゃないか。

渋谷――あの時が一番キツかったな。雨も激しくて、さすがに歩いてる奴も少なかったよ。ブラフ

CamScannerでスキャン

マンの楽屋に行ったら、トシロウに「よく遭難しなかったですね」って誉められたぜ。

松村——それは誉めてるんじゃなくて、馬鹿にしてんだよ。

渋谷——いや、そんな事はない。トシロウと俺の関係を知らないから、そういう事を言うんだ。

松村——心配そうな顔してたか？

渋谷——いや、笑ってた。

松村——だから、馬鹿にされてるんだよ。年寄りの冷や水だと思われたんだよ。

渋谷——何か、そんな気がして来た……。

松村——翌週、自分のフェスがあるんだからそんな無茶やったら駄目だろう。

渋谷——でも、全部観たかったんだよ。ギャング・オブ・フォーの〝ダメージド・グッズ〟を生きている間に、生で聴けるなんて思わなかったよ。演奏が上手かったのと、ヴォーカルが、いきなり四つんばいになってステージの上を走り出したのには驚いたけどな。

松村——演奏が上手いと驚くのかよ。

渋谷——絶対下手だと思っていたからな。それにステージングも絶対に無愛想だと思っていたから、四つんばいと兎の耳には驚いたぜ。

松村——何だよ、その兎の耳って。

渋谷——ヴォーカルの奴が、頭の横で手を兎の耳みたいにして変なアクションをするんだよ。謎だったな。ロックのライヴを観て早三十年以上になるけど、あんなアクションは初めて観た。一瞬、ギャング・オブ・フォーはコミック・バンドなのかと思ったぜ。

松村——社員が、社長はどこにでも居て不気味だって言ってたぞ。宇宙人みたいなカッコでウロウロして目立ってたらしいじゃないか。

渋谷——ゴアテックスの立派なレイン・スーツで、

CamScannerでスキャン

ちょっとピカピカしてオシャレなんだよ。

松村――ピカピカするレイン・スーツなんて見た事ないぜ。

渋谷――でも、フジは毎年雨が降るから客が雨慣れしてるよな。ちょっと降り出しただけで、ほとんど全員がザーッとレイン・スーツに着替えるのが笑えた。

松村――お前もピカピカしてたんだろう。

渋谷――俺もすぐに宇宙人に変身したんだけど、昔は雨が降ると喜んで濡れてた馬鹿も居たけど絶滅したね。みんな痛い目にあって学習したんだろうな。

松村――トイレは相変わらず並んでたな。

渋谷――マーズ・ヴォルタの時、バック・ステージに居たんだけど、セドリックがトイレが一杯でウロウロしてたのが笑えた。バック・ステージにもトイレは沢山あったけどな。開演五分前だったんだけど大丈夫だったのかな。ライヴはいつも通りだったけど。

松村――マーズ・ヴォルタ、シガー・ロスっていうホワイト・ステージ最終日のトリとトリ前もなかなかだよな。

渋谷――そうそう、その日もモービーからマーズ・ヴォルタ、マーズ・ヴォルタからニュー・オーダー、ニュー・オーダーからシガー・ロスって移動してたんだ。最終日も雨でキツかったな。

松村――お前、何か目的を間違ってないか。音楽聴きに行くってより、一年分の運動不足を解消しに行ってんじゃないか。

渋谷――自分のフェスではその何倍も歩くぞ。

松村――二週間で一年分の運動してるわけだ。

渋谷――そうじゃないよ。俺はこのフェスの季節に死なないように、毎週ジムに行ってんだから。

松村――何か悲しい中年だな。

CamScannerでスキャン

渋谷――その二週で疲れたせいか、サマーソニックは、海と幕張メッセの中をウロウロするだけでマリン・スタジアムには行かなかったな。

松村――オアシスは観なかったのかよ。

渋谷――スリップノット、ナイン・インチ。ウィーザー、オアシスはスタジアムで観たぜ。

松村――今回のサマソニの目玉はディープ・パープルだ、って言ってたじゃないか。

渋谷――本当は観たかったんだけど、粉川に義理立てしてティアーズを観たんだ。

松村――粉川は頼んでないって言ってたぞ。

渋谷――音楽評論家としての職業意識と、ハード・ロック少年だった魂とが闘って、結局職業意識が勝ってしまったんだな。俺も汚れてしまったよ。ごめんリッチー。

松村――リッチー・ブラックモアは来てないよ。

渋谷――ごめんジョン・ロード。誕生日が一緒なのに観れなくて。

松村――ジョン・ロードも来てないよ。

渋谷――ごめんグレン・ヒューズ、別にスウェード好きじゃないんだ。

松村――だから、グレン・ヒューズも来てないんだよ。

渋谷――オリジナル・メンバーのほとんどが居ないからな。

松村――グレン・ヒューズはオリジナルじゃないだろう。

渋谷――いいんだよ、誰も知らないから、そんな事。

松村――お前、ハナから行く気なかっただろう。

渋谷――だって、このイアン・ギラン・ディープ・パープルって、前回の来日で観て、何かピンと来なかったんだよ。

松村――何だ、単独コンサート行ってんじゃない

か。

渋谷——俺の純粋なハード・ロック少年の魂が行けって叫んだんだよ。

松村——単に〝ハイウェイ・スター〟と〝スモーク・オン・ザ・ウォーター〟が聴きたかっただけだろう。

渋谷——凄い、良く分かるな。

松村——誰でも分かるわい、そんな事。

渋谷——ナイン・インチが凄かったな。

松村——そうなんだ。

渋谷——だって大阪でトレントが「オオキニ」って言ったんだぞ。

松村——ミック・ジャガーも言ったじゃないか。

渋谷——そうだけど、ステージでほとんど口もきかない、インタヴューも受けないってキャラだったのに、ちょっとびっくりしたな。

松村——東京でも言ったのか。

渋谷——東京で「オオキニ」って言ってどうするんだよ。

松村——じゃあ、何が凄かったんだよ。お前が「オオキニ」が凄いって言うから聞いてやったのに。

渋谷——ごめん。当然パフォーマンスが凄かったんだよ。いきなり角刈りだし。

松村——角刈りと演奏は関係ないだろう。

渋谷——なんか角刈りっぽい演奏だったんだよ。

松村——お前、いちおう音楽評論家だろう？

渋谷——オウ！　三十六年もやってるぞ。来年は[注]人間国宝だ。

松村——他に表現はないのかよ。

渋谷——結局、暗黒な文学的トーンの強いアーティストで、それが魅力でもあるんだけど、今回はもっと攻撃的でストレートなハード・ロックだったんだよ。エネルギーの絶対量が他のバンドとは違ったね。前がスリップノットだったのに、やっぱりナイン・インチは格上な感じだったな。スリ

CamScannerでスキャン

ップノットも良かったけど。
松村――大阪ではマスク取ったらしいな。
渋谷――良く知ってるな。ただスリップノットは、もう「スワレーッ」っていうのは止めてほしいな。
松村――何だそれ。
渋谷――いや、分かる奴だけ分かればいいから。
松村――感じ悪いな。
渋谷――ところでディープ・パープルにはトミー・ボーリンは居なかったのか。
松村――えっ、トミー・ボーリンって死んだんじゃなかったっけ。
渋谷――死んだ。
松村――……お前が死ねば。 S

注：当然、なっていない。

ボクラ・シブヤマツ五十四歳、来日公演ヤッテ・ブレイク・シマース！

松村――こないだ、坪内祐三さんが書いてたんだけどさ……。

渋谷――ちょっと、待て。坪内祐三って、俺達よりずっと歳下なんじゃないのか？

松村――そうだな。七つか八つは歳下だろうな。

渋谷――七つも八つも歳下なのに、どうしてお前が〝さん〟付けて呼ぶんだよ。

松村――俺は誰でも〝さん〟付けだぞ。

渋谷――ウソつけ。

松村――ウソじゃないよ。この前、ビート・クルセイダースに会ったときも、ちゃんと「ヒダカさん」って呼んだぞ。

渋谷――それ聞いて、ヒダカは顔が引きつってたっていうじゃないか。

松村――見たのか、お前は。

渋谷――同席してた高橋に聞いたんだよ。なっ、高橋？

高橋――引きつってはいませんでしたけど、「僕はスマッシュの日高さんの子供ではありません」って言ってました。

渋谷――……終わったら呼ぶから、向こう行って仕事してろ。

CamScannerでスキャン

松村――まあ、俺の場合は、そのときお前がぶってなかったから、本人かどうか分からないじゃないか。だから、いとおさんが付けにしたんだよ。

渋谷――意味が分かんねえよ。

松村――だって、いくら俺が上だからって、素面の覆面レスラーに「気安くやあ、ストロング・マシン君」なんて言ったら、殴られるかも知れないだろ。

渋谷――ビークルは、プロレスラーか。

松村――それに、実は『ミュージック・マガジン』の愛読者で、お前に敵意を持っていて、「あっこいつ渋谷の友達だ」って思って、殴られるかも知れないだろ。

渋谷――お前は人と会うとき、いつも殴られるかも知れないって心配してるのかよ。

松村――で、話を戻すと、坪内さんは俺の書くものを評価してくれるからさ。

渋谷――本当かよ。からかわれてるんじゃないのか。

松村――この前だって、「内田百閒、高橋義孝、山口瞳の次に来るのは松村さんだから、もっと書いてください」って言ってくれたぞ。

渋谷――俺には、からかい以外の何物でもないって思えるけどな。

松村――だから、俺も「もっと書きたいんですけど、渋谷がメンドくさいテレビの仕事とかを押し付けてくるんで、なかなか書けないんです」って言ったんだ。

渋谷――こないだ、一回だけじゃないか。よくそういうことが言えるな、お前は！

松村――冗談に決まってんだろ。

渋谷――……。

松村――どうした、元気か？

渋谷――お前が言うと、冗談が冗談に聞こえないんだよ。で、坪内祐三がどうしたんだよ。

松村――ローリング・ストーンズは、日本ではいつから人気が出たんだろうか？　って書いてたんだよ。あの当時、本当にビートルズは日本で人気があった

CamScannerでスキャン

んだろうか？　っていうのは俺もお前も書いてるだろ。

渋谷——まあな。中学でも高校でも、クラスにひとりかふたりしかファンはいなかったからな。

松村——それも、俺達は団塊の世代の終わりのところで、一クラスに五十人もいたのにだぞ。ビートルズがそうだったら、ストーンズはもっとファンがいなかったんじゃないかっていうんだよ。

渋谷——それは分かるけどな。

松村——坪内さんが中学生のとき、ツェッペリンのファンやボウイのファンはいたけど、ストーンズのファンはほとんどいなかったんだって。

渋谷——七〇年代前半だったら、そりゃそうだよ。なんてったって、ツェッペリンの人気は凄かったからな。

松村——そうか？　最初のうちは、パープルのほうが人気があったぞ。

渋谷——何、言ってんだよ。ツェッペリンのほうに、決まってんだろ。

松村——バカ、言うなよ。〝ハイウェイ・スター〟や〝スモーク・オン・ザ・ウォーター〟はみんな知ってたけど、〝幻惑されて〟なんか誰も知らなかったぞ。

渋谷——なんで〝幻惑されて〟なんだよ。〝胸いっぱいの愛を〟とか〝移民の歌〟を出せよ！

松村——冗談に決まってんだろ。

渋谷——……。

松村——ムキになんなよ。もういい大人なんだから。

渋谷——うるさいよ。

松村——で、坪内さんは『レット・イット・ビー』を観に行ったら満員で、『ギミー・シェルター』はガラガラだったんだって。

渋谷——まあな。

松村——それで、ストーンズはいったいいつから人気が出たんだろうって考えて、『女たち』あたりじゃないかっていうんだ。

渋谷——けっこう、当たってるかも知れないな。

松村――いや、俺はそうじゃないと思う。

渋谷――おいおい。せっかく認めてくれてる人に、反対するのかよ、お前は。

松村――そういうことじゃないよ。ストーンズが日本でブレイクしたのは、一九九〇年の初来日からだと思う。

渋谷――ああ、そういうことか。

松村――あのときに、ガーッてストーンズのファンは増えた。若い新しいファンが増えたのは喜ばしいことなんだけど、突然「私、昔っからストーンズのファンだったの」って言い出す人も増えた。

渋谷――なんで、女なんだよ。

松村――あのとき、そういう女の人が、やたらといたんだよ。俺達と同世代で、「私、ずっとストーンズのファンだったの」って言う人がいたんだよ。

渋谷――別に、いいじゃないか。

松村――良くないよ。俺、その人、ずいぶん前から知ってたけど、絶対にストーンズ・ファンじゃなかったもん。

渋谷――どうでもいいだろ、そんなこと。

松村――良くないよ。だから、「順序立ててよく考えよう。あなたはストーンズ・ファンじゃなかった」って言って、いっしょに考えたんだよ。

渋谷――ヒマか、お前は。

松村――そうしたら、分かったんだよ。中学生のとき、彼女はザ・タイガースのファンだったんだよ。で、タイガースがやたらとストーンズのカヴァーをやってたんだよ。それから二十年経って、彼女は昔っからストーンズのファンだったって思い込んじゃったんだよ。

渋谷――そんなこと分かって、どうしようっていうんだ、お前は。

松村――だって、俺はいちおう〝テル・ミー〟から聴いてるわけで、最初に買ったLPだって『アウト・オブ・アワ・ヘッズ』だぞ。沢田研二の〝タイム・イズ・オン・マイ・サイド〟聴いてた人と、いっしょ

CamScannerでスキャン

にしてもらいたくないよ。
渋谷――沢田研二好きじゃん、お前。
松村――……まあな。お前もな。
渋谷――……まあな。結局、それで何が言いたいんだよ。
松村――つまり、来日してブレイクしたバンドって、いっぱいいるわけだろ。クイーンとか、チープ・トリックとかさ。ストーンズも、そうなんだよ。なおかつ、デビューから日本でのブレイクまで、もっとも時間がかかったバンドなんだよ。
渋谷――それが結論かよ。まあいいや、来年はまたポールとストーンズのダブル来日だからな。
松村――えっ、決まったのか？
渋谷――冗談だよ。
松村――………。 **M**

五十四歳松村、ネットＤＪやります！

松村——コンニチハ、アル・クーパーです。

渋谷——あっ、お前も行ったのか、アル・クーパーのコンサートに。

松村——行ったよ、二日目に。

渋谷——あれっ、俺も二日目だったんだけど、会わなかったな。

松村——当たり前だろ。顔合わせた途端にアル・クーパーの講釈でもされたらうるさくてしょうがないから、なるべく渋谷と離れた席にしてくれって頼んだんだよ。

渋谷——そんな席の指定があるのかよ。

松村——こないだだって、お前、ジェフ・ベックのライヴ観に行って、なんか講釈タレてたけど、ちょっと前のテクノのジェフ・ベックだって、俺はちゃんと聴いてたんだぞ。

渋谷——それなら、そうと言えばいいじゃないか。

松村――数十年のDJ稼業のせいか、お前は一方的にひとりで喋るのに慣れてるから、邪魔しちゃいけないって思って、気をつかってやってたんだよ。
渋谷――お前は気をつかってるつもりなのに、相手は何も感じてないっていうのも、数十年前からだよな。
松村――うるさいよ。で、どうだった、アル・クーパーは。
渋谷――いきなりブルース・プロジェクトで始まったから、こりゃあ本気だなって思ったね。
松村――だけど、あのギター、けっこうぎこちなかったじゃないか。大丈夫なのかなって、ちょっと心配になったぞ。
渋谷――まあ、あれは御愛嬌だな。俺は全キャリアを振り返るんじゃないかって期待したんだけど、ほとんどニュー・アルバムの『ブラック・コーヒー』からだったな。
松村――『ブラック・コーヒー』はいいアルバムだから、それなりに充実してたじゃないか。
渋谷――ステージから降りて来るとき、転ぶんじゃないかって、不安だったよ。
松村――そうそう、あれはなんだったんだろうな。ベンチャーズでは〝朝日のあたる家〟のときジェリー・マギーが演奏しながら必ず場内を一周するんだけど、あのアル・クーパーの場内一周はよく分かんなかったな。お客さんが一杯入ったから、ウイニング・ランじゃなくてウイニング・ウォークだったのかな。
渋谷――いいじゃないか、アル・クーパーがやりたいんだから。それよりも、何かの曲のとき、突然弾かなくなっただろ。寝ちゃったんじゃないかって、心配になったぞ。
松村――古今亭志ん生か、アル・クーパーは。
渋谷――まあ似たようなもんだろ、名人みたいなもんだし。
松村――しかし、アンコールが〝ジョリー〟なのは分

かるけど、客席に〝ジョリー〟コールを要求するなよな。

渋谷――いいじゃないか、アル・クーパーがやりたいんだから。ポール・マッカートニーだって〝ヘイ・ジュード〟で客席にコーラスを要求するじゃないか。

松村――それとこれとは、意味が違うだろ。そういえば、ポールのアメリカ・ツアーは九月から始まってるのに、あんまり報道されないのはどうしてなんだよ。一曲目は〝マジカル・ミステリー・ツアー〟だぞ。今迄やってなかった〝アイル・ゲット・ユー〟、〝テイル・ゼア・ウィズ・ユー〟、〝アイ・ウィル〟、〝アイル・フォロー・ザ・サン〟、〝ドゥ・メニー・ピープル〟、〝シー・ケイム・イン・スルー・ザ・バスルーム・ウィンドー〟もやってるんだぞ。アンコールでは、なんと〝プリーズ・プリーズ・ミー〟もやってるんだぞ。

渋谷――「そういえば」なんて言って、わざわざ書いてきたメモを見ながら喋るのやめてくれないか。

松村――いや、アメリカへ行って観て来た友達がせっかく教えてくれたからさ。

渋谷――お前、最近、ポールに批判的だったじゃないか。

松村――そんなことないよ。ただ、ポールも老いるっていうことが、分かんなかったのかも知れないな。再婚して子供も作ったし、今現実には、来年は〝ホエン・アイム・シックスティ・フォー〟なんだよな。昔のように声が出なくても、ちっともおかしくはないんだな。それでも、ムキになって、わざわざ〝ヘルター・スケルター〟を歌ってんだから、ポールらしいっていえばポールらしいよ、うん。

渋谷――そこまでいっちゃうと、もう分かんないよ。しかし、そうやってひとりで喋って納得するのは、やめてくれよ。ひとのことは、言えないぞ。まるで、DJだぞ。

松村――おう、DJやるんだよ、俺。

渋谷――へえ。

CamScannerでスキャン

松村――WOWOWのインターネットのAZステーション[注]っていうので。「BBC ROCK レジェンズ」っていって、例のBBCの放送用のライヴ音源がみんな使えるんだよ。ビートルズなんか、チェックしてみたら、あの『ライヴ・アット・BBC』に入ってない曲が十五もあったぞ。入ってる曲でも、別テイクがかなりありそうなんだ。

渋谷――それで、ビートルズ大会をやるのか。

松村――ビートルズはもちろんだけど、これから毎週やるんだよ。六〇年代七〇年代の使用可能曲リストを見たんだけど、なんか三十年ぐらいやれそうなぐらいの数があったぞ。

渋谷――いつからやるんだよ。

松村――一回目は十一月三日からで、この日と次の週はT．レックス。三週目と四週目はキンクス。そして、十二月の五回は、ジャーン、ビートルズ大会だぞ。

渋谷――だけど、お前、インターネットのDJって、どういうことなのか分かってるのか。

松村――さあ。

渋谷――やる本人が分かんなくて、どうするんだよ。

松村――俺は普通にラジオでDJするつもりでやればいいんだろ。あとは、WOWOWがなんとかしてくるだろ。

渋谷――こういう奴にやらせて、いいのだろうか。

松村――なんか、WOWOWオンラインの会員登録をすればいいんだって。で、無料だってさ。

渋谷――分かって言ってんのか、お前。

松村――さあ。

渋谷――……。

松村――ともかく毎週だから、一月以降はアニマルズ、バッドフィンガー、フー、ゾンビーズ、フリー、ブレンズレー・シュウォーツ、ストーンズ、ジミ・ヘンドリックスってやっていこうと思ってるんだ。

渋谷――お前の好きなバンドばっかりじゃないか。

松村――そう。オロされる前に、好きなバンドをや

っとかなきゃな。

渋谷――……。

松村――正しいだろ。

渋谷――ずっと続いて、クリムゾンとかイエスとかやらなきゃなくなったらどうするんだよ。

松村――プログレだったら、長い曲選んで、四〜五曲かけて、「イエスでした」って言えばいいんだろ。お前のソウル・イートのDJだ。ハハハハハ。

渋谷――……。

松村――ああ、そういうときはゲストで出てお前が喋ればいいんじゃないか。

渋谷――松村、この後、時間あるだろ。俺がDJ道をしっかり教えてやるから。

松村――さよなら。M

注：当然、もう終わっている。

クイーン列島蹂躙！
見ろ、やっぱり俺たちは正しかったじゃないか！

松村――親方、元気かよ。

渋谷――何だよ、親方って。

松村――お前、会社で「親方」って呼ばれているらしいじゃないか。

渋谷――呼ばれてるわけねえだろう。

松村――フェスのホームページにスタッフが書いてたぞ。

渋谷――ああ、あれか。お前もそんなもん読んでんじゃないよ。

松村――俺なりにお前の会社を心配してチェック入れてるんだよ。

渋谷――フェスのバイトが、うちにくる前に国技館に勤めていて、偉そうなオヤジを見ると、思わず「親方」って言ってしまうらしいんだよ。

松村――そんな奴、雇っていて大丈夫かよ。

渋谷――ちょっと心配だな。

松村――よく、何百倍とか何千倍とか採用の時に言ってるけど、それで選んだのがコイツかよ、ってのは多いよなロッキング・オンって。

渋谷――そうじゃない、と言いたいけど、確かに俺もそう思う時があるな。

松村――だったら採用の方法を考えろよ。

渋谷――考えているし、いろいろ新しい事をやってるんだけど、結局、選ぶのが俺だから変んない

CamScannerでスキャン

んだよ。

松村――絶望的な結論だな。

渋谷――だいたい社員の第一号がお前だったんだから、その時にロッキング・オンの運命は決まってたな。

松村――それを言うなら、社長がお前という事で運命が決まってたんだよ。

渋谷――何か倒産した会社の原因について話し合っているみたいだから止めよう。そういえばクイーンが再結成したじゃないか。

松村――いきなり話が飛ぶな。

渋谷――いや、フレディが居ないクイーンって、社長が居ない会社みたいなもんじゃないか。

松村――ジョン・ディーコンは、フレディが居ないクイーンはクイーンじゃない、って言って参加しなかったらしいな。

渋谷――まあ、それもひとつの見識なんだろうけど、果たしてどんなもんになってんだろうと思って観に行って来たんだ。そしたら、そんな嫌なもんじゃなくて、楽しめたんだな。

松村――まあ、ロンドンのハイド・パークでのコンサートには七万人とか八万人とか来たらしいからな。あれって無料だったのか？

渋谷――金とったに決まってるだろう。イギリス人も、デビュー当時はゲテモノ扱いしていたクセに、調子いいよな。

松村――調子いいかどうかは分んないけど、デビュー当時を知ってると、今のクイーンの神格化状態って、かなり変な感じするよな。

渋谷――デビュー当時、クイーンを世界一高く評価していたファンでも、この状態を予想した奴は居ないと思うね。

松村――そういえば大貫憲章って、やたらクイーンを持ち上げていなかったか？

渋谷——持ち上げてたな。クイーンの大貫とか言われてたよな。

松村——先見の明があったんだ。三十年後を予測していて、世界で最も見識のある音楽評論家だったんだ。

渋谷——そんなわけないだろう。あいつが三十年後を予測するわけがないじゃないか。

松村——だって事実が証明してるだろう。お前、この業界で大貫ぐらいしか友達いないんだから、もっと評価してやれよ。本当に人のことを誉めないよな、お前は。

渋谷——別に、良けりゃ誉めるけど、三十年後の予測なんか大貫はしようとも思ってないぜ。でも、大貫に限らず、日本のロック・ファンはクイーンに熱狂したよな。

松村——『ロッキング・オン』もやたら表紙にしてたし、ロジャー・テイラー単体の表紙もなかったか？

渋谷——あったよ。凄く売れたんだよ。でも今の読者は誰も信じないだろうな。

松村——確かに。

渋谷——日本におけるクイーン人気って独特で、ある意味で一番ツボにはまったバンドだったよな。

松村——何だよツボって。

渋谷——まずメロディー。この分り易さは破格じゃないか。しかも日本人が好きな情緒的なメロディーが多いから、聴いていて気持ちがいいわけよ。今回の来日でも、客がほとんどの歌を一緒に歌うわけ。あれは凄い。俺の隣りの親子は、子供なんか小学校低学年だと思うけど、一緒に歌ってたぞ。

松村——〝ボヘミアン・ラプソディ〟とか、歌うのかな。

渋谷——歌うか。〝ウィ・ウィル・ロック・ユー〟とか〝ウィ・アー・ザ・チャンピオン〟だけど、他のバンドじゃあり得ないぜ。

松村――オアシスなんかもカラオケ仕様だよな。

渋谷――そうそう。ただメロディーの構造はマニックスあたりがクイーンに近いよな。

松村――他のツボは？

渋谷――音の厚み。日本人は音のスカスカした音楽が駄目で、とにかく空間をべったりと音で埋めてないと満足しないわけ、その点クイーンの音作りは、特にブライアン・メイのギターを中心に、思いっきりべったりしていているから快いわけよ。重い布団だと何だかあったかい感じするじゃない。

松村――そういう昭和な比喩は通じないと思うぜ、今の若者には。

渋谷――俺は今だに重い布団だと安心するけど。

松村――お前の昭和度はどうでもいいけど、クイーンってルックスでキャーキャー言われてたんじゃないのか。

渋谷――それが次のツボ。欧米では、ブライアン・メイとかロジャー・テイラーは、そんな抜群のハンサムじゃないので、どうしても異形のフレディに目が行ってしまうわけよ。それでクイーンはルックス的にもゲテモノという扱いになってたんだ。日本人の若い女の子はフレディが見えなかったんで、いきなりアイドルになったんだな。

松村――あれだけ目立ってたのに、何でフレディが見えないんだよ。

渋谷――ブライアン・メイとロジャー・テイラーが王子様だったからだよ。今のロジャー・テイラーを見ると誰も信じないだろうけど。

松村――太ったよな。

渋谷――お互い、人の事は言えないけど、同一人物とは思えなかったな。とにかくクイーンは日本人のツボにはまりまくったんだよ、フーの逆だな。

松村――確かに。フーって日本でも人気が異常に低いよな。

渋谷——世界的にはビートルズ、ストーンズと並んで三大ロック・バンドと言われているのに、日本では全然じゃないか。クイーンのツボと真逆なんだよ。まずメロディーが情緒的でなくて、ボキボキしてるのが駄目なんだよ。

松村——何だボキボキって。

渋谷——そんな感じじゃん。凄くポップで素晴らしいんだけど日本人的じゃないんだよ。それに音もスカスカしてるじゃん。

松村——してないだろう。もの凄くぶっといじゃないか。

渋谷——そうなんだけど、音と音の間に空間があるんで、それが重い布団にならないんだよ。

松村——お前の布団説なんかどうでもいいけど、昔からフーって日本人受けしなかったよな。

渋谷——そしてルックス。

松村——ロジャー・ダルトリーはアメリカ、イギリスではアイドルで、セックス・シンボルだけどな。

渋谷——どうも、ああいうのは日本の女に受けないみたいだぜ。

松村——ロジャー・テイラーじゃないと駄目なんだ。

渋谷——みたいだな。というわけでクイーンはバカ受け、フーは受けない、とても奇妙なロック風土が日本にはあるわけよ。

松村——だから何なんだよ。

渋谷——いや、それだけなんだけど。何なんだと言われても困るんだけど。

松村——でも、そのクイーンも、今やフー以上の存在になってるんだから、凄いよな。

渋谷——二〇世紀の最も偉大なバンドの二位に選んでるんだぜ、イギリス人。ストーンズでさえ三位。まあ一位のビートルズは当然としても。

CamScannerでスキャン

松村——かなりの手のひら返しだよな。

渋谷——本当、キワモノというよりゲテモノ扱いだったからな、デビュー当時はイギリスで。メンバーは日本に感謝して当然だろう。日本だけだよ熱狂してたのは。

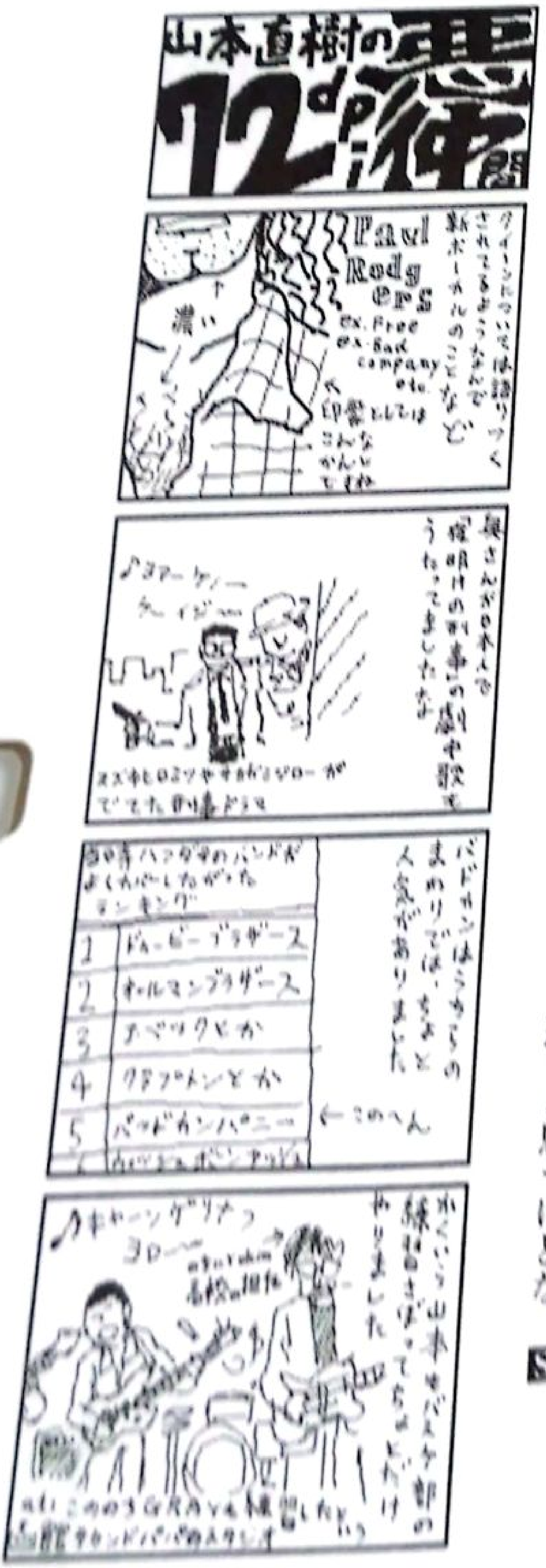
松村——コンサートはやっぱり当時熱狂していたような中年がたくさん来てるのか。

渋谷——オバサンは無論の事、おじさんがやたら居たのには驚いたな。しかも、一緒に歌って泣くんだよ。別に泣く事はないと思うんだけど、こみ上げて来るもんがあるんだろうな。

松村——でも、結局は日本人の正しさが、今のクイーン評価を見てると全世界的に証明されたわけだよな。

渋谷——全世界が日本人化してるんだ。

松村——ちょっと違うと思うけどな。 S



渋谷陽一五十四歳、ピーター・バカランと新コンビ結成しました！

渋谷——コンニチハ、ピーター・バカランです。

松村——……。

渋谷——何か言えよ。

松村——そんなボケ、突っ込みようがないじゃないか。ピーターと『ＳＩＧＨＴ』で渋松対談やってたな。

渋谷——渋松にするつもりはなかったんだけど、結果そうなっちゃったな。読者の皆さん、現在絶讃発売中の『ＳＩＧＨＴ』最新号を是非読んで下さい。「究極のロック百曲」というテーマで僕とピーターが楽しい対談をやってます。

松村——英語が分からないくせに、ロックとか言

CamScannerでスキャン

うんじゃない、って馬鹿にされてたな。みんな思っていて、なかなか言えない事を、さすがピーター、よく言ってくれた。

渋谷——そんな事、ピーターは言っていないよ。

松村——お前が、プリンスは繊細で下品だって言ったら、爆笑してたじゃないか。英語が分からないから、そんな間抜けな事が言えるって感じだったぜ。あの笑いは。

渋谷——そんな事ない。プリンスは音だけ聴けば洗練されてるし、繊細だ。確かに歌詞はえげつないけど。そこまでやらなくても、と思えるくらい下品だけど、英語だから気にならないじゃないか。

松村——だから、ピーターはイギリス人なんだから分かるんだよ。歌詞だって重要な曲の要素だろう。

渋谷——まあな。でも、分からないんだからしょうがないだろう。

松村——いや、その部分を当たり前のようにピーターが指摘していたのが面白かった。

渋谷——でも、もっと価値観の落差があるのかと思ったけど、そんなになかった。

松村——ピーターと俺たちって同じ年だよな。

渋谷——そう、スティングもヒューイ・ルイスもそうだぞ。

松村——何か微妙なラインだな。

渋谷——まあ、ある程度は共通の価値観を共有できると思ったからピーターとやったんだけどな。伊藤とか大貫とかやってもラチがあかないもん。とりあえず一位の〝ライク・ア・ローリング・ストーン〟でいきなりつまづくぜ。

松村——そんな事ないだろう。あいつらだって音楽評論家なんだぜ。

渋谷——ラジオのゲストに呼んでエミネムの話したら、大貫なんか「それ、新しい野菜か?」とか言

うんだぜ。しかも伊藤も「バカ、馬の名前だよ」とか答えるし。

松村――面白いじゃないか。わざと言ってるんだよな。

渋谷――当たり前だろう。本当にそう思ってたら大変だろう。

松村――いや、あり得るかな、と思ってさ。でも、そういうギャグでボケようという姿勢は立派だぜ。さすがプロ。

渋谷――プロって、俺達はお笑い芸人じゃないんだから。音楽に対する知識と批判能力で食ってるプロだから。

松村――俺は音楽評論家じゃないから、その辺はどうでもいいけど。でも、偉そうに言ってるお前も英語分かんないでアメリカやイギリスのロックを評論しているわけだろう。笑いの芸を磨いた方がいいんじゃないか？

渋谷――やなこった。

松村――でも、考えてみると、お前って英語の分かんないアメリカ文学研究家みたいなもんだよ。それって、普通あり得ないよな。

渋谷――……。

松村――黙るなよ。

渋谷――そういう後がないような追い込みかたをするなよ。ピーターの方が優しかったぞ。来月からピーターとやろうかな。

松村――俺はいいけど、きっとピーターはつき合ってくれないと思うぜ。

渋谷――確かに。

松村――あのベスト百曲って『ローリング・ストーン』が選んだんだ。

渋谷――『ローリング・ストーン』がロック五十周年でシリーズで出してた歴史振り返り企画のひとつなんだよ。

CamScannerでスキャン

松村――アルバムもやってたけど、あっちはビートルズの圧勝だったよな。

渋谷――こっちも当然の事、ビートルズは強いけど、最高位が八位の〝ヘイ・ジュード〟なんだよな。

松村――ピーターもお前もブツブツ文句を言ってたな。

渋谷――お前なんか、もっと文句言いそうじゃないか。

松村――まあな。

渋谷――他は十三位に〝イエスタデイ〟、十六位に〝抱きしめたい〟、二十位に〝レット・イット・ビー〟なんだけど、これじゃビートルズはバラード・バンドだろう。

松村――でも世界中でもビートルズの人気曲ってそんな感じなんだろうな。

渋谷――音楽ファン一万人が選ぶ名曲とか言うならまだ分かるけど、これって有名ミュージシャンとか音楽評論家とかプロデューサーとかしか投票してない、玄人中の玄人が選んだチャートなんだぜ。〝レット・イット・ビー〟とか〝ヘイ・ジュード〟とか書いてるんじゃないよ、お前ら。

松村――そんな、自分だけの趣味だけが、正しいと思ってもしょうがないだろう、いつもお前はそうなんだから。英語分かんないクセに。

渋谷――ウルサイ。一人だけ常識人な振りをするな、本当は俺よりひどいクセに。

松村――四位が〝ホワッツ・ゴーイン・オン〟で、五位が〝リスペクト〟っていうのはいかにもアメリカって感じだよな。

渋谷――そうだな。特にアレサ・フランクリンの〝リスペクト〟は、日本人にとってはそれって何？って感じだろうな。

松村――黒人音楽って、特に六〇年代は情報がちゃんと入って来なかったしな。

CamScannerでスキャン

渋谷――十二位のサム・クックの〝ア・チェンジ・イズ・ゴナ・カム〟なんて、本当に日本人の知らない曲だから、これが、〝イエスタデイ〟より上にランクされているリアリティーなんて分かんないよ。まあ、分かんなくてもいいんだけど。このチャートもいいかげんなところも多くて、別に絶対じゃないから。

松村――でも〝ア・チェンジ・イズ・ゴナ・カム〟は名曲だろう。

渋谷――まあ、そうなんだけど。

松村――お前、この曲でもピーターに詞の解説されて「そうなんだ」とか間抜けな答えしてるけど、いいのかよ。

渋谷――しょうがないだろう。

松村――自分の雑誌なんだから、少しはとりつくろった方がいいぜ。

渋谷――でも、全体に曲が古過ぎ。もっと新しい名曲がいくらでもあるのに。

松村――そうは言っても、今現役バリバリの連中が選んでいるのが古い曲なんだからしょうがないじゃないか。メタリカの奴が〝イエスタデイ〟選んでるのは笑ったな。そいつが選んでるのが、他にもプレスリー、ビーチ・ボーイズ、ツェッペリンだぜ。

渋谷――ジャック・ジョンソンもボブ・マーリー、スライ、キャット・スティーヴンスだしな。

松村――トム・モレロもディラン、ストーンズ、クラッシュだぜ。パブリック・エネミーが入ってるのがらしいけど。

渋谷――次の五十周年記念の時に二〇〇〇年以降の曲が入って来るって事なのかな。

松村――そこまでじゃないにしろ、結局歴史的名曲ってのは、歴史が作られないと出て来ないんだよ。

渋谷――言えてる。松村とは思えない名言だな。

松村――でも、ロッキング・オンの社員ってこの辺の曲とか知らないよな。

渋谷――そうなんだよ。

松村――そうなんだよ、って社長のお前が言ってていいのかよ。

渋谷――よくない。だから、今度、新年会(注)でロック・クラシック・イントロ・クイズってのをやって、その解答率で給料決めようと思ってんだけど。

松村――みんな辞めるよ、会社。 S

注：ロッキング・オン社の年間行事のひとつ。全社員が知性とユーモアを強制的に試されるスピーチのせいで、提供される食事を楽しむことがあまりできない、年に一回のどきどき行事。

闘け、世のIT長者ども！　お前らにロックはあるのかい？

渋谷——コンニチハ、ホリエモンです。

松村——ビミョーなネタで来たな。

渋谷——旬なネタじゃないか。

松村——この対談をしてる時点ではな。でもこの本が出てる頃は、もうライブドアは倒産してるかも知れないぜ。

渋谷——そこまでは行ってないだろうけど、いずれにしろ話題になってるからいいよ。

松村——お前としては、どうなんだよこの騒ぎは。

渋谷——ビミョーだよな。前にも言ったけどホリエモンとは友達になれそうにないし、経営も実体がなさ過ぎると思うけど、あいつが闘ってる旧体制は、俺にとっても敵だし、ムカつく対象でもあるわけよ。だから、こんな事で負けてほしくないわけ。でも、こんな事やってると負けるよな、とも思うんだよな。

松村——でも、まるで大犯罪者みたいな言い方をされてるけど、そんな大犯罪なのか？

渋谷——それもビミョーだよな。ひとつは風説の流布ってヤツで、証券法違反という事で逮捕されたんだけど、どうなんだろう。

松村——つまり嘘をついて儲けたって事なんだろう？

渋谷——まあな。でも、その嘘って、すでに買収していた出版社を、これから買収するフリをして株をつり上げたって事なんだよ。あんまり上等の手法じゃないし、事実だとしたら犯罪性は高いんだろうけ

CamScannerでスキャン

ど、まだ事実関係はクリアになってないし、ライブドア・サイドの理屈もあるみたいなんだよな。

松村——それだけなのか？

渋谷——最初はな。

松村——その割には騒ぎがでかくないか。

渋谷——まあ、話題性だよな。何かインチキ臭いと思ってたライブドアが、やっぱりインチキだった、という事でメディアが面白がったんだよ。

松村——安倍晋三のスキャンダル隠しって話もあるよな。

渋谷——まあ、2ちゃん・レベルの話なんだろうけどな。ただスキャンダル隠しかどうかは別として、事実の深刻度という事から考えると、当時のマスコミの扱いはいくぶんバランスを欠いたよな。

松村——だって、人が死ぬかも知れないマンションを建てた業者が、政治家と密接な関係があって、そこで金のやりとりがあったかも知れないって、それこそ大スキャンダルじゃないのか。その風説の何とかより、よっぽど深刻だろう。

渋谷——そうだよ。ましてその政治家が、次の首相候補の安倍だったというのは、もの凄い事なんじゃないか。

松村——どうしてメディアはホリエモンばっかなんだよ。

渋谷——面白いからだろう。それにメディアはＩＴの連中が嫌いだからな。フジテレビなんか嬉々として役員を引き上げたりしていて、業務提携を解消するとか言ってたじゃないか。ああいうのを見るとムカつくよな。ホリエモン頑張らんかい、とか思えて来るんだよな。

松村——吉川ひなのとパラオ行ってる時じゃないだろう、と言いたいわけだ。

渋谷——別に誰とパラオ行ってもいいけどワキが甘過ぎるんだよな。

松村——太ってるしな。

渋谷——フジテレビの日枝なんか、日に日にやせて

いく感じなのに、ストレスないのかね。

松村――ストレスで太るタイプじゃないのか。それに粉飾決算とか言われてないか。決算もストレス太りしてんのかな。

渋谷――かなり乱暴な事をやってるみたいだな。カネボウの二千億の粉飾とはレベルが違うけど。

松村――でもライブドアって、何で儲けてんのか分かんない会社だよな。

渋谷――そうそう、それでほぼ同時期にピクサーがディズニーに買われたって話が新聞に出たんだよ。

松村――ピクサーってCGのアニメ作ってる会社だったよな。

渋谷――『トイ・ストーリー』とか『ニモ』とか、最近では『Mr.インクレディブル』とか作っている、究極のヒット・メーカーだよ。

松村――なんで買われちゃうんだよ。

渋谷――ちょっと業界的な話になるんだけど、ピクサーはディズニーと手を切ろうとしてたんだよ。でも、ディズニーの社長が代わって、いい関係が作れそうになったんで、売ったんだな。

松村――良く分かんないよ。

渋谷――つまり、ディズニーは八千五百億くらいでピクサーを買ったわけ。

松村――くれ、その金。

渋谷――うるさい。でもそれは実際に金を払ったわけじゃなくて、ディズニーの株と交換したわけ。それでピクサーの大株主であったスティーブ・ジョブズは、結果ディズニーの株の五パーセントを持つ個人の筆頭株主になったんだよ。

松村――余計、話が分からなくなった。

渋谷――要するに、ピクサーは自分の持っているコンテンツの力によって、アメリカで最も強力なメディア企業の経営をコントロールする力を持ったって事なんだよ。しかも、それはディズニー自身も望んだ事なわけ。

松村――スティーブ・ジョブズって、あのiPod

のスティーブ・ジョブズか。

渋谷――iPodというかアップルの社長のスティーブ・ジョブズだよ。

松村――俺にiPodくれ。

渋谷――うるさい。ディズニーって、三大ネットワークのABCも持ってる巨大企業だから、本当にアメリカでは、ITとメディアって一緒になって来たよな。

松村――それってホリエモンのやりたい事だったんじゃないのか？

渋谷――そうだよ。でもスティーブ・ジョブズとホリエモンとの決定的な違いは、本業にどういう実体があるかって事だよな。ピクサーにしろアップルにしろ、そこに事業として実体があるわけで、しかも新しい価値観と思想性も持っているんだよ。

松村――でもスティーブ・ジョブズって最近暴露本出されてなかったか？

渋谷――つまんない事知ってるな。

松村――IT松村と呼べ。

渋谷――暴露本というか、相当エキセントリックな奴らしいから、いろいろ書かれたらしいけどな。でも、ライブドアって結局、証券業務で儲けていたわけで、しかもネット取引でさえなかったわけよ。

松村――全然新しくないじゃん。

渋谷――そうなんだよ。日本のIT企業ってビジネス・モデルとして、そんなに画期的に新しい事をやってるわけじゃなくて、マネー・ゲームのスキルの高い連中って感じなんだよな。

松村――何か、オッサン臭いよな、若いくせに。

渋谷――オッサンの俺達に言われたくないだろうけど、そうだよな。ロックのニオイさえしないからな。

松村――WINDOWSはストーンズで、iPodはU2だったよな。

渋谷――CMはな。あれって上手に使ってたよな。ライブドアも楽天もロックなCM作らなそうだよな。

松村――ライブドアはアイドルで、楽天は懐メロっ

て感じだな。

渋谷——よく分かんないけど、そんな感じする。

松村——ストーンズもU2も来日するな。

渋谷——ストーンズはステージの上にビル建てるらしいぜ。

松村——何だそれ。姉歯ビルか。

渋谷——あの老人のエネルギーは凄いよな。最近の〝レイン・フォール・ダウン〟のヴィデオ・クリップ観たんだけど、怖かったぜジイサンで。

松村——実際、六十代だからな。

渋谷——でも、カッコイイんだよ。全然ロックなんだよ。あれは本当に凄い。妖気が出てたぜ。

松村——まだ死んでないんだから、幽霊じゃあるまいし、妖気はないだろう。

渋谷——半分妖怪化してるぜ。ヴィデオ観てみろよ。だって六十二だか六十三で、今だに腹出して腰振ってんだよ。しかも、全く違和感なくてカッコイイなんて、それは妖怪だろう。

松村——ホリエモンって絶対に妖怪化しなさそうだよな。

渋谷——何か、コロコロしててぬいぐるみみたいだもんな。つまりロックは血肉化した思想だから、ストーンズみたいに肉体そのものがロック化すると、いくら老人になってもロック度は外見的にも上がっていくわけ。ニール・ヤングなんかもそうだよな。

松村——ディランもそんな感じだよな。

渋谷——それに対して、日本のIT連中って全然ロックがないよな。

松村——別にいいじゃないか、ミュージシャンでもないんだし。

渋谷——でもアメリカの連中って、やっぱりロックなニオイがするじゃないか。

松村——ビル・ゲイツはよく分かんないけど、スティーブ・ジョブズは確かにそうだな。

渋谷——ビル・ゲイツってボン・ジョヴィぐらいな感じだけど、少なくてもホリエモン、三木谷よりは

CamScannerでスキャン

ロックな感じがあるよ。
松村——それがどうしたんだよ。
渋谷——だから、ITによって新しいビジネス・モデルを作るなら、新しい思想とグルーヴを持ってないと駄目なんだよ。それがロックだろう。
松村——全く意味が分かんない。そんないいかげんな事言ってると逮捕されるぞ。風説の流布だな。
渋谷——だから、今度IT長者対象にロック講座をやろうかと思うんだ。授業料は百万円くらいで、僕にもロックを聴けばスティーヴ・ジョブズになれるとか言って。お前も講師にしてやるよ。
松村——そんな事より、お前もホリエモンにパソコンの使いかたでも習ったがいいよ。若い社員が、社長のパソコンの面倒みるのはもう嫌だと言ってたぞ。 S

渋谷陽一五十四歳、今日も元気にリニューアル王やってます

渋谷——コンニチハ、ジョン・ポール・ジョーンズです。

松村——オッ、珍しいもので来たな。

渋谷——ジョン・ポール・ジョーンズはレッド・ツェッペリンのベーシストです。

松村——知ってるよ。

渋谷——お前は知ってても、最近の若いロック・ファンは知らないんだよ。

松村——そんなもんかね。

渋谷——今度出る『SIGHT』が一九六九年の特集で、表紙がツェッペリンなんだよ。

松村——いよいよ廃刊か。

渋谷——何で廃刊なんだよ。

松村——何か、これで思い残す事がなくなったのかな、と思ってさ。

渋谷——思い残す事だらけだよ。

松村——諦めの悪い奴だな。俺なんか、ほとんどの事を諦めたぞ。いろんな煩悩を持ってるから、そういう淀んだ汚い顔をしてるんだよ。地獄に落ちるぞ。

渋谷——お前は細木数子か、でも鋭いな。実は『SIGHT』は次の号からリニューアルするんだよ。

CamScannerでスキャン

松村——ほら見ろ、廃刊するんじゃないか。

渋谷——だからリニューアルだって言ってるだろう。お前は、日本語が理解できないのかよ。

松村——お前、何年雑誌の編集やってんだよ。世の中、リニューアルとか言ってイメチェンして成功した雑誌何かあるか？　リニューアル後、成功した雑誌と廃刊になった雑誌の統計をとってみたら、圧倒的に廃刊誌のほうが多いと思うな。

渋谷——……。

松村——泣きそうな顔するな。余計に汚い顔になるだろう。

渋谷——ウルサイ。俺は『JAPAN』をリニューアルして成功させたし、『H』[注]もそうやって月刊にまで持って来たんだよ。俺は出版界のリニューアル王なんだよ。

松村——何だリニューアル王って。言葉として物凄くカッコ悪いんだけど。

渋谷——確かに。

松村——じゃあ、リニューアル王としては今回のリニューアルも自信があるんだ。

渋谷——もちろん。でも、そのリニューアル王って止めようぜ。

松村——お前が言い出したんじゃないか、リニューアル王。

渋谷——お前、最近どんどん性格悪くなってないか。とにかく、これまでの『SIGHT』としてはラストになるんで、一九六九年特集をやってツェッペリンを表紙にしたかったんだよ。

松村——まあ、お前が編集長なんだからいいんじゃないか。でも『SIGHT』って、何回も一九六九年特集やってないか。

渋谷——いや、一番ドラマチックな年なんでとっておいたんだよ。

松村——いよいよ廃刊を機に出したわけだ。

渋谷――だから廃刊じゃないって言ってるだろう。

松村――そうそうリニューアルだ、リニューアル。頑張れリニューアル王。

渋谷――殺すぞ。

松村――で、満を持して作った一九六九年号はどうなんだよ。

渋谷――とにかく、本当にドラマチックな年なんだよ。ウッドストックがあって、オルタモントの悲劇もあって、『トミー』もこの年に作られてるんだな。映画は『イージー・ライダー』だし、日本でも安田講堂が陥落したんだよ。

松村――まさに時代が変わったって感じだよな。俺達は高校三年か。

渋谷――十八だからな。高校卒業と大学入学という、これも一番大きな変化の年だよな。

松村――俺もお前も大学入ってないけどな。でも、何でそんなドラマチックな年なのに表紙がツェッペリンなんだよ。

渋谷――ツェッペリンがデビューした年だからだよ。

松村――かなり強引だな。

渋谷――そんな事ないだろう。それにこの年に偉大なツェッペリンはファーストとセカンドを出してるんだぜ。

松村――ファーストって一九六八年じゃなかったっけ？

渋谷――つまんない事知ってんな。アメリカではそうだけど、本国イギリスでは一九六九年だからいいんだよ。どう考えても一九六九年はツェッペリンの年だろう。

松村――まあいいけど、でもツェッペリンってデビュー当初はそんなに評価されてなかったよな。

渋谷――偉い！　たまにはお前もいい事を言うな。特集を読むと分かるけど、『ローリング・ストーン』

CamScannerでスキャン

誌のレヴューなんてボロクソに書いてあるからな。ああいうロック・エリート連中からは嫌われてたよな。

松村――何でだ。

渋谷――頭悪そうに見えたんじゃないか。確かにロバート・プラントとジョン・ボーナムは余り頭良くなかったし。

松村――お前が言ってどうするんだよ。

渋谷――というか、ツェッペリンが何であるか誰も分かんなかったんだよ。それは本人達も分かってなかったんじゃないかな。だから、一貫して高性能なハード・ロック・バンド、ヘヴィー・メタル・バンドとしての認識と評価しかなかったよな。俺が「ツェッペリンをヘヴィー・メタルと呼ぶ奴は殺す」という原稿を書いた時も、余り理解されなかったよ。結局、ツェッペリンが何であるか分かっていたのは俺だけだった、って事だよ。

松村――そんな調子だからジミー・ペイジに嫌われるんだよ。

渋谷――でも、今でこそツェッペリンはロックの奇跡として誰もが認める存在になったけど、ではどこが凄いんだ、と改めて訊かれると答えにくいバンドなわけ。例えばディランやビートルズ、ストーンズは、ある意味明快なんだけど、ツェッペリンは言語化しにくいよ。そこが偉大だし、ロックが進化するにつれてツェッペリンの全体像が見えて来る不思議な存在だよな、常に理解されない何かが残り続けるバンドなんだよ。その奇跡がスタートしたのが一九六九年で、そのドキュメントとして興味深いよ。全てのメディアを敵に回して、一種のハイプと思われながらも、空前の人気に押されて、凄まじい勢いで走り抜けたのが一九六九年なんだよ。ハードなワールド・ツアーをやりながら、同時にレコーディングをして、その年にリ

CamScannerでスキャン

リースしたのが、あのセカンド・アルバムなんだぜ。人間技じゃないよな。

松村——それで、お前としては一九六九年はツェッペリンの年だと主張したいわけだ。

渋谷——まあな。でも別にウッドストックの年でも、オルタモントの年でも、何でもいいんだけどな。ツェッペリンが一番売れるんじゃないかと思ってさ。

松村——いきなり本音言うなよ。でもツェッペリンって、ホテルの部屋壊したり、グルーピーと大騒ぎしたり、ろくでもない伝説も多いバンドじゃないか。最初のアメリカ・ツアーあたりが一番やばかったんじゃないのか？

渋谷——その辺もいろいろ書いてあって、当時のスタッフが、ジミー・ペイジは明らかにセックス依存症だった、みたいな事を断言してるんだよな。あれってどうなんだ。

松村——当時から言われてたよな。

渋谷——最初の来日の時、俺の知りあいのモデルがジミー・ペイジとやったたって言ってたけど、本当だったんだな。

松村——身近に証人がいるじゃないか。

渋谷——いや、その娘から結構エグイ話を聞いたんで、俺のジミーはそんな奴じゃないと当時は否定したんだよ。でも、このテキスト読むと自信なくなって来たな。

松村——何だ、俺のジミーって。気持ち悪い奴だな。

渋谷——広島に最初の来日の時にツアーで行ったんだけど、その移動の寝台車で、ロバート・プラントとジョン・ボーナムが女を奪い合って殴り合いのケンカしたたって、日本のツアー・スタッフから聞いたな。

松村——いっぱい情報持ってるじゃないか。

渋谷――しょうがない奴らだよな。だいたいロバート・プラントなんか、吉原のソープ・ランドの前で待ってる写真を週刊誌にスクープされてたもんな。

松村――当時はトルコって言ってたけどな。

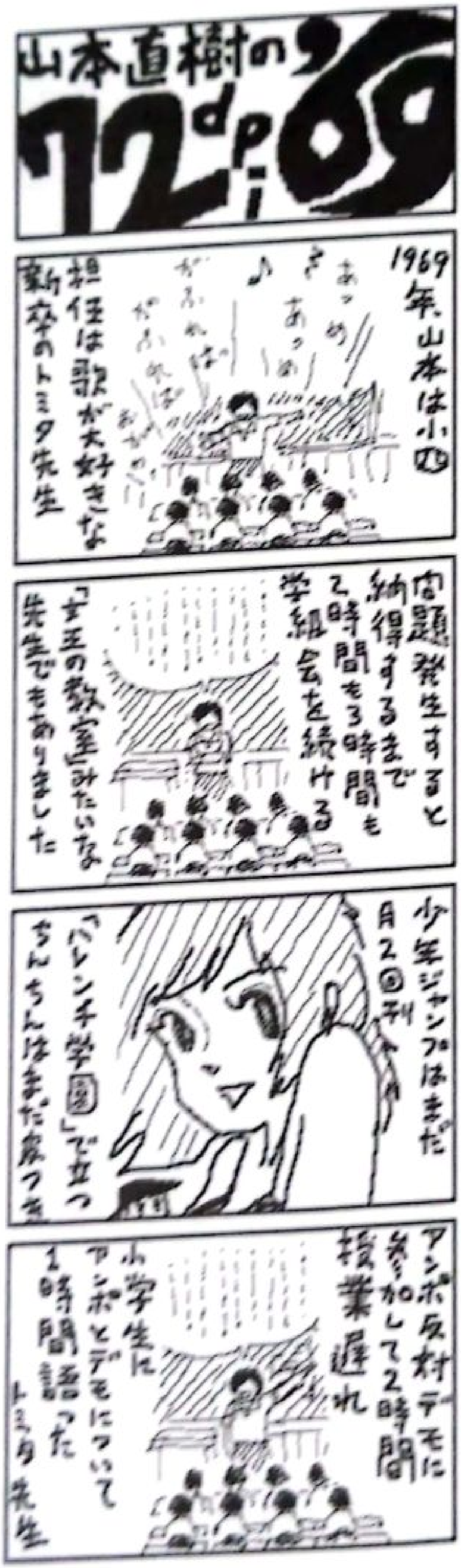
渋谷――ニコニコの笑顔で写ってたのが情けなかったな。

松村――やっぱりロック・レジェンドだよな、ツェッペリンは。

渋谷――セックス・ドラッグ・アンド・ロックンロールだろう。

松村――何か久しぶりに聞いたな、そのフレーズ。S

注1：ロッキング・オン・ジャパンの増刊として一九九四年に創刊されたカルチャー誌。



さよなら大類。そして今までありがとう！

渋谷——なあ大類、どうして俺を見捨ててパリに行っちゃうんだよ？ 三十年以上一緒にやってきたのに。残念で仕方がないよ。

大類——そういうことを、目の前で弁当とか納豆とか食べながら言わないでくれよ。全然説得力ないんだけど。

渋谷——いやあ、「大類の最後の号でどうしても対談やりたい！」と思ってたんだけど、全然時間がなくってさ。結局、昼飯の時間しか空いてなかったんだよ。

松村——お前、普通一人で弁当食うか？ 「どうぞ」っつって俺たちにも出すだろ？

渋谷——ウルサイ。いいから早く始めようぜ。大類がロッキング・オンをやり始めたのって何号目からだっけ？

大類——五号目からじゃないかな。表参道の本屋で「ロッキング・オン」を見て、デザイナー募集の広告を見て電話した憶えがあるよ。面白かったし、

ロック好きだったしね。で、横尾のところで写植待ちながら、その場でデザインしていったっていう。

渋谷――超アナログな方式だよな。それにあの頃、デザイン料は払ってなかったよな？

大類――全然。十年くらい貰ってなかったよ。

渋谷――それで、よくやってくれてたよな。あの頃、大類はデザイン事務所でサラリーマンやってたわけじゃん？

大類――そうそう、三年間ぐらい。

渋谷――俺、毎日新聞に版下取りに行ったの憶えてるよ。

大類――最初は銀座で勤めてて――銀座から出向で毎日新聞に行ってたんだね。多分。

渋谷――で、すぐ辞めちゃったんだ。

大類――そう、三年間でもう辞めて。広告の仕事やってたんだけど――写真撮り一つ取っても、ラフ置いてカメラマンに見せて、スポンサーが来て、立ち会ってどうのこうの、っていう作業が全く嫌いで。カメラマンもクリエイターなんだから自分で何かやってくれよ、っていう感じでね。

渋谷――だけどさ、大類もいろんなことをやって、いろんなことをやめちゃってるけど、『ロッキング・オン』だけは続いたよね。

大類――そうだねえ……多分、仕事っていう意識がなかったからだろうね。毎月、白いキャンパスに絵を描くみたいな感じで、コラージュ作業みたいだったから、全く苦にならなかったし、毎月楽しかった。

渋谷――あの当時って、編集部も何もなくってさ。わけ分かんなかったよね。

大類――まだサークルでミニコミ作ってる、っていう感じだったよね。ミニコミだけど原稿のしっかりしたもの、っていう。

渋谷——大類が参加したのは取次流通に乗ってからだからまだいいよ。三号目あたりまで、俺たち手売りしてたからね。

大類——でもまあ、事務所を転々としながら少しずつ会社が大きくなっていく過程は見てたし、出張校正で渋谷のポルシェか何かで凸版まで走ったりとか——。

渋谷——それはずいぶん金ができてからだよ。『ロッキング・オン』創刊して十何年か後だな。

大類——あ、そっか。

渋谷——今でも憶えてるのは——当時は橘川の親父の印刷屋で作ってたじゃない？　色校とか何とかっていう世間的な印刷のプロセスも分かんないのに、いきなり校正出されて、そこで最終的にGOしなくちゃいけないのに写真も入ってなくて。どういう表紙になるか見当もつかなくてさ。この七号目なんかまさにそうなんだけど、憶えてるか？　本当は、この余白に写真が入ってたんだよ。

大類——あれ、そうだっけ？　今見て「斬新だなあ」と思ったんだけど。

渋谷——「斬新だなあ」じゃないんだよ。写真にアクセントをつけるために缶詰の絵をくっつけたんだけど、アーティストの写真がパッとしなかったんで、結局、缶詰の表紙になっちゃったんだよ。ロック雑誌じゃなくて、スーパーのカタログみたいじゃん。

大類——近いよね。

渋谷——「近いよね」じゃないって。

松村——でも、『ロッキング・オン』らしいよね。

渋谷——というか、何でもありだったよね。でも俺、その時に校正をチェックした印刷屋の匂いとか、そこまで憶えてるよ。

大類——そうなんだ。

渋谷——そこで「そうだったよね」っていう相槌を

CamScannerでスキャン

買おうと思ったんだけど――。

大類――匂いすら憶えてない。

渋谷――……何か白けてきちゃったなあ。でも、俺はよく憶えてるよ。俺と大類しかいないわけだよ、その印刷屋の現場には。

大類――ああ、そうか。

渋谷――松村もその現場にはいないし。

松村――でも、大類とはしょっちゅう遊んでたけどな。大類ん家に遊びに行ったこともあったし、旅行とかも行ったし。

渋谷――旅行行ったの、お前ら？

大類――よく飲んだりしてたよね？

松村――渋谷が酒飲まないから、勝手に決めるんだ。普通、忘年会とかは社長が音頭とるんだけど、とらないから、俺とか大類とかで勝手にやって「忘年会の金を出せ」っていう。

渋谷――何やってたんだよ。そんな具合だから、俺的には、俺と大類の二人で"ロッキング・オン"を作ったっていう感慨があるんだよ。テキストを俺が作って、デザインを大類が作るっていう。

大類――ああ、でもそれは言われたことある、渋谷に。

渋谷――で、言っちゃあ何だけれども、編集者の割にはヴィジュアルのセンスがあったから、俺は。大類としても、ある程度ヴィジュアルを分かる編集者としての俺っていうのは、それなりにやり甲斐はあったんでしょ？

大類――そうだね。うん。

松村――何を自画自賛してるんだよ。

渋谷――で、俺は大類と一緒にアイデアも出したりしたけど、松村はそういう現場は全然知らないで、能天気にラリってたんだよ。一時期、松村が唯一の社員だった時期があるんだけどさ。

大類――ああ、そうだった。

CamScannerでスキャン

渋谷——松村にこれをやってくれよなって頼んだんだよ。そしたら、おおって言って、その後音信不通になっちゃったんだよ。翌日電話したら、いやあ、朝な、東横線に乗ってな、気がついたら夜になってたんだよって。そんなわけねえだろ！

松村——おれはな、異空間へ入ってたらしいんだな。東横線で。俺はあの渋谷方面へ行ったのに、何でもないのに、どこかわかんないけど、気がついたら別の場所にいたんだよ。

渋谷——「時間も空間も飛んでる」とか言うわけだよ。怒りようがないじゃないか。そんな奴と会社なんかやれないぜ、お前。

大類——そうだねえ。

渋谷——松村もおかしい、桶川もおかしい、岩谷家に至ってはもっとおかしい、みたいなさ。そういう状況の中で、やっぱりまともだったのは——。

大類——僕だけだよね。

渋谷——……まあ、仕事においてはね。性格は異常だったけれども、すごく心の支えだったよね。でも雑誌編集って、大類も初めてだったんだよね。

大類——そう、全く初めて。だから「ハッキンジャ」やりながら、編集の作業も自分で覚えていったわけだから。

渋谷——だけどさ、このあと桶川が大類のデビュー作なんだけどさ——いいデザインだよね。

松村——まあ、もはや基本だよね。今の「ハッキンジャ」そのまんまのね。その頃は桶川が変な紙の貼り方をしてたりしたけれども。

大類——だから、ほんとはフラージュな作業なんだよね。活字とか写真のコラージュ作業でページを埋めていくっていう感じだったね。

渋谷——大類のデザインの仕方って、異常なんだ

よ。どういうものかというと――版下があって、写植を自らの手で貼りながら、写真にトレーシング・ペーパーをかけて縮小・拡大をやるという。何だろうな？　世の中みんな新幹線で移動してるのに、いまだに人力の三輪車で動いてる、みたいな感じなんだよ。

松村――だから、俺もそれに合わせて、今でも手書き原稿なんだよ。鉛筆で。

渋谷――うるさいよ。今はもう雑誌のデザインの世界でもデータ入稿で、デジタル・データで写真からレイアウトから処理されているし、世の中の出版物の九九、九九九九九九％ぐらいはそうなっているんだけども――ひょっとすると今、日本にある雑誌の中で、大類の作り方は一冊だけかもしれない。

大類――ああ、かもしれないね。

渋谷――写真の縮小・拡大は、トレスコっていう便利な機能があるんだけど――そんなもの、触ったことないだろ？

大類――ね？

渋谷――「ね？」じゃなくてさ。何でテクノロジーの進歩に付いて行かないわけ？

大類――なんでかなあ。コンピューターはもちろん知ってて、作業も時々やるんだけど。

渋谷――え、そうなの？

大類――でも、打ち込みは全部スタッフがやるのね。僕が横に座って「もうちょっと文字を大きく、この色で」って指示するんだけど。

渋谷――何だそれ。

大類――コンピューターって、サイズから何から、全部数字で出てくるわけよ。それこそ○、○○ミリぐらいまで全部。その感覚がね、全然分かんないんだよね。

松村――信用できないんだ。

大類――うん。だからほら、もっと感覚的にパタッと文字を置いたり、クシャミした時に写植が飛んで行って「あ、これは素晴らしい!」とか、そのレベルのデザイン作業だから。

渋谷――……。

大類――計算機との闘いの、一㎜二㎜の活字の置き方とか、全然分かんない。もっと肉体的な作業なんだよ、僕の場合は。うん。

渋谷――トレスコみたいな超便利なものが出てきて、世の中のデザイン事務所には全て入ってたわけだよ。それを使ってみようかと思ったことはないわけ?

大類――ない。だから………コピー機だね、僕は。コピー機が僕にとってのマッキントッシュだね。

渋谷――偉そうに言うんじゃないよ。だけどさ、その手作り版下しか作れないスタイルに、『ロッキング・オン』は三十何年つき合ってきたけどさ。他のクライアントはそんなこと許してくれないでしょ?

大類――ああ、パリでやってた『purple』は全部データ入稿だったね。三百ページぐらいあるのを、編集長が一人で全部コンピューターいじって、僕が横に座って指示して、どんどん作っていくっていう。

渋谷――面倒臭えなあ。それ普通デザイナーのやる仕事なんだけども。

大類――そうそうそう。

渋谷――「そうそうそう」じゃなくてさ。

大類――それが分かった上で『purple』も「大類くんにお願いします」って依頼があったわけだから。

松村――これからもコンピューター使ってやる気は全然ないわけ?

大類――多分やらない。

松村――偉い。さすが大類だな。「原稿をメールで送ります」なんて、間違いだよな？

大類――そう。コンピューターが、っていうか、キーボードが信じられないからねえ。

渋谷――何言ってんだよ。お前ら二人揃えるんじゃなかった、失敗したなあ。でも、その大類のやり方はすごいと思うな。日本にたった一人のデザイナーだと思うよ。

大類――みんな驚くんだけどね。印刷所にも「データ入稿お願いします」って言われるんだけど、僕データ入稿できないから、全部原画を作って、指定を入れて、原画を全部渡すの。それで全部向こうがやってくれるから。

渋谷――何だかなあ。でも、その後の大類はさあ、「毎日新聞で働いていた真面目なサラリーマン」から、だんだん様子がおかしくなっていくじゃない？

大類――そうかなあ？

渋谷――そうだよ。急に何かこう、女縛った写真をさあ――。

大類――それは急じゃないよ。かなり後だよ。

渋谷――とにかく、だんだん変になってさ。俺、一番印象的だったのはさ――大類が初めてアメリカに行った時に、すごいカルチャー・ショックを受けたわけよ。きっと、日本が嫌いになったんだろうね。

大類――そうそう。嫌いになった。すごく。あれは多分二十四〜二十五の頃じゃないかな。

渋谷――で、日本に帰ってきても、心が日本にないわけ。「アメリカに行きたい」ばっかり言うようになって。ある日、大類が来てさ、「俺さあ、東京港に行ったんだよ」「何しに」「アメリカのほう見てたんだ」って。

大類――嘘だあ！

渋谷――本当だよ。「船見てたんだ」とか言ってさ。「うわ、ヤバいこいつ！」と思って。憶えてない？

大類――いや。でも、それからサングラスし始めたの、多分。「風景も見たくない」っていって……何でそこまで行っちゃったのか分かんないけど。

渋谷――よく見てるだろ？　俺。松村なんかそういう観察眼ゼロだから。

松村――サングラスしてたのは知ってるよ。

渋谷――そりゃ当たり前だよ。サングラスはそれからいつもしてたんだよ。

松村――一緒に飲み屋に入って、飲み屋の親父に「眼鏡とってくれ」って言われたことあったよな。

大類――ね？　言われたよね。

渋谷――で、デザインもなんか、アメリカの水着のねえちゃんばっかり登場するようになって。「大丈夫かなこいつ」って。

松村――そういう志向は前からあったの？

大類――いや。ポップ・アートとかアメリカのデザイナーとかは注目してたんだけど、そこまで精神的に病むまでは――。

渋谷――病んでたとは思わない？　自分で。

大類――全然。でも、うちのおふくろもよく言ったんだよ。「よく海外に住みたいって言ってたわねえ」って。

松村――逆に言うと、よくこの歳まで我慢してたよね。もう五十代後半なわけでさ、十年前に決心してても全然よかったわけじゃない？

大類――そういうのも、全然考えなかったんだよなあ。

渋谷――というか、すでに二重生活が始まってたわけだよ。フランス半分、日本半分っていう。で、ある時期から、大類は日本の現実を見なくなったんだよ。その頃からだんだん、性的な嗜好性もお

CamScannerでスキャン

かしくなっていって。

大類——んー……僕はあまり変ってないと思うんだけど、ちょっと変ったものを扱ったりするようにはなったかな。でも、それも必然みたいなもので。たまたま出会ったものがすごく官能的で、「じゃあそれを日本に紹介しよう」っていうことでやったら、たまたまみんなが飛びついてきちゃったっていう。

渋谷——要するにそれがボンデージっていう——ボンデージもそうだけど、その前からなんか、変な性的なもの？ 変ったものに対するフェティッシュな嗜好性って、君の中にあったよね。

大類——うん、うん。

渋谷——それは、縛られた女を見た途端に、異常に興奮して——。

大類——違う違う。「縛られてる」っていうことじゃなくて、縛られてる様子を写した写真家がすごいと思った。だから、もちろんヘルムート・ニュートンとかブルース・ウェーバーとか普通に知ってるけど、やっぱりもっと写真家のパーソナリティが前面に出てくる写真ってそんなにないわけじゃん。だけど、あのボンデージの最初に見た写真は——。

渋谷——ジョン・ウィリーだっけ？

大類——そう。あれはもうパーソナリティが滲み出てて。もう泣きたいくらいだった。それぐらい綺麗な写真だった。別にそれまでSMが好きで、隠れてやってたとか、そういうものでは全然なかったし。

渋谷——違うんだ。

大類——うん。写真としてすごくリアルだったんだよ。だからといって「僕もSMやってみよう」っていうのでは全くないし。ただ、ボンデージを扱ってる、カルチャーとしてSMと近いから、本当

のSMのマニアの人たちといろいろ話もしたけどね。

渋谷――で、ついに大類は自分でクラブまで始めちゃったわけだよ、DEEPという、変なクラブでさあ。

大類――あれ、渋谷も来たんだっけ?

渋谷――行ったよ。なんかさあ、ただ暗いだけなんだよ。

大類――だってターンテーブルの明かりしかないからね。あれ、新しかったんだよ?

渋谷――「新しい」っていうか、異常だったんだよ。

大類――ああ、そうか。

松村――あの後、俺もDJするようになって、他の店に行ったら、全くあの状態だったね。踊ってる奴が見えないんだよ。懐中電灯でこうやって見てCD替えてたよ。あれが四~五年前のことだったから、大類はその前からずっとやってたわけだ。

渋谷――だから、時代の流行りだから真っ暗なんじゃないんだよ、大類の場合は。要するに「見たくない」んだよ、絶対。

大類――またそういう――。

渋谷――真っ暗が好きなんだよ、大類は。

大類――いや、あれは音をちゃんと聴いてもらって踊らせるために真っ暗にしてるの。まあ、見たくないっていうのも、潜在的にあるのかもしれないけど――。

渋谷――いや、絶対真っ暗が好きなの、大類は。なんでかっていうと――こいつの部屋も暗いんだよ。別にクラブのコンセプトじゃないんだよ。暗くないと生きていけないわけ。

大類――そうなのかなあ。

渋谷――だから、その異常さが『SALE』に出たり、クラブのDEEPに出たり、どんどんエスカレートしていくわけだけども――実は俺は大類に

CamScannerでスキャン

『ビザール』という本を教えてもらったんだけど、俺の究極の本も『ビザール』なんだよ。まあ松村みたいな奴には分からないけれどもだね――。

大類――ねえ。

松村――何だよ。

渋谷――要するに、俺としては似てると思ってるんだよ、本の作り方が。テキストを書いて、インタヴューして、文字だけで雑誌が完結するんじゃないっていう。『ビザール』は、ジョン・ウィリーが全部個人で編集から写真からイラストから何から一人で全部作上げていて――あれは一種の、ヴィジュアルな一つの作品だよね。

大類――うん、そうそうそう。

渋谷――あれが大類的にも一つの理想形なんだけど、俺にとっても理想形なんだよね。似たものを感じるよね、雑誌フェチというか。逆に言うと、だからこそ『ロッキング・オン』に付き合ってくれたんじゃないかと思うんだけど――デザインにしても、理解してくんなきゃつまんないだろ?

大類――いや、多分大丈夫だと思うけどね。でも編集部が書き上げる原稿がいつも刺激になってたし。原稿が悪かったらやってなかったと思う。特に大きい記事は、いつもテキスト読んでからデザインしてるからね。

渋谷――逆に言えば、デザイナーとしても評価されるようになり、自分で雑誌を出したりクラブをやったり、いろんなことをやるようになって、自分の表現のステージがあるわけじゃない? それなのに『ロッキング・オン』をやり続けてくれたっていうのは、俺としては嬉しいし、「なんでかなあ?」っていう。

大類――なんでだろうねえ。三十年やったっていう重みとか、実感とか、全くないからさ。

渋谷――何、それ。

大類――ほんと。僕のところに『ロッキング・オン』一冊も残ってないし。

渋谷――何だお前。

大類――だって見本が届いても、次の号作る時に、古い号を全部切り貼りして版下に使っちゃうから。背表紙の絵柄が十二号分ばしっと揃ったのなんて、見たことないよ。

松村――愛情ないんじゃないか。

大類――だから、毎号「新しいものを作り上げる」っていう作業の積み重ねで三十年間来ちゃったのかなあ、っていう感じだね。食事とか排泄とかと一緒のような気がする。

渋谷――ウンコかよ、『ロッキング・オン』は。

松村――だけど、そうやって捨てていくっていうのはすごく大変なことだよな。

渋谷――そうだな。お前、すごく捨てられない奴だからな。

松村――いや、最近はすごく捨ててるんだよ。五十になった時に「捨てなきゃ!」と思って、いろんなものを――終わったことは「終わった」ということにしないと、何も進まないという事に、五十過ぎて気がついたんだな。

渋谷――三十年遅かったよな。

松村――そうだな。でも三十年前にそれやってたら歌手やってらんなかったからな、俺。

渋谷――で、大類が今回、本当にフランスに移住しちゃおうと決めたのはなんでなの?

大類――七~八年前ぐらいにパリに家を買って、「いずれは引っ越したいな」と思ってて。渋谷から「六十まではやってくれ」って言われてたけど、なるべく早く行きたいなと思って。大人が住んでてすごく気持ちのいい街だから。子供の街じゃないし。雰囲気もすごくセクシーだし、向こうに行って何か新しいことができるかなあって……大きな

希望とか夢を持ってとか、そういうのは全くないけどね。

渋谷――どっちかって言うと、「日本にいたくない」っていうのが大きいのかな。

大類――それはある。うん。

渋谷――日本の何がそんなに嫌なの？

大類――街、かなあ……あと、子供たちがすごく嫌だね。渋谷とか歩いてる、とんでもない格好の子たちとか、建築物とか――。

渋谷――醜い？

大類――すごい醜い。今は田園調布だし、そういうものを見る機会がないからすごく楽しいけど……渋谷に行った時とかもう、騒々しくてねえ。

松村――でも、なんで最初に行ったアメリカじゃなくて、パリだったんだろうね。

大類――まあ、アメリカも好きだったけど、初めてパリに行った時に、すごく印象がよかったんだよね。最初のアメリカと同じような感じなのかもしれないけど。一回目で恋をしたっていう。あと、フランス人の友達もすごく多くなって――。

渋谷――え、フランス語しゃべれるの？

大類――全然。まあ、英語が多少できるから、英語で生活するけど。

松村――俺は「シルブプレ」と「パルドン？」くらいならできるよ。

渋谷――基本中の基本じゃねえかよ。

松村――俺、それだけで一週間いたからな。

大類――え、パリ行ったことあるの？

松村――一回あるんだよ。最初の時なんて、ジョルジュ・サンクに泊まったんだぜ。

大類――何それ？

松村――とんでもない高級ホテルがシャンゼリゼにあるんだよ。で、ミック・ジャガーのインタヴューに行ったら、ミック・ジャガーが「同じホテ

ルに泊まれ」って。俺じゃなくてレコード会社が払うからいいんだけどさ。

渋谷――やっぱり大類は、パリの中でも街中は嫌なんだ。

大類――そうだね。すごい変なとこ。今いる十八区は、移民の町って感じ。ブラックとアラブ人がほとんどの町だから。で、僕の家の二～三ブロック先では、なんかドラッグのディーラーが暗躍してるっていう。

松村――ちっとも落ち着かないじゃん。

大類――でも、うちは中庭に面してて、すごく気持ちいいんだよね。

渋谷――で、大きなお世話だけどさ――どうやって食ってくんだよ。

大類――……ねえ。まあ、大丈夫じゃない？　これで僕がまだ四十くらいだったら、ばりばり稼ごう、税金もパリ市に払おう、って感じだけど。五十過ぎて、これから税金払うの嫌だなあと思って。

渋谷――だから税金の問題じゃなくてさ。

大類――あとは犬を飼って、犬と暮らす、っていうのだけが夢かな。部屋に美人のマネキンがいるから、それが恋人っていう感じで。

渋谷――何だそれ。でもほら、「三十年間やってきたロッキング・オンを離れるのは寂しいなあ」とか、そういうのはないの？

大類――…………まあ、「頑張ってください」って感じだよ、僕は。

渋谷――何だお前。

松村――全然愛着ないな。

渋谷――俺はやっぱり、大類の『ロッキング・オン』にすごく愛着があるんだよ。初代編集長だし、いっぱいいろんな本作ってきたけど「自分にとっての唯一の雑誌は何だ」と言われれば『ロッキング・

オン』だから、どう考えたって。自分が編集長を離れても、未だに『ロッキング・オン』独特の匂いを発してるし——今の編集長なんかは怒るかもしれないけども、すごく「渋谷陽一臭」が出てるわけで。それを支えてくれてたのは大類だったと思うんだよね。その大類がいなくなると、いよいよ人の雑誌になっちゃうなあっていう。俺の時代も終わったのかなあ、ってさ。

大類——そんなオーバーな——。

渋谷——いや、正直そんな感じだよ。で、結局残るのは松村だけかっていう……そうだよ、お前だけじゃねえか、松村！どうしてくれるんだ。

松村——何だ、文句あんのかよ。どうせ俺は『バザール』だって知らねえよ。

渋谷——『ビザール』だよ！

（この対談は実際に行われたものです。編集部）

ミック・ジャガー六十二歳、僕ら渋松五十四歳、天国に近いのはどっち？

渋谷——お前、ストーンズ、ステージの裏からしか観ることができなかったらしいな。

松村——裏じゃないの、ステージの上だよ。プレミア席で、海外じゃ数十万円で売ってる席だぜ。

渋谷——でも、あれって、よくステージ後方席開放とか言って、コンサートのギリギリに安く売る席だよな。

松村——だから、後方じゃなくて、ステージの上だと言ってるだろう。お前も見ただろう。セットの組み込まれたビルから観れるんだよ。絶対に体験できないぜ、ストーンズと同じステージに立つなんて。

渋谷——別に立ってないじゃないか。だって演奏中はほとんどメンバーの背中しか見てないいんだろう。

松村——まあな。

渋谷——ステージを見るまでは、ステージ上に客席があるって、一体どんなんだろう、と思ってたんだけど、見たら、なんだこれって感じだったな。あそこで観てる奴って、なんかうらやましいって感じじゃなく間抜けな感じだったな。

松村——間抜けはないだろう、メンバーにはめちゃくちゃ近いぞ。

渋谷——でも、背中だろう。俺はキースのケツよ

り顔を見たいな。

松村――別にケツだけ見てたわけじゃねえよ。メンバーも気を使って、後ろに手を振ったりしていただろう。

渋谷――でも、チャーリーはケツしか見えなかっただろう。

松村――座ってんだから、しょうがないだろう。

渋谷――俺は、チャーリーのケツより顔が見たいな。

松村――分かったよ。お前、そこまでカラむのは、本当はあそこで観たかったんだろう？

渋谷――……。

松村――正直に言えよ。

渋谷――フン、いいんだよ。俺はちゃんとストーンズとは正面から向き合いたかったから。

松村――なに、わけの分かんないこと言ってんだよ。

渋谷――でもすごかったな。あり得ないパワーと若さだったな。

松村――ドームで、ステージのハシからハシまでミック・ジャガー走ってたな。

渋谷――新聞の評でも書いたけど、前回の来日より若返っていたのが驚異的だった。俺は三年から四年に一度、痩せようと思うんだけど、それはストーンズのステージを観たときなんだよ。

松村――アホか、普通に俺達が痩せても、病気だと思われるだけだよ。あれは、絶対的なエネルギー量があるから若く見えるんだよ。痩せて体力がなくなれば、単なる衰えた老人だろう。

渋谷――どうして、お前はそういう夢のないことを言うんだよ。俺がせっかく十年後ミック・ジャガー化計画を始めようと思っているのに。出すぞ、腹。

松村――出てるじゃないか。

CamScannerでスキャン

渋谷——そうじゃなくて、腹を見せるぞってことだよ。

松村——警察来るぞ。

渋谷——お前な、まだ俺達はストーンズより十歳下なんだから、努力しようぜ。

松村——あんな怪物と勝負したってしょうがないだろう。世の中の四十七歳の中年女全員が、目指せマドンナって、レオタード着て、脚広げたら怖いだろう。

渋谷——警察呼ぶ。

松村——だから、分を知るというのが大切なんだよ。

渋谷——でもね、俺は考えたよ。下を見てたら駄目だ。確かにストーンズは上過ぎるかも知れないけど、目指したいね。

松村——お前は、関東の三日間は全部行ったんだって。

渋谷——全部、前から観たぞ。

松村——分かったよ。どの日が良かった？

渋谷——さいたまスーパーアリーナがやっぱりステージが近かったから良かったな。アリーナなんで曲目が地味になるって話だったけど、ドームで演らなかった曲で、この日だけ演ったのが〝ワイルド・ホース〟とかだから、全然地味じゃなかったな。歌ったぞ〝ワイルド・ホース〟。隣の中年オヤジも歌ってたんだけど、なぜかハモったんだよな、同じメロディ歌ってんのに。

松村——お前の音程がはずれてるからだよ。

渋谷——そのオヤジがはずれてるかも知れないじゃないか。

松村——お前だよ。俺はお前のオンチと三十年つき合ってんだから、保証するね。

渋谷——ミックも歌下手だよな。

松村——そういう問題じゃないだろう。ストーン

ズ・ファンに殺されるぞ。

渋谷——とにかく、あのバリバリの現役感がすごかったな。再結成バンドとか、昔の名前で出ています、みたいなバンド多いけど、そういうレベルじゃないもんな。あのグルーヴは唯一無比だし、それが衰えるどころかシェイプ・アップされていくんだからなんだかよく分かんないよな。明らかに進歩してるし。どうなってんだよ、あのジイさん達。

松村——新しい薬が開発されたんだな、バイアグラみたいなヤツ。それ飲むと、ああなるんだよ。でも一錠十万円ぐらいするんで俺達は飲めないんだよ。

渋谷——俺は二、三錠なら飲めるぞ。

松村——これが中途半端に飲むと、逆に老けるんだよ。それで飲み続けるために、あんな大規模なワールド・ツアーをやってるわけよ。

渋谷——なに、もっともらしくホラを吹いてんだよ。

松村——でも、そんなことを妄想した奴も多いと思うぜ。

渋谷——確かに。単に若々しいという感じではなかったな。怖かった。俺はさいたまスーパーアリーナの席が本当にステージに近かったんだよ。ステージの上じゃなかったけど。

松村——しつこいよ。

渋谷——近くで見ると、ミック・ジャガーの気合が壮絶だった。結局、ミックの執念というか、業みたいなものが、あのバンドを支えてるんだな。ドラム・セットのところに水を飲みに行くとき、ドームでは見えなかったけど、細かい指示をスタッフにしてんだよ。イヤフォン・モニターの音量とか、そのレベルなんだろうけど、その迫力がやばかった。でもキースが勝手に次の曲のイントロ

CamScannerでスキャン

弾き始めちゃうんで、その指示が終わんないうちにマイクに走っていく姿がなんか悲しかった。

松村――別に悲しくないだろう。

渋谷――いや、大変なんだろうな、と思ってさ。

松村――キースは楽しそうだったな。

渋谷――ミックはロン・ウッドには、いろんな指示を出してるんだよ。結構。小僧扱いなんだよ。でもキースは完全な放し飼い状態だったな。

松村――諦めてるんだろうな。なに言ってもケンカになりそうだし。

渋谷――セットリストも、ヒット・パレードだと思った前回より、もっとコマーシャルだったな。セカンド・ステージでも〝ミス・ユー〟と〝ホンキー・トンク・ウィメン〟だったし。

松村――でも〝サティスファクション〟も〝黒くぬれ！〟も、まったく懐メロじゃなかったな。

渋谷――完全に二十一世紀型ロックン・ロールになってたもんな。最近は、なんちゃってストーンズみたいな若手バンドが多いけど、歳は若くても、ストーンズよりオッサン臭かったりするのが駄目だよな。

松村――オッサンに言われたくないだろうけど。

渋谷――キースが今回の来日インタヴューで同じ曲を何十年も演奏することについて訊かれて、何十年も演奏を続けていくことによって、その曲がなんであるかが分かって来る、と言ってんだよ。究極の名言だよな。本当にそうだと思う。ストーンズにとっても〝サティスファクション〟や〝黒くぬれ！〟は他者なんだよ。

松村――なんだよ、他者って。

渋谷――だから、自分が作ったとしても、その曲のすべてを理解しているってもんではないってことなんだよ。当然、それは曲そのものが巨大じゃないと意味ないんだけど、ストーンズは、自分達

自身でも理解できていない巨大な曲をたくさん持ってるんだよ。だから、常に演奏の度に新しい発見があって、曲の理解が更新されていくんだな。

松村——ラスト・ツアーじゃない、って言ってたな。

渋谷——また、来そうだよな、本当に。

松村——でも、実は俺、あの席じゃなくて、VIPルームで観てたんだ。

渋谷——え、お前、あそこで観るって言ってたじゃないか。

松村——でも、背中じゃなくて顔見たいし。しかも、飲み物タダだし、ソファーはフカフカだし。疲れなくて良かったぞ。

渋谷——なんで言わないんだよ。

松村——なんか盛り上がってるお前に悪いかな、と思ってさ。立ってて疲れなかったか？

渋谷——殺す。 **S**

ヒルズに負けるな。インフォスタワーにもマスコミが押し掛けてきたぞ

渋谷――コンニチハ。西岡進です。

松村――誰だよ。それ。

渋谷――なんだ知らないのかよ。うちのオフィスビルの十四階に入ってる会社の社長だよ。

松村――知ってるわけないだろう。そんな会社の社長。

渋谷――有名だぜ。山口組系の組長と一緒に逮捕されて新聞に載ったんだから。

松村――なんだそれ。

渋谷――投資用ワンルーム・マンションの会社なんだけど、なんか不動産の移転登記で、虚偽の登記をしたらしいんだ。会社に一斉捜索が入って、新聞社とかテレビ局とか来てすごかったぞ。これでうちのビルも六本木ヒルズに迫るぞ。IT企業もいろいろ入ってるし、逮捕者も出したし、渋谷ヒルズとか名前を変えたらいいのに。そういえば二十階に入ってるODAがらみの会社も、なんか前に問題起こして新聞記事になってたよな。勝ってるな、六本木ヒルズに。

松村――そんなことで勝ってどうすんだよ。どういうビルなんだよ。お前のところは。

渋谷――よく知らないけど、逮捕される社長の会社とIT企業が入ってる先端ビルだよ。

松村――どこが先端なんだよ。

CamScannerでスキャン

渋谷——エレベーターに乗ると、乗ってる奴がどこの社員かすぐに分かるんだよ。アミューズ[注]とウチは、音楽業界ノリのいいかげんなファッションで、元気で若いのがアミューズで暗くてオタク臭いのがウチなんだ。

松村——自分で言うなよ。

渋谷——普通のサラリーマンのオッサンと地味なOL風なのが、そのODAがらみの会社だな。

松村——まともに会社員風なのはそこだけなんだ。

渋谷——まあな。それでシマンテックっていうIT企業が入ってるんだけど、そこは外人と外人風の日本人が多いな。

松村——なんだ、外人風の日本人って。

渋谷——なんかいるじゃん。英語喋りそうな日本人って。

松村——いるか、そんなもん。

渋谷——首からカード・キーみたいなもんぶら下げているから、すぐ分かるけど、ここはほぼ全員英語喋ってるな。

松村——いいじゃないか、英語喋っても。ロッキング・オンも喋る奴多いじゃないか。

渋谷——まあな。エレベーターでそのカード・キー社員と二人きりになると、英語で話しかけられるんじゃないかとビビルよな。

松村——お前は、初めて海外旅行した田舎のオッサンかよ。

渋谷——だから、なるべく目線を合わせないようにして下向いてるんだ。

松村——逆に不審がられるぞ。

渋谷——確かに。

松村——それで、そのワンルーム会社はどうなんだよ。

渋谷——これが一番分かりやすいんだ。とにかく全員グレーのスーツで集団で動くんだ。石原軍団

みたいだぞ。

松村——背が高いんだ。

渋谷——別に背は高くないけど、声はデカイな。それで、いつもメシの話をしてるんだ。

松村——なんだそれ。

渋谷——よく分かんないけど、どこでメシを食うとか、そのコンビニの弁当は旨そう、だとか、そんな話ばっかしてるんだよ。

松村——それはメシのときに乗り合わせるからじゃないのか。

渋谷——そうかも知れないけど、なんかいつもメシの話をしてる印象があるな。うちの社員が営業に行くんで、グレーのスーツ着てエレベーターに乗ったら、そこの社員から「お前、どこにメシ食いに行く？」って訊かれたらしいぜ。

松村——本当かよ。

渋谷——本当だよ。だから、そこの連中もグレーのスーツ着て、このエレベーターに乗ってる奴は、自分の会社の社員だという記号認識があるんだな。それで、話のテーマはメシっていうのも決めてあるんだよ。

松村——作ってるだろう。

渋谷——作ってねえよ。でも、社長が逮捕されてからあまりエレベーターで会わないんだよな。

松村——きっと、ほとんどが営業マンだろうから、今営業に行っても意味ないから動いてないんだよ。

渋谷——そうかもな。それで、ウチもさっそく作ったぞ、社長逮捕マニュアル。

松村——なんだそれ。

渋谷——だから、俺が逮捕されたとき、どう対応するかっていうマニュアルだよ。

松村——渋松は休載するとか。

渋谷——そんなことはどうでもいいんだよ。もっと重要な、サシ入れはなににするとかだよ。

CamScannerでスキャン

松村——もっと、どうでもいいじゃないか。
渋谷——でも、ホリエモンとか見てると、いきなり社長解任とかされちゃうんだよな。
松村——あれだけのワンマン会社でも、手のヒラを返したみたいになるんだな。
渋谷——ホリエモンでさえあれなら、ウチなんかすごいだろうな。
松村——まず、山崎はすぐに社長宣言するな。それで、きっと俺を呼び戻そうとするな。
渋谷——しない、しない。
松村——新たな象徴が必要じゃないか。
渋谷——お前はなんの象徴なんだよ。
松村——愛と自由だよ。ラヴ・アンド・フリー！
渋谷——お前の場合はただ働かないで波風立てない平和主義じゃないか。つぶれるぞ会社。
松村——来るかな、いよいよ俺の時代。お前はいつ逮捕されるんだ？　なるべく早目に教えろよな、俺もいろいろ準備があるから。
渋谷——いいよ、準備しなくて。
松村——そういえば、『SIGHT』でホリエモン取りあげてたな。
渋谷——オッ、お前も社会ネタに興味を持ってくれたんだ。
松村——いや、一九六九年の特集で、表紙がツェッペリンだったから読んだだけだけど。
渋谷——そんなとこだと思ったよ。
松村——リニューアルするって言ってたけどどうなったんだ。
渋谷——できたぞ。すごいぞ。この『ロッキング・オン』とほぼ同時発売だから、読者の皆さん是非読んで下さい。
松村——これか、なんか地味じゃないか？　本当に文春とか世界と同じサイズなんだ。
渋谷——ちょっと違うけどな。微妙に変えている

んで、オッサン臭くないんだよ。
松村――よく分かんないけど、いきなり鎖国かよ。
渋谷――「小泉鎖国参拝で日本は何を失ったか」って、いいコピーだろう。
松村――活字ばっかだな。
渋谷――そういう小学生みたいな感想しかないのかよ。
松村――まだ、なにも読んでいないからしょうがないだろう。あっ、たけしの連載は続いているんだ。
渋谷――すごいぞ、連載陣。たけし、吉本隆明、藤原帰一、斎藤美奈子といった、これまでの人達以外にも、高橋源一郎、いがらしみきお、東浩紀、酒井啓子、柳原和子、ピーター・バラカン、長田弘といった人達も書いてくれるようになったぞ。次号はもっとすごくなるぞ。
松村――なんか、リベラル系の人達を全部集めてる感じだな。みんな、よく書いてくれるよな。
渋谷――人徳だよ。
松村――違うと思うな。加藤紘一インタヴューも載ってんだ。前の小泉純一郎のときも思ったけど、こういう大物政治家はどうやって出てもらうんだ。
渋谷――普通に頼むんだよ。俺の人徳で出てくれるんだよ。
松村――絶対に違うと思う。
渋谷――でも、嬉しかったぞ、作っていて。吉本隆明とか長田弘とか、自分が青春時代に必死で読んでいた人達の書き下ろし原稿をもらうんだぜ。編集者やっててよかったよ。
松村――だいたい、お前の本って、そういう依頼原稿ってなかったもんな。
渋谷――だって、音楽雑誌とかサブカル雑誌って、どうしても書いてもらいたい作家っていないじゃないか。音楽評論家なんて、俺以上の奴なんかい

ないんだし。

松村――本当にいいかげんに、そういうことを言うのをやめたほうがいいよ。なんか、笑えなくなってると思う。お前、自分が思っている以上に笑えないキャラになってるぜ。一度、逮捕されたほうがいいかも。

渋谷――なんで逮捕されるんだよ。

松村――ホリエモンも出所したときに油抜けしてたじゃないか。お前も油抜きしてこいよ。そのあいだは俺がつないでおいてやるから。きっと会社二倍になってるよ。

渋谷――確実に半分になってると思う。**S**

注：サザンオールスターズ、福山雅治、Perfume etc.を擁し、自らコンテンツ制作も行なう大手プロダクション。渋谷は勝手に一緒にしているが、向こうからすれば甚だ迷惑なはず。

僕ら渋松五十五歳、まだまだ反権力の季節は終わりません

渋谷――コンニチハ、村上ファンドです。

松村――来ると思ったよ。でも、村上ファンドは名前じゃないだろう。

渋谷――でも、村上世彰って言ってもわかんないだろう。村上ファンドは、もはやあいつの名前みたいなもんだな。

松村――確かに。

渋谷――これでウチのビルは六本木ヒルズに逮捕者の数で完全に水をあけられたな。頑張らないと、どんどん差が広がってしまうな。

松村――いいじゃないかよ、広がって。

渋谷――なんとなく悔しくないか。

松村――悔しくないよ、そんなこと。

渋谷――負けず嫌いなんだよ、俺。

松村――負けろよ、そんなこと。

渋谷――でも、記者会見で「金儲けはそんなに悪い

ことですか」とか言ってたけど、そういう事実認識なんだろうな。

松村――別に金を儲けたから非難されているわけじゃないからな。犯罪は駄目だろうって話だからな。

渋谷――世間からの嫌われかたに対する開き直りはホリエモンのほうが腹がすわってたな。

松村――お前、ホリエモン好きだな。

渋谷――好きじゃないけど、村上ファンドとホリエモンと、どっちかと結婚しなくちゃならなくなったら、やっぱりホリエモンじゃないか。

松村――お前は、どういう問題の立てかたをしてるんだよ。

渋谷――いや、たとえばの話だよ。

松村――たとえに決まってるだろう。大体なんで結婚なんだよ。普通、どっちも嫌だよ。

渋谷――でも、どうしてもってなったらどうする?

松村――だから、どうしてもってならないんだよ。

渋谷――だって村上ファンドはすぐに自白しちゃったけど、ホリエモンは最後まで否認してたんだぜ。根性あるよな。

松村――わかったよ。それじゃ、お前とホリエモンの結婚式には祝電を打ってやるよ。

渋谷――出席はしてくれないんだ。

松村――本当にやるつもりかよ、お前は。

渋谷――でも、日本の場合、ITビジネスの成功モデルが少ないよな。

松村――ソフトバンクとか、楽天とかじゃないのか。

渋谷――まあな。でもアナログな感じで、なんか違うんだよ。

松村――パソコンを触れないお前に言われたくないだろう。

渋谷――まあ、そうなんだろうけど。杉山清貴&オメガトライブが売れたから、日本にもロックが根づいたと言ってるみたいな感じなんだな。

松村――思いっ切りわかりにくい例を出してきたな。でも、なんとなくわかる。

渋谷――早く、若い、誰もがそうなりたいと思えるような企業家が出てくるといいよな。結局、自分が銀行とかテレビとか、既存の巨大な壁の前で無力だった悔しい体験しかないんで、若い奴に期待するしかないんだよ。

松村――引退老人みたいなことを言ってるな。

渋谷――ロックという村ではそれなりのことができてる手応えはあるんだけど、社会全体の中ではあまりに小さいよな。

松村――それでホリエモンなんだ。

渋谷――でも、駄目だよな。やっぱり、本当にオリジナルなビジネス・モデルや、まったく新しい世界観を持った新製品を作れないもんな。やっぱ、ロック聴いてそうな経営者がいないと駄目だよ。

松村――お前、そればっか言ってるな。

渋谷――ロックって、ひとつのリトマス試験紙みたいな機能があると思うんだけどな。

松村――そう簡単なもんじゃないと思うけどな。

渋谷――でも、価値観に影響与えると思うぜ。ロック聴いて保守的っていうのもあるだろうけど、そういえば、アメリカの保守系雑誌が歴代ベスト保守ロック・ソングってのを発表したんだよ。

松村――なんだそれ。

渋谷――アメリカに『ナショナル・レヴュー』っていう保守系雑誌があるらしいんだけど、そこが選んでるんだ。でも、フー、ビートルズ、ストーンズ、U2、ピストルズってところがトップ・テンで、わけがわかんないんだよ。

松村――全部、保守どころか反体制的メッセージをもったバンドばかりじゃないか。

渋谷――そうだろう。一位がフーの〝無法の世界〟なんだけど、ピート・タウンゼントが抗議したらしいぜ。

松村――なんで〝無法の世界〟が保守的なんだ?

渋谷――甘ったれた理想主義を絶ち切った歌詞だと思ったらしいぜ。

CamScannerでスキャン

松村――確かに「新しいボスは、昔のボスと同じ」みたいな歌詞があるからな。

渋谷――恣意的に解釈したら、変革に対するニヒリズムみたいな理解も可能じゃないか。

松村――そりゃ、ピート・タウンゼントは怒るよな。逆に理解されて、それを闘うべき敵に利用されたんじゃたまらないぜ。ビートルズの〝レボリューション〟も同じパターンだな。

渋谷――そうそう、あの曲なんかアホな保守派が鬼の首を取ったみたいに喜びそうじゃん。

松村――過激な革命主義を批判してるからな。あれはジョン・レノンが観念的で無茶な革命主義を批判した歌で、いうまでもないけどジョンは徹底的に反権力で革命的な人だったからな。

渋谷――あの当時、自己満足的な左翼冒険主義みたいなものがあったからな。

松村――そういう死語を使っても、今の若い読者には通じないぞ。なんんだ、左翼冒険主義って。

渋谷――いいんだよ、なんとなく漢字の並んだイメージで伝わるから。

松村――いいかげんんだな。

渋谷――スプリングスティーンの〝ボーン・イン・ザ・USA〟なんかも、そうだよな。このランキングではトップ・テンには入っていないけど。

松村――レーガンかなんかが愛国的な歌だから素晴らしいとか言って、なんかのキャンペーンに使おうとして、スプリングスティーンが怒ったんだよな。

渋谷――当たり前だよ。だって、あの歌は、俺の兄貴は黄色のベトコンを銃で殺した、そんなアメリカに生まれた、って歌詞だぜ。アメリカの人って、本当に英語わかってんのかよ、とか思っちゃうよな。アメリカ批判の歌なのに、どう誤解できるのか謎だよな。

松村――そういえば、俺の友達も、ポリスの〝ロクサーヌ〟が流行ったとき、あれを六さんというオッサンの歌だと思ってたな。

CamScannerでスキャン

渋谷——アホか、それは誤解じゃなくて、タモリの空耳じゃないか。

松村——英語がわかんないって怖いよな。

渋谷——そういうレベルの問題じゃねえよ。でも、この保守ソングの選ばれかたって巧妙な感じがするな。いかにも保守的ってバンドはなくて、どちらかといえば反体制的なイメージの大物バンドばかりが選ばれているじゃないか。そのことによって、そういうバンドのイメージを貶めつつ、そのファンに変な先入観を与えるという、二重の効果が狙われた感じがするな。

松村——歌詞って、どういう解釈でも可能って部分があるからな。言おうと思えば、なんでも言えちゃうよな、六さんとか。

渋谷——それは言えないんだよ。**S**

CamScannerでスキャン

俺たちのビートルズはまだまだ終わらねえんだよ

松村――コンニチハ、ジョン・レノンです。
渋谷――それは違うな。
松村――ハイ？
渋谷――ジョン・レノンはもう死んでるんだよ。
松村――………知ってるよ。
渋谷――ジョージ・ハリソンもいないんだよ。
松村――だから、知ってるって。
渋谷――こないだ、ビリー・プレストンも亡くなったんだよ。
松村――分かってるって。
渋谷――じゃあ、言うなよな。
松村――………。コンニチハ、ポール・マッカートニーです。
渋谷――それなら、まあいいだろう。
松村――エッラそうに。
渋谷――で、なんだっていうんだよ。ビートルズ来日四十周年か？
松村――そう、今回の来日四十周年ってなんか凄くないか。新聞も雑誌もテレビも、やたらと特集してるよな。
渋谷――お前だって、ドサクサまぎれにラジオでやったじゃないか。それも、この忙しい俺をゲストに出させやがってよ。
松村――あれはドサクサまぎれじゃないだろ。ビートルズ来日四十周年を語るのにもっとも適切な人間といったら俺じゃないか。

渋谷——どうして、そこで日本公演を観てない俺を呼ぶんだよ。

松村——いやあ、お前はツェッペリンとビートルズしか語れないんじゃないかって思ったからさ。

渋谷——俺が何十年DJやってると思ってるんだよ。語れないロック・バンドなんて、いないわ。

松村——じゃあ、あの次の週にやったビー・ジーズを、お前二時間語れるか？

渋谷——ビー・ジーズ………。語ろうとも思わないわ。

松村——ハーマンズ・ハーミッツは？

渋谷——だから、語らないって。

松村——メアリー・ホプキンは？

渋谷——やっぱり、お前と俺とでは、ロックに対する感覚がずいぶん違うように思うな。

松村——だけど、来日三十周年のときは、こんなじゃなかったよな。

渋谷——そうだな。この半分も盛り上がんなかったな。

松村——で、面白いのは、ああいった四十周年特集を作った人のほとんどは、来日公演を観ていないっていうことなんだよ。

渋谷——どうして、分かるんだよ。

松村——ある新聞のインタヴューを受けたときに、「当時中学二年生っていったら、一番若い観客ですよ」って言われたんだよ。たしかに、俺も学校で一年や二年の奴が観に行ったって話は聞いてないしさ。

渋谷——そのインタヴュアーは？

松村——取材に来たり原稿依頼してくる人達は、みんな三十代四十代だったな。

渋谷——ちょっと不思議だな。

松村——こないだ、日本で唯一のビートルズのサインの鑑定家の本多康宏君と酒を飲んで、「どうして、そんなに熱心なの？」って訊いたら、「ビートルズを観てないから」って言ってたな。「松村さんは観たから、平気なんですよ」って。

CamScannerでスキャン

渋谷——そういうものかね。
松村——やっぱりビートルズに詳しくて、当時小学生だった奴に聞いたんだけど、あの頃小学生以下の子供は、とんでもないふうに思わされてたんだよ。
渋谷——どういうふうに？
松村——六月二十八日に学校から帰ろうとしたら、校内のところにオジイチャンが迎えに来てたんだって。そんなこと初めてなんで、「どうしたの？」って訊いたら、「今日はビートルズっていうのが来るから、早く帰ろう」って言ったんだって。
渋谷——なんなんだ、ビートルズは。そいつは離れ小島にでも住んでたんじゃないのか。
松村——あいつ、たしか浅草だよ。
渋谷——………。
松村——だから、そいつはビートルズっていうのはゴジラみたいなものだと思って、家に帰っても友達は大丈夫だろうか学校は壊されないだろうかって心配だったんだって。
渋谷——ウソつけ、そんな奴いねえよ。
松村——本当だよ。『ストレンジ・デイズ』の岩本晃市郎君だから。
渋谷——お前、からかわれてるんじゃないのか。
松村——当時の子供達はそんなふうに吹き込まれてたんだよ。それから四十年経って伝説が大きくなって、ゴジラとまではいわなくても『ウルトラQ』には出られるぐらいにはなったんじゃないか。
渋谷——たしかに、ビートルズの人気が高くなったのって、解散してからだしね。だけど、それも七月でおしまいだ。
松村——いや、まだまだあるみたいだぞ。八月の終わりにNHKのテレビで特集があるから、取材させてくれって電話があったぞ。
渋谷——NHKなのに、なんで俺じゃないんだよ。
松村——お前は忙しいんだろ？
渋谷——………まあな。しかし、ビートルズって本当に話題が切れることないな。

松村――そういえば、サルティンバンコ。

渋谷――……………。

松村――そうかと思えば、キダム。

渋谷――…………あのな。

松村――はたまた、アレグリア。

渋谷――だから、なんなんだよ。フジテレビの深夜のコマーシャルかよ。

松村――つまり、あのサーカスみたいなのをやっているシルク・ドゥ・ソレイユが、今度は『ラヴ』っていうタイトルでビートルズをテーマにしたショーをやるんだって。

渋谷――なんとなく、分かるな。

松村――〝ビーイング・フォー・ザ・ベネフィット・オブ・ミスター・カイト〟みたいな感じなのかな。

渋谷――まあな。

松村――サージェント・ペパーズやレディ・マドンナも出てくるんだってさ。

渋谷――ああ、なるほどな。

松村――ラヴリー・リタやバンガロウ・ビルも出てくるのかな？

渋谷――知らないよ、そんなこと。

松村――で、当然、音楽にも力を入れていて、ジョージ・マーティンがミックスし直したビートルズの曲がいっぱい使われるんだって。

渋谷――そうか、『イエロー・サブマリン』みたいなものか。

松村――一番興味深いのは、ひょっとしたらそのジョージ・マーティンがミックスし直したものでアルバムがリリースされるかもしれないっていうことなんだよ。

渋谷――やっぱり『イエロー・サブマリン』か。

松村――どんな曲が入るのか、ちょっとドキドキするな。

渋谷――お前は本物のビートルズを観たんだから、ドキドキするなよ。

松村――なあ、ドクター・ロバートやロッキー・ラ

ックーンも出てくるのかな。
渋谷――知らないよ。会ったこともないし。あと、誰がいるんだよ。
松村――『イエロー・サブマリン』にも出てきたのだと、ノーホエア・マンだろ、エリナー・リグビーだろ、ルーシーだろ。ミッシェルとかマーサとかデズモンドとかモーリーは、分かりにくいな。タックスマンとかウォルラスはキャラクターにしやすいんじゃないか。セクシー・セディーとかハニー・パイも、面白いな。ミスター・マスタードとポリシーン・パンだって……あれ、渋谷は？
古川[注]――お帰りになられました。M

注：古川琢也。渋谷に「性格が悪い」という一点で社員として認知されている現ロッキング・オン副編集長。それにしても、ウチの会社は「フルカワ」という名前の奴が多い。

若者の諸君、夏フェス最強のサヴァイヴァル術教えます

渋谷——コンニチハ、ポール・ロジャースです。フジ・スピードウェイの霧はメチャクチャ濃くて前が見えないぜ。

松村——伝説のウドー・フェス行ったんだ。

渋谷——そりゃ、行くだろう。キッス、サンタナ、ドゥービー、ジェフ・ベックだぜ。俺のためのフェスじゃないか。

松村——確かに。

渋谷——メチャメチャ楽しかったぜ。それにやたら声かけられたし。

松村——誰にだ?

渋谷——客に決まっているだろう。少し歩くと、すぐに「渋谷さんですか」って、オッサンが声をかけてくるんだ。

松村——他のフェスではそうでもないのか。

渋谷——フジでは結構あるけど、サマソニなんか、ほとんどないね。

松村——若者は、お前に興味ないいんだ。

渋谷——まあ、簡単に言ってしまうと、そういうことなんだけど、要するに、あの時期だけ俺はわりと顔出ししてたんだよ。

松村——なんだ、あの時期って。

渋谷——栄光の七〇年代だよ。キッス、サンタナ、ドゥービー、ジェフ・ベックが一番輝いていた、ロック黄金時代だよ。

松村——俺たちが二十代の頃だ。

渋谷——そうそう、そしてウドー・フェスの客も二十代だったんだろうな。あの時期だけ、俺はテ

CamScannerでスキャン

レビに出たり、雑誌で写真出したりしてたんだ。

松村――今じゃ、すっかり落ち目で誰も写真撮りに来ないもんな。

渋谷――違うの、わざと出してないんだよ。だから、あの時期ロック・ファンだった世代にだけ、俺は顔を知られてるんだよ。あのウドー・フェスに行って、改めて気付いたね。

松村――そんなオッサンになったのに、良く分かったな。

渋谷――変わってないってことだろう。

松村――まったく変わったと思うけど、特徴があり過ぎるから分かるんだろうな。

渋谷――でもみんな楽しそうだったぞ。

松村――オッサンくさ過ぎじゃないのか。

渋谷――確かにそうで、俺も超オッサンだから言えた立場じゃないけど、最初はどうなのかな、と思ってたんだ。でも、オッサンはオッサンなりにすごいんだよ。

松村――なにがすごいんだよ。

渋谷――バディ・ガイが観たくて早く行ったんだけど、オッサン達が昼前からビールで酔っ払って出来上がってんだよ。

松村――全然、すごくないじゃないか。

渋谷――俺も、そう思ってさ。お前ら酒のみに来たのか、音楽聴きに来たのか、どっちなんだよ、とか腹立ててたんだ。で、途中でバディ・ガイがオーティス・レディングのカヴァーやったんだよ。

松村――一番新しいアルバムでやってたな。

渋谷――そうそう、そうしたら、そのイントロが鳴ったとたん、その酔っ払いが「おっ、オーティス」とか言うんだよ。

松村――一応知ってんだ。

渋谷――それで、この曲は○○さんとのセッションで演りましたよね、とか盛り上がってんだよ。

CamScannerでスキャン

それから延々、ソウル、ブルースの話で盛り上がってたな。時間は止まってたけど、年季は入ってたぜ。

松村――でも、客は少なかったんだろう。

渋谷――キッスが「俺達はここに四万人の客がいると思って演るからな。駄目だ、後ろを向いちゃ！前だけ見てれば分からないんだから」って言ってたぞ。

松村――それってどうなんだよ。実際はどれくらいいたんだよ。

渋谷――具体的な数字は分からないけど、どのステージも、常に行こうと思ったら最前列近くまで行けたんじゃないか。

松村――結構、俺達オヤジ・ロック・ファンにはいいメンツだったけどな。

渋谷――そうそう、ドゥービーなんか楽しかったぞ。キッスも野外なんでやたら花火の量が多くて、最後なんか火花と煙で巨大なステージが見えなくなったくらいだから。

松村――なんでオヤジ達はたくさん来なかったんだろう。

渋谷――やっぱり若者みたいなエネルギーはないからな、遠くまでは出かけていかないんじゃないのかな。あっ、そういえば、会場で声かけてきたオッサンが名刺くれたんだ。ほら。

松村――ロック酒場、じみへん。福島じゃないかよ、この店。

渋谷――そういう気合いの入った客もいたんだな。しかし、本当に時間が止まっているな。ロック酒場だし、じみへんだぜ。

松村――なんでじみへんって平仮名なんだよ。

渋谷――知らないよ。漢字書けないんじゃないか。

松村――……。

渋谷――でも、いい感じのオヤジだったぜ。福島

に行ったとき、寄ってみろよ。
松村——でも、花火すごかったんだろう。なんかやたら宣伝してたよな。
渋谷——霧で見えなかった。
松村——……。
渋谷——確かに音はすごかったから、見えたら派手だったんだろうな。本当に夜になると霧がすごいんだよ。ポール・ロジャースのときなんか、ステージから十メートルぐらい離れるとまったく見えなくなっちゃうんだよ。
松村——でも、お前みたいに車で移動するような奴には都合がいいんじゃないのか。
渋谷——最高だよ。今や、四十代、五十代のオヤジのロック・ファンは元気で、消費したがっているんだから、もっとこういうフェスをやって欲しいよ。若い奴にも観てもらいたいし。ポール・ロジャースのことをクイーンのヴォーカルだと思ってるんじゃないのかな。そういえば、新入社員の小川(注)なんか〝オール・ライト・ナウ〟も知らないんだぜ。クビだ！
松村——でも、そこでしか顔を認知されないお前もなんか悲しいな。
渋谷——確かに、あそこにいると、なんか自分が懐メロ歌手になったような気分になるな。ちょっといい感じだったな。
松村——どこがいい感じなんだよ。
渋谷——青春が戻ってくる感じだよ。来年もやってもらえるようにウドーに頼もう。お前も来年は一緒に行こう。バッドフィンガーとか、ケイト・ブッシュとか呼んでもらおうぜ。
松村——いいけど、他のフェスはどうだったんだよ。
渋谷——今年は多かったよな。毎週フェスに行ってたな。

松村——よく体がもつな。
渋谷——まいったんだよ。でも、俺ほどフェスに行ってる奴はいないと思うんだ。だからサヴァイヴァルのスキルも高いんだよ。
松村——なんか、吉川が言ってたけど、サマソニでは楽屋に入りっぱなしで、巣を作っていたらしいじゃないか。
渋谷——巣なんか作ってねえよ。
吉川——いや、ソニック・ステージでトゥールのとき、一番観やすい袖の前で椅子広げて座ってるんですよ。それで、なんだか知らないけど、すりみたいなもんを体から出してて、すだれみたいでしたよ。
渋谷——なんだよ、すだれって。俺は犯罪者かよ。
吉川——そんな感じですね。
渋谷——馬鹿言ってんじゃないよ。
松村——ほら見ろ、だから、巣を作ってたんだよ。
渋谷——違うの、俺は朝から晩まで、ほとんど切れ目なしにライヴ観てるから、効率的に休まないと死んじゃうんだよ。だから、どのフェスでも最良のポジションを知ってるんだよ。
松村——それですだれなんだ。
渋谷——だいたいフェス行ってライヴ観ない奴多過ぎ。フジ・ロック行ってドラゴンドラに一時間も並んでるんじゃないよ。
松村——ドラゴンドラ人気すごかったらしいな、今年は。
渋谷——高いチケット代払って、なんでロープウェイに乗ってんだよ。そんなにロープウェイに乗りたければ箱根あたりで乗ってろよ。
松村——今年はヘリコプターも飛んでたな。
渋谷——あれ、うるさい。日高にやめろって言っとけよ。
松村——あれもすごい人気だったらしいぜ。

渋谷——なんでライヴ観ないんだよ。

松村——お前みたいにガッガツするばかりがフェスじゃないんだよ。あの空気を楽しむのがフェスなんだよ。

渋谷——だったらウドーに来いよ。空気はたくさんあったぞ。

松村——……。**S**

注1：富士スピードウェイにてウドー事務所が主催した、初の大規模ロック・フェス。現在は開催されていない。

注2：小川智宏。現ロッキング・オン・ジャパン編集部。入社から五年間、ロッキング・オン編集部に在籍。この時点では、まさか二年後に渋松対談の担当を任されるとは予想だにせず、大きく開いたVネックTシャツで出社していた。ちなみに社内恋愛をいつの間にか育み現在は既婚。

俺はトイレを新品に変えさせるマドンナが好きだ！

渋谷——コンニチハ、マドンナ四十八歳、古いトイレは嫌いです。
松村——なんだそれ。
渋谷——マドンナ、ウイツよかったぞ。
松村——らしいな。でも、なんでトイレなんだよ。
渋谷——マドンナは人の使ったトイレが嫌いで、自分の宿泊するホテルのトイレは新品に変えさせるらしいぜ。
松村——なんだそれ。
渋谷——よく分からないけど、新品が好きなんじゃない。清潔好きなんだな。俺も言ってみようかな。

俺は人の座った椅子は嫌いなんで俺が行くコンサート会場の椅子は新品にするようにって。
松村——来なくていいって言われて終わりだよ。それより、家でお父さんの使ったトイレの後は嫌とか言われてないか。
渋谷——言われてる。マドンナが娘なら新品に変えさせるな。家のトイレ、使うたびに新品にしてたんじゃ破産するぜ。
松村——大丈夫だよ。お前の娘はマドンナじゃないし、マドンナがお前の家に来ることもないから。
渋谷——マドンナって森昌子と同い年だって知って

CamScannerでスキャン

た？

松村——知らないよ。

渋谷——すごいと思わないか。

松村——森昌子に限らず、どんな四十八歳と比較してもマドンナはすごいだろう。

渋谷——本当にそうだよな。背中の筋肉なんか、意味不明についてたぞ。

松村——なんだよ意味不明って。

渋谷——なんか使用目的がはっきりしないままついた筋肉の量なんだよ。ウェイト・リフティングでもするのかなってくらいついてるんだよ。

松村——ものすごいエクササイズしてるらしいな。

渋谷——エクササイズってレベルじゃないと思うな。

松村——そうじゃなければ四十八歳でレオタードにならないよな。

渋谷——確かに、森昌子はレオタードにならないと思うよ。

松村——だから、マドンナ以外のすべての四十八歳女子は何万人の前でレオタードで踊ろうとは思わないの。

渋谷——でも、すごいライヴだったぞ。二時間きっちり踊るんだけど、すべての曲にしっかりとした演出コンセプトがあって、それに映像、ダンス、照明、すべてが計算されて、世界観が作られているんだよ。ミラーボールは一億円だし、叶姉妹は来てるし、いちいち無駄に派手なんだよ。

松村——叶姉妹も演出プランに入っているのかよ。

渋谷——勝手に来てただけだと思う。取り巻き連れてウロウロ歩き回ってるんだけど、それにいちいち客が反応してウザかった。なんか派手な服着てたぞ。

松村——叶姉妹って、なにがそんなに面白いんだ？

渋谷——だって、派手だって以外、特になんの芸もない連中だろう、叶姉妹ってわりには顔が似てないのが面白いのかな。

松村——そんなわけないだろう。

渋谷――まあ、叶姉妹はどうでもいいんだ。とにかく素晴らしいショウで、毎回感心するのは、すごいエンターテインメントなんだけど、常にアートなテイストが取り入れられて、それが表現のカンフル剤として効果的なんだよ。映像のクオリティーなんか半端じゃないぜ。

松村――十字架につるされたんだろう。

渋谷――ロシアでやめろと言われた演出なんだけど、結局強行したんだ。

松村――なんで十字架なんだ。

渋谷――キリスト教っていうのはマドンナの中で一貫して強いテーマとしてあるんだよ。今回は、その十字架の演出がある部分がメッセージ性の強いパートで、アフリカや中東での子供の問題、それはAIDSだったり、孤児の問題だったり、少年兵の問題だったり、いろいろあるんだけど、かなりシリアスだったな。

松村――マドンナって、そういう人だっけ？

渋谷――そういう人なんだよ。

松村――スポーツ新聞なんかだと、完全なエロキャラとして扱われているし、ルイ・ヴィトン大好きなんだろう。

渋谷――ルイ・ヴィトンが好きな、メッセージ・メーカーなんだよ。

松村――よく分かんないな。

渋谷――日本だと、まだマドンナのシリアスな部分がイメージとして定着していないんでちょっと違和感があるかもな。

松村――でも、デビュー当時のイメージからはかなり変わったよな。まだ〝ライク・ア・ヴァージン〟とか歌ったりするのか。

渋谷――歌うぜ。今回も変な乗馬マシンに乗りながら、エロいポーズのダンスをして歌ってたよ。

松村――まだエロキャラじゃないか。

渋谷――そうだよ。そこが偉いんだよ。

松村――そのシリアスなメッセージと合うのかよ。

CamScannerでスキャン

渋谷――分かんだよ、というか何になんだよ、表現のベクトルは。

松村――なんだベクトルって、適当なカタカナ使って、適当なことを言おうとしてるな。

渋谷――してないよ。

松村――じゃあ、ちゃんと説明しろよ。

渋谷――すごく本質的なことを言うと、マドンナの表現の核は怒りなんだよ。マドンナは常に怒ってる人で、それがすべての表現のエネルギーになっているんだよ。

松村――疲れそうだね。

渋谷――疲れると思うよ。だって、あれだけ成功していても、なんかマドンナって幸福そうに見えないじゃん。仕事も家庭もすべてがうまくいっているのに。

松村――よく分かんないけどな、その辺は。

渋谷――だから、デビュー当時、マドンナが怒っていたのは、成功していない、まだ何者にもなっていない自分だったし、その自分を認めない世間だったりしたわけさ。

松村――売れないタレントは皆そうなんじゃないか。

渋谷――そうそう、でもマドンナの怒りは半端じゃなくて、だからすごく努力したし、戦略も立ててたんだよ。

松村――それが〝ライク・ア・ヴァージン〟なのか？

渋谷――そうそう、まああれはたまたまの楽曲なんだろうけど、あれはとても挑戦的なテーマを持ってるわけよ。これまでの女性アイドルの在り方、あるいは女性という性の在り方とか、それに対する挑戦だよな。

松村――そんな大げさなものか。

渋谷――曲がプロデュース・チームによって作られた当初は、ちょっとしたアイドル戦略の変化球ぐらいのものだったかもしれないけど、マドンナ自身の存在があの楽曲に違う意味を与えたよな。それこそ、四十八歳になった彼女が、ポールに股間をこすり付

CamScannerでスキャン

けて歌うわけで、それがちゃんとパフォーマンスになっているところがすごい。

松村——すごいって言えば確かにすごいけど。

渋谷——それから一貫して彼女が表現してきたのは怒りなんだよ。性に対する抑圧的な考えに対する怒り、キリスト教信仰の倫理的抑圧に対する怒り、その基本は肉体や精神の自由を抑圧するものに対する怒りなんだよ。

松村——やけに力が入ってるな。

渋谷——いやコンサートに感動したんだよ。でも、不思議と音楽的なカタルシスのないライヴなんだよ。ストイック過ぎるわけ。それはなんなんだろうな、と考えていたわけ。

松村——お前も楽しめない性格だな。

渋谷——いいんだよ、そういうことを考えるのが楽しいんだから。

松村——マドンナみたいだな。

渋谷——そうそう、苦労性のところが似てると思ってた。背中に筋肉ないけど。だから、最近のシリアスなメッセージも、当然その怒りが基本にあるわけだよ。普通は自分が成功すれば世界に対する怒りも薄れるんだけど、マドンナはより強まったんだよ。というか、どんどん視界がクリアになって、怒りのレベルが上がってるわけ。世界や人はかくあるべきという思いがあって、それを拒むものとは闘うんだよ。ヴィデオで観た自分の首のシワにショックを受けて整形したらしいんだ。その理由が亭主のガイ・リッチーに申しわけないっていうんだから、すごいよな。つまり、女房としてかくあるべきというものに自分はなっていないというのが許せなかったわけよ。

松村——疲れる人生だな。

渋谷——だから言ったじゃないか、幸せそうに見えないって。あのエクササイズなんかその思想が究極的に表現されてるよ。ドームで客席に降りたとき「なんで日本は規制でこんなに客席が遠いのよ、みんな怒って闘いなさい」って言ったんだけど、本当に怒

りがエネルギーなんだな、と思ったよ。

松村——楽しいのか、そのコンサート。

渋谷——楽しいのがコンサートだというヴィジョンをマドンナは持っていて、その為の努力が死ぬほどされているからすごく楽しいんだけど、どこか幸福感がないんだよ。

松村——不思議なコンサートだな。

渋谷——世界や人間に不足している物に対する根源的な飢餓感、そして怒りがテーマだからな。でも、唯一無比だと思うぜ。あの不思議な荒涼感も含めて。俺は尊敬するな。マドンナには、かくあるべきトイレを求めて、新品を要求する権利があるな、やっぱり。

松村——よく分かんないけど、俺は疲れるからそんな人生はいいよ。**S**

渋谷陽一、ヘビメタ転向宣言!? 今月のライヴ七番勝負

渋谷——コンニチハ、リック・ニールセンです。伊藤政則も僕らのことは大好きです。

松村——なんだそれ。

渋谷——チープ・トリックの来日コンサート行ったら、隣が伊藤政則だったんだよ。めったにあいつと一緒になることないから、面白かったな。互いに面白がってたら、前に座ってる客が携帯使ってんだけど、待受画面がツェッペリンなんだよ。思いっきり七〇年代した空間だったな。会場も新宿厚生年金会館だし。

松村——客人っててんのかよ。

渋谷——なに言ってんだよ満員だよ。東京は二回やったんだけど、二回とも満員だぜ。でも、もう一回が渋公だったんで、俺はどうしても厚年で観たかったんだ。

松村——なんでだよ。

渋谷——お前、知ってるかよ。今渋公ってなんていう名前になったか。

松村——ああ、そうかC.C.レモン・ホールっていうんだよな。

渋谷——普通、観たくないだろうチープ・トリックをC.C.レモン・ホールで。

松村——別になんでもいいじゃないかよ、会場の名前なんて。

渋谷——俺は嫌だ、C.C.レモン・ホールでチープ・トリックは。どうせならサントリーも、角瓶ホールとかにしてくれたら良かったのに。モルツ・ホールでもいいけど。

松村——そんなオッサン臭い名前つけてどうすんだよ。

CamScannerでスキャン

渋谷――だから、意地でも新宿厚生年金会館で観たかったんだよ。俺はあそこで、リトル・フィートもイエスもヴァン・ヘイレンも観たんだぞ。

松村――単なる年寄りだってことじゃないか。

渋谷――だいたい厚年といえばロッキング・オン発祥の地じゃないか。

松村――厚年じゃなくて、その向かいにあったソウル・イートというロック喫茶だけどな。

渋谷――俺とお前が最初に会ったのもソウル・イートだったじゃないか。お前は、あの俺達の熱い青春の日々を忘れたのかよ。

松村――別に忘れてないよ。でもC. C. レモン・ホールとソウル・イートは関係ないだろう。涙目になってるけど大丈夫かよ、お前。

渋谷――だから、名前には歴史があるわけよ。例えばCBGBがダイエット・コーク・ホールになっていいわけ？ それはもう歴史に対する裏切りだろう。

松村――よく分かんないけど、アスベスト問題もあって渋公もイメージ変えたかったんじゃないか。八千万円もらったらしいし。

渋谷――俺が最初にRCを観た渋公の思い出をどうしてくれるんだよ。

松村――それはどうでもいいと思う。

渋谷――でも、伊藤政則といえばスレイヤーだよな。

松村――……。

渋谷――ラウドパークが面白くてさ。

松村――話題が変わったんだな。

渋谷――ラウドパークって、ヘヴィ・メタルのフェスがあったんだよ。

松村――お前、メタル[注]って嫌いじゃないのかよ。

渋谷――おおむねな。でも、面白いバンドも最近はいるし、メタルそのものがギャグ・ネタとして

CamScannerでスキャン

定着してきたというか、真剣に語ったり批判したりするもんじゃなくなって、あえて俺がアンチをアピールする必要もなくなったんだよ。

松村――もともと、お前はツェッペリンだしな。

渋谷――そうそう、ツェッペリンをメタルとして語られることに対する反発が基本だったんだよ。だから、当初の主張、ツェッペリンはメタルじゃない。メタルは古典芸能みたいなもんだから、そのレベルでまず語るべき、という俺の意見が、一般的な世論となったからそれでいいんだ。

松村――一般的な世論かどうかは分からないけど、特殊な意見ではなくなったかもな。

渋谷――それでラウドパーク行って思ったのは、メタル・ファンはマナーがいい。そして音楽好きだ、ということだな。

松村――イメージと違うな。

渋谷――飲食スペースがいつも空いてんだよ。常にライヴ・エリアにいてライヴを観てるんだよ。フジみたいにドラゴンドラに三時間並ぶ奴は絶対にいないね。だって、午前中の開場前から何千人も並んでいて、とにかく熱心なんだよ。会場にゴミは少ないし、酒飲んでる奴も少ないし、なんとカップルも多いんだぜ。まあ、それは二日目だけで、一日目は怖ろしいくらい男だらけだったらしいけど。メタル・オタクみたいな奴が多くて、目当てのバンドがないときは、休憩エリアで文庫本読んでたらしいぜ。

松村――本当かよ。

渋谷――編集長の粉川が言ってた。それにメタルのサイトに行ったら、このラウドパークで熱い議論が展開されてんだよ。それは、どっかのバンドのときにモッシュが起きたらしいんだ。それを怒ってる奴が、メタル・ファンならモッシュじゃなくてヘッド・バンギングだろう、とか書いてるわ

け。それに対して、あのバンドのあの曲にはモッシュもありだという反論が出たりしてるんだよ。俺なんか、そんなことはどうでもいいじゃねえか、とか思っちゃうけど、重要なんだろうな。とにかく真剣なんだよ。

松村——トリがスレイヤーだったんだ。

渋谷——そうそう、良かったぜ。そういえば客もマナーがいいけど、バンドもちゃんとしてるんだよ。すべてのバンドが演奏予定時間を守って、転換もスムーズなんだ。十時が終演予定だったんだけど、スレイヤーが終わったのが十時二分だった。

松村——すごいな。

渋谷——フェスのプロデューサーとしては夢のような状況だな。今度、メタル・フェスやろうかな。

松村——止めたほうがいいと思う。他にはどんなバンドが出たんだ？

渋谷——スレイヤーの前がディオだった。

松村——ディオって、あのディオかよ。

渋谷——そう、あのロニー・ジェイムス・ディオのディオだよ。しかも、一番受けた曲が〝ロング・リヴ・ロックンロール〟だぜ。

松村——それって二〇〇六年の話だよな。

渋谷——お前に言われたくないけど、そうなんだよ。MCのサッシャが、ディオの後に出てきて「いや、なごみましたな」って言ってウケてたけど、なごんだな。BPMが他のバンドの半分くらいだった。

松村——よく分かんないフェスだな。

渋谷——でもポーグスはアルコール度高かったな。バンドも客も酒びたりだったぜ。

松村——……。

渋谷——フジに来たばかりなんで客がいるのか心配だったけど、超満だったぜ。

CamScannerでスキャン

松村——また、次の話題なんだな。

渋谷——シェインが例によって酔っぱらっていて、レロレロしてるんだよ。

松村——それって、一種のお約束だろう。だって施設か刑務所に入ってたんじゃなかったっけ。

渋谷——そうなんだけど、どうなんだろうな。俺の隣のグループは、コンサートに来てんだか、酔っぱらいに来てるのか、よく分かんない乗りだったぜ。シェイン以外のメンバーがものすごくタイトでバリバリの演奏していたんでライヴは良かったんだけど、あんまり健全じゃない感じだったな。

松村——どう健全じゃないんだよ。

渋谷——ちゃんとしてないシェインをみんなが許してるって感じだよ。

松村——優しいファンじゃないか。

渋谷——そうかな。トム・ウェイツは、ステージ以外ではバリバリのシラフで、ステージに上がると酔っぱらったフリをするんだよ。それはイメージ戦略としてアリだけど、本当に酔ってたんじゃ駄目だろう。

松村——まあ、ライヴが良けりゃいいと思うけど。

渋谷——マニは酔っぱらってないけど、かなりヤバイ感じだったな。

松村——……。

渋谷——しかし、あんなに超満だと思わなかったな。まあ、〝カントリー・ガール〟はいい曲だったけど、プライマルって日本のロック・ファンのツボなんだろうな。

松村——また、次かよ。

渋谷——歌ってないときのアクションのほうが激しいんだよ。フィオナ・アップルって、それが可愛いかったぜ。

松村——……。

渋谷——ズートンズって、観る度にうまくなって

CamScannerでスキャン

ろと思うんだけど。

松村——俺帰るから、一人でやってろよ。

渋谷——スパークス観に行こうと思ったら終演が十一時とかで、それだとスタジオに間に合わないんであきらめたんだけど、そんな遅くまでやるなよな。

粉川——松村さん、お帰りになられましたけど。

渋谷——じゃあ、お前が相手しろ。お前はなにを観たんだ。

粉川——マライア・キャリーは写真より四割増しな体積がありましたよ。

渋谷——……。**S**

注：ツェッペリンをヘヴィー・メタルと呼ぶ奴はゴミだ、と60歳になった今も社内で言って回っている。とにかくツェッペリンとなると、様子がおかしい。

あとがき

まず、最初に、この対談がどういうことで始まったのか、説明しておきます。初期の「ロッキング・オン」は隔月刊であった（一番最初は季刊だった）。二か月に一回の発行だったから、どうしても新しい情報がもれてしまうことになる。つまり、一月に発行される号には一月の情報は載っているのだけど、二月の情報は間に合わない。次は三月に発行される号で、二月の情報はここに後追いのように載ることになる。これをなんとかしようというのが、この対談だったのだ。

締め切りのぎりぎりまで待って、ひとつでもふたつでも二月の情報を載せたいということだ。当然時間の余裕はないので、書くよりも早いから喋ることになる。喋ったものを原稿にするのにも時間がかかるので、喋るように書くことになる。二人で向かい合って座って、渋谷が自分の発言を数行書くと、原稿用紙を寄越し

CamScannerでスキャン

て、僕が自分の発言を書く。無言でこういうことを繰り返すわけで、時間がなくて喫茶店でやったこともあったから、横で見ていた人はこいつらアブないんじゃないかと思っただろうと、今省みる。それでも、数時間で必要な数頁分の原稿が、ぴったり出来上がる。

そのうちに、もっと早くするために、発言者に関係なく、各々が一枚ずつ書くようにする。つまり、渋谷が僕の発言を書いたり、僕が渋谷の発言を書いたりするようになったのだ。ここらへんで、暗黙のうちに、この対談における二人のキャラクターを決めたのだろうと思う。そうでなければ、出来ない。

こういうふうになるというと、どうしてもエスカレートしてしまう。次は、前半分と後半分で、分けるということになる。もう、向かい合って座って、変な目で見られることもない。片方が書いてファックスで送り、片方も書いて送り返す。で、最後には、一月交代で一篇全部ひとりで書くことになる。ということなのです。

もう情報のもれを補う必要もなくなり、ただただ面白いものを書けばいい。ときには、長く続き過ぎているという意見もあった。

CamScannerでスキャン

古くからの読者は知っているだろうけどれど、実はこの対談はもう何度も終わっているのだ。おそらく、三〜四回は終わっているのではないだろうか。その度に、やめないでくれという読者の要望をいただいて、今日まで来ている。読者の皆さんには、感謝の言葉しかない。ありがとうございます。白髪になるまで続けられたのは、あなた達のおかげです。

この全百一篇の中から自分が書いたものを挙げようと思ったのだけど、はっきりとしないものもある。つまり、キャラクターを設定したために、どちらが書いたのか分からなくなってしまったのだ。とりあえず、二十四篇は僕が書いたものだと思うけれど、渋谷の手が入っている可能性もある。もちろん、その逆もありえる。また、ふたりで書いたとしか思えないものも三篇あった。渋谷の言い回しと僕の言い回しが、複雑に交じっている。「さよなら大類。そして今までありがとう!」は実際に三人で鼎談して、担当者がまとめたものだ。つまり、渋松大鼎談である。

最近は編集部が「今月は渋谷が書きます」とか「今月は松村さんが書いてください」とか言ってくるので、あまり僕は書いていない。

渋谷が書きたいことがあるんだなと思っていたのだけど、今回読んでみたらレッド・ツェッペリンばかりで、どうしてこんなにロバート・プラントは悪く言われなければならないのかと、可哀そうで涙ぐんでしまった。

最後になってしまいましたけれど、推薦文を書いてくださった桑田佳祐さんありがとうございます。

松村雄策

CamScannerでスキャン